
遊戯王 LEGENDs ~伝説の名の元に~

廃棄人形

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 LEGENDS～伝説の名の元に～

【Zコード】

N1158Y

【作者名】

廃棄人形

【あらすじ】

俺、一ノ瀬燈夜は別段変わった生活をしてた訳じゃない。友達と高校行つたり、遊戯王やつたり、デュエルモンスターZやつたり、決闘したり……。

今日も、久し振りのチャンピオンシップ……通称CSに出掛けるところだった。

突如聞こえる声。

次々と倒れる咄。

そして、とうとう俺も……！

次の瞬間。

眼を覚ました俺の前に居たのは、ブランマジヒブランマジガールだった。

『遊戯王』僕らの進んで行く道と並行して連載する』ことになりました。

向こうは、コラボ相手である『紫苑の槍』様との相談の結果、一週間に一度の更新になりますが、こちらはそういうのも無く、不定期更新になります。

なるだけ早くしたいと思つてますよ、ハイ。

「別れの言葉は、要らないよな……」

事実は小説より奇なり。

真っ先にそんな言葉が思い浮かぶのは、俺が変だからだろうか。いや、俺自身、自分で小説を書いているからだろう。そう思いたい。そういえば……あの小説、今良いところだつたんだよなあ。主人公が最後の戦いへと出向いていったのに、複数のヒロインはそれを知らずに仲間たちと平和な時間を過ごしている。

その時、主人公が行つた言葉はただ、一言。

「別れの言葉は、要らないよな……」

『あの……私の話、聞いてる?』

「何も見えない聞こえない世界は平和です本当にありがとうございます!』

ビバ、現実逃避

遊戯王チーム、LEGENDs・伝説という名を付けて、俺たちは活動していた。

活動つていつても、実際はそんなに大逸れたことをしたわけじゃない。各地の遊戯王チャンピオンシップ……通称CSに出向き、デ

ユエル動画を撮影、投稿し……ブログを作ったりして。

メンバーは俺含めて4人だけだ。それぞれ一癖も二癖もある性格だから、人気が分割された。

「あ、～ねみい」

瀬野基。耳にピアス、ドクロのシルバーネックレス。指には指輪

……見た目だけならばかなり素行の悪そうな不良だが、実際は心優しい男だ。

俺が初めて会った時は、凄い荒れてたっけな……。

「……お前のことだ。昨日、夜遅くまでデッキの調整でもしていたのだろう?」

……クールだ。凄くクールだ。クールになれよっ! とは言わな
いし言われもしないだろう。

瀧川幸仁。長い髪を後ろに縛っている、メンバー内一番の長身だ。
少しで良いからその身長を分けて欲しい。

「今日は久し振りのCSだもんね~。僕も楽しみで眠れなかつたよ
!」

「コイツは長谷部慧。中世的な顔立ちで、女装させれば凄く似合つ
んじやないだろうか。

何故か走らないけど、俺に凄く懐いている奴だ。一部ではゲイ疑
惑も浮かび上がっている。勿論、お相手は俺……やれやれだ。

「なんことより、早く行こうぜ?」

そして俺、**一ノ瀬燈夜。**メンバー内で一番特徴が無い、という嫌

味な理由でリーダー やつてます、ハイ。

……そりゃ、自覚してるけどさつ。3人みたいに顔が良いつて訳でも無いし……頭も良くない、運動神経もびみょー……良く鈍感つて言われるし……あ、涙が。

「なんで泣いてるの、燈夜？」

「……自分が情けなくなつて……つか、ちけえよつー…」

「ああつ」

なんでそんなに残念そうなんだ！？

そんなんだからマン研（マンガ研究会……）といふ名の腐女子の集まり）にネタにされんだよつ！ 無駄に絵が上手いのがさらにムカつくー

……閑話休題。何言つてんだか、俺。

『 やつと、見付けました』

「…………え？」

声。無駄にイケメンボイスの声が、脳内に響く感じで聞こえてきた。

……とつとう俺も厨二病か！？

「誰だつー」

と思つたら、どうやら聞こえたのは俺だけじゃないらしい。

基が声を張り上げてるし、幸仁は怪訝そうに眉を潜めながら辺りを見渡しているし……。慧に至つては、何故か俺に抱きついてるし。

「階にも聞こえた……のか？」

「ああ……男の声だつた

「だな……」

「うん……」

……4人全員聞こえたつて事は、ただの厨二病の症状じゃないつてことだよな……一体何なんだ?

『私たちの為に、戦つて欲しいのつ!』

「うわつー!?

「……」
「今度は女性の声……!?
しかも、どこかで聞いたことのあるような……!?

頭が混乱して、訳が分からなくなってきた頃。

基が、ぱたりと倒れた。

「基つー!?

そして、幸仁【が。

「幸仁……!」

最後に、崩れていいくかのように俺の身体から落ちていく慧。

「け、慧……」

何が、どうなつて。

次の瞬間だつた。

頭が少しづつぼーっとしていく感覺。身体の力が無くなっていく
感覺。

数分後。

その場には、誰も居なかつた。

「別れの言葉は、要らないよな……」（後書き）

『遊戯王 僕らの進んで行く道』の方と合わせて、感想、評価などお待ちしております！！

「……現実逃避して良い?」

「……え?」

「……どうだ?」

朝なのか曇なのか分かり難い明るさの空。眼を細めて遠くを見つめるとい、山や海、ガラクタの詰まれた場所……様々などころが見える。

……俺、そんなに眼が良いわけじゃないから見間違いだろつ。若しくは夢だ、間違いない。

やつて俺は頬を抓る。捻るよ^{ねじ}り引つ張つた。

「……ひたひ」

馬鹿な……そつか、これは痛みのある夢なんだ!

『お皿覚めですか』

「うひやあつー?」

だ、誰だつ……?

視線を後ろにやると、誰も居ない……訳も無く。半透明で、且つ宙を浮いている黒い魔道服を着た男性。勿論、右手には杖。

。

「夢だ……皿の前に『ブラック・マジシャン』が居るなんて夢だ……」

「……っ!」

通称B.M。アニメでパンチラって奴が使つてたギャル風B.M.じかなくて、普通の……普通のつて言つのも変だけど……武藤遊戯が使つてたB.M.だ。

つまりは……マハーダだ、うさ。

『おはよつ、マスター』

「…………」

…………え。まさか、そんな

ブ…………！

『《ブラック・マジシャン・ガール》――?』

『マナツヒト言こまへすー』

…………う。あ、可愛い。

じゃなくて！ ん、つまりどうこうこと！？ つか、その服、力
一ドで見てた時も口口いなあ、なんて思つてたけど……実際見ると
もつとヤヴァイ……！！

「やつぱ…………夢だ…………」

しかし、夢でもB.M.G.に会えるなら別にこのままでも……げふん、
ブラック・マジシャン・ガール
げふん。

『夢では有りません』

「こやこやつ……！それが夢じゃければ、何が夢なんだよー？」

『ん~、将来の夢?』

……間違つてはいなければ。

「……万が一……万が一、これが夢じやないとしたらわ……なんで俺を呼んだんだ?」

『マスター……燈夜殿には、世界を救つて頂きたいのです』

……何、そのテンプレ発言。

「世界を……救う?」

そりや、アーメではそんなよつなこと起しつてたけど。

「……訳わかんねー」

『私たちにも原因は分からぬだよね。なんか突然、色々な世界が崩れ始めちゃつて……既に2つ、滅んじやつた世界もあるし』

は……滅んだ世界? 世界つてやつぱ複数あつたのか? 小説を書いてる身として、異世界の存在があれば良いなー、とは思つてたけど……。

けど、俺は素直に喜べない。滅んだ世界があるつてことは、その世界に住んでいた人たちは死んじやつたつてことだ。

残念ながら、BMとB MGの表情は重い。とても嘘を吐いているように見えた。

「マジ……なんだよな?」

『ええ。そして決まって、滅ぶ世界は「デュエルモンスター」ズ……地球で言う遊戯王が盛んな世界なのです』

もしこれが夢じやないとして、と考える。

今、俺が居るこの場所は精靈界つてところだらう。アニメで見た風景よりもちよ～と違つけれど、B.Mたちが居るんだから間違いない。

そして、遊戯王が盛んな世界。アニメの世界みたいな「デュエルモンスター」ズが絶対の世界もあるんだし、地球は盛んじやない方なんだろう。

そして、何よりも…… B.Mは言つた。世界を救つて欲しい、と。

原因が分からぬのに世界を救つて欲しい……つてことは、多分遊戯王が盛んな世界に俺を行かせて、原因を探らせようという魂胆だろう。

「……なんで俺なんだよ？」

『私たちが選んだんだよ。マスターなら世界を救つてくれる、って!』

「……買ひ被りすぎだろ……ん? なあ、つーことは慧たちも……?」

『彼らも世界を救つてくだれる勇者に選ばれたのです。尤も、選んだのは私たちでは』『わこませんが』

つてことは、あいつらもの世界のどこかに……。

俺は一度、大きく深呼吸する。気持ちを落ち着かせて、腕を組む。

「……最後に確認。本当に……ほんとてこ、夢とかじや無いんだよな？」

『うそ、夢じゃないよ～？』

「…………はあ～」

おーけー、夢じやない。信じよつ。B M Gが折角笑顔を向けてくれたんだから信じない、なんつー選択肢は無い。
ただ……信じる代わりに一言言わせてくれ。

「…………現実逃避して良い？」

『駄目です』

即答だった。

アニメで相棒や王様、勿論霸王とかが居た世界とはまた違う世界。
俺は『ブラック・マジシャン』と『ブラック・マジシャン・ガール』……もとい、マハードとマナの導きによつてこの見知らぬ世界に降り立つた。

観衆の元じやなくて良かつた……なんて安堵の息を零す。

あ、そうそう。

B M や B M G の如前はアーメで出たマハーダやマナだけ、王様が使用してた存在とは違うんだってさ。俺はそれよりも、王様達が別の世界で実在していた事が驚きなんだけど。

それはともかく、マハーダとマナは正真正銘、俺が初めてのマスターらしい。

人の居ない路地裏を抜け、俺は日の光を浴びた。空には雲一つ無く、地球と変わらぬ広い青空が世界を包んでいた。

ひゅー、と駆け抜ける風は髪を撫で、柔らかく揺れる。

「やうにや、慧たちもこの世界に来てるのか？」

『うん、居るよ。一番早い基さんなんて、半年も前から来てるし』

「は、半年…？」

なんでそんなに時間が空いてんだ……？

『この世界と精霊界は、時間の流れ方が違うのです。幸仁殿は4ヶ月前、慧殿は2ヶ月前に来ています』

……そうなのか。

はあ……しつかし、やっぱり夢じゃなかつたんだな……。

改めて、俺は辺りを見渡す。

この世界はアニメの世界と同じく、デュエルモンスターズを中心の世界だ。道行く人の全員が様々な色のデュエルディスクを手に付けているし、そこらにある店舗の半分以上がカードショップだ。
……カードショップだらけって……競争が激しそうだなあ。

「わい……」これからどうすつか……

当たり前だけど、俺は金が無い。いや、元々金欠気味ではあったんだけど……文字通り一銭も無い今よりはマシだった。

そのままじや、世界を救うなんつー大業を成す前にのたれ死ぬぞ。

「きやつ……！」

「ん……？」

女性の声……？

きょろきょろと視線を巡らす。すると、視界の端に路地裏へ連れ込まれていく女性の姿が見えた。周りの人たちは見て見ぬフリをしている。

「…………」

連れ込まれた……？

助けに行かなきや、という気持ちと怖い、という心が交差する。

俺は暫くその場に立ち尽くし、唇を噛んで顔を背けた。

『助けなくて良いの、マスター？』

隣にふわふわ浮いているマナ。

そりや、助けたいけど、『昔』とは違うんだ。『昔』みたいに無鉄砲じゃないって自覚しているし、子供でもない。助けたところで、俺に利なんて無い。

そうだよ……普通なんだ。自分の事だけ考えてれば良い。

こんな身体になつちやつて……。

「俺は…………」

燈夜に愛される資格、無くなつちやつた。

「…………」

バイバイ。

「……チイツ！」

何、迷つてんだ……俺。後の事なんて考えるなよ……俺らしくねえぞつ！？

一気に路地裏へと脚を動かした。恐怖で奮え、止まつてしまつそうになる度に心中で喝を入れ、走りながら大きく深呼吸した。

路地裏では、3人の男が居た。金髪に赤髪、それと茶髪野郎。少し離れた場所に4つのデュエルディスクが転がっている。
一つはピンク色だし、女性のやつだろつか。

アニメで見たデュエルアカデミアの制服みたいな服装は破り千切れ、スカートも切られている。純白の下着がモロ見えだ。
プチン、と。

何かの糸が切れる音がした。

「よお……楽しことじしてんじやねHの？」

基みたいな口調になる。イライラとする心を落ち着かせるつもりなど毛頭無く、俺は感情のまま身体を動かす。

「なつ、なんだお前……ー?」

「なんもんどうでも良いだろーが。それより、随分と上玉見つけた
な、てめえら」「は、なんだよ……お前、混ぜて欲しいのか? 最後なら別に良い

ぜ?」

茶髪がそう言つと、身体と口を押さえられている女性の顔がさら
に絶望の色へと染まつていぐ。

「なら、俺も混ぜてもうつかな……」

近付く。片手で女性を触りつつ、俺は手を

金髪の頬をぶん殴る為に振りかぶる。

「がはつ!?

「て、てめ……がつ!」

「ぐふつ……!?

金髪を殴り飛ばし、赤髪の腹を蹴り、茶髪の鼻つ柱をグーで殴る。
さまあ見る。

俺は上着を脱ぎ、女性に掛けてやる。きょとんとした表情の女性
は少し可愛らしげけれど、今はそんな事を考えている暇は無い。

「そう、良かつた。立てる?」

「大丈夫?」

「は、はい……」

「ク、と頷くのを見た俺は身体を支えながら立たせてあげる。そ

してデュエルディスクのあるところまで歩いた。
ピンク色のディスクを持つて、女性に差し出す。

「これ、君の？」

「そ、そうです……」

それを持って、路地裏から脱出しようと歩を進める。

「ま、待てよ……」

「あ、あ？」

やべ、スゲエ殺氣立つた声出た。

茶髪は見事に気絶しているが、金髪と赤髪はよろよろと立ち上がり、
ついていた。特に金髪はデュエルディスクを左腕に取り付けていて、
展開させていた。

「おー、デュエルしろよ

……その台詞、まさか現実で聞けるとは思わなかつた……。しかもアニメだと、主人公が言う言葉だしな。

つか、アレか？ デュエルで自分たちが勝つたら女を置いてけとか、そんな感じ？ そんなんぜつてーヤダね。
とは言え……。

(「……遊戯王が主な世界なんだよなあ……仕方ない）

「「めん、俺、デュエルディスク持つてないんだよね……借りて良い？」

「あの……私がデュエルします。元はと言えば、私が

「大丈夫だよ。俺は君を助けに来たんだし、最後までケリ付けない

と

ピンク色のデュエルディスクを左腕に取り付けて（初めてだから少し手間が掛かったのは秘密）、多重スリーブに入ってるデッキを装着する。

……良く入ったな……………それにしても、俺がいつも使うメインデッキだけケースに入れてベルトに取り付けといて良かつた。

俺がこの世界に持つて来た物といえば、このデッキだけだしな……携帯や財布はバッグの中だけど、そのバッグは多分日本に置いたままだし。

デッキがディスクによつて勝手にシャッフルされる。LCDが4000と表示され、その下にあるランプが光つた。

……4000？ マジで？ 無いわー。

……それにしても。

(……何、このランプ？ 充電切れ？)

「チツ、先攻はお前かよ…………」

「仕方ないじやんか。あつちのターンランプが光つたんだからよ。ま、後攻だから攻撃出来るし、良いんじやん？」

……「説明どりも。

んじやん、

「デュエルっ！ って言えよつ……」

……あ、すんません。

「……現実逃避して良い?」（後書き）

マナの性格があやふやだ……っ！

そして、コメディって難しいッス。

誰かおせーて（泣）

感想、評価等お待ちしております！

「……初めて、だつたんですね」

「えと……俺のターン、ドローします。スタンバイ、メイン入ります」

「あの……何言つてるんですか？」

「へ？」

……えつと、言つて、変？

「うう……地球じゃこれが普通だつたしなあ……アニメみたいにデュエルすれば良いんだよな？ つてことはアレか、効果とかも説明するのか？ たるー……。

「《熟練の黒魔術師》を召喚しま……召喚！」

「……アイツ、なんか変じやね？」

気にするな。

「《魔法族の里》を発動！」

おお、フィールド魔法は横に差し込む場所があつたのか。そういうアニメでもそうだつたな。

辺りに木々が生い茂る。魔法使い族モンスターが住む舞台が整つた。

「自分フィールド上にのみ魔法使い族モンスターが存在する場合、相手は魔法カードを発動する事が出来ない」

「ちつ……厄介だな」

まあ、デメリットで相手が魔法使いを召喚したり、俺の場に魔法

使いが居なくなつたりしたら意味無くなるんだけどな。特に後者だと、俺が魔法を発動出来なくなつちまつ。

ちなみに、この時《熟練の黒魔術師》に魔力カウンターが乗る。

《熟練の黒魔術師》魔力カウンター 0 1 .

「俺はカードを一枚伏せて、ターンエンド！」

「俺のターン、ドロー行くぜっ！」

元気良いな。俺に殴られたからか、鼻の辺りは赤いけど。

「《ジエネティック・ワーウルフ》召喚！」

おお、純粹に強い。

下級通常モンスターでは今のところ、最高攻撃力を持つているモンスターだ。

……ちなみに、遊戯王カードWikiでこのカードを見ると、もしかすると女性かもしれないって書いてあるんだから面白いよな。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド！」

「ううん……いいや。俺のターン、ドローっと

ライフ……4000だろ？ あれ、つーか何で攻撃しなかつたんだ？ 伏せカード警戒？ 俺なら攻撃するのに……まあ、ブレイングは人それぞれだしな。

……一言言うと。

……結構チキン？

「あの伏せ……気になるから、割りに行くかね。俺はまず、速攻魔

サイク

法発動！ その伏せカードを対象にする！」

「チツ……『^{リアクティブアーマー}炸裂装甲』が」

……『炸裂装甲』？ 『次元幽閉』じゃなくて？

……まあ、良いけど。

『熟練の黒魔術師』魔力カウンター 1 2 .

うーん……このまま熟練の効果使いたかつたけど……ライフ 40
00だし、別に良いか。

「リバースカードオープン、速攻魔法！ ^{ディメンション・ドレッジ}自分フィールド上に魔法
使い族モンスターが存在する時、自分のモンスター1体をリリース
して手札から魔法使い族モンスターを特殊召喚する！」

……説明つて疲れるなー、つたく。

「『熟練の黒魔術師』をリリースし、『ブラック・マジシャン・ガ
ール』を特殊召喚！」

『はーい！』

はあ、癒される……。

なんて思っていたけれど、驚いた様子で女性、金髪に赤髪、茶髪
がマナを見つめている。

……茶髪、いつの間に起きたんだ？ 三沢みたいなエアーマンだ
な、お前。

「ど、どうして『ブラック・マジシャン・ガール』が……？」

「……なんか悪いの？」

「ふ、《ブラック・マジシャン・ガール》は伝説のカードですよ……！」
世界で一枚しか作られていないカードですよ……！」

え……デッキに2枚入ってるけど。

「偽者か……？　いや、偽者じゃあディスクが反応するわけねーし
……」

偽者なんて失礼な。

「まあ、気を取り直して……さらに《ディメンション・マジック》
の効果は続く！　お前の場に居る《ジエネティック・ワーウルフ》
を破壊する！」

「チツ……」

良し、これで相手の場はがら空きだな。

「行くぞ、マナ！！」

『はい！』

「魔法カード、《賢者の宝石》！　自分フィールド上に《ブラック・
マジシャン・ガール》が存在する時、手札またはデッキから《ブランク・マジシャン》を特殊召喚出来る！」

「え……まさか、《ブラック・マジシャン・ガール》と同じ伝説の
カードまでー？」

……プラマジもか。デッキに3枚投入しますけど、何か？

「来い、マハードッ！」

『はっ！』

やべ、デュエルディスク使つてのデュエルつて楽しい！ テンション上がるな、コレ！

場にブラマジとブラマジガールの師弟が並ぶ。ソリッドビジョン？ で見るとスゲェ……良い！！

「バトルつ！ マナで相手プレイヤーに直接攻撃！ 黒・魔・導・爆・裂・破！！」

「うああああああつ！」

金髪 L P 4 0 0 0 2 0 0 0 .

「トドメ！ マハーダ……！ 黒・魔・導！！」

「ああああああああああああああああああああつ！！！」

金髪 L P 2 0 0 0 0 .

「……大袈裟じゃね？」

しかし、本当に気絶しているらしい男たち3人を見て、俺は凄くスカッとした気分になった。

「……ふわ～」

なんて間抜けな声が出てしまつくらい、今、俺が居る家は大きかつた。

それこそ、アニメや漫画、後はTVの中でしか見た事が無いくらいの大きな屋敷。庭もかなり広いし、メイドや執事も大勢。つまりは、

「君つて、お嬢様だつたんだな……」

「そんな、お嬢様なんて……」

その屋敷の中の一室。

無駄にふかふかなソファに座つて、俺は驚きに顔を歪めている。向かい合つ形で座つている襲われていた女性はふるふると首を振つた。

「私の事は結姫ユカリつて呼んでください」

「じゃあ、結姫ユカリ……さん？」

「呼び捨てで構いませんよ、燈夜さん」

……それはそれで、緊張するなあ。

彼女の名前は咲之宮結姫さきのみやユカリ。この世界ではかなり有名な企業の三女らしい。アニメで言う海馬コーポレーションとかだろうか。

「本日は、本当にありがとうございました……！　あのままだつたら、今頃……」

「気にはんなつて。当然だろ？」

とか言つて、最初はビビりまくついた俺。けれど、田の前に居るのは凄い美少女だ。格好付けたくなるのは当然……だよな？　ピンク色の髪はセミロングくらいの長さで、凄くさらさらしてゐる。

蒼い瞳は宝石のように綺麗で、ずっと見つめていたら吸い込まれてしまいそうだ。

ドレスの上からでもスタイルは良いし……なんつーか、凄い美人だ、うん。

「それでも……本当に、なんとお礼を言つたら良いか……」

……まあ、気持ちは分からなくないけど。

けど、最初は見捨てようとしたくらいだし、ちつと罪悪感がある……」めん、結姫さん……もとい、結姫。

「あのっ、今日は泊まつて行きませんか！？」
「はっ？」

「の子、突然何を？

「お礼したいんです。今日はたっぷりお持て成しさせてくださいー！」

「いや……ほら、ご両親に迷惑だし」

「大丈夫です。この家は私個人の物ですから、父と母は住んでおりません！」

……それ、もっと拙くない？

「それとも……迷惑、ですか？」

「……そんな小動物みたいな顔をされたら……。

「お、お言葉に甘えようかな~」
「はーっ！」

..... 断れないって。

凄く嬉しそうに笑顔を浮かべる結姫、ちよつヒドキッとした俺。勿論、それは秘密だけれど。

それから、凄く大変だった、と言付けしておぐ。

使用人ではなく結姫が作った料理は……正直、美味しいと言つにはちょっと……なんつーか、個性的だったし、結姫の部屋で一緒に寝よう、と言われて一悶着あつたし。

何より、かなり大きな風呂に俺が入つて少ししたら、背中をお流しますとか良いながら結姫が入つて来るんだもんな。勿論、バスタオル一枚を羽織っただけの姿で。

……アレは焦つた。

そして、夜。俺は結局、結姫の押しに負けて彼女の部屋に居座つていた。

現実では始めて見る天蓋付きのベッドに、ピンク色の絨毯。幾つかぬいぐるみも置かれており、なんつうか、ちょっと豪華なところ以外は“普通”的の女の子の部屋だつた。

妙にドキドキしながら部屋のベッドに腰を下ろしながら待つといふと、コンコン、というノックと共に部屋の扉が開く。

「お、お待たせしました……」

「……うう」

当たり前だけど、パジャマ姿だ。黄色いパジャマに身を包み、風呂に入ったせいか頬が紅潮した結姫の姿は……かなり、可愛いし、色っぽい。

俺は無意識にも顔を背けてしまひ。

「じゃ、じゃあ寝るか！」

俺はその緊張感に耐えられなくなつて、結姫より先に布団の中に潜つてしまつ。勿論結姫の場所を空けてだが。力チ、と電気が消される。俺は結姫に背を向ける形で横になつていると、その背中にふによん、と柔らかい感触が……。

「ゆつ、結姫！？」

「温かいですね……」

あ、当たつてる当たつてる……！ 何がとは言わないけど、マシユマロの山が2つう……！！

「……今日は、本当にありがとうございました」

「べ、別にそれは気にしなくて良いって……」

「私、人に助けて頂いたの……初めてなんです」

……え……？

「天下の咲之富家……カード業界や勿論、経済や政界など様々な業界に手を伸ばしている家柄……姉2人は才能があつたのか、どんどん力を付けていきました」

まあ、俺はまだ咲之富家がどれだけ凄いのか分からぬけどそれでも、相当凄いんだろうなあ、と曖昧には分かる。

「……妹も、最年少のプロデュエリストとして、活躍しています……それなのに私は……アカデミアに入学しても、妹には全く勝

てませんし……姉2人にも、置いてきぼりで「……」

「私、捨てられたも同然んですよ。実際、姉や妹は実家で暮らしていりますし……私はこの屋敷を与えられて、複数の使用者と共にここで住め、と……」

気が付くと、結姫の声が震えているような気がした。身体も小刻に震えていて、それが背中を通して俺に伝わっている。

プレッシャー、もあるんだろう。

大きな家に生まれ、育ち、これからも生きていく……その上でのプレッシャーは、俺なんかには想像出来ないものなんだろう。

「今日、私が襲われていた時……心の奥底で思つたんです。ああ、これも良いかな、つて」

「は……？」

「！」のまま襲われてしまえば、自殺する理由が出来るなあ、つて……

……

俺が借りてるパジャマが湿り始めた。

泣い、てる……？

「……初めて、だつたんですね」

結姫の腕が俺の身体を抱き締めるように回り込む。脚も絡めて来て、俺の結姫の身体が完全に密着した。

「誰かに、助けて貰うのは……初めてだつたんです……！まるで心の蟻わだがまりが溶けて行く感じがして……」

「ねえ、結姫」

俺は結姫の言葉を遮つて、口を開く。

「敬語、止めて良いよ」

「え……？」

「無理、してるだろ？ 俺はもつ、お前の友達なんだからさ……気兼ねなんてしなくて良いって」

「燈夜……さん」

「名前も、呼び捨てで良いし。なっ」

上半身を起しつゝ、まだ少しだけ湿つてこる結姫の頭を撫でる。
なるべく優しく、優しく。

「どう、や……」

「何か困った事があれば俺に言え。出来る限りの事をしてやるよ。
友達……だもんな？」

「ふ……うええ……」

ちよつとクサかったかな、なんて思ったけど……どうせひこれで
良かつたみたいだ。

俺の胸に抱き付きたながら、大きな声で泣き崩れる結姫の頭を優しく撫でてやりながら、俺は暫くそのまままで面でやる。

窓からには、満月の光が俺たちを覗き込んでいた。

「……初めて、だったんですね」（後書き）

小説って、難しいですね……（汗）

……やっぱりプロットを録に作っていないからツライのか。

ヒロインの人数さえ決めてないしねっ

感想、評価等お待ちしております！！

「なんつーか……運命感じじるな、コレ」

「あ、おはよー!」「やむこます、燈夜さん!…」

「ん……おはよー、結姫」

翌朝。

珍しく……とこりか初めて鳥の轡ねじめりで眼を覚ました俺がリビングに行くと、既に起きていたらしい結姫の出迎えを受けた。
そういうや、使用人方が居ない……違う部屋とかかね?

「朝食、出来てますよ」

「ありがと。……とこりで、君が作ったの?」

「い、いえ……。私が作ると……その、美味しくなかつたですし

あ……気付いてたんだ。

なんて思つたけど、口には出せずにあはは、と空笑いしておく。

メイドさんが作つたという豪華な朝食の前に俺と結姫は腰を下ろす。

「「頂きます」「

ほぼ同時に食事前の挨拶をして、箸に手を伸ばした。

「ん、美味しい!」

「はい。私のとは大違ひですよね?」

……結構ショックだったのか、お前?

「……今度教えて貰いましょう」

頑張れ。

ちなみに、昨日の夜、口調は碎けて良じよ、とは言つたけれど……昔からこの口調だつたからか、最早これが素なのだと云う。また、呼び捨てだと何故か落ち着かないらしい。姉妹ならともかく。

「さて、と」

朝食を美味しく頂いた俺は、ん~、と伸びをして立ち上がる。隣に浮かぶマハーデとマナに視線を送る。

「んじや、行くかな

「え……もつ行つてしまつんですか?」

食器を運んでいくメイドさんたちを尻目に、俺はああ、と頷く。

「あの……失礼ですけど、ビルで行くか……聞いて良いですか?」

「え? あ~……」

マナに視線を送ると、視線を逸らして頬を搔いていた。んにゅうう……。

「……分かんね。行く場所無いし……適当に歩き回るんじやないかなー」

この世界にや勿論、親や家があるはずも無いし……行く当ても無い。マハーデやマナも、正直今のところは役立たず、って感じだからなあ……。

せめてもうひとつ準備して欲しかった、うふ。

「な、ならっ……」

「へ？ 何？」

顔を輝かせて近付いてくる結姫。
えと……？

「わ、私と一緒にアカデミアへ行きませんか？」

説明をしてもいい。

今、結姫が通っている第壱デュエルアカデミア 横都校かじどという場所に通っているらしく、今は春休みなんだとか。

後1週間程度で寮に戻るらしいんだけど、その際、俺も編入者として一緒に行かないか、というもの。

「いや、俺、金も持つてないし……学費とか寮費？ とか払えないんだよね……それに、経歴とか無いから編入は難しいと思うよ？」
「大丈夫です。第壱校は咲之宮家が設立しましたから、例え私でも顔は利きますよ」

「……」

え、何それ怖い。

なんて冗談は置いといて、俺は本気で迷う。

全寮制で、食事や部屋は勿論出てくるし、結姫の話によると島に建っているらしいアカデミア内でアルバイトをする事も可能だとか。

成績も上がれば学費免除、とかで結姫の迷惑にもならなくて済むらしいし……何より。

……今の俺、家無しの上に無い文……うわ、情けねH。

「えと、じゃあ……お願ひします」

「はいっー。」

ホント、いつか恩返ししなきやなー……。

そんな事を思いながら、俺はにっこりと笑つて、この結姫に苦笑を浮かべたのだつた。

手続きとかは私がしておきます。私はどこかく、燈夜さんに恩返しをしたいんです！

なんて握り拳を作りながら力説されてしまつたら、俺は何も言い返せない。俺としては、一晩ふかふかのベッドで眠らせてもらつたり、美味しい食事を貰つただけで充分なんだけどな……。

そんな事を言つたら、結姫はまた色々言葉を並べて否定するだろうから黙つておいた。

俺は只今、町を探検中であります。

ちやんとここに帰つて来てくださいね、と念を押されながらも町へと繰り出した俺は、色々なカードショップを見て回りながら進んでいた。

「……なあ」

『どうしたの、マスター？』

俺の声に反応したのは、マナだつた。というより、基本的に俺の傍に居てくれるのはマナらしい。マハードはたまにしか出て来てくれない。

……閑話休題。

「……もしかしてこの世界つて、」

『シンクロやエクシーズは無いよ？』

「…………ですよね」

白いカードや黒いカードは勿論、チューナーさえも無いんだからなあ……。俺の予想は大当たりだ。残念な事に。どうするよ……俺のプラマジック、チューナー入つてるぞ？アーカナイトやテンペスター、ライブラなどの魔法使いシンクロモンスターしか基本的に使わないとは言え……はあ。しかも、俺は余りのカードなんて持っていない。カードを入れ替える事すら出来ないなんて……不便だ。

「…………ん？」

テレビだ。ガラスケースの奥にあるテレビに、3人の人間が映つて、俺はふと立ち止まつた。

男2人に、女1人。

銀髪に染めたガラの悪そうな男と、長い髪を結んでいる男。ショートの髪だけど、柔らかい髪質っぽくて結構可愛らしい女の子……

.....?

「は、基！？ 幸仁！？ つて、コイツも……良く見たら慧じ
やねえか！」

な、なんでテレビに……？ しかも慧に至つては……女装？

.....ほわい？

そつかそつか、コイツラ芸能人になつたのか。慧は……あれだ、
需要を狙つてとか？

『この3人、実はお知り合いとの事で集まつて頂きました！ 突如
櫻都町に現れたこの3人こそ、巷で有名なシンクロ召喚、エクシ
ズ召喚を行う数少ない人材なのですっ！』

あ～、成る程。そういうことか……ちなみに、言い忘れてたけど
櫻都町とは今俺が居るこの町の事だ。

つまりはアレだろ？ この世界に来たばかりのあいつ等は何も
知らずにシンクロやエクシーズ召喚をしちまつて、一気に有名にな
つた。それがこの結果、と。

でも……なんで慧は女装してんだ？

しかも良く見てみれば、基たちが着ているのは昨日、結姫が着て
いた制服と同じだ。違うところと言えば、基と幸仁が着ているのは
青だつてところだけ。

.....慧や結姫の制服は赤のブレザーだ。

んで……なんで慧は女装してんだ……？

謎だ。

『「Jの3人は今、第壹デュエルアカデミア櫻都校にて、数少ない特待生枠として選出されています！」』

「マジか……アイツラ、第壹校に居るのか。

「なんつーか……運命感じるな、コレ」

「顔が自然と綻ぶ。良かつた……1週間後、俺が編入する頃には会えるんだ。

俄然、やる気が出てきたぜ……！　早く会いてえな！

「チツ、たりー……」

「そう言つな、基」

「るせーよ」

街を歩く3人の男女。正確には格好だけだが。

両手をポケットに突つ込み、元来の目付きの悪さがむしろに際立ちながら歩く瀬野基。

後ろで結んだ長い髪を揺らしながら、やれやれ、という感じに肩を竦める瀧川幸仁。

アカデミアの女子専用制服を着込んで、くすくす、と笑みを浮かべている長谷部慧。

「取り敢えず、今日で春休み中の撮影は最後なんだから良いじゃん。ね？」

「チツ……わーつてるよ」

最早芸能人とも大差ない彼ら。実際は約半年ほど前、地球からやつて来た人間だと知る者は居ない。勿論、本人を除いてだが。

「時間は空いちゃったけど、皆集まれて良かつたね」

「ああ、まあな」

「チームLEGENDS……“全員集合”か」

3人で笑う。温かな空気が彼らを覆った。

「これからどうするの？」

「シラネ。取り敢えず、世界の歪みの原因を探すんじゃねえの？」

「そうだな」と幸仁も同意する。

彼らも燈夜と同じく、精霊によつて選ばれた人間達である。しかし未だに、その原因是分かつていらない。

「けど、探すつて言つても……どうやつて？」

「ンな事、俺が知るわけねーだろ。テキトーに待つてりゃそっちからくんじやね？」

「果報は寝て待て、とも言つからな」

尤も、果報では無いのだが……それは3人とも分かつているのか、それに対しても何かを言つ事は無かつた。沈黙が続く。

「なあ……」

その沈黙を破ったのは、基だった。

「…………なんか物足りねーんだけど」

「うん。僕もそう思つてたところ」

「…………奇遇だな」

何かが、足りない。とても大事な“何か”が……。
しかし、考えても考えても思い付く事は無く、時は過ぎていった。

「あ、兄貴…………！」

暫くの後、そつと走ってきたのは3人の男達だった。

金色の髪をした男と、赤い髪をした男。そして、鼻の辺りにガーゼを貼り付けた茶髪の男だ。

「よお！」

「…………また、そういう奴らと一緒に居るのか？」

「別に良いだろ。人の勝手だつつの。じゃあなー！」

手を上げて、基が去っていく。その姿を見届けた幸仁は、はあ、
と深い溜め息を零した。

「変わらないね…………基」

「…………ああ。…………俺も、この後父上との会談がある。ここで失礼する」

「あ、うん。じゃあな」

頷いて、幸仁も去つていく。

「やつぱつ……なんか、違う」

ぱんつと呼いた慧の声は、喧騒に揉き消されていく。

そして、あつと暫く間に一週間が経過した。

「なんつか……運命感じぬな、『ソル』（後書き）

『メモリイ書』じゅとしたらシリアルス書いてしまつ……なんてこいつ黙田
作者。

廃棄人形というハンドルネームもあながち間違いじゃない（汗）

感想、評価等お待ちしております！

「

は？」

第壱テュエルアカデミア 横都校。

特待生枠、5人。今は慧たち3人しか居ないらしいが……それはともかく、かなり有名なアカデミアらしく、時折テレビや雑誌に載ることも多いらしい。

咲之宮家が設立し、早数十年。学費や寮費もそれなりに安く提供していて、且つ設備も良くてプロデュエリストやアイドルデュエリストを幾人も出している功績から、今やこの世界で一、二を争うアカデミアだといつ。

そんな結姫の説明を受けて、俺ははー……としか言い返せなかつた。

執事服に身を包めた格好良い男性に乗せて貰い、俺と結姫は第壱校へと向かう。

「そういうや、第壱校つて階級みたいのあるのか？」「階級、ですか？」

アニメのGXだと、オシリスレッド、ライイロード、オベリスクブルーに分かれていたからなー。後半はともかくとして、前半のレッドの扱いは酷かった。

特にブルーと教官、クロノスの差別にはアニメながら腹を立てたものだ。

「ありますよ。第五位から第零位まで」「……」めぐ、説明お願い」

アニメとは違つただな……世界が違つし、当たり前だけど。

「はい。一番下の階級が第五位でして、順に第一位まで上がっています。基本的には『テュエルモンスター』ズの成績によつて上下致しますが……家柄などでいきなり第一位、または第二位になることがあるので……」

浮かない顔でそう告げる結姫。確かに、そつこつのはヤダな……。

「ちなみに、お前は何位なんだ？」
「私は第二位に属しています。学園長には第一位を薦められたんですけど、私は実力で上がりたかったので」
「へー。俺もそうしたいな」

「ネと/or>かで階級を上げる奴つて、なんか性格悪く感じるんだよな……。

その点、俺は結姫みたいなやつは好きだ。俺みたいな奴に言われてもキモイだけだらうから言わないけど。

ちなみに、その階級によつて寮とかも変わるらしい。制服は変わらず、男が青、女は赤らしい。俺も既に制服に着替えているけど、まだちょっと違和感がある。

ま……そのうち慣れるだろ。うん。

「あ……もうすぐ着きますよ」

虎島校長……悪いけど俺、その名前を聞いて少し笑ってしまった。
だつてアレだぜ？ アニメGXの校長の名前が鮫島だし……え、
まさか狙つた？ まさかここまで似てるとは思わないだろ、うん。
と、初対面の人失礼な事を考えながら俺はアカデミアの説明を
受ける。

……もう結姫に教えて貰つた事ばかりだけど。面倒つたらありや
しないな。

「ここまでが大まかな説明だ。分かったかい？」
「え？ あ、はい……ありがとうございます……」
「そうか、良かつた。君は第五位からのスタートになるが……」

構いません そう言おうとした時だった。

部屋の扉がノックされた。虎島校長がどうぞ、と許可を出すと扉
が静かに開いた。

「失礼しやーす」
「…………失礼します」
「失礼します」

3人の声。ダルそうに欠伸をしながら中に入つてくる男性が1人、
物静かに入つてくる男性1人、そして赤い女生徒用の制服を着た人
1人……。

「基！ 幸仁！ それに慧！…」

そう、その3人だった。

「あ？」

「よ、元気だつたか！？ 良かつた、この学校に皆が居てさ。実はちょっと不安だつたんだよな～……」

結姫が居てくれたとは言え、彼女は階級が違う上に性別も違う。例え同じ階級になれたとしても、男性寮と女性寮に分かれてしまうだろう。

そうなると、どちらにせよ結局は“独り”で頑張る事が多くなつてしまつ。

と、なると。

俺はやつぱり、皆に再会できて良かつたな、つて思つ。

そう、俺が安堵の息を漏らしている時だつた。
女性用の制服を着た慧が、首を傾げる。

「…………君、誰？」

「…………は？」

あれ、俺の聞き間違い……か？ それとも人違いかな？

「えと、『じめん…………瀬野基に瀧川幸仁…………長谷部慧、だよな？』

「…………何故俺たちの名前を知つている？」

「いや、だつて…………え？ ジやあ、その…………地球から来たんじ
や

「

いきなりだつた。

俺の言葉を遮るように、基が俺の胸倉を掴む。そして……まるで

仇でも見るかのような鋭い視線を俺にぶつけた。

昔の基を思い出す、冷たく悲しげな視線……！

「テメエ……なんでそれを知つてやがんだ、あア！？」

……やつぱり、基たちは地球……日本から来たんだ。俺と同じで。

「……冗談、だよな？ ほら、基つてさ……幼馴染居ただろ？ 中学ん時にやんちゃしてる時も、ずっと傍に居てくれた……幸仁は大学生の彼女が居て、すっげー大事にしてる……慧、お前は男だろ……？ 高校に入つてすぐ、電車の中で痴漢されてさ……泣いてただろ？」

まさか、という不安が胸中を支配する。基は俺の胸倉から手を離して、鋭く睨み付けながら口を開く。

聴くな。

そう制止が脳内で響くも、俺の耳朶は基が発する震動をキヤツチする。

低い……それこそ、針のよつに俺の心臓を抉るものに近い言葉の棘……。

「……テメエ、何モンだ？」

棘が、心臓を突き刺す。

「僕の性別も知つてるなんて……それに、なんでそこまで詳しいの？」

？」

「それは……」

「怪しいな」

「…………そう呟いた声に反応して、墓があん、と口元を歪ませる。

「テメエ、アレじやねーか？ 精霊どもが言つてた世界の歪みつてのを引き起こす存在つてのは」

「はあー？」

「成る程な。一理ある」

ねえよつー

さういふ反論しようとしたら、後ろでずっと傍観していたらしい虎島校長の制止によつて止められた。

……空氣読め。

「……………ぢゅせり、君たちには何かしらの事情があるみたいだが……悪いがこれでお開きにして貰いたい。もう少しで式だ」

「…………チツ

確かに、結構な時間が経つている。

第壹校では、教室が1つしかない。それに全ての階級の生徒が集まり、様々な式や講義を受ける事になる。

尤も……アカデミアが行うデュエルトーナメントとかを行う場合はデュエル場で開会式が行われるらしいんだけど。

「…………では、1つ提案が御座います、校長」

「何かね、瀧川君」

相変わらずの長い髪。幸仁は一步前に出た。

「本日の新期式にて、1つの余興をしてはどうでしょ？」

「余興、と？」

「はい。我々、特待生の誰か1人と……本日からこのアカデミアで過ごすという彼のデュエルです。聞けば、咲之宮家のご令嬢のお知り合いらしいですし……良い見世物にはなるかと思われます」

「……相変わらず、ペラペラと言葉が続くな、こいつ。

「成る程……それは良いかもしれないな」

「……僕がやるよ。僕にやらせて欲しい」

そう言つて手を上げたのは、慧だった。

「……分かりました。それでは、それでやつて貰いましょう。それで宜しいかな、一ノ瀬君」

「ああ」

相手は慧、か。

俺という存在が忘れられていた事に心が揺れながら、俺は小さな声で返事をした。

基、幸仁……慧でさえも、俺のことを敵対視する視線に耐え切れず、俺はそそくさと部屋を出たのだった。

新期式……新たな季節と学期の境目を告げるその式を目前に迫っていた俺は、ギスギスした雰囲気のまま慧たちに案内され、第五位の寮に到着した。

オシリスレッドの寮よりも小さな建物は、風呂もトイレも共同らしい。その上ワントームで、物も殆ど置けない。

……今にもゴキブリとか出てきそうだな。

敷かれていた布団の上には2着の制服と黒いデュエルディスク。それと連絡手段のDP。決してデュエルポイントではなく、デュエルストフォンの略である。しかし、生徒全員にDPが支給されるなんて、リッチだなあ……なんて思つたり。

俺は元々着ていた私服を脱ぎだす。すると、何故か後ろに残つたままだつた慧が顔を背けた。

(……相変わらず、だな)

日本に居た時も、俺が着替える時は極力視線を逸らしていたのを思い出す。しかも顔を赤くして。だからマン研のやつらに……略。制服に身を包んだ俺は、携帯大のDPをポケットにしまい、黒いデュエルディスクを左腕に嵌める。カチッ、という音を確認すると、制服のベルトにデッキの入ったケースを差し込んだ。

良し。

「……んで、テメエは何モンなんだよ?」

待つてくれていたのか、俺の準備が終わると同時に基が口を開く。

「………… わあな

「ああっー? 調子乗つてシビュウ殺すぞシー!」

つたぐ、相変わらず柄悪いな、基は。
俺はそんな姿に溜め息を零しそうになりながら、制服のポケット
に両手を突っ込む。

「俺は一ノ瀬燈夜。お前らと同じで地球からやつて來たんだよ」「一ノ瀬エ? んな奴、聞いたことねーな……なんで俺たちの事知つてんだよ」

やつぱり、記憶が無いのか。しかも俺のことだけ。

「は……めげやつ。

こんな事態、マハーデヤマナは知つてたのか? 知つてたとした
ら、教えてくれても良かつたのにな……。

「なんで、つて言われてもな……」

……言つても良いのか? 言つたら思ひ出すかもしれないしな……迷う。

と、脳内で考へてみると、頭に直接響くよつた声が聞こえる。マ
ハーデの声だ。

『言わない方が良いかと思われます。彼らは今、燈夜殿の事で頭が
混乱しています。その上、貴方が『学友だと言えば、やうに頭を痛
ませる原因になります』

ふむ……一理あるな。

俺の頭が痛くなりそうだけど……まつ、コイシカの為だ。

「お前ら、結構有名だつたぜ？ 色んな大会で上位に君臨してゐるしな。遊戯王チーム『LEGENDs』の名前つて、外国にも名前を轟かせてたし」

「これは嘘じやない。パソコンで検索を掛けたら、かなりの数が出てきたんだからビックリだ。

「成る程な……しかし、何故基の幼馴染の事や……俺の恋人の事も知つていた？」

「げ、そのまま流してくれよ……面倒だな、つたく。

「いやー、俺つて『LEGENDs』の大ファンだつたんだよね。言わばストーカー？ お前らが住んでる町まで行つて調べちまつたんだよ。ゴメンっ！」

「…………」

軽蔑するような慧の視線が俺に突き刺さる。痛い、痛いつて。それこそ汚物でも見るような眼差しだ。特に基の殺氣なんてスゴイ。ただ、全く変わらない幸仁の視線が実は一番怖かつたりするんだよな……はは。

「……どうか。では、俺たちは先に教室へ向かつている。じゃあな」

「ついて来んじゃねーぞ、ストーカー」

「…………それじゃあ」

冷たい瞳のまま、3人は部屋を出て行く。結局、慧が女生徒の制服を着ている理由を聞けなかつた。

『マスター……』

「…………わらい、ちょっと一人にして」

耳鳴りがした。

「

は？」（後書き）

毎回毎回、話のタイトルで頭を悩ませます……。

そういう小説書いてる方は、曲聴きながら書いてます？

私はWALKMANで大音量つけていつwww

ただ、友達は集中出来ない（歌つっちゃう）から聴かないみたいですね。

監さんまだやりですか？？

感想、評価等お待ちしておりますよー！

「俺なんて、地味なモブキャラで充分だつたんだ

……新期式。最早俺にとつては入学式と言つても良いソレを受けながら、俺は内心溜め息を零しながら思つ。

……ビニの世界も、校長の話つて長いんだな。

かれこれ30分は経つてゐるんぢやないかと思つぼどこゝ長い口上が並べられている。良くもまあ原稿も無しにそのまま話せるもんだ。場所はこのアカデミア唯一の教室。

階級ごとに分けられた席順だが、非常に面白い事に、第五位は俺しか居ないらしい。周りは空氣だ。三沢的な意味ではなく、本当に。しかも一番前の列だから、寝る事も出来ない。

「……たりー」

つい小声で呟いてしまつほどには、俺の気は削がれていた。

正直これっぽっちも興味が湧かない虎島校長の話は無視して、俺は教室を視線だけで巡らす。

壇上に居る校長と教卓。その背後には巨大なスクリーンが天井から吊りられている。妙に近未来的な学校だ。教科書やノートなんて物も無く、席には備え付けのノートパソコンが置いてあるんだから。

ちなみに、このノーパソはDPを掲げる事によつて識別番号を認知し、その人個人の情報が表示される。

……DPを落としたら大変だな。

んで、その校長から少し離れた場所に居る優男風の男性。若いけれど、あれで教頭先生らしい。地球の時のイメージが大きいから、

凄く違和感。

その教頭先生の隣に特待生の3人 慧、基、幸仁[が並んで立っていた。

さらに離れて、生徒会長や生徒会副会長など。

一段上がつて、後ろの列には誰も居ない。本来ならその列も第五位の生徒が使うはずだからだ。

そのまた一段上ると、第四位の生徒。そこから2段上がり、一番数が多いという第三位の人たち。

(以外と女性、多いんだな……)

さりに上……ここからは流石に確認すると、校長たちにバレる。けれどその辺りは第一位のはずだから、結姫はその列のどこかに居るはずだ。

……後で挨拶しないとな。

「 では、私の話はこれで終わりにする」

ふう……やつと終わつたか。

「 虎島校長、ありがとうございました。それでは……ここで、催し物を用意致しました」

催し物？ つてなんだ？

なんかのイベント……？

今までこんなのがあったか？

そんな声が後ろから聞こえてくる。

「まずは本日より第壱デュエルアカデミア樺都校に編入した人を紹介します。どうぞ、前へ」

「あ、はい」

うわ……結構緊張するな。CSの表彰式に上がった時よりも緊張する。

まだデュエル動画撮つてた方が良いな、こりや。

「えと……一ノ瀬燈夜、です。第五位からのスタートになりますが、皆さんに追いつけるように頑張りたいと思います。宜しくお願ひします」

良し、結構良い印象与えたんじゃないかな？

なんて頭を下げながら思つたけど、拍手が疎らだ。それこそ、多くて5人くらい……？

顔を上げる。

……本当にすくねえ。

結姫は大きく拍手してくれている。けれど、それ以外俺に拍手で出迎えてくれているのは2・3人くらいだ。

なんか……もしかして、皆暗い？ 人の事言えないかもだけどさ。

「今回の催しほは、彼と特待生の1人、長谷部慧さんとデュエルしてもらひます」

生徒会長（らしき人）がそういうと、慧が一步前に出る。

最近久しく見ていなかつた真剣な眼差しが俺に突き刺さる。と同時に、何故か教室内に居る男子たちに殺氣が出てきた気がする。

「……どして？」

「もしかして、アレか？ 慧つて人気者？」

「それでは、デュエルスタンバイをお願いします」
「あ、はい」

おおっ！ 教卓が床下に沈んでく！
面白いなー。

なんて感想を持ちながら、俺はある程度距離を置いて横側に付いているボタンを押してディスクを展開する。

黒いスリーブに入つたプラマジックをディスクにセットすると、勝手にシャツフルされた。

5枚引く。充電切れ……もとい、ターンランプ？ が光つた。

「始めよう、一ノ瀬さん デュエル！」
「で、デュエル！」

は、恥ずい……。

彼を一目見た時、僕は妙な懐かしさを感じた。

漆黒の髪に黒耀のような真っ黒い瞳。正直、容姿は良くも悪くも無く、平凡。咲之宮家のご令嬢と知り合い、という幸仁の言葉も少し……信じ難い。

けれど彼は、“何か”ある。僕はそう直感していた。

「えと、俺の先攻で良いんだよな……ドローーー！」

彼は僕たちと同じ、地球の日本から来たらしい。もしも同時期にこの世界へ飛ばされたのだとしたら、環境から見て、代行天使や暗黒界とかの可能性が高い。

用心しないと。

「うし。俺はまず、『魔導戦士ブレイカー』を召喚！ このカードが召喚に成功した時、魔力カウンターを一つ置く。それに伴つて、攻撃力もアップ！」

『魔導戦士ブレイカー』魔力カウンター 0 1 ATK1600

1900 .

ブレイカー……かつて禁止カードにもなった、汎用性のある闇属性、魔法使い族モンスター。

確か昔の選考会で、採用率が1位だったんだよね。
けれど色々なデッキに入るとは言え、これで代行天使や暗黒界の可能性は下がった……かな。

「ターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー！」

……まだ基や幸仁には敵わないけれど、これでも第一位の特待生。それに、

「ストーカーさんには、負けられない……！ 僕は『召喚僧サモンプリースト』を召喚！ このカードは召喚した時、守備表示になる！ そして、手札の『古のルール』を捨てて、デッキから『E・HERO プリズマー』を特殊召喚！」

今、手札に上級モンスター やそのサーチカードはない。
僕はスカートのポケットの中に入っている一枚のカードに手を伸ばす。

「そして、プリズマーの効果を発動！ エクストラデッキの『E・HERO ネオス・ナイト』を見せて、デッキより、その素材の1枚……『E・HERO ネオス』を墓地へ送る！」

このカード、欲しいのか？

ま、俺は使う気ねーし……やるよ。

コレを機に、お前も遊戯王始めるのか？

ちくつ、と……微かな痛みが僕の頭を襲う。

「つ……僕は、LV4の『召喚僧サモンプリースト』と『E・HERO プリズマー』をオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築……！ エクシーズ召喚！ 『ダイガスター・エメラル』ツ！」

「うあ……やつぱりか」

特殊召喚されるエメラルの周りには、緑色の球体が2つ飛び回っていた。

「　念の為、知らない人が居る可能性もあるので説明しておきます。彼女……長谷部慧さんや瀬野基君、瀧川幸仁君はかの伝説の力ード、《E・HERO ネオス》、《青眼の白龍》、《真紅眼の黒竜》^{ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンレッドアイズ・ブラック・ドラゴン}を使用しています。そして且つ、謎のシンクロ召喚、エクシード召喚を行えるのです！」

歓声が沸き起ころ。恥ずかしいなあ、もう……。
一ノ瀬さんも流石に苦笑しているようだ。

……氣を取り直して。

「エメラルの効果を発動！　このカードのエクシーズ素材を取り除き、僕は墓地に存在する効果モンスター以外のモンスターを1体、特殊召喚する！　来て！　《E・HERO ネオス》！！」

出た……このデッキのエース！

うん。僕もやるよ……　君！

一瞬、だけど。

ネオスが僕の方を向いて、悲しげに眼を細めた気がした……見間違い、だよね。

「ばつ、バトル！　ネオスで、《魔導戦士ブレイカー》を攻撃！」

「うわっ！？」

軽い衝撃が一ノ瀬さんを襲う。

一ノ瀬燈夜 LP 40000 3400 .

「続いて、『ダイガスター・エメラル』でダイレクトアタック！」
「くうう……」

一ノ瀬燈夜 LP 34000 1600 .

「僕はカードを一枚伏せて、ターンを終了するよ」「ふう……つたぐ、強くなつたな……お前」「え……？」

何かを懐かしむように、僕を見つめてくる。

「最初は苛められっ子で、俺の後ろを付いて回るだけだったお前がなんか、すげー懐かしい」「あ、え……？」

確かに、僕は苛められていた。女っぽいから、つていう理由だけで。そんな僕を見かねたかのように、誰かが助けてくれて……。

あれ。

僕を助けてくれたのは、基？ 幸仁？

誰？

「……行くぜ。俺のターン、ドローッ！」「

勢い良くカードをドローする一ノ瀬さん。

「俺は手札から、《ガガガマジシャン》を召喚！」

ガガガマジシャン……？

「^{ダイメンション・マジック}速攻魔法！ 俺の場に居る《ガガガマジシャン》をリリースし、来い！ 《ブラック・マジシャン・ガール》……！」

『れつづ』——。

「なつ……まさか、彼も伝説のカードを！？ 一体どうなってるんだあーつ！？」

生徒会長だけじゃなく、会場に居る殆どの人が驚いている。それは、僕も例外じゃない。

「《ダイメンション・マジック》の効果により、《ダイガスタ・エメラル》を破壊する！」

「え、エメラルを破壊？」

ネオスじゃないんだ……。

ブランマジガールが放った魔法がエメラルに直撃して、見事に粉砕する。残ったエクシーズ素材も一緒に墓地へ行つた。

「魔法カード、《賢者の宝石》！ ブランマジガールが俺の場に居る時、師匠である《ブラック・マジシャン》を特殊召喚する！ 出て来い、マハード！」

『仰せのままに、マスター』

伝説のカード、2枚目。

魔術師の師弟が並び、会場が静まり返る。

「魔法カード、《マジシャンズ・クロス》！俺の場に魔法使い族モンスターが2体以上存在する場合、1体を選択！他の魔法使いは攻撃できない代わりに、そのモンスターの攻撃力を3000まで引き上げる！対象はブラマジガール！」

『パワーアップっ！』

《ブラック・マジシャン・ガール》 ATK2000 3000 .

「これが勝利の鍵だ……《死者蘇生》！俺の墓地に居る《ガガガマジシャン》を蘇生！そして、効果を発動！1ターンに1度、1から8のレベルを宣言し、そのレベルになる！俺はLV7を宣言！」

《ガガガマジシャン》 LV4 LV7 .

一ノ瀬さんは大きく深呼吸した。
やっぱり、彼もエクシーズ召喚を……！

「なあ、慧」

「え……」

「俺、本当はこんな事、やりたくないんだぜ？目立ちたくないかつたしさ……俺なんて、地味なモブキャラで充分だつたんだ。けどさ、」

《ブラック・マジシャン》とLV7の《ガガガマジシャン》が、

小さな光になっていく。

「お前のネオスが、凄く辛そうだからな……感謝しろよな？俺は
レバフ同士の『ブラック・マジシャン』と『ガガガマジシャン』で
エクシーズ！ 来い！ 『N.O.·11 ビッグ・アイ』！
「つ……！」

ようにもよって、ソレ……！？

「で、伝説のカードだけではなく、エクシーズ召喚さえも行つて見
せた編入生！ 一体彼は何者……！？」

黒い光となつたプラマジと『ガガガマジシャン』。その中の一つ
が、ビッグ・アイに吸収されていく。

「ビッグ・アイの効果を発動！ エクシーズ素材を1つ取り除いて、
相手モンスター1体を選択！」このターン、ビッグ・アイは攻撃で
きないけど……永続的に、そのモンスターのコントロールを得る！
じつちに来い、ネオス！」

ネオスが、僕のフィールドから離れていく。
遠くへ行つてしまふ。

大切なネオスが……。

「あ……」

お前のことは、ボクが守つてやるつて。だから泣くな、
な？

ボクは一ノ瀬とうやー、これからは、お前の友達だから
なつ！

「とひ、 や……」

「『マジシャンズ・クロス』の効果は、“他の魔法使い”が攻撃出来ないだけだ。だからネオスは攻撃出来るぜ。元々、ビッグ・アイは効果を使ったターン、攻撃出来ないしな。あ、ちなみに取り除いたエクシーズ素材はブライマジだから、ブライマジガールの攻撃力も上がってるぜ？」

『ブラック・マジシャン・ガール』 ATK3000 3300 .

「バトルフェイズ！ 『ブラック・マジシャン・ガール』で、慧にダイレクトアタック！」

『行くよー！』

「あ…………！」

手が、動かない。

赤い火の玉が、僕を襲つた。

長谷部慧 LP 4000 700 .

「ネオス……行つけえ！ ラス・オブ・ネオス！－！」

『はつ…………－！』

ネオスのチョップが、僕に直撃して…………。

長谷部慧 LP 700 0 .

教室内は静寂に包まれていた。

第五位の編入生に、特待生が負けたんだ。仕方ないっちゃ仕方ないけどな。

俺はデッキをケースに仕舞つて、俺は仕方ないな、と言った感じで溜め息を零した。

「…………無意識に、手加減をしちまつのも…………お前の悪い癖だぜ、慧」

「手加減、とは……？」

生徒会長がマイクを通して、俺の言葉に反応する。
俺は肩を竦めて、元の自分の席に戻ろうと背を向けた。

「大方、その伏せカード……攻撃反応型のトラップだろ。プラマジガールが攻撃しようとしたら、視線がそのカードに向かつたからな」
そもそも、実はチームLEGENDsで、俺は最弱の部類なんだ。あれを防がれてたら手札は0枚だつたし、危なかつただろうな、うん。

「もつとデッキ、改良しようつと……。

「確かに……『聖なるバリア・ミラーフォース』」

……よりもよってそれですか、そうですか。

慧のデュエルディスクから確認したらしいカード。俺は小さく溜め息を零した。

と同時に、教室内の空気が和らぐ。やっぱり手加減してたんだ、とか特待生の人に勝てるわけ無いよな、とか……後、慧タンはあはあ、とか。

最後の奴、潰すか。“アレ”を。

その後。

慧が俺をずっと見続けていた以外は、滞りも無く新期式は終わりを告げた。

「俺なんて、地味なモブキャラで充分だったんだ」（後書き）

タイトル、タイトルが……ツ！

タイトルは後から考えるタイプなので、良いタイトルを考える人は
尊敬します（笑）

「ああ、可愛いこと思つよ」

第一位、特待生寮の一室。

天蓋付きのベッドで横になりながら、長谷部慧は目を閉じていた。

「君、誰？」

「なんで……」

なんで、忘れちゃつていたんだろう。
新期式が終わり、數十程度しか経っていない。デュエルディスクは外したとは言え、服装はまだ赤い制服のままだ。

「……燈夜……」

彼は、忘れないで居てくれた。けれど、自分たちを混乱させない
為にと嘘を吐いたんだろう。

彼ならそうする。
彼は優しいから。

しかも、無自覚で……天然なんだ。

「それに惹かれて、僕たちは燈夜の傍に居たんだよ……？」

その言葉に答えてくれる人は、居ない。
未だに基と幸仁は忘れたまま。

「特徴が無いからリーダー……か。基は照れて、そんな事言つたけ
ど……本当は違うよ？」

段々と涙声になつていいく。

「僕も……基も、幸仁も……君に助けられたんだから。君のおかげで、今の僕たちが居るんだから…………なのに、なんで」

なんで、忘れちやつてたの？

自分に問いかけて……答へば出てこない。

「全部……全部、思い出した。僕は」

声にならない声で、呟く。

慧が燈夜と出会ったのは、小学生の時だった。

『お前、本当に男かー?』
『おい、服脱いで見ろよー!』
『もう、止めなよー。ケイちゃんが可哀相でしょー?』

小学校の教室。複数の子供の笑い声が木靈(じだま)して、幼い慧の瞳に涙が浮かんだ。

喋り方も男らじくなく、仕草も女の子みたいで、顔立ちが可愛らしく、身体付きが華奢で身長が低かった。

その上、明るい茶髪に綺麗なブラウンの瞳は、他の男子よりも随

分違つて見えた。

小さな子供達の間で、田を付けられるのも頷ける。
無理矢理にも脱がせる氣なのか、1人の男子の手が伸びた時。

「まつたしょもねー」としてんのか、お前は？」

慧を面白がつて見ている男子や女子たちと慧の間に割つて入つて
きた1人の男子。

それが、“一ノ瀬燈夜”だった。

「なんだよ、一ノ瀬。 違う学年なんだから関係無いだろっ！」

「コイツはボクと同じ人間！ ほら、関係あるだろ？」

「は、はあ？」

何言つてんだコイツ、みたいな眼で燈夜を見付けるリーダーっぽい男子。

しかし、燈夜の言つている事自体、間違つて“は”いない。一応。
「つかお前ら、コイツが嫌がつてんのわかんねー？ だとしたら馬鹿だな、馬一鹿！」

「はあっ！？ そ、それくらい分かつてるつづーのー、なつ！？」

その男子の問いに頷く後ろの子供達。流石子供、燈夜の簡単な口車に乗せられてしまつた。

「分かつてるならなんで続けるんだ？」

「そ、それは……」

「クラスメイトが嫌がつてゐ事をやるなんてなー。あつ、もしかして馬鹿じやなくて、大馬鹿さん？ 偉い子はそんな事しないんじや

ない？」

ぐつ、と言葉に詰まる男子。

「け、けどよ……ソイツ、男っぽくねーじゃんか。なんか、オレたちと違うつづーか……」

チク、と慧の胸が痛む。

燈夜は背後に居る慧をじろじろと凝視して、一言呟いた。

「んー？ 何が違うんだ？」

「ひや、ひやひ？」

慧の頬を摘み、縦へ横へと伸ばす。どんどん変わっていく慧の顔に、なんとなく面白くなつた燈夜はふつ、と吹いてしまつた。手を離すと、頬が赤くなつてしまつている。

涙目になつて頬を押さえる慧に「ゴメン、と言謝つて燈夜は再び男子達に向かい合つ。

「ボクたちとなんら変わらなくね？」

「え……」

「まあ、確かに髪の色は明るいけど。んなこと言つたらボクとお前じゃ、ボクの方が背は低いし髪は黒い。そっちの子はちょっと太つてゐるし、その子は眼鏡掛けてるじゃん」

人はそれぞれ、千差万別、十人十色。それを幼い頃から……それも天然で分かつてゐるからこそ、本氣で不思議だつた。何が違うのだろう、と。

自分も彼も、他の人も、結局は同じ“人間”なのに。

「…………」

燈夜のその言葉に、男子達は何も言えなくなっていた。

「ほらっ！ 人に嫌がつたことをしきやつた時は、まず「ゴメンナサ
イって言わなきゃね」

燈夜が退いて、男子の背を押す。

「そ、その…………」「、」「めん……」

「ごめん、ゴメン、『免』次々と発せられる謝罪の言葉。慧に詰
め寄っていた全員が、軽く俯きながら口を開いていた。

「もう良いよ！」「これからは普通に友達になろう？　ね？」
「あ、ああ！」

慧が燈夜の方へ視線を向ける。

けれど、その場に燈夜の姿は無く

。

「ふわ～あ」

幼き一ノ瀬燈夜少年は下校途中、大きな欠伸を零した。

眠そうに眼を擦る。

無駄に重いランドセルを背負い直し、帰宅路を歩く。

「…………っ！」

「…………ん？」

声、だろうか。

小さな物音が後ろの方から聞こえてきた。

「…………ノ瀬君ー！」

やつぱり声だった。

後ろを振り向くと、オレンジ色のランドセルを背負った長谷部慧
がこちらに向かつて走ってきていた。

燈夜の田の前まで来ると、はあ、はあと息を整える。
最後に大きく深呼吸して、慧は勢い良く頭を下げる。

「ありがとう、一ノ瀬君ー！」

「は……？」

意味が分からぬ、と言つた風に首を傾げる燈夜。

「えと……何が？」

「今日……助けて、くれて。その上友達も出来たし……」

「あ～、その事か。アイツラとは仲良くなつてる?」

「う、うん。さつきまで一緒に居たし……」

「そつか。んじゃ、ボクのおかげじゃないな

今度は慧が首を傾げる番だった。

「確かにきつかけを作ったのはボクだけじゃ。結局その後、その子と仲良くなれるかは自分次第でしょ？もしボクが君だったら絶対仲良くなれなかつたもん」

それは胸を張つて言えることだらうか……しかし、燈夜は絶対！と言つて頷いていた。

その姿に、慧がふつ、と笑つてしまつ。

そんな慧に、燈夜もははつ、と笑みを浮かべる。

「それにさ。お前、良く男っぽくないとかなんとか言われてたじやん？けどそれって、可愛いって言われてるんじゃないの？」

「可愛い……？」

「そ。男だらうが女だらうが、可愛いは褒め言葉だと毎ひつよ。自信持てば良いじゃん」

ふと。

本当にふと、気になつた事がある。

「その……一ノ瀬君も……僕の事、可愛いって思つたり…………する？」

「ああ、可愛い」と思つよ

ドクン、と……心臓が高鳴る音がした。

小学2年生の慧と小学3年生の燈夜。

一ノ瀬燈夜と、長谷部慧が初めて出会つた時の事。

「ああ、可愛ことと思つよ」（後輩や）

今回は少し短めでした。

うーん、文字数は基本的に4000文字前後を目指しているんですけど、読者にどうすればどちらが良いんでしょ?……?

「……あハ、『マキホール』踏んだ」（前書き）

タイトル？

狙いましたが何か WWW？

「……あつ、『キボール』踏んだ

「凄いですね！ 特待生の方に勝つてしまつなんて「ま、手加減されてたみたいだけな」
「それでも凄いと思いますつ。ただでさえ第五位の人人が特待生の人とデュエルする事は珍しいのに……」

あ、やつぱりそうなんだ。

とすると、アレかな？ 第五位や第四位の人つて、“ドロップアウトボーグ”みたいな感じに言われんのかな？
うは……憂鬱。

新期式の片付けは第三位から第五位の人人が行ひりしく、丁度その片付けが終わつたところだ。
手伝いたいと言つたが断られた結姫は、どうやらずっと待つていてくれたらしい……これがリア充つて奴か！

「ここが購買になります。購買ではパンやジュースなどは勿論、様々なパックが置かれています」

「へ~」

ソレは良いんだけど……金がね。

いつか結姫にも借り、返さないと行けないし……この購買辺りでアルバイト出来ないかな？

「ん？ へえ、パック以外にもカード、売つてるんだな」

一種のカードショップだ。ガラスケースの中に幾枚かのカードがあるし、ばら売りされてるカードも多々だ。

「ちよつと見ていいか?」

「ええ、勿論」

さんわゆ、と言つてガラスケースの中を見していく。流石に日版ばかりで、米版や韓版は無い。

……そういや、今俺が喋つたり読んだりしてるので、日本語だよな? けどここは地球じゃないし……お金の単位も円だし……うーん?

まあ、良いか。

「えと……『聖なるバリア・マリーフォース』……に、2万!?」

「……? 何を驚いているんですか?」

「え? えと、え? いや、な、なんでも……」

た、たけえ……俺の予想以上にたけえ……。

「『激流葬』……4万……『奈落の落とし穴』……1万2000円
……はは、んなアホな」

「冗談は効果だけにしておけってんだ!」

「なあ……この購買つて、カード売ることは出来るか?」「
はい、出来ますけど……」

……はつーしまつた、ブライマジック以外のカードは“向ひつ
”じゃん……。

『燈夜殿』 地球に置いたままのカードは全て持つてくる事が可能で

すが『

「宜しくお願ひしますマハード様」

「な、何してるんですか……？」

はつ……マハードやマナ、結姫たちには見えないんだった……。端から見ると、何も無いところに突然頭を下げた変人の絵が……！

ははは。周りの視線が痛いぜ……チクショー。

「……つ、次行こつぜ？」

「え？ あ、はい……」

止めぬ……そんな眼で俺を見るなーッ！

その後、校内を案内されている間……結姫の視線が少し、痛かつたです。

『マスターつて、結構お馬鹿さんだよね』

「本当の事を言つのは止めようか、マナ。傷付くから

地球上に置いて来てしまったカードを持って来て貰つた。
そんで、一言言つと。

「部屋、狭いツス」

ただでさえ狭いのに、俺のカードが散乱してもうグチャグチャだ。取り敢えず布団が敷かれているところだけは確保。これで俺は眠れる。誰か来たとしても、後1人くらいなら座れるスペースもある。良し。

後は、このカードたちを残す分と売る分に分けるだけだ。

「面倒だけど……やるしかねーよな」

なるべく早く結姫の負担を無くさないと。
それに、

(何か作業してれば……慧たちの事、考えずに済むよな)

まず、使わない分のカードを集めよう。

うーん……本当ならラマジックを使いたいなーって思つてる
んだけど、なんか伝説のカードらしいし……他のデッキも使おうか
な?

あ、けビシンクロやエクシーズは自重しないと……くう、シリイ。

「……先に、使用するデッキ作つまつつか。あー、今日は徹夜か~」

頑張つてっ! というマナの声援が横から。

うん。ボクはその声だけで頑張れるよ! キツと。

なんて自分に喝を入れていたら、ちょっとボロい扉がノックされ
た。

こんな時間に誰だ……? もう夜の8時だぞ?

「は～い。ちょっと待つて～あつ、《ゴキボーリ》踏んだ。ゴメンっ！」

ふう……犠牲は《ゴキボーリ》だけだつたか……お前のことは忘れない……決して。

ガチャ、と意外と良い音と同時に扉を開く。そこには、妙に暗い表情のした……、

「慧……じゃない、長谷部……さん？ どうしたんだ、こんな時間に？」

「燈夜……」

……？

つか、第一位の特待生がこんなところに来て良いのか？ 多分だけど、この学校……もとい、アカデミアも前半のアニメGX同様差別が激しいし、来ない方が……。

なんて思つていると、突然慧がぱつ！ と頭を下げる。

「ゴメン！」

「へ……？」

わっつ……？

「全部……思い出したんだ。一ノ瀬燈夜……18歳、高校2年生……留年しちゃったから、僕や基とは学年が違うんだよね……」

「え……思い出したのか、俺の事？」

「うん。チームLEGENDsのリーダーは、僕の大切な人だよ」

そつか……そつか……っ！

俺は喜びの余り、慧に抱き付いてしまった。

「と、燈夜……つー？」

「良かつた……俺、なんかすっげー寂しくてさ……他人の空似だつたらどれだけ良かつたかって……何度も、何度も……！」

「燈夜……」

それ程、俺は弱い人間だった、ということだらう。

1人じや何も出来ない。家族、友達……傍に誰かが居ないと、俺は孤独に耐え切れず壊れてしまつ。

マナやマハード、結姫が居たから良かつたもの……1日でコレだ。コレが数日、数週間、数ヶ月とあつたら……。

「ゴメンね……燈夜」

「……ああ、ありがとう、慧。落ち着いた」

数分、だろうか。

俺は暫く慧に抱き付いたままだつた。

「ここじゃ何だし、中に入るか？ つっても、スゲエ散らかってるけどな」

「え……えと、良いの……？」

「何遠慮してんだ？ ほら、入れよ」

…………相変わらずの散乱で。

なんとかカードとカードの間を通りて、ベッドの位置まで移動する。

ふう、と息を吐きながら腰を下ろし、カードを纏め始める。

「マナ、茶頬んで良いかー？」

『んー』

「えと……燈夜、マナって誰？」

ああ、そつか。慧はアニメや漫画見て無いから、ブライダルガールつて言わないと分かんないのか。

……いや、見てても分からぬいかな？

「マナー。実体化出来るか？」

『これでもお師匠様の弟子だよ？ そんなの簡単、簡単っ！』

個室に厨房は無い。だから、一度部屋を出て廊下の隅にある厨房まで行かないとお茶を入れることは出来ない。

だから、部屋を出て行こうとしていたマナがふつ……、と実体化する。未だに宙は浮いたままだけど、透き通っていた身体が色を持つた。

「わっ！？ ぶ、ブライダルガール！？ なんでっ！？」

「へ……？ いや、俺の精霊だし。ブライダルガールも認めるぞ？ お前もネオスが精霊だろ？」

「せ、精霊つて……知らないよ」

え……。俺はてっきり、慧もネオスっていう精霊が居て、傍に居るんだと思つたからマナを実体化させたんだけど……。

「マナたちに世界の歪みみたいの、聞かされたんじゃないのか？」
「う、ううう。僕や基、幸仁が眼を覚ました時には世界の歪みにしての知識が頭に入つてて……」

え……んじゃ、聞かされたのは俺だけって事か？

マナに視線を送ると、私は知らない、と首を傾げられだし。どう

やらその理由は分からぬいらしい。

「……まあ、良いか。それより、お茶お願ひ」

『はあい』

情報が少ない今、考へても仕方ないしな。

「ところで、燈夜は何してるの？」

「ん~？ 幾つか俺が使いそうなテッキを作つて、残りは購買辺りに売つちゃおうかなって」

「売るの？」

「ああ。実はさ、この学費や寮費つて、結姫……咲之宮の人が大目に見てくれてるんだよな」

「そつか……確かに、この世界に来た時貰つたお金だけじゃ足りないかもね」

「ゑ？」

「え？」

お金を……貰つた？

「誰に？」

「えと……僕たちをこの世界に呼んだつていう人、だけど

……。

『お茶、お待ちどうづ』

『ひうつ！？』

ンだよソレ……不公平だ、不公平すぎる！

アレか？
慧も基も幸仁も、豊顔立ちが整ってるからありました
つてか！？
平凡でスママセンね、チクシヨウつ！

「…………え、と…………もしかして…………」

……いいえ、何でも御座いません」

くそ……やつてられねー。何が世界を救つて欲しいだ、呼んだの

黒幕にて奴か……せめて顔出せや

ま、マスター……？

それに全然構わなしんたけど

いや構えよー！？

精霊としえと お前は女^の子^だぞ！？

「新編」古今類聚卷之三

「え？ 僕を……犯すの？」

「犯さないから！ 顎を赤く染めるなっ！」

だつて…

つたく、ドイツもコイツも……。

「お前、なんで女子の制服着てるんだ?」

「あ、コレ? コレは、その……」

……?

顔を俯いて、慧は言葉に詰まっている。そんなに言い辛い事なのか……?

「言いたくないなら別に」

「つづん。燈夜には、聴いて欲しいかな……」

「……」

デッキを作つていた手を止めて、俺は真っ直ぐに慧を見つめる。スカートの裾を掴んで、何度も深呼吸している。勇気を振り絞つているんだ。その姿も忘れないよう、俺は視線を逸らさない。やがて、慧の口が開く。

「燈夜は……つ。性同一性障害って、知ってる?」

「……性同一性障害? それってアレだろ? 身体の性別と心の性別が違うって言つて……」

何度も、俺が書いた小説のネタにしているから調べた覚えがある。ん……?

この会話の流れでその病名を出したって事は……。

「……燈夜の思つてる通りだよ。僕はね、生まれ付きの性同一性障害なんだ」

慧は、自分のさらさらな髪を撫でる。ショートの髪は、慧の中世的な顔立ちと相まって凄く似合っていた。

「身体は男だけど……“私”ね、心は女の子なんだよ?」

「…………」

「この世界に来た時……新しい自分にならうって思った。最初は基や幸仁も一線を置かれてたけど……それでも

「お前つて、スゲエ可愛いよな」

え……、と慧の言葉が止まる。

結構恥ずかしい事言つつもりだし、俺は慧に視線を合わせないよう壁に背を預けて、目を閉じた。

「初めて会った時は、性別とか良く分かんなかつたけどさ。中学、高校つて進むとさ……お前がどれだけ可愛いか分かつて來たんだよな」

ま、顔立ちの良さつてだけなら基や幸仁も負けて無かつたけど。

「だつて、そこらの女子より普通にレベル高いしさ。デザインが好きだから、とか言つてレディースの服着てた時も、男だとは思えなかつたし」

「燈夜……」

「けど、やっぱアレだな。基や幸仁よりも一緒に過ごしていた時間が長かった俺からしてみれば、」

一拍。

「慧は慧だな、うん」

「僕は、僕……？」

「そ。男だろうが女だろうが、一人称が僕だったり私だったりしても、長谷部慧は長谷部慧。俺の大切なダチだ」

昔、慧を苛めてた男子に言つた事と同じ。

「イツはボクと同じ人間！」

性別だとか、病気だとか関係なく。俺は俺であるよつて、慧は慧なんだ。

「あ、あはは……なんか、凄くスッキリした。そつか……僕は僕……うん、そうだよ」

じゅうやら、心の蟠りは取れたみたいだな。
わだかま

「あ、けどね燈夜」

「うん？」

「僕、心は女の子だからさ……好きになるの、男の人なんだよね」「あ～、そうか。そりやそうだよな……」

ん？

なんでここでその会話？

ま、まさか……。

「お前……もしかして」

「……うん。僕ね」

「基か幸仁のじゅうか好きなんだな……」

「ええっ！…？」

『『』の流れでっ！…？ マスターってやつぱりお馬鹿さん！…？』

だからそれを聞ひなつて！ 本当の事だから余計傷付くんだよ！

「ち、違うよっ！… 僕が好きなのは、ずっと昔から燈夜なんだから

…」

「え？」

「……………っ！」

ぱり、じ。

綺麗にカードを避けながら、慧は部屋を出て行った。

「……………え？」

『むう……なんか、ヤダな』

……………え？

……………マジ？

「……あゝ、『ヤキポール』踏んだ」（後書き）

特に書くことが無い……ショボーン。

感想、評価等お待ちしております！！

「絶対、好きになつてもいいから」

あの日……慧から想定外の告白を受けて1週間が経つた。

取り敢えず、俺はあれから慧と話していない。というより、俺が近付くとアイツが逃げるんだ。気持ちは分からぬいでもないけど。それと、マナも何故か俺の前に出てこない。なにゆえ何故なにゆえ……？

俺の癒しがつー？

と、本気7割^{兀談}3割の事は置いといて。

俺がこのアカデミアについて分かつた事がある。

「アイツだろ？ 第五位の癖に咲之宮結姫様に近付いてる野郎つてのは……」

「なんで第五位なんかが伝説のカードやエクシーズ使えるんだ？」

「結姫お姉さまに近付いたらコロス……」

えと、うん。

差別はそうだけど、何より結姫の人気が高いといつ事。同じくら
い慧や基、幸仁の人気が高いといつ事。

はあ。前途多難。

「あ、燈夜さん！」

ついでに言つておくと、俺が結姫に近付いているんじゃない。
事実は逆である。

「一緒に教室まで行きましょう。」

「…………ああ」

殺気が凄く……大きいです……。

先日、俺は幾つかデッキを作り終え、残りの殆どのカードを購買に売った。勿論、高かった聖バリ（ミラフオ？）や奈落、激流とか死者蘇生を筆頭に。

すると、どうだらうか。俺は凄いお金持ちになつた。

…………まあ、殆どは貯金と学費、寮費、その他諸々で済んでいたケド。

貯金つて大事だよねつ。ここまでこの世界に居るか分かんないんだしなつ！

鋭い死線（誤字じやない）に耐えながら教室に入った。
と。

「つ…………？」

「…………？　どうしたんですか、燈夜さん？」

「い、いや…………」

なんだ、今の…………？　寒氣…………？

背筋が凍るような感覚。恐怖とかとは何かが違う感情が、身体を縮こまらせた。

そのまま一步が動かせない。結姫が心配そうに俺を見つめ、少し離れた場所では慧がどうしたんだねつ、と首を傾げていた。

「…………そつか」

隣で、声。女性のトーンなのに、妙に低い。

「“テメエ”が、オレの敵か」

振り向けない。口内に溜まつた唾を飲み込んで、俺は唇を噛んだ。
痛い。

その痛みは俺の身体の痺れを解かす。

「つ……！」

意を決して声がした方 結姫とは逆の方向 ヘ振り向ヘ。

「だ、誰も居ない……？」

「誰だつたんだ……今の。それに、さつきの背筋が凍るような感覚
は……？」

「燈夜さん？」

「あ、ああ……なあ、今隣に誰か居なかつたか？」

「隣ですか？　いえ、誰も見ていませんけど……」

……一種のホラーだな。

「……うへん、気のせいだな。昨日夜更かししてたからね」

「……そつですか？　それなら良いんですけど……」

そうは言つても。

“気のせい”じゃないって、俺は心の奥底で薄々感付いていたんだ。

「はあ……階級毎の『デュエルトーナメント』ですか」

俺は理解不能、と脳内で完結させながら呟く。

只今、本日の最終科目を終えたところ。正直、俺にとつては基礎中の基礎って言って良い事を習い終えて、さあ帰ろう、と思つたところの連絡事項だった。

「半年に一回、第壹校では階級毎に代表者を一人選出し、トーナメントをする。その順位によって階級毎に評価やカードなどの賞品を貰っている」

……なあ。

それってさ、基本的に第一位の奴が優勝しないか？ 何、その変な大会……馬鹿なの？ 死ぬの？

つか、

「それって、俺が代表になるのは確定じゃんか……」「そうなるな」

……わざと言っていますね、名も知らぬ一般教師さん。

「開催は明日の朝9時だ」

「早っ！？」

もつと早く連絡しない、普通！？ 一晩しかデッキ調整はさせないってか！

「一応、トーナメント途中のデッキ入れ替えは認められるぞ」

……それ、余り意味無いよな？

何故なら、この世界の殆どが一人一つしかデッキを持つていなければだ。

理由としては簡単。

この世界では、カード1枚1枚の“価値”が高いからだ。

それと、この世界は地球とかとは違つて、自分のデッキに凄い愛着を持つ。人によつては他のデッキを使うと、「浮氣者！」「とか言われる事もあるくらいだ。

「各階級の者は、開催までに代表者を決めておく事。それでは、解散！」

はあ……帰つてデッキ、調整するかね……。

そう思いながら立ち上がると、制服の裾を掴まれている感覚。

「ん……？」

そこに居たのは、かなり身長の低い女の子。俺の胸にも届かないし、見た目だけなら小学生くらいだろうか。

水色の髪はそれなりに長い。髪の毛をツインテールにしていて、肩に触れるか触れない程度まで下りていた。

表情が読みにくいいなー。元々顔色を窺つてその場を切り抜けるタ

イフである俺は、ひょっと厄介。

「えと……どうしたの？」

「…………逃げて」

「は？」

「ボクから……早く」

そう言つや否や、彼女はその場を立ち去る。まるで何事も無かつたかのよつこ、颯爽と教室を出て行った。

「なんだつたんだ……？」

「うーん……コレ入れたいけど……抜きたいカードがねー……」

これ、デッキ編集のあるあるだよな？

『私はこれがびみょーだと思つんだけど……』

「俺も思つけども……ピン入れとくと役に立つんだよ……初手率高いし」

マナに協力して貰いながらデッキを改造中。

さつき、久し振りにマナが俺の目の前に出て来てくれた。
嬉しい……物凄く嬉しいんだけど、なんでこの1週間出て来てく

れなかつたのか、理由は教えてくれなかつた。くそ。

それはともかく。

部屋の中で試行錯誤していると、扉がノックされた。

「はーい」

こんな時間に誰だ？　まだ飯前だし、殆どは自分の寮に戻つてるとと思うんだけどな……。

前みたいにカードが散乱している訳でもないので、スマーズに扉前へ。

開けると、なんか久し振りに間近で見たなー、という感じの慧が。

「慧？　どうした？」

「あの……は、話したいことがあつて」

「ん、そか。取り敢えず中に入れよ」

第五位の寮だけあって、暖房設備とかそういうのは皆無だ。中はまだ暖かいとは言え、外は冷えるだろう。中に入つて、前みたいに2人で布団の上に座り込む。

「んで、話つてなんだ？」

顔は赤いし、ずっと俯いているし……多分この前関連、だよな？勢いで俺に告白して来たあの事件。俺はまあ、この1週間である程度整理は出来たけど……本人は違うんだろうなあ。

「あの……この前の」と、だけど

やつぱり。

「その……小学3年生の時、僕を助けてくれたでしょ？」

「ん……まあ」

自覚は無いけど。

「その時から僕……その、す、すす……好きだつたんだ。燈夜の事……」

「……そか」

「けど……僕は男だし……ずっと、告白出来なくて……数ヶ月間も、燈夜の事、忘れちゃってたし……」

あ、そっか。

俺はまだ数日しか経っていないけれど、基は半年、幸仁^{セイジン}や慧は数ヶ月もの間この異世界に居たんだけな。

「だから……ね。告白の事……忘れて欲しいんだ」「……ん？ 忘れる？」

うん、と慧は首肯する。

「だつて、気持ち悪いでしょ？ 男から好かれても……」

「男つつつたつて、心は女なんだろ？」

「うん……けど、」

「なんか、お前らしくないな」

「え？」

なんつーか、こう……慧は笑つてなきやな。

ただでさえ、基は眉間に皺寄つてるし、幸仁^{セイジン}はクールだし。

なんて考へていると、再び扉がノックされる。

慧に断りを入れて、扉へ向かう。

力子は、と相変わらずの小變咲良い音が鳴る

そこに居たのは、さつき俺に「逃げて」って言つた女の子だった。ただ違うとすれば、さつきはツインテールだったのが今度はボニー・テールだった事。

いや、別人か。身長が違う。さつきは俺の胸くらいかそれ以下だつたのに、今は俺と同じくらいだ。

それに、髪の色も、さっきの子は水色だったけど、目の前の子は銀髪。翠色の瞳も、紅だ。

なんで一瞬でも同一人物だつて思つちやつたんだろ？

それにしても、顔立ちは瓜一つくらい似てる……双子？

「よお……挨拶に来たぜ、一ノ瀬燈夜さんよ」

「ん　ああ、うん。えと？」

き合いなんだからな」「

はあ……さいですか。

「じゃあな。今日は挨拶だけだしよ。ルナに宣しくな
「あ……はー」

ルナ……？ さつきの背の低い女の子の事かな？
取り敢えず扉を閉めて、慧の下へ戻る。

「どうしたの？」

「いや……別に。それより、時間は大丈夫なのか？」

もうすぐ夕食の時間だ。DPで時間を確認した慧は、あつ！ と
声を上げて立ち上がった。

「そろそろ戻らないと……」

「はは、やつぱりか。 なあ、慧

「え？」

まあ、本当は色々言いたい事があつたんだけど、時間が無いし…
… 一つだけ。

「忘れないからな、お前からの告白。そりゃ、今は世界の歪みやら
なんたらで返事は出来ないけど……

ちなみにそれは俺の言い訳だ。

世間は俺を、“ヘタレ”と呼ぶだらけ。うん、自覚してるよ?
ヘタレで何が悪い！

「お前はお前のまま、真っ直ぐ進めば良いだろ？ 初めて他人に力
ミングアウトするけど、俺って……まあ、男だらうと女だらうと大
丈夫な奴だから。別に気にしないし」

まあそれは、慧とずっと一緒に居て、なんか段々と吹っ切れて来たからなんだけど……閑話休題。

「つまりはアレだ、その……俺に好きになつて貰いたいなら、努力すれば良いだろ?」

うわ、最低男の発言だ。自分で言いながらうわ~、ってなる。

「……そうだね。うん。ありがとう、燈夜!」

笑顔。

そう、その笑顔だ。その笑顔を待つてたぜ、慧。

「絶対、好きになつてもうつから。覚悟しておいてよ、燈夜!」

「絶対、好きになつてもいいから」（後書き）

慧が吹っ切れた回。

性別なんて気にせず、慧はこれから燈夜にアタックして行くでしょうね。

そんなことよりつ（酷）、燈夜は男でも女でもOKだという新事実！

その辺りは作者と同じ。

所謂“バイ”ですね、分かります。

感想、評価等お待ちしております！！

「ライバル宣言、しちゃいます！」

「あ……始めよっか

……いや、おかしいだろ、コレ。

田の前に居るのは、どう見ても教師だ。うん、間違いない。第五位の寮長をやつてる、彰正煉昌先生。アキマサ れんしょう彰正が名前だ。無駄に爽やか顔、基や幸仁並かそれ以上の整った顔立ち。優男つてこいついう人を言つんだなあ、なんて思つたり。

「……いやいや、え？」

今日は朝から、疲れる事ばかりです。

今日は朝から、マナの機嫌が悪かつた。
何故かずつと姿を現したまま、俺の隣で頬を膨らませたりしていった。

俺が話し掛けると、ふいっ！ という感じで顔を背けられたり。
それだけで俺の一日の活力が無くなつた気がする。

しかも、今は他の人も姿が見える状態。そろそろ登校しないと行けない時間帯だから、姿を消してもらわないと……。

「えと……卅、マナ?」

『……何?』

……怖。

「いや、あの、えと……ど、どうして機嫌悪いのかなー、と」

『…………マスターの所為だもん』

「へ?」

俺が何かした……ってこと? いつ? ま、まさか……俺が寝て
る時に何かしちまったのか!?

『……? なんで土下座してるの?』

「なんかしなきゃイケナイ気がした」

『…………ふつ』

暫くやつしてると、マナが耐え切れない感じで吹き出した。
そして、あはは……、と無邪気に笑い始めた。

『ははは……。うん、許す。マスターって昔からやつだし……それ
に、嫌われちゃつたりするよりはマシだもんね』

なんか良く分からぬけど、許してもらえた……? つか、昔か

「……?」

らつて……見てたのか、俺のこと？

なんて疑問に思つてゐると、扉がノックされる。

「燈夜ー？ 一緒に行こつよー」

「ん……慧？」

「わ、私も居ますよつ！」

「……結姫も？」

第一位と第二位の人があつたぞ。

まあ、良いか。

俺はディスクと複数のデッキの入つたバッグを持つと、DPをポケットにしまい玄関へ。扉を開けると……。

(え?)

何故か、慧と結姫が見詰め合つて……うん、嘘。睨み合つていた。

Why?

「え、と……おはよう、2人とも」

「おはよう、とう……」

「おはよつじやつこめ……」

……? なんだ、2人とも?

『……あ。ゴメン、マスター。姿消すの忘れてた

……なん、だと。

つか、慧はマナの事、知つてるだろつ！？

「だつ、誰ですかあの人はつ！？」

「いや、えつと……マナ、です」

「そつか……そういうえば、マナちゃんつて燈夜とずっと一緒につけね……」

「いつ……ー？」

ジト～……。何故か結姫に睨まれるマナ。その睨み 자체は怖くなく、どちらかといえば可愛い部類なんだけど……睨む理由が良く分からぬ。

『あはは～。うん、良い機会だよね』

……何が？ 嫌な予感しかしないんだけど……。

マナはさつきよりもさらに現実味を帯びた。気配というか、温度というか……そういう物がハツキリしたように見える。言つならば、普通の人間みたいな感じ？

そんな感じになつたマナは、突然俺の腕に抱き付く……つてええつ！？

「2人には、ライバル宣言しちゃいま～す！」

「「「つー？」」

「ライバルで……お前、デュエル出来たつけ？」

「「「つー？」」

つか、胸当たつてるから！ その格好で近付こしゃりめええ。

「お……俺、先に行つてるからな！」

マナから逃れ、俺はその場から逃走。精霊のマナは近くじやなくて良いのかな、なんて頭の片隅で思いながら走った。

……朝から凄く疲れた。そんな気がする。

んで、9時少し前。階級別トーナメント開催まで後数分、と言つた感じ。

教室の液晶板に写されたトーナメント表と連絡事項を呼んで、俺は唖然としていた。

例えば。

第一位から第五位の代表者他にも、教師群で1人、大会に参加する人が居る、とか。

教師と第一位以外の人気が優勝した場合、その者は昇格する事が出来る、だとか。

優勝した人は、出来る限りの願いを叶える事が出来る、とか。

第一回戦は、第五位の代表者……俺対、第五位寮長の彰正先生、とか（これ一番大事）。

んで、回想終わり。

場所はデュエル場。1階はデュエルスペースになっていて、2階以降は全て観客席になっている。

その観客席に何故か並んで座っている慧、結姫。俺が視線を送ると、2人とも手を振ってくれた……のは嬉しいんだけど、男からの死線が大きいです、ハイ。

……良く見ると、慧、結姫と並んで座っている人も見覚えがある。

「鴻ルナ……だよな？ 多分」

それはともかく、マナは既に精霊化しています。今回は出番が無いから、俺の傍には居ないけど。

『では、階級別デュエルトーナメント第一回戦、第五位代表者一ノ瀬燈夜対、教師群代表者彰正煉昌先生、始め！』

「先攻はどうぞ、一ノ瀬君。第五位の力、僕に見せてみてよ
「……俺のターン、ドローー！」

ターンランプは向こうは光っていたはずなのにな……流石、教師群の中で一番人気が高い先生なだけある！

「俺は 『サイレント・マジシャン LV4』を召喚！」
「へえ……」

イラストでは女性と分かり難い魔術師……サイレント・マジシャンが場に現れる。

幼い子供だから、力も弱い。けれど、

「《レベルアップ！》発動！俺の場に居るLVと名の付いてるモンスターを墓地に送り、そのモンスターに記されているモンスターの召喚条件を無視して特殊召喚する！来い、《サイレント・マジシャン》LV8』！！」

「……それは、子供が大人に成熟した姿。攻撃力は3500もある。

「攻撃力3500のモンスターが、手札2枚消費で出てくるとはね……」「それに、このカードは相手の魔法の効果を受けませんよ」

そう、それが地味に効くんだよね。

ライボルだつたり、地割れ、地碎き……その他諸々。俺の好きなモンスタートップ5に君臨するぜ！」

『ありがとう、燈夜様』

「……へ」

『さあ、一緒に戦いましょう』

……空耳ツスか？ 空耳ツスよね？

氣を取り直して、と。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「では僕のターン、ドロー。僕は《グリーン・ガジェット》を召喚。効果により、デッキから《レッド・ガジェット》を手札に加えるよ」「つ……ガジェット、か」

結構な古株ながら、結構な頻度で大会に参戦していた強者だ。つわもの

ただ、俺が知ってるガジェットでは除去が多めだとは言え、地砕きとかが多い。LV8にはそれらが効かないから、怖いのは罠力トラップだ……。

「カードを一枚伏せて、ターン終了」

「俺のターン、ドロー！」

手札は4枚、か。

「……バトル！『サイレント・マジシャン LV8』で『グリーン・ガジェット』に攻撃！」

「モンスターの召喚は無し、か。残念だね……罠発動、『狡猾な落とし穴』！僕の墓地に罠カードが無い時に発動出来る！ フィールド上のモンスターを2体破壊する！」

げ……。

今、フィールドに居るのはグリーンとLV8だ。

「ゴメン、サイレント・マジシャン……守れね！」

『仕方ないわ。また、近い内に』

……また喋った。

……コイツも精霊、つて奴だろうか。

まあ、良いか。

「メイン2！俺はモンスターをセット、カードを一枚伏せてター

ン終了！」

「僕のターン、ドロー。さて、厄介なモンスターは居ないし動こうか……僕は手札より、《歯車街》を発動する」

が、ガジェットはガジェットでも古代の機械関連の方か！

除去ガジェット、代償ガジェット、マシンガジェット……エクシーズは無いにしても、ある程度の候補の中でもさかそれとは。

こりゃ……パワーで勝てるのはサイレント・マジシャンだけだぜ。

「その顔じゃ、《歯車街》の効果は知ってるみたいだね。聰明で何よりだ。このカードの効果により、アンティーケ・ギアと名の付いたモンスターが必要とするリリースは1体少なくなる。そこで僕は、《古代の機械獣》と通常召喚！」

「うわ……よりもよってそれか……」

歯車で出来た街に、機械で出来た獣。LV6で攻撃力は2000と少なめだが、効果が厄介だ。

まず、《古代の機械獣》が攻撃する時はダメステ終了時まで魔法、罠カードを使えない。つまり《次元幽閉》だつたり《炸裂装甲》、攻撃宣言した後だと《月の書》などが打てないということだ。

2つ目の効果は、《古代の機械獣》が戦闘破壊したモンスターの効果は無効化されるということ。

《巨大ネズミ》、《仮面竜》などのリクルーター、《クリッター》などとのサーチャー、《異次元の女戦士》なども無効化、ということだ。

「続いて、《ダブル・サイクロン》発動。僕の場の《歯車街》と、君の場にある左側の伏せカードを破壊したいな」

「うわー……やべ」

破壊されたのは、《奇跡の軌跡》だ。

「へえ……相手にドローをせる代わりに、攻撃力を1000上げて2回攻撃させるカードか。確かにサイレント・マジシャンと相性は良いね」

……まあ、そのモンスターが攻撃した時の戦闘ダメージが0になるデメリットもあるけど。

「それじゃあ、破壊された《歯車街》の効果を発動。デッキより、《古代の機械巨竜》を特殊召喚！」

本当に、大きいな……。

つい見上げて、息を吐いてしまう。

戦意が喪失してしまいそうな程の迫力。

……このデッキでアイツに対抗出来る攻撃力を持つてるの、サイレント・マジシャンだけだぞ。サイマジ以外で最高攻撃力は1600なんだし。

「バトルフェイズ。まずは《古代の機械獣》でセットモンスターに攻撃！」

「く……モンスターは《見習い魔術師》です」

「リクルーター、だね。けれどギアビーストの効果により、無効化されるよ」

……分かつてるよ。

何の効果も発動されず、《見習い魔術師》は破壊され墓地へ行く。

「続いて、《古代の機械巨竜》で直接攻撃！」

「う、うわああああああああつ……！」

一ノ瀬燈夜 LP 4000 1000 .

「ええ……つい俺も大声を出しちまった。

結姫を襲つた不良さん。大袈裟じやね？ とか思つてしまつてマジすんません。こりや、大袈裟にもなりますね、ハイ。

「それじゃ、僕はターンエンドかな」

「くう……俺のターン、ドローー！」

ふう……落ち着け。

まだ大丈夫。

「その眼……まだ諦めてないみたいだね。さあ、君の力を魅せて見て」

「ええ……行きますよ！ 僕は魔法カード、《トレード・イン》を発動！ 《サイレント・マジシャン LV8》を捨てて、2枚ドローフ！ ク……まだ！ 速攻魔法、《手札断殺》！ お互いに手札を2枚墓地に送り、2枚ドロー！」

「成る程ね。サイレント・マジシャンと相性が良いカードをどんどん積んでるみたいだね」

勿論。

この『デッキの主役は、サイマジだからな！

「 良しつ！ リバースカードオープン！ 《コミット・リバース》！ 戻つて来い、《サイレント・マジシャン LV4》！」

攻撃力が1000の幼いサイマジが復活する。けど、ゴメン。

子供の君は正直……うん、使い回し。

「魔法カード、『レベルアップ!』」

「一枚田だぜ……引けて良かつた、ホント。

「もう墓地に2枚あるけど……もう1枚はまだデッキの中だ!　『サイレント・マジシャン』LV8!…」「

『今度こそ、行きましょうか、燈夜様』

「ああ!　バトル!　『サイレント・マジシャン』LV8』で『古代の機械巨竜』にアタック!」

サイマジが放った炎は小さく、とても頼りない。けれどその破壊力は、古代の巨竜なんて目じやないぜ!…

「く……つ!」

彰正煉昌 LP4000 3500 .

「俺はこのまま、ターンエンド」

「まさか、ガジェルドラゴンが倒されるなんてね……君が第五位とは、アカデミアも質が落ちたというか」

いや、それ教師が言っちゃ駄目な気がするよ?　それに俺の場合、編入したてだからっていう理由があるんだし。

「けれど……僕が担当する唯一の寮生が君とは、僕も鼻が高いよ、燈夜君」

「はは……ありがとうございます」「やーい

「さて……僕のターン、ドロー！」「

彰正先生は、何を引いた？

俺が緊張に身を固めていると、彰正先生はふふ、と柔軟に笑った。

「……カードを信頼する事によつて、デッキは応えてくれる。それほど世界でも一緒に僕は思つてゐる」

「……？ はあ」

「事実、君のデッキも応えてくれている。あの状況を、《ブラックホール》などのパワー・カードを使わずに突破されるとは正直、思つていなかつた」

褒めて、くれてるんだよな……？

なんか実感が湧かない褒められ方だ。

「……僕のデッキも、応えてくれたよ。燈夜君」「え……？」

「僕は《レッド・ガジェット》を召喚。効果により、《イエロー・ガジェット》を手札に加え、バトルフェイズに移行する！」

「……？ バトルフェイズ？

パワーでサイマジに勝てない事は誰しもが分かっている事……魔法も効かないし……はつ！？

ま、まさか……？

「気付いたかい？ 《古代の機械獣》で《サイレント・マジシャンLV8》に攻撃！」

……来る！

「ダメージステップ、《リミッター解除》！ 僕の場に居る機械族モンスターはエンドフェイズに自壊する代わりに、攻撃力が倍になる！」

《古代の機械獣》 ATK2000 4000 ·
《レッド・ガジェット》 ATK1300 2600 ·

「くそ……もうギアビーストが攻撃宣言してるから伏せカードが使えない……」

俺の伏せカードは《魔宮の賄賂》。これが使えないんだもんなあ。

「スゲェな……先生の言った通りだ。カードを信頼してれば、本当にデッキは応えてくれるんだな……」

「そう。最近の子は、それを分かつてはくれないんだけどね……」

確かに、そうかもしれない。

けど！

「……先生なら、分かるよな。ダメージステップじやなくて、ダメージ計算時に打てるモンスターカードの事」

「ん……っ！ まさか……！？」

「本当に、デッキは応えてくれたぜ……！ 最後の手札の効果を使う！ 《オネスト》お！！」

《サイレント・マジシャン LV8》 ATK3500 7500 ·

「返り討ちにしてやれッ！」

『流石……新しい主人は違うわね。力が漲つてくるわ』

バトル続行！

『「サイレント・バーニング！！」』

彰正煉昌 LP 3500 0 .

そんなこんなで、俺はテュエルに勝利した。

「ライバル宣言、しちゃいます！」（後書き）

まだ連載始めて10日しか経って居ないので、メインの『遊戯王』
僕らの進んで行く道』を超える勢いのLEGENDs。

……更新速度つて、大切だね。

感想、評価等お待ちしております！！

「ソイツが俺の敵か」

「うおおおおおおおおおおおおおー！」

歓声が上がる。

快く思つてないとは言え、第五位の人間が教師を破つたのだ。盛り上がりがない訳がない。

「本当に、デッキは応えてくれたぜ”……か

ツインテールではなく、ポニー^{テール}。

鋭い視線で喜ぶ一ノ瀬燈夜を見詰めながら、はつ、と鼻で笑う。

「物語の主人公みてーな台詞吐くじゃねエか……んなもん、糞喰らえだな

似^{テメエ}非主人公は。

「オレがぶつ潰してやるよ」

「まさか、あそこで『オネスト』とはね……負けたよ
「今日は運が良いみたいですよ」

「運も実力の内、か。君は強いよ。このアカデミアでも指折りにね。僕が保障しよう」

「、」ここまで真っ直ぐに褒められると照れる……。

「お疲れ様でした、燈夜さん。凄かつたです！」

「本当だよ。先生もお疲れ様です」

デュエル場から少し離れて俺と彰正先生が話していると、観客席から降りてきた慧と結姫が近付いて来た。

「ありがとうございます。それにしても、僕に勝つんだから、多分すぐにでも第五位を抜けられるんじゃないかな、燈夜君は」

「そうですね。煉昌先生はこのアカデミアでも強い方ですし、間違い無いと思います」

「そうだつたのか。

確かに、俺もかなり危なかつたな。彰正先生は『リミッター解除』を引いたとは言え、俺は『トレード・イン』、『手札断殺』とドロー補助をしてやつと『オネスト』だ。

今回は運が良かつたけど、次やつたらどうなることやら。

「それはともかく、次の対戦は……」

「第一位対第三位だよ」

「第一位の代表者は私です。第二位の人は良く知らないんですが、女性だと言う事は聞いています」

デュエル場の向こう側には、既に1人の女性がスタンバつてゐる。

『早速次へ参りましょう。第一位の代表者と第三位の代表者はデュ

エル場へ上がつてください』

「行つて来ます」

「ああ。頑張れよ、結姫」

「はい！」

さて、どんな『テュエルを見せてくれるのかな……？

かなり楽しみにしながら、俺は慧や彰正先生と共に観客席へ向かつた。

『では第一回戦。第一位代表者、咲之宮結姫さん対、第三位代表者、
御園凜那さん……始めて下わー』

『テュエル場に立つている結姫に、緊張感といった類は感じられない。対戦相手の御園つていう人もそうだ。

下半身にまで届きそうなかなり長い髪は俺並に黒い。瞳の色は……遠田だと分かりにくいけど、灰色っぽい。

それにして背が高い。俺と同じくらいだろうか？ 多少、俺よりは小さい印象を受ける。

「先攻は私のようだな。ドローー！」

『うわやあターン！』ハシブチは御園さんに灯りを点したらしく。

「……私はモンスターをセット。ターン終了」
「私のターンです、ドローっ！」

最初は無難にモンスターをセット、か。

「私は『イービル・ソーン』を通常召喚します！　『イービル・ソーン』の効果を発動！　このカードをリリースして、相手に300ダメージを与える、任意の数、デッキから『イービル・ソーン』と特殊召喚出来ます！」

「く、う」

御園凜那 LP 4000 3700 .

一瞬だけ『イービル・ソーン』がフィールドから消えたかと思うと、今度は2体の『イービル・ソーン』が場に並ぶ。

「このカードはダメージを与える効果は使えません。しかし、私は魔法カード『超栄養太陽』を発動します！　このカードは私のフィールドに居るLV2以下の植物族モンスターをリリースして発動し、リリースしたモンスターのレベル+3以下のモンスターを特殊召喚します！　『イービル・ソーン』をリリースし、デッキより『ローンファイア・ブロッサム』を守備表示で特殊召喚です！」

やつぱり、植物族デッキか。

原作で、5D、Sのヒロインである十六夜アキが使つてた種族だよな。正直、アキが使うまではスゴイマイナー種族として有名だったのを憶えている。

「『ローンファイア・ブロッサム』の効果を発動します！　『イー

ビル・ソーン》をリリースし、デッキより《ギガ・プラント》を特殊召喚します！」

「ここはティタニアルじゃなくて、ギガプラか。

俺が前に作つた植物デッキはデュアル軸で、《スープルヴィス》と《血の代償》を使ってワンキルするデッキだつたな。

「バトルです！ 《ギガ・プラント》でセットモンスターに攻撃します！」

「モンスターは《シャイン・エンジェル》だ。リクルート効果により、私はデッキから《クイーンズ・ナイト》を特殊召喚！」

《クイーンズ・ナイト》……つてことは、絵札の三銃士か。
俺も作ろうとしたけど、納得出来るのが作れなくて止めたな……。

「う……これは嫌な予感がします……私はカードを一枚伏せて、ターンを終了します！」

「私のターン！ ドロー！ 私は手札より、《キングス・ナイト》を通常召喚！ 《クイーンズ・ナイト》が自分フィールド上に存在する場合にこのカードが召喚に成功した時、デッキより《ジャックス・ナイト》を特殊召喚する！」

一気に並ぶ騎士たち。

「永続魔法、《連合軍》！ 自分フィールド上の戦士族、魔法使い族モンスター1体につき、私の場に居る戦士族モンスターの攻撃力は200ポイントアップする！」

今、場に居るのは三銃士。

つまり、全員の攻撃力が600ポイント上がるという事だ。

『クイーンズ・ナイト』 ATK1500 2100 .

『キングス・ナイト』 ATK1600 2200 .

『ジャックス・ナイト』 ATK1900 2500 .

ジャックスの攻撃力が、『ギガ・プラント』の攻撃力を超えた。

「バトル！ 『ジャックス・ナイト』で『ギガ・プラント』に攻撃！」

「罠発動します！ 『ゾーン・ウォール棘の壁』！ 私のフィールドに存在する植物族モンスターが攻撃対象にされた時、相手の攻撃表示モンスターを全て破壊します！」

出た。擬似『聖なるバリア・ミラーフォース』。

「甘いっ！ 私は手札より速攻魔法、『我が身を盾に』発動！ 1500ライフポイントを支払い、モンスターを破壊する効果を持つカードの効果を無効にし破壊する！」

「つ……！」

御園凜那 LP 3700 2200 .

それによつて、『棘の壁』は無効化されて『ギガ・プラント』が破壊される。

咲之宮結姫 LP 4000 3900 .

「バトル続行！ 『クイーンズ・ナイト』で『ローンファイア・ブロッサム』に攻撃！ 続いて『キングス・ナイト』でプレイヤーにダイレクトアタック！」

「さやああつ！」

咲之宮結姫 LP 3900 1700 ·

「メインフレイズ2へ移行！《融合》つ！場に居る三銃士を融合し、来い！《アルカナ ナイトジョーカー》！…」

かつさえ。

三銃士を融合させて出てきたアルカナに、俺はただその感想を持つた。
それに、手札は3枚もある。アルカナの効果を使うには充分な数だ。
その上、《連合軍》の効果で攻撃力が上がる。

《アルカナ ナイトジョーカー》 ATK3800 4000 ·

「さらに私は《フュージョン・リカバー融合回収》を発動！墓地の《キングス・ナイト》と《融合》を回収し、ターン終了」

上手い。《融合回収》によつて、アルカナのコストがまかね抑えている。

「うう……私のターン、ドローします！モンスターをセットし、ターン終了します」

結姫は防戦一方か。

日本……もとい、地球の植物はシンクロやエクシーズがあるけれど、この世界だとその召喚方法が存在しない。

という事は、優秀なチューナーモンスターの《グローアップ・バルブ》、《スポーツ》などが居ないことになる。

……つてことは、攻撃力3000以上のモンスターを対処する方法は少ないんじゃないだろうか。

「私のターン、ドロー！　2枚目の《クイーンズ・ナイト》を召喚し、バトル！」

《アルカナ ナイトジョーカー》 ATK4000 4200 ·
《クイーンズ・ナイト》 ATK1500 1900 ·

「アルカナでセットモンスターに攻撃する！」
「モンスターは《ダンディライオン》です。このカードが墓地へ送られた時、綿毛トークンを2体特殊召喚します」
「成る程。ならば、《クイーンズ・ナイト》で1体のトークンに攻撃」

成す術も無く、1体のトークンが破壊される。

「ターンエンドだ」

さて、結姫はどう出るかな？

「私のターン……ドロー！　魔法カード、《ブラック・ホール》ツ！…」「つー？」

うわ、引きつええ……。

アルカナの効果は対象になつた時に発動できる効果。対象を取らないブラホは、《クイーンズ・ナイト》と綿毛トークン1体を巻き込んでモンスターを破壊する。

「永続魔法、《増草剤》を発動！ このターン、私は通常召喚権を破棄して墓地より《ローンファイア・プロッサム》を特殊召喚！」

この流れも強いなあ、やっぱり。

「ローンファイアの効果を発動します。リリースはローンファイアで、その時《増草剤》も破壊されます。デッキより、来て下さい…！」

『《椿姫ティタニアール》…』

出て来た……俺が植物デッキを作った際、いつも初手に居たから周りからは嫁、嫁と言われたカード。
薔薇が旋風と共に巻き上がった。

「バトルフェイズです！ ティタニアールで、御園さんにダイレクトアタック！」

「く……、一步足りなかつたか」

御園凜那 LP2200 0 .

意外にもあつさりと。
デュエルは、終了した。

「お疲れ様、結姫。御園さんも」

顔見知りだったのかは分からぬけれど、2人で一緒に観客席ま

で上がってきたのを迎えた。

俺の2つ隣……ルナちゃんは俺に用事があるからこの席は使って良い、と告げてその場から居なくなり、彰正先生も下の生徒会メンバーが居る場所へ行ってしまい、席は2つ空いている。

「ありがとうございます」

「ああ……えっと、確か……」

「一人瀬燈夜だ。宜しくな」

「いらっしゃいこそ。私は御園凜那だ。凜那で良い」

差し出された手に応えて、俺は御園さん……凜那と握手する。
……隣でジト眼になつてゐる慧と結姫は……取り敢えず無視。慧
はまあ分かるけど、結姫はなんでも……？

彰正先生が座つていた場所……つまりは俺の隣に結姫が座り、そ
の向こう側に凜那が腰を下ろす。

『では第三回戦。これが終わり次第、休憩になります。では、第一
位の代表者と第四位の代表者はデュエル場へ上がつてください』

マイクを通しての響く声に反応して、2人の人影がデュエル場へ
上がる。

1人は幸仁だった。相変わらずの長い髪を揺らしながら、物静か
に会場へ上がる。と同時に、女性の黄色い歓声が湧き上がった。

す、スゲエ……スゲエ人気だな、幸仁。それに全く反応しない幸
仁も幸仁だが。カイザーミたいな奴だよ。

しかし、GXにてカイザーっていうのも強ち間違いないじゃない。幸
仁はチームLEGENDsでも一番強かつたしな。

そしてもう一人。

高い身長、結ばれた長い髪。銀色の髪。

アレは、

「鴻ソル……？」

何故かは知らないけど、俺に挨拶しに来てくれた子だ。あの子、代表になつたんだな。

『第一位代表者、瀧川幸仁君。アカデミア最強と言われている、『青眼の白龍』使いの特待生です！一方、第四位代表者は鴻ルナ……じゃない、ソル、さん？えと、情報があんまり有りませんが……と、とにかく始めて下さい』

……？ 情報？

俺は生徒会長が言った台詞に内心首を傾げるけれど、そんなの結構い無しにデュエルが開始される。

「先攻は譲ろう」

「要らないな。オレは後攻の方が好きなんだよ。ターンランプに従つて、テメーが先攻やりやがれ」

「……そうか。では俺のターン、ドロー！」

先攻は幸仁らしい。

「《増援》を発動。デッキより《正義の味方 カイバーマン》を手札に加える。《調和の宝札》。手札の《伝説の白石》ホワイト・オブ・レジションを捨て、2枚ドローする。その後、《伝説の白石》の効果によりデッキの《青眼の白龍》を手札に加える」

「おお、一気に手札が回る。

既にブルーアイズを出せる手札にしたな、幸仁。」

「『トレード・イン』発動。手札のブルーアイズを捨て、2枚ドロ一する。『おろかな埋葬』。『伝説の白石』を落とし、デッキからブルーアイズを手札に」

「……嫌な予感がする。」

「カイバーマンを召喚し、効果を発動。このカードをリリースし、1体目のブルーアイズを特殊召喚する。『古のルール』。手札に居る2枚目のブルーアイズを特殊召喚。そして、」

「……え？」

「『死者蘇生』。墓地に存在する『青眼の白龍』を場に降臨させる！」

「……え？」

場に並ぶ3体の白き龍。漫画やアニメで見たブルーアイズじゃ眼じゃないくらいの大迫力。

もし俺がアレに成功してたら、『粉碎玉碎大喝采はあーはつはつはー!』みたいな笑いをしていたに違いない。

この光景には、流石の俺や慧も苦笑いを隠しきれない。
対戦相手じゃなくて良かつた、と……本気で思う。

まあ、ブラホで一発なのは『愛嬌。

「カードを一枚伏せ、ターン終了」

「はあん……やるじゃねーかよ。流石、御神みかみが選んだだけあるぜ」

「御神……？」

「御神……って、誰だ？」

鴻さん……ルナって子も居るし面倒だな。ソルで良いか……が言った御神という人名。

それに反応したのは、隣に居る慧だった。

「御神つて誰？」

「あ……えと、この前言つたさ」

俺の後ろに居る結姫たちを慧は一瞥し、口を近付けてくる。俺も伴つて耳を近付ける。

「僕や幸仁、基がこの世界に来てから会つた人が、御神つて名乗つてたんだ。その人がこの世界の事とか、養子縁組とか……後、お金とか」

「ソイツが俺の敵か

「……あ、あはは」

御神、御神……覚えたぞ、御神！

会つたら絶対文句言つてやる！

……と、まあ本音10割冗談無しの事は置いといて。

御神が選んだ、って事はこの世界に連れて來たのは御神つて人なんだよな。世界の歪みとか、そこら辺も分かつてゐる事になる。一体何者だ、御神つて……？

「オレのターン、ドローするぜ！ まずはその伏せカードを使わせてやる……『ブラック・ホール』！」

「……カウンター罠、『王者の看破』発動」

「どううな

『王者の看破』。LV7以上の通常モンスターが自分フィールド上に表側表示で存在する時に発動可能のカウンター罠で、ノーコストの『神の宣告』みたいな感じだ。

さて、ソル……ここでブラホを使つた、ってことはあの龍たちをどうにか出来る手立てがある、ってことだよな。看破も見抜いてたみたいだし。

「『闇の誘惑』発動！ カードを2枚ドローして……そうだな、『終焉の精霊』^{ジエンドスピリット}は要らねーな。除外だ」

『終焉の精霊』……か。『ネクロ・フェイス』とか、除外を使つたデッキって事だよな？

「さて、瀧川。テーマにやもう未来はねーぞ」「何？」

「……オレは、手札の『墮天使ゼラート』を捨てて『ダーク・グレファー』を特殊召喚するぜ。そして効果を発動！ 『墮天使スペルビア』を捨ててデッキから2枚目の『墮天使ゼラート』を墓地へ送る」

「墮天使デッキか……。『終焉の精霊』も入つてたって事は、除外も存分に使うんだろうなあ……。

「『ダーク・ヴァルキリア』を召喚。このカードをコストに、『前

線復活の代償》を発動するぜ」

……成る程。

《ダーク・ヴァルキリア》はデュアルモンスター。再度召喚されない限りは、通常モンスター扱いされる。

さらに《前線復活の代償》は通常モンスターをリリースして、自分が相手の墓地のモンスターを蘇生させるカードだ。

そして、

「オレの墓地に居る《墮天使スペルビア》を蘇生して、効果発動！
墓地に天使族……《墮天使ゼラート》を特殊召喚ッ！」

墓地から蘇生されたから、スペルビアはさらなる天使を呼び出す。

「ゼラートの効果発動！ 手札の《終末の騎士》を捨てて、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！」
「く……っ！」

ゼラートの効果によって全滅する伝説の龍たち。
これで幸仁の場はがら空きだ。

「んじゃ、バトル入るぞ、瀧川サンよ。《墮天使ゼラート》でダイレクトアタックつ！」

「つ……！」

瀧川幸仁 LP 4000 1200 .

「……なんもねーな？ 《墮天使スペルビア》でトドメだッ！…」

瀧川幸仁 L P 1 2 0 0 0 .

後攻2ターン目で、幸仁は敗北した。

「ソイツが俺の敵か」（後書き）

今回は一回、デュエルを行いました。

疲れた……。

初ターン、ブルーアイズ3体。

格好良いですね（笑）

しかし、やはりデュエルを考えるのは苦手です。

……うん、頑張ろつ。

感想、評価等お待ちしております！

「ハ、ハラセ……シ……」（前書き）

「の辺りから、なんかグダグダします……」（泣）

「ハ、コレは……ッ！」

第一位の人間が、第四位の人間に負ける。

それは、アカデミア全体に多大な動搖とショックを与えていた。
俺や慧も例外ではない。

……まあ、

「すげ……あの状況から勝つなんてな。あの子ってあんなに強いんだ」
「す、凄い事ですよ……階級つて、それこそ断崖絶壁な程に実力差
があるんです。だからこそ生徒たちは上がる事に憧れ、上がる事を
諦めるんです」

……大袈裟じやないのか、それ。

正直、デュエルなんて時の運。仕組んだりしていない限り、どっ

ちが勝つてもおかしく無い勝負だ。

勝負に、『絶対』は無い。

「……慧も同じ気持ちか？」

「う、うん……仮にもこのアカデミアに3ヶ月も居るし……多分燈
夜も少しココに居れば、気持ちは分かる筈だよ」

「……」

そんなモンかね。

まつ、少なくとも今は階級なんて興味無いし、素直にソルの勝利
を祝うかな。

なんてコトを思いながら、俺は一人で拍手をする。周りが凄く静

かだつたから、たつた1人の拍手だろうと会場に大きく響いた。

ただ、呆然としている中、俺以外が拍手してくれる筈も無く……うん、寂しい。

『……つ、次の対戦は午後の13時30分から行います……それまで休憩で……』

珍しく肩を落として去っていく幸仁に、基が近付いていくのが見えた。

「いや、コレは……ッ！」

か、買つしかないのか……！？ 俺はコレを買つて、腹を壊して午後の対戦を辞退すれば良いのか……！？

……つと、興奮しすぎた。餅搗け餅搗け。

しかし、買つて損したくない……うおおつー？

「ええい、一つ買つたあ！」

「……今までどんな葛藤をしていたんだ？」

気にするな、凜那。

俺は金を払い、買つたパンをそのまま開ける。見たところ何の変哲も無い普通のパン。中には餡とかが入つてそうだ。

「こざわ……ドローー！」

アニメでも有名なドローパン。中に入っていたのは……？

「……………カレーパン、ですね」

「……………カレーパン、だな」

「……………カレーパン、みたいだね」

「なんでこんなに普通なんだっ！？ セめてカレーパンでもカレーをそのまま入れるとか工夫しろよっ！？ しかも普通に美味しいし！！」

緊張した俺が馬鹿みたいじゃないか。

なんて妙に心を削るハプニングがあつたりしたが、適当に食料と飲み物を買って中庭へ。

どこかへ行こうとした凛那も誘い、結姫、慧、そして俺。4人で昼食タイム。

うん。

ハーレム状態、とか馬鹿な事言つつもりはないけれど……最近、死線がすぐ隣に居る気がして仕方が無いね。

「さて、食うか」

「……………それ、食べるの？」

「……………男には、收まり付かない時があるんだよ」

「やつつけですよねつ！？」

「流石にドローパン5つといふのは……いや、別にとやかくは言わないが」

良いんだよ。カレーパンなんてつまらないパンを当ててしまった

からにや、変なパンを焼てるしかないだろー。

「こーや、ドローフー！」

「…………普通のジャムパンだな」

「……食べるのは後！ ドローフー！」

「えと、これは……？」

「……外は他と同じなのに、中身はメロンパンだ。くそ、ドローフー！」

「…………クリームパン、ですか？」

何故だ……普通のしか入ってないとかそんなオチか！？

「後2つある…………！ ドローフー！」

「…………ふむ。これはチョコレートパンみたいだな」

「…………ラスト、か」

くそ…………これが頼みの綱だ。

「ドローフー行くぜっ…………！」

「ど、どしだった、燈夜…………？」

これば、まさか…………。

「…………何も入ってない」

結局。

俺は今日当たったパンの中身を混ぜて、自ら外れを出したのだった。

「どうするのです？ 全く情報が無いではありませんか」「ん、どうしようか？」

「変わりはしませんが。私は兄さんを探します。行きますよ、姉さん」

「はい」「ちょっと！ お待ちなさい！」

街中。

人、人、人と溢れ返っている中、3人の少女が居た。

1人は金色の髪をくるくると巻いた少女。蒼い瞳はキツイ印象を与える、豪華なドレスと高飛車な口調はお嬢様を連想させる。

次に、間延びした口調の女性。ワンピースを身に纏つた彼女は、自然な茶髪にウェーブを掛けている。

そして、冷淡な口調をした女の子。黒い髪は背中に垂れる程度の長さで、艶やかに光っていた。漆黒の瞳は、宝石のように輝いている。

「全く……感謝なさつてよ。わたくしが着いていなければ、今頃貴方たちはどうなつていたか……」

「その心配は不要です。私たちは御神さんにある程度の協力はして貰えますから」

「む……それはそうですが。わたくしも御神様に頼まれた案内人ですか？ 少しくらい感謝を あの、聞いております？」

黒髪の少女が見詰めるのは、ビルに取り付けられた巨大テレビ。そこに流れているのは、見覚えのある顔だった。

「あれ～？ あれって、幸仁君じゃない～？」

「…………そうですね」

第壱デュエルアカデミア 横都校最強の決闘者デュエリスト、瀧川幸仁。その特集だった。

「……行きましょう。目的地が決まりました」

「だね～」

「ちょっと……アカデミアに向かうなら、まず許可を得る為にも御神様の下へ……つてお待ちなさいなっ！」

主役が、集まつていぐ。

もうすぐデュエルが始まる。

13時20分前後……無駄にやるせない昼食を終え、俺がデュエル場に戻るともう殆どの人が観客席に座っていた。

生徒会長たちや教師達も居て、遅れてないのに遅刻した気分になつてしまつ。

『…………既に勝ち残った代表者たちは来ているようですね。咲之宮結

姫さん、鴻ソルさん、一ノ瀬燈夜さん……先にデュエル場まで来て下さい』

ん……俺たちか。

慧や凜那と一言交わし、俺と結姫は観客席から下に降りていく。階段を降り、通路の途中。ソルが腕を組んで壁に寄り掛かった。

「よお、燈夜」

「ああ。なんだ、待ってたのか?」

「まーな」

ソルと並んでデュエル場へ向かう。後ろから結姫の痛い視線を感じるが、気にしない。だつて、怖いもん。

「まさかお前が……瀧川に勝つなんてな。正直ビックリしたよ」「あの程度じゃ負けねーよ」

お、スゲエ自信。」しつこいのは嫌いじゃないな。

「燈夜」

「ん?」

もう少しでデュエル場だ。観客席も盛り上がりつつ来ている。

「もう少しで、役者が揃つぜ」

「……?」

『では、少し早いですが始めましょうー。今回は変則ルールで、3

人の代表者が一斉に『デュエルするサバイバルとなります!』

ソルが言つた言葉の意味を考える暇も無く、生徒会長がゲームのルールを告げる。

「サバイバルか……1対1対1、という事だよな?」

だとしたら、サイレント・マジシャンでも良い気がする。『レベルアップ!』を引かなかつたら時でも、魔力カウンターが手早く乗るしな。

けど……同じデッキって、なんか味気無え……どうすつか。

「 さん」

『それでは、デュエルフィールドにお並びください!』

「 に」

「 お互い頑張りましょう、燈夜さん」

「 いち」

「 ばん、と。

デュエル場を隔てる扉が勢い良く開く。

俺含め、その場に居た全員がその方向に視線を向ける。

そこには、3人の少女が。

「 ゼロ」

え……いや、え?

まさか……。

「し、 霽…………？」

「…………」

「…………？」

俺の唯一の家族であり、大切な妹と姉…………霽と姉さんの姿があった。

な、なんで……？　ここ、異世界だろ？　まさか、霽たちもこの世界に！？

ゆつくり。勢い良く開かれた扉とは対称的に静かな歩みだ。

「…………」

そして、霽と姉さん、後俺の知らない女性が田の前にやつてくる。

「霽…………姉さん…………？」

「やつぱり…………貴方が兄さん、ですね」

やつぱり（…………）…………？

「兄さん…………！」

「わっ！？」

クールな霽には似合わず、勢い良く抱き締められる。あらまあ、なんて呑気に姉さんも微笑む。

「なら、あたしも～」

「姉さんっ！？」

俺の背中に抱きついて来る姉さん。ね、姉さん…………き、田大な胸が当たつてるんですけど……。

「レ…………どうすりや良いつスかね。」

「え~と……うん、生徒会長ー。」

『あ、はい?』

「俺、対戦辞退します! ついでに先生! ちょっと早退します!」

「はい?」

「ううこいつ」とひきり返す。

俺は歩き難いまま、零と姉さんを連れてその場から後退した。

「……わたくしの事は、忘れられて置きますのね」

という訳で、俺の部屋。
何が“こう訳で”なのかは自分でも把握しきれてないけれど……
俺はマナに3人分のお茶を入れて貰った。
ちなみに、簡単にだがマナの説明はした。

ちなみに、簡単にだがマナの説明はした。

「あつ~…………ふう。んで、なんで零と姉さんが『アーティス~
それよつ~…………君つて、本当にあたしの弟なんだよね~?』
『は?』

「なんでそんな事訊くんだ……？」

「…………」

「あつ、

「もしかして記憶が……ん？ けど霊はさつとき兄さんって……」「懐かしい匂いがしたので。魂が憶えていたのだと思します」

「……んな馬鹿な」

「いや、霊なら有り得るな。

例え俺のクローンを数百、数千と作ったとしてもその中から本物オリジナルの俺を見つけ出しがねない。

「……俺は間違いなく、霊の兄であり姉さん……若菜姉の弟だよ。

「ノ瀬燈夜だ」

「私は分かつていきましたが」

「ん~……けど実感湧かないね~」

しかし、なんで霊たちも記憶を失くしてんだ？ 俺は全部覚えてたのに……。

「……で、結局なんでこの世界に？」

「御神さんに導かれただけです」

「……またソイツか」

しかも、霊や姉さんはその御神つて奴に会つてゐるつて事になる。

「色々この世界の事も教えてもらひつつ~

「俺には何も言わずに……良し。」

会つたら殴る。

「兄さんもこの世界に来ている、と聞いたので……」

「あたしたち、燈夜ちゃんが居ないと生きられないもんね～」

ちなみに、これは比喩じゃない。

父ちゃんと母さんは訳あって居ない俺たち一ノ瀬家。雲はしつかりしてるけどまだ中学生だし、姉さんはおつとりして天然。バイトなんて出来るはずも無い。

というわけで、収入源は俺だけだった。その上家事が出来ない2人じや、生きられても自堕落に過ごす事になつていただろう。

……まあ、俺のバイト先の店長は凄く優しい上にお金持ちだったらしいから、俺たちを凄く可愛がってくれた。

だからこそ、俺も趣味の遊戯王を続けられたり出来たんだよな……

閑話休題。

「……はあ。んで、雲たちはなんでアカデミアに？ 制服まで着てる」

「兄さんが居る所、私有りです」

「……つまり？」

「編入する事にしたの～」

ですよね。だと思ったよ。

「本当はね～？ 燈夜ちゃんと同じ第五位にして貰いたかったんだけど～」

「御神さんがこのアカデミアの校長に掛け合つて……第一位の特待生枠に入れて頂いたのです」

「やっぱり……ソイツとは一度語り合つ必要があるな

つか、あれ？

「特待生枠つて、後1つじゃなかつたつけ？」
「御神さんつて、凄いね～」

あ、せいですか。

まあ、雪と姉さんの遊戯王の実力は高いナビ。実は本気を出せば俺でも勝てないくらい。

.....。

あれ、地球組で一番弱いのつて……俺じやね？

「……？ 何故膝を折っているのですか？」
「自分に絶望していたのさ」

はは。俺つて、弱いね～（自暴自棄）。

なんて【冗談は置いといで、俺は自分用のお茶を一気に飲み干す。少し温くなっていたそのお茶は勢い良く俺の喉を嚥下して、渴きを無くす。

「兄さん……」

「うん？」

「非常に残念なのですが、私たちはこれから校長先生の元へ向かわないと行けませんので」

「あ、そっか」

「また近い内に来るね～？」

そう言って、雪と姉さんは立ち上がる。

入り口まで行つて2人を見送ると、俺は玄関の扉を閉めてそのまま背を預けた。

ふう、と息を吐く。

「……“役者”……か」

ソルが言つた言葉。その言葉の直後に零と姉さんが来た。ソルは、何か知つてゐるのか？ そういや幸仁とデュルしてゐる時も、御神に選ばれたがどうとかつて……。

「……ああっ、もう！ 訳分かんねーッ！－！」

『大丈夫、マスター？』

……大丈夫じゃない。頭がこんがらがりそつだ。

「……マナは何か知らないのか？」

『うん……ごめん。お師匠様も良く分からないつて……』

そつか。

はあー、と大きな溜め息を吐いて、俺はマナに再び、お茶を頼むのだった。

「ハーパー・ピュア・シー」（後書き）

手が……指が勝手にキャラを増やしていく……ツ――！

姉や妹は居る設定だつたけれども、まさか登場するなんて、私も予想外（苦笑）

「めんなさい。

こんな小説ですが、
感想、評価等お待ちしております！

「マジサーデ、してあげようか？」

「納得できませんわ……何故このわたくしが第一位なのです……」

「……

ぶつぶつ、ぶつぶつ。

いや、ね？ 愚痴を零すのは良いんだけどさ……。

「……なんで俺の部屋に来てるの？ つか、君誰？」

階級別の大會と雫、姉さんとの再会を終えて結構経った。
ただでさえ顔立ちの整った雫と姉さんなのに、その上第一位の特
待生となれば人気が上がるのは必至。
……そんな2人が毎晩はずっと俺の傍にいるから、俺に降りかかる
もの。それは、

『「ロロス……ロロス……』

「ひいツー？」

トイレだって楽に行けやしない……誰か男の友達、欲しいなあ……。

それはともかく。階級別の大会だけど、何故かソルも対決を辞退して、済し崩し的に優勝は結姫になつた。
素直に喜べないかもだけど、おめでとう。心中で祝福しておくよ。

「いや、まあえっと……落ち着けよ、な？」

結姫に直接言えない訳は、ただ一つ。

……男子に追い掛け回されてます。

「第一位の長谷部慧ちゃんに……」

「第二位の咲之宮結姫様……」

「第三位の御園凜那さん……」

「それなりに人気のある第四位の鴻……」

「拳句、編入してきた特待生の姉妹までエ……？」

「いや、な？ ほら、慧は昔から知り合いだし、結姫には世話なんつてるから。凜那は普通の友達で、ソルやルナもあっちから近付いて来てるし、零と姉さんは兄妹だからさ……」

「死に晒せエ——ツ！——！」

人の話聴けよっ！？

からがら逃げ回つて、俺は自分の部屋に帰還した。文字通り“命

からがら”つて奴だ。
つ、疲れる……。最近はコレばっかりだ。俺の平穀はどこ逃げた。
しかも、皆気付いてない振りなのかそうじやないのかは知らない

けれど、誰も俺の苦労なんて気付いてないしな。

「はーー」

『大変そうだね、マスター』

「マナ……」

最早俺の癒しは自室しかない。マナが傍に居てくれるだけマシか。それはそうと、マハードは最近俺の傍に居ない。俺が頼んで、零たちがなんで記憶を失ったかとかを調べて貰っている。

……。

「マッサージ、してあげようか?」

「ん……ああ、頼む」

一瞬の内に実体化したマナは、俺に抱きつきながら耳元で囁く。最初はびりたえた俺だけど、最近じや結構慣れた。マナって人懐っこいんだな。出来れば俺以外にはしないで欲しい……と思つのは、俺の我慢だろうか。

「う、ふう……」

いや~、気持ち良い。マナって可愛いし気が利くし、流石だよな。うつ伏せで横になる俺に馬乗りして、背中を押して貰いながら俺はそんな事を思つ。

と、

「コンコン、と扉がノックされた。

「ん……誰だ？」

「あ？ 私は精霊化してるねー」

そう言つて、マナはすぐに俺しか見えない姿になる。
…………
…………
扉を開けると、そこには面たのは…………。

「君は……」

確か、雪や姉さんと一緒に面た女の子……。
お嬢様！ と主張するかのよつたなクルクル巻きの金髪に蒼い瞳。

「失礼しますわ」

「お、おこちよつとーー？」

勝手に中に入るなよ！

なんて俺の主張は聞き入れられず、ソイツはじろじろと俺の部屋
を眺める。

「…………狭いですね」

「第五位の部屋だから当たり前だべー。」

「…………まあ、良いですわ」

いや、良くねえよ。勝手に座るなって。

んで、冒頭。

無駄に深い溜め息を零しながら、ソイツはぶつぶつと愚痴を零し
始めた。ここはお悩み相談所じゃないぞ。

「わたくしこそ第一位の座につけてつけなのですわ……」今まで雪

や若菜を案内したのもわたくしですのに、御神様つたら……」

「今、俺が会いたい奴ノ・イの名前が出たぞ

「……？ 貴方、何故こんな所に？」

「こんな所で悪かったなっ！ つか、お前がこの部屋に来たんだろ

うが！」

「あら

あらじゅねーよつ！

ソイツはすつ、と立ち上がりつて制服のスカートをつまむ。それこそアニメで見たお嬢様がお辞儀をするような仕草だ。

「今まで挨拶が遅れて申し訳御座いませんでした。わたくしは御神様に仕える者。リリア＝フォルゼン・レイランドですわ。リリア、とお呼び頂いて結構です、一ノ瀬燈夜様

「はあ……俺の名前知ってるんだな」

「ええ

まあ、不思議じゃないか。雪や姉さんを案内してくれたらしい。

「姉さんたちを案内してくれたんだっけ？ ありがとな

「…………

「…………びひつた？」

そんな鳩が豆鉄砲喰らつたような顔して。

「……いえ、思ったよりも礼儀が為つていたので、驚いただけです

わ

「……そりゃどうも」「せん

第一印象は悪いんだな、俺。ちょっとガックリ。

リリアは静かな動作で再び腰を下ろして、俺と視線を合わせる。

「しかし……まさか、貴方が……」

「ん？ 僕がどうしたって？」

「…………いいえ、真正面から話すような事では御座いませんから。役者が全員揃つた時にでも」

また、役者か。

「本日は、貴方に御神様からの伝言を伝えに来たのです」

ほお、御神から。

「明日の放課。午後18時頃に、島の外れにある灯台にまで来て欲しい、と」

そこが決着の場所かっ！

ふふふ……やつと、やつとの拳が光る時が……！

「尚、役者は全てこちらが集めるので、貴方はデュエルディスクとデッキを持ってくるだけで宜しいらしいですわ」

「……ああ、了解。午後6時に外れの灯台だな」

憶えたぞ……マナが。

「本日はそれだけですわ。それでは、また」

それだけ告げると、リリアは俺の部屋、第五位の寮から出て行く。

「…………」

決着は明日。

ディスクとデッキを持って来いって事は、デュエルをするんだな？
なら、俺がやる事は決まった。

「マナ～。デッキ構築、手伝ってくれないか？」

『うそ、良いよ～』

夜は、更けていく。

冷たい風が吹く。下ろした状態の髪が風に流れ、忙しく揺れていた。

まだ日も昇っていない真夜中。肌寒さは寝間着姿の自分を容赦無く襲う。

「…………たのに……」

呟く声は、波の音にさらわれた。

背後で灯台の明かりが海の向こうまで照らされと伸びている。

「…………逃げて…………言つたの……」

“彼”に、逃げる気なんて毛頭無い。そもそも逃げてとは言つたが、説明も無しにはいそですか、と歩を返す理由も無い。そんな事、分かっている。分かっているけれど。

「…………ボクが…………」

彼を、護る。

「マジサーデ、してあがよつか?」（後書き）

マナ可憐こみ、マナ。

今更ですが。

この小説、登場人物……といふかヒロイン沢山居ます。

……一桁到達しちゃいそうな程（苦笑）

感想、評価等お待ちしております！

「わたしが一ノ瀬君を…………譲る」

潮風に身を委ね、青い世界を感慨深そつと眺める。雲一つ無い空。世界を照らす太陽は、広い海を輝かせた。

「さて……」

どんな物語が、始まるかな？

今日は相変わらずだった。

朝、第五位と第一位の寮は遠いといつのこと、わざわざ 態々迎えに来てくれた慧と結姫、雫と姉さん。

昼、凜那を含めた大所帯で昼食。

そして、待ち合わせ時間まで後1時間となつた頃。俺は死線を巡らせる男共（時折女有り）に追い掛け回され。

あつと言ひ間に、午後18時になつた。

後ろには俺以外誰も見えない精霊化したマナが居る。

ちなみに俺しか見えないのが精霊化、他人も見えるけど触れないのが半精霊化、誰にでも見えるし触れるのが実体化、と呼ぶ事している。

「お……なんかいつぱい居るだ?」

灯台近くまで来ると、幾つかの人影が見える。

えつと……慧に幸仁、基……雲と姉さん、リリア……ソルも居るな。後は……、

「あれ……結姫と凜那も居る?」

ソルやリリアが言つてた“役者”って、結姫たちも含んでたのか? 後一人、俺の知らない人が居る。遠目から見てもかなりの美形の男性で、正に優男、という感じだ。

……あの人気が御神、って奴だろ? つか。

「お~い、みん……痛つ!?

何かにぶつかった。壁か? いやいや、んな馬鹿な……目の前にや何も無いのに。

手を添えると、硬い物に触れた。

「なんだ……?」

「兄さん!」

俺が困惑していると、雲が声を張り上げる。けど俺の方へ走ろうとしたら、御神(多分断定)さんが手で制止した。

一步、一步。

御神さんが俺の方へ近付いて来る。

「やあ。君が一ノ瀬燈夜君だね? 僕は御神新。みかみアラタ宜しくね?」

「宜しくじゃない! お前……慧たちの前には現れといて、俺の前

に出て来ないってのはどうこう見だよ！？」

「おお、怖。それにはちゃんと理由があるから、そつ怒らないでよ」

理由……？

何の理由があつて？

「まあ、まずは最初から説明しよう。君は知つてゐるのかな？ この世界が滅びかけている事」

「滅びかけてるっていうか……歪みだかなら聞いたな」

「うん、まあそうだね。僕が幸仁君たちに説明した時もその言葉を使つたし、間違いないよ」

なんだ、その言い方……？ もつと別の言い方がある、みたいな……。

怪訝そうに俺が見詰めているのに気付いたのか、御神さんはふつ、と肩を竦めた。

「まず、一つ言つてしまひ。この場に居る全員が、元は地球の人間だよ」

「…………？」

地球の……？

慧たちはともかく、結姫や凜那たちも居るんだぞ？ 僕に隠してたつて感じもしなかつたし、結姫に関しては姉妹の話も聴いた。有り得ないだろ。

「…………いや、全員じゃないか。僕と鴻ソルは違つて　君の精霊は、あくまで精霊界の出だ」

その視線の先には、俺の後ろに居るマナに向けられている。

「イツ……マナが見えてるのか？　今は俺以外には見えない精霊化の状態なのに。

「この世界は壊れかけている。この世界だけじゃなく、平行世界や地球、その他諸々の世界がだ」

数多くの世界、つて事か？　なんか、元々大きかった話がさらに巨大化しそうな勢いだな。

「だから神は、この世界の救世主を選んだ。数ある世界で唯一、遊戯王デュエルモンスターZを考察している地球でね」

そう、驚いた事にこの世界には地球にあつた遊戯王Wikieとかが無い。多分、遊戯王が世界の中心だからこそ、色んな著者がルールとかに関して本を出しているからだろう。

「一ノ瀬雲、一ノ瀬若菜、長谷部慧、瀬野基、瀧川幸仁の5人は君も知つて居る通り、地球で生まれ育つた」

「…………」

「ぐく」と頷く。

「ただ、咲之宮結姫と御園凜那は不運だった。生まれてすぐ事故と病気に罹り死亡。神がこの世界に転生させたのさ。あ、ついでにリアもそうだよ」

「わたくしはついでですね……」

成る程。だから、“元は地球の人間”、ね。

それにもしても、リリア可哀相。状況が状況じゃなければ、涙が出てきちゃいそうだ。

「じゃあ、ソルはどうなんだよ？」

「オレは、咲之宮や御園よりも特別だった、って事だぜ」

特別……？

確認するように俺が反芻すると、ああ、とソルは首肯した。

「鴻ソルは元々は選ばれた存在ではなく、極普通にこの世界で暮らしていた。しかし、もう一人地球で選ばれていた存在が鴻ソルと魂がリンクしてね」

「もう一人……？」

誰だ？

「君も、会っているだろ？」

「え、まさか」

「そう。鴻ルナだよ」

逃げて。

そう言つた彼女の無表情な顔が思い浮かぶ。

あれ、けどその選ばれた人間が“役者”だとしたら、ルナは一体どこに……？

「地球で育つた鴻ルナは、この世界の鴻ソルと魂が引かれ合い、ほんの3年前、とうとう融合した。GXで言つ、『超融合』で十代とユベルが融合したみたいな感じだね」

「うわ、なんかウゼン。」

しかし、3年前……？ 俺がまだギリギリ中学生の時か？

「志藤彩伽……」

「つ……！？」

「それが、地球に居た時の鴻ルナの名前だよ」

志藤……彩……伽……。

知ってる。

中3の時、俺と同じクラスで……いつも独りで。そんな姿に俺が見かねて話し掛けたんだ。

ただ、卒業式の少し前……倒れて、意識不明になつた、女の子

。

「ふ……。長谷部慧と同じ反応をするんだね、一ノ瀬燈夜君。この子も同じ話をしたら、何も言葉を紡げなくなつたよ」

そりや、そりだろ。驚くつての。

志藤とは、俺だけじゃなく慧も友達になつたんだ。良く話したし、一緒に帰つた事もあつた。

「……んで……志藤は今どこ?..」

「オレの中だよ」

「……は?」

中?

「さつき御神が言つただろ? 融合したつて。時々入れ替わる時はあるけどよ、今はオレン中で話を聞いてるだろーぜ」

それが、融合、か。

一重人格みたいなものだらうか?

「…………」

今、志藤はどんな気持ちで俺たちを見ているだろ？。

志藤は、余り喋らなかつたし、笑いもしなかつた。いつも無表情で無口で、感情を表に出すのが凄く苦手で。

なのに動物が好きで、甘い物が好きで、俺が頭を撫でると顔を赤くした。

「…………せよ」

「うん？」

「出せよ。志藤を今すぐ、自由にしおよび……」

訳分かんねー。頭が混乱して、目の前にある壁に頭突きを何回もしたい衝動に駆られる。

「良いけど、後悔するかもよ？ それでも良い？」

「何の説明も無しに、じゃあ諦めます、なんて言つかよ」

「……それもそうか。良いよ。じゃあ　」

ソルが呻く。痛みといつよりは気持ち悪さを抑えるよひと胸元を押された。

そして、ソルが分身するかのようにもう一人の身体がソルから出てきた。ソルよりも大分身長が低く、ツインテールの髪。確かに、と思った。

髪を黒くして、ツインテールじゃなくてショートカットにしたら志藤彩伽だ。

ぱたり、と志藤は静かに倒れた。

「志藤ッ！！」

「さつとき語つただろう? 魂が融合したんだ。その殆どがソルの中にあるんだし、彼女の中にあるのはもう殆ど無い。欠片と言つて良いね」

「……」

後悔。後悔つて、これの事か。

気付けなかつた自分に歯軋りしていると、ゆっくりとした動作で志藤が動き出した。

ばんつゝと俺は目の前にある見えない壁に手を付ける。

向ひうて、行けない。

「志藤……！」

魂の、欠片。それがどれ程の物かは分からなければ、動くのが辛そうな志藤を見ていると酷い状況なんだろ? って分かる。あのメンバーの中で、志藤彩伽の時の彼女を知る唯一の存在である慧が肩を貸していた。

結姫や凛那も、慧に続いて志藤を支える。

「だ、大丈夫ですか……?」

「……一ノ瀬……君」

小さい声だ。俺には聞こえない。

「無理するな。碌に立てもしないと語つのこ……」

「どん、と。」

見えない壁を殴り付けても、傷一つ付かない。それどころか俺の手が痛むだけだ。

「……さて、辛そうではあるものの、命に別状はない。本当の意味で、全員が揃つた今、本題に入ろうか」

「……本題……？」

『逃げてください、燈夜殿っ！』

は……？

突然聞こえたマハーダの声。振り向くと、血相を変えた顔で杖を俺に構えていた。

『お師匠様……！？』

『黒・魔・導！！』

「わわっ！？」

やべ、死ぬ……！？

マハーダの攻撃が俺に直撃……あれ、してない？
咄嗟に口を閉じた俺だけど、痛みなんて全くない。それどころか、熱も身体を襲つて来なかつた。

「……へ……？」

壁。俺を囲うよつこ、四角い壁が炎から俺を守つてくれていた。

え、と……？

『ぐ……遅かつたか』

も、もしかして、俺……。

「閉じ込められてる……ー?」

「『お答。流石の高位魔術師も、気付くのが遅かつたみたいだね』

前、後ろ、左右……下……は地面か。後は上。
全部見えない壁に閉ざされて、俺は身動きが取れなくなってしまった。

「さあ、本題だ。静かに聞いてくれよ、一ノ瀬燈夜君」

視線を戻す。

慧と結姫に支えられて何とか立つている状態の志藤が視界に写つた。

「この場に居る一ノ瀬雲、一ノ瀬若菜、長谷部慧、瀬野基、瀧川幸仁、咲之宮結姫、御園凜那、リリア・フォルゼン・レイランド、志藤彩伽……イレギュラーとは言え、鴻ソル……いや、本名鴻ソフィア」

ア

その名前は呼ぶなつての、とソルが嘆息する声が聞こえた。

……これからソフィアって呼んでやろう、なんて悪戯心が湧き上がる状況を読めない俺。

「9名、然して10名は僕が選んだ。だが一ノ瀬燈夜君。君は違う。僕が選んだ訳では無い。誰が選んだか、僕にも分からなかつた。と、すれば」

……嫌な予感。

「世界を滅ぼす要因は、もしかしたら君なのではないか、と僕は考えた」

……ですよね。

「なつ、ち、ち、違います！ 燐夜さんは世界を滅ぼしたりしません！」

「そりだよ！ 地球に墜た時だつて、いつも僕を助けてくれたし……！」

「基と幸仁も何か言つてよ……」

「わりいナビよ……俺、お前に説明されてもまだ思い出せねえんだよ。アイツヒダチだつたなんてな」

「……同じく」

そんな、と嘆く慧。

「燐夜ちゃんが世界を滅ぼすなら、あたしも手伝つて」

「ですね。私たちは兄さんこそ世界の中心ですから」

いやいや、んな事しないから。

「……まつ、オレはどうでも良いな」

「私は……まだ判断しかねるな……」

「わたくしもですわ。元々そんなに接触していた訳では御座いませんし」

なんでこんな事になつてるんだ……？

本当……訳が分からぬ。分からぬぞ。

「ち……がう」

そんな中。

小さな声が、俺の……俺たちの耳朵を叩いた。

「一ノ瀬君は……違つ

「分からぬだらう? 例え違つたとしても、不安要素は消してお
くさ

「なら、ボクが……！」

一步ずつ、ゆっくりと。

慧たちから離れて、一人で歩いてくる。

そして、俺と皆を隔てる見えない壁に辿り着くと、志藤はその壁
に背を預けた。

「わたしが、一ノ瀬君を……譲る」

やう言つて、志藤はディスクを構えた。

「わたしが一ノ瀬君を…………譲る」（後書き）

さやー、鴻ルナ改め志藤彩伽格好良いー、で今回は終わりました。

「」である程度の秘密、設定は露呈しちゃいました。

勿論、まだ分からないコトは多いくらいですけど（笑）

感想、評価等お待ちしております！

「君は、弱いね

ずっと、独りで。
ずっと、孤独で。

苛められていたという事実は無くとも、クラスメイトに一線を引かれていたのは間違いないと思った。

口数も少なくて、いつも無表情で。わたしは、自らクラスに溶け込もうともせずに本ばかり読んでいた。
寂しかった……と思う。

けど。

「よ、志藤。何の本読んでるんだ?」

貴方が、わたしの傍に居てくれて

。

「はあん……オレたち全員を相手にじょうつてのか、ルナ?……
いや、志藤彩伽、だつたか?」

わたしは小さく頷く。

「……オレが相手して良いか、御神?」
「どうぞ」

「うし」

御神新に許可を得て、ソル……ソフィアが数歩前に出る。ソフィアの『テッキ』は知っている……。墮天使を軸とした、闇属性のビートダウン。

「そりいや、テメーと『トコエル』するのは初めてだつたな？ 選ばれた存在でありますから、そつち側に付いたテメーの力……見せて貰おうか？」

「…………」

勿論。

わたしが、彼を護る。

「『テュエル』！」

「先攻はオレだ、ドロー！ オレは永続魔法、『漆黒のトバリ』を発動！ そして『終末の騎士』召喚！ 効果により、『テッキ』から『ネクロ・ガードナー』を落として、ターンエンドだ」

まずは順当。特に伏せカードも無い……。

「…………ドロー…………」

手札を確認する。大丈夫、悪くない手札。

「…………」

後ろで、彼が見てるのを感じる。

安心して、一ノ瀬君…………。

貴方の為なら、わたし……命を、張れるから。

「《ヘカテリス》効果……捨てて《神の居城 - ヴァルハラ》をサ
チ……発動」

「はあん。オレが墮天使ならお前は天使か」

「ヴァルハラの効果により……私は《光神テテュス》を特殊召
喚……《ジエルエンデュオ》召喚……バトル」

墓地にはネクガ……ソフィアのデッキは、時間が経つに連れて爆
发力が一気に増す……ここは、攻める。

「《ジエルエンデュオ》で《終末の騎士》を攻撃」

「ツ……！」

ソフィア LP 4000 3700 .

「……テテュスでアタック」
「うあああつ……！」

ソフィア LP 3700 1300 .

……ネクガの効果は使わなかつた……。

……。

「……わたしはカードを1枚伏せて、ターン終了」
「オレのターンだ、ドローつ！」

にい、と。

ソフィアが笑う。

「」の時、《漆黒のトバリ》の効果を発動するぜ。ドローフェイズにドローしたカードが闇属性モンスターだった場合、相手に見せることで墓地に送り、再びドロー出来る。引いたカードは《墮天使エデ・アーラエ》！」

墓地に送られ、再びソフィアがドローする。

「トバリの効果は続けられるぜ。《墮天使アスマティウス》！ ドロー！ 《ダーク・ヴァルキリア》！ ドロー！ ……ここで打ち止めだな」

一気に墓地が肥えてしまった。

今……ソフィアの墓地の闇属性モンスターは5体。

「行くぜ、志藤彩伽。オレのフィールドにモンスターは存在せず、墓地に闇属性モンスターが5体以上存在する時に、《ダーク・クリエイター》を特殊召喚出来る！」

《ザ・クリエイター創世神》のダーク化したモンスター。
コレは……結構、危ないかもしねり。

「ダクリの効果を発動！ 墓地の《終末の騎士》を除外し、《ダーク・ヴァルキリア》を特殊召喚！」

つ……。

デュアル召喚して、モンスターを破壊するつもり……？

用心するのはコイツラじゃねーぞ？ 墓地の闇属性の数は3体！ 来い、《ダーク・アームド・ドラゴン》！…

「だ、ダムド握つてたのかよつー？」

後ろで一ノ瀬君が叫ぶ。

駄目……わたしの伏せカードじゃ……勝てない。

「ダムドの効果！ 《墮天使アスモティウス》を除外して、まずはその伏せカードを破壊だ！」

「つ……《光神化》！ ……手札の《マシュマロン》を、守備表示で特殊召喚……！」

「チツ。んじゃ、ダムドの効果を続けるぜ。《墮天使エテ・アーラエ》を除外して厄介な《マシュマロン》を破壊する」

駄目……時間稼ぎも出来ない……。

「《ダーク・ヴァルキリア》を再度召喚！ 魔力カウンターが乗るが……取り除いて、《光神テテュス》を破壊する」

そんな……。

「……《オネスト》警戒、てか。ダムドの効果だ。《ネクロ・ガードナー》を除外して、《ジエルエンデュオ》を破壊！」

これで、わたしの場合はヴァルハラのみ。

「バトル……《ダーク・クリエイター》でダイレクトアタック」

彩伽 LP 40000 1700 .

「《ダーク・アームド・ドラゴン》……」

駄目……殆ど魂の無い今の身体じゃ、あの攻撃に耐えられない……

。。

「めんなさい、一ノ瀬君…………。

「トドメだ」

護れなかつたよ

。

彩伽 LP1700 0 .

静かに、倒れていく。

ダムドの吐く炎に覆われ、何も見えなくなる。

ただ、とてもない量の煙の中に見えた小さな影が、静かに倒れていくのだけは、捉える事が出来た。

「志藤ツ……！」

煙が晴れる。

既にディスクを仕舞い込んだ鴻ソファ。今にも志藤の方へ飛び出して来そうな慧や結姫たち。

そして、俺のすぐ近くに倒れている、志藤。

「クソ……クソガツ！」

なんだよ、この壁……！ なんで破れねエンだよー？

「マハーダー マナツー！」

『 黒・魔・導！』

『 黒・魔・導・爆・裂・破！』

……壊れない。

びくともしない。

……どうして？

慧、結姫、凜那、零に姉さん……5人が志藤の下へ向かおうとしている。けれど、御神が制止しているらしい。

俺と同じように、見えない壁があるのか、空気を呑いていた。俺と違うのは、閉じ込められているわけではない、といつどころか。

御神新だけが、静かに志藤の下へ歩いている。

「志藤に、近付くんじゃねエツ！」

「君は、弱いね」

つ……！

「悔しいとは思わないかい？」

悔しこそ……悔しくて悔しくて、自分を殺したくなー！
俺じや、何も出来ない。

俺は、弱いから。

俺は 。。

『汝、力が欲しいかえ？』

力……欲しい。

御神をぶつ飛ばせるくらい、強い力がツ！！

『良いじゃろう。妾の力、汝に貸し与えたもう』

どくん。

一際高く、心臓が躍動する。身体中の血液が巡り廻って、噴火しそうなほどに熱い。

「カオス・バースト」

巨大な、爆発。

それは俺を囲っていた見えない壁を破壊し、爆風だけで慧たちの壁をも消滅させるものだった。

「な、に……？」

御神の驚きに満ちた顔なんて無視だ。

俺はすぐに志藤の下へ駆け寄つて、抱き寄せた。

「志藤……」

……氣を失っているだけ、か。

ほつと胸を撫で下ろす。と同時に、慧たちが近くまで近付いてきていた。

「燈夜……どう、志藤さん……」

「……大丈夫だ。怪我は無いし……ただ、」

「魂が無い、かい？」

……その通りだ。

口を挟んで来た御神に、少しイラッとしたけど……間違いないんだから仕方ない。

「どうすれば……」

「うん？」

「……どうすれば、治せますか」

「燈夜さん……？」

御神なんて、嫌いだ。

今すぐにでも殴り倒したい。殴つて殴つて、勝手に選んで……迷惑を掛けた皆に……志藤に、謝らせたい。

けど、駄目なんだ。

それじゃ、志藤はこのまま一。

「…………まあ。本当なら、今すぐにも君を消しちゃいたいんだけど……」

数人が身構える。

「……そんな事をしたら、全面戦争にならうだね。また今度にするよ」

「今度も今も無いです。燈夜さんは絶対に死なせませんから」

ふう、と嘆息した。

「……分かつた。志藤彩伽は治しておくれよ」

「……そんな事、出来るのか？」

「僕は何でも出来るよ。何でも、ね」

そう言つて、御神は俺たちに背を向けた。

「明日には眼を覚ますだろう。ただし、覚えておくと良い

もう結構離れているところに、御神の声は良く聞こえる。まるで、頭に直接響いているかのようだ。

「一ノ瀬燈夜君。僕の予感……いや、予言だ。君が僕の敵にしろ味方に付くにしろ……世界は君を中心に傾いていくよ」

そういった御神は、静かに闇に消えていった。

「君は、弱いね」（後書き）

なんかテコヒル……呆氣無れやあめたー。

ライフが8000と考えてしまつので、あつ、もつ終わり？……
となるのが多い（汗）

ライフ400で遊戯王小説を書いている方々は、どう考へている
のでしょうか？

今回は、志藤彩伽の過去の一戻。それと一ノ瀬燈夜に聞こえた“声
”といつ秘密を置きました。

さて……謎あんせーの“声”的正体が分かるでしょうか？（笑）

感想、評価等お待ちしております

「……は、恥ずかしいですか」

日が落ちて、また昇り。

1時限目のはじまりを告げる金の音が響いても、講義が開始される事は無かった。

その理由は簡単である。

「本日から、第五位の教育係りとして、御神コーコーポレーションの会長である御神新さんが来て下さりました」

頭が痛い。

「災難ですね、兄さん」「慰めないでくれ……」

名田上は、俺の教育係り。実際のところは、多分俺の監視つてところだろうか。
これから同じ寮に住むつて言つんだから、俺の頭痛も分かるだろう?

第五位の寮に住むのは俺と彰正先生だけで充分だ!

「今日から、私が兄さんの部屋で寝泊りしましょうか?」「なんか怖いからそれは良い」

「……チツ」

舌打ちしたよ、この子。マジで貞操奪う気だつただろ。

同じ理由で姉さんも駄目だ。特に姉さんは零と違つて胸も大きいし、俺の理性が持ちそうに無い。

「……何か失礼な事考えませんでしたか？」

「エスパーか」

「考えたんですね」

考えてません、なんて言つてももう遅いか？　俺の馬鹿。
どうぞ、と睨んでくる零の静かな怒りを抑えていると、妙なタイミングで姉さん登場。

「う……」

揺れる胸を見て、零が半眼に。

「……どうせ私はお母さん似ですから」

「なんか、ごめん。

しょんぼりとする零に内心謝罪する。

昼休み。

俺は毎日買つているドローパンを食べながら、大人数で中庭に居た。

俺、零、慧、結姫、凜那。姉さんは新しく出来た友達と話していらっしゃく、少し遅れてきた。
そして、

「志藤、体は大丈夫か？」

「……平氣」

志藤彩伽。

志藤は朝、俺が登校途中に起きたらしい。慧がそれを教えに来て
くれて、俺はすぐに保健室へ向かった。
身体に多少の疲労が溜まっているだけで、後は健康体そのものら
しい。良かった、良かった。

「……ところで燈夜」

「どうした？」

「……今日のパンはどうだった？」

「焼きそばパンでしたが、ナニカ？」

しかも俺が買つ前の奴は、最早何が入つているのか分からぬパン
だった。失神したくらいだし、物凄いのだったんだろう。

……ヤになるね、もつ。

……これからも買つけど。

「引き連が強いといふことで良いじゃないか」

「良くない。これはプライドの問題だ。俺は……絶対に諦めない！」

「そんな格好良い台詞を叫ばれても……」

「じもつとも。

「そんなことよつ～、もつすぐ文化祭みたいだね～」

「そんなこと……姉さん、以外と毒舌ツす。天然だから尚悪い。

「文化祭、ですか」

「階級なんぞ関係なく、数人が集まつて出し物を出せるらしい」

「そうなのか……詳しいな、凜那。

「僕たちも何か出す?」

「……何を……?」

「え? えと……と、燈夜?」

「俺に流すのかつ!?

「あ~……」、「コスプレティュエル?」

「ゴメン。GXの文化祭パクった。

「良いわね~。燈夜ちゃんのコスプレ、見たいわ~」

「こ、コスプレですか……は、恥ずかしいです」

「兄さん、カメラの用意は出来ています」

「撮るなっ!」

しかもどこから取り出したんだ、その高級カメラ、……。
これだから零つて油断ならない。

「それなら、コスプレティュエルとコスプレ喫茶を合わせないかい?
「どうから湧いて出たんだお前はっ!」

「神出鬼没だな、御神。」

俺の背後に立つて、御神がっこり顔をしている。その無駄な爽やかスマイルが苦手なんだ、俺は。

「…………コスプレ喫茶…………？」

そしてお前も、良く普通に話せるよな……志藤。

「うそ、そう。コスプレしたまま喫茶店をやつて、休憩中とか、デコールを挑まれた時に余興としてデコール。勿論店員さんがデコールするのもオッケー」

「うわ、メンズー…………。

「良いですね、それ

え、マジで？

結姫だけじゃなく、凛那や慧も結構乗り気だつた。予想外だ。

「どうする、燈夜？」

「兄さんの一言で決まりますよ」

「うわー…………視線が集中してるー。

雪や姉さん、慧はともかく……なんで結姫や凛那も俺に任せせるよ？

…………良し。

「文化祭、盛り上げるかー…………」

ぱんっ、と手を合わせながら俺はそう叫んだ。

文化祭で行う出し物の申請も終わり、私、御園凜那は島外れの灯台に来ていた。

「…………」

昨日。ほんの昨日だ。鴻ソフィアの中から志藤彩伽が現れ、一悶着が起こった場所。

まだ然程時間が経っていないというのに、皆……それこそ、当事者でさえ、元気に講義を受けていた。

異常だ、と……私は表情を歪ませる。

「ん……凜那？」

「つ……燈夜、か」

当事者の一人、一ノ瀬燈夜だ。

ディスクも付けず、制服のポケットに手を入れながら歩いてくる。その視線は海、そしてその向こうへと注がれていた。

「まさか、お前や結姫も元は地球の人間だとは思わなかつたよ」

「……私も、御神に教えられるまでは忘れていたさ」

「そうなのか？」

「ああ。転生したとは言え、記憶なんぞ無い。御園家に生まれ、御園家で育ち、偶然にもこのアカデミアにやつて来たのだからな」

ふうん、と燈夜が呟く。

恐らく、咲之宮もそうだらう。隣で、同じような反応をしていた

のだし、間違いない。

「……私は、」

「うん?」

「…………関係ない。地球だとか、救世主だとか……私には関係ない。強くならなくては…………」

階級を上げ、このアカデミアの誰よりも…………。

「…………燈夜相手に、何を喋っているんだ、私は。思ったよりも滅入っているな…………。」

「…………すまない。忘れてくれ」

「…………なあ、お前って何のコスプレ似合つかな?」

「はっ?」

何を突然…………?

しかし、燈夜の眼は真剣だ。

「うん、やっぱイメージ的に戦士族…………か? 凜那つて可愛いといいよりは綺麗だしなあ…………」

「つ…………」

「…………」「イツは小声で何を…………つ――!」

頬が紅潮するのが分かる。そんな事言われた事も無いから当然だ。

「俺も、強くならないとな」

「…………な、え?」

と、当然雰囲気が変わったな…………。

どこか憂いを帯びた様子の燈夜は、眼を細めて真っ直ぐにアカデミアを見つめている。

「…………

その横顔に私は、暫し見惚れてしまっていた。

「……じゃあな。凜那も早く帰れよ？ 女の子の帰り道は危ないぜ？」

「つ！ わ、分かつている！」

笑いを噛み殺しながら、燈夜がその場を後にする。

「私は、何を……」

夜風は冷たい。

けれど何故か、私の身体は少し、火照っていた。

「……は、恥ずかしいです」（後書き）

ここに文化祭の予告と凜那のフラグ立て。

しかし、文化祭開催はまだ少し先です。主要キャラ毎のイベントをやりたいなーと。文化祭前で2・3人……短いですよ？（笑）

感想、評価等お待ちしております！

「それはズルイ、です……」

文化祭の準備も少しづつ始めて来た今日。

世界の救世主（ここ、笑うとこ）メンバーの10人と+（俺と御神）で喫茶店を切り盛りする事に決まって1週間。

最初はギクシャクした仲も、少しづつ改善されてきた気持ち良い日。

それこそ、

「そりいや、志藤を治して貰つた事……御神にお礼、言つてねえな
なんて事さえ呟いてしまつほどに気分の良い日の朝。
教室……俺の机の上。

「……果たし状？」

無駄に可愛らしい丸文字で書かれているから、俺にとつて差出人は分かり切つたモノだったとさ。

「……はあ」

「……？ あれ、姉さんは？」
「若菜さんなら、今頃どこかで告白されてるんじゃないかな？」

「……昨日は雪だつたよな？」

「ちなみに結姫さんは一昨日でした」

「け、けど慧さんはその前でしたよね？」

モテモテだなお前らつ！？

いつもの如く、追い立てる野獣どもから逃げ切つた俺は昼休み、ドーパンを持つて中庭に来ていた。

「……この様子じや、明日は凜那か」

「冗談は止してくれ。私なんかを好きになってくれる人など居るのか」

「分からぬぞ？ お前も、このメンバーに負けず劣らずの美人だからな」

全く。少しば俺の平凡な容姿を見習え！

つて……あれ？ なんで固まってるんだ、凜那？ 他の皆も俺を睨んでるし……俺、何かした？

……はつー？

「……お前ら……そつか。このカスタードパン、そんなに食べたかったのか」

「違いますっ！？ といつかなんでそんなにパンがあるんですかっ！」

「数撃ちや当たる……試してみたんだ。10個…………7個がカストードパンだったよ…………」

あ、涙が。

つか、パンの事じゃないならなんで俺は睨まれてたんだ？ 首を傾げ始めた俺に、溜め息吐く皆さん。

……あ、諦められた？

「「」れは 苦労しそうです……」

「これからもライバルが増えそつだよ……」

「兄さん……昔から変わりませんね」

……えと、「めんなさこ」?

なんで俺が責められてる感じになつてゐるんだい?……?

「それが燈夜ちやんくおつてじへだからへ」

「わわつ! 姉さんにつの間につ! ?」

というか、抱き付かないで!-

「姉さん。兄さんから離れて」

「嫌よ~」

「……離れなせこ

「イヤ~」

……あの、俺を挟んで喧嘩しないでくれません?

そして姉さん、俺の頭に柔らかい山が当たつてゐるんだよナビハーブ。

「……燈夜。鼻が伸びてるよ」

「鼻の下な? 鼻が伸びたら血信満々か茹じへば嘘吐きだからな? そもそも伸びてねえつー?」

「……」

「~~~」

あの、そろそろ離れて……。

「「デュエル（～）…」」

「一体どんな流れでデュエルになつたの？！？
つか、俺を離してデュエルして！ 慧たちも空氣読んで離れなくて良いから！」

「燈夜ちゃんが近くに居るから、負ける気がしないわ～
「く……勝てる気がしませんね」

「じゃあ戦るな！」

「私の先攻です、ドローー！ 私は《セイクリッド・シェラタン》を召喚します。このカードの召喚に成功した時、私はデッキより《セイクリッド・エスカ》を手札に加えます。カードを一枚伏せて、ターンを終了します」

セイクリッド 現実世界、とこつより日本で出たDT13で出
たカテゴリだ。

雪や姉さんが俺に影響されて遊戯王を始めた時、丁度この弾が出た時期だから、雪はセイクリッドをずっと愛用している。

「あたしのターン、ドローー。あたしは《ヴェルズ・マンドラゴ》を特殊召喚～」

一方で、姉さんはヴェルズ。雪に対抗したのかそうでないのか、セイクリッドと同じくDT13で登場したカテゴリだ。

ちなみに、マンドラゴはフィールドの自分のモンスターが相手よりも少ない時、特殊召喚出来るモンスターだ。

「せりに、《ヴェルズ・ヘリオロープ》を召喚へ」

んで、ヘリオロープは通常モンスターだ。攻撃力は1950と中途半端だけど……良く考えたら、それはヴェルズ全体に言えるな。

「バトル～。マンドラゴちゃんでショラタンちゃんに攻撃～」「う……！」

霊 LP 4000 3150 .

「ヘリオロープちゃんとダイレクト～」「う……！」

霊 LP 3150 1200 .

前から思つてたけど、ライフ4000って少ないよな。デュエルがすぐ終わっちゃう。

まあ、原作みたいに表側守備表示が無いだけマシだけど。

「カードを一枚伏せて、終了ね～」

はあ……早く終わらせてくれ。

ん？あれ……もしかして、もし姉さんが勝つたら俺、姉さんに抱きつかれたまま？

それは……色々困る… イロイロ…

「し、霊……も、もし勝つたら……えと、頭撫でてやるや～へ」

「私のターン、ドローします」

……今、霊の眼がキリッとなつた。うし、勝つる。

「私は永続魔法、《セイクリッドの星痕》^{セイクリッドの星痕}を発動します。リバースカードオープン、《リビング・デッドの呼び声》。シェラタンを特殊召喚します」

シェラタンのサーチ効果は通常召喚のみ対応して。特殊召喚されて出てきた今回は、サーチする事が出来ない。

「私はシェラタンをリリースし、《セイクリッド・スピカ》を召喚します。このカードが召喚に成功した時、効果により、手札より《セイクリッド・エスカ》を表側守備表示で特殊召喚します。このカードもシェラタンと同じくサーチ効果を持っています。シェラタンと違うのは、特殊召喚にも対応している点ですね、兄さん」「何故俺に訊く……まあ、そうだけど」

「エスカの効果により、私は《セイクリッド・エスカ》を手札に加えます」

……まるでガジェットだな。レベル違うけど。

「LV5のスピカとエスカでオーバーレイ・ネットワークを構築。ランク5……来て下さい、《セイクリッド・ブレアデス》！」

来たか……セイクリッドのエクシーズモンスター。
エクシーズ素材を一つ取り除く事で、フィールド上のカードをバウンスする強力な効果を持つカード。

「セイクリッドと名の付いたモンスターがエクシーズ召喚に成功した時、星痕の効果により1枚ドローします」

引いたカードを見て、雫は成る程、と呟いた。

「……プレアデスの効果を発動します。素材を1つ取り除いて、《ヴェルズ・ヘリオロープ》を手札に戻します」

「チヨーン、《侵略の侵食感染》発動～。1ターンに1度、ヴェルズと名の付いたモンスターをデッキに戻してヴェルズをサーチするのよ～。ヘリオロープちゃんを戻して、《ヴェルズオランタ》を手札に～」

「……そうですか。なら、」

霧は、手札の1枚を抜き取る。

「魔法カード、《簡易融合》発動します。1000ライフコストを支払い、」

霧 LP 1200 200 .

「《おジャマ・ナイト》を特殊召喚します」

「きやあ～、おジャマちゃん邪魔～」

ああ、邪魔だ。おい、お茶飲むな！ そのちやぶ台びいから出しあつ～？」

「墓地の《セイクリッド・シェラタン》をゲームから除外し、《靈魂の護送船》ウル・コンヴァイを特殊召喚します。再びレバーアイ！ 2体目の《セイクリッド・プレアデス》をエクシーズ召喚します！」

！」

あ……なんか凄い泣きそうな顔でおジャマたちが消えた。

そういうや、プレアデスはレバーアイの光属性2体だったな。《ヴェルズ・バハムート》はヴェルズと名の付いたモンスターが2体だった

から、忘れてた。

「2体目のフレアアーティスの効果により、《ヴェルズ・マンドラゴ》を手札に戻します」

「あ～……」

……ホント、ライフ4000以下足りないよな。

「兄さんの応援を受けた私に、敗北の2文字はありません」

ヤバイ、格好良いよこの子。

「バトルフェイズに入ります。フレアアーティスでダイレクトアタック！」

「きや～」

「う、うわああつー…？」

若菜 LP 40000 1500 .

お、俺も巻き添えで怖え～……あの、早く離してくれません、姉さん？ 俺も怖いんスけど…………うー？

「2体目のフレアアーティスでトドメです」

「うにゃあ～」

「うにゃあつて何……うわああつー…」

若菜 LP 15000 .

「むう……仕方ないわね～」

や、やつと解放された……。

そんな何故か疲労困憊の俺に、雲はトロトロと近付いてきて、頭を差し出してきた。

「お前……俺に構わず攻撃してきたから、頭撫でるの無しな
「そんな……」

ショボン。

それこそ仔猫のように肩を落とす雲に、俺はふつと少く笑い、
なるべく優しく雲の頭に手を乗せた。

「え……」

「お疲れさん。良いデュエルだったぜ」

ワンキルだけどな。

「……兄さん……それはズルイ、です……」

雲の呟いた言葉は、俺の耳には聞こえなかった。

そして、放課。

俺は最近足に運ぶ回数が多いな、と思い始めた灯台の下へやつて
来た。

「果たし状……ねえ」

可愛らじい丸文字。流石にハートとかは無いとは言え、果たし状
といつ言葉を無しにすればラブレターに見えなくも無い。

……人生初のラブレターがこの世界、というのもなんか嫌だけど。
そもそもラブレターって時代遅れ…………勿論果たし状も。

さて。

「どこに居るんだ、『瀬野基』さーん」

「チッ……なんで分かんだよ」

「俺に果たし状を送つてきて、且つこんな丸文字の奴なんて、俺に
はお前しか思いつかなかつたんだよ」

「…………慧に言われてもよ。やっぱ俺にや、ストーカーとしか思えね
H」

ああ、そういうやそんな設定喋つてたな。すっかり忘れてた。

「慧、どんな話したんだ?」

「…………別に。慧も、幸一も、俺も……テメエに救われたつて事
とかな」「

救われた?

……“あの”事か? 慧の時もそうだけど、全然自覚ねえな。
俺としちゃ、普通に接したりしただけなんだぜ。

「俺あ話聞くのは苦手なんだよ。慧の話が本当で、俺とダチだつた
つづーなら分かるだろ、俺の性格

……ああ。

「困った時は、
拳で語る」

「デュエルッ！」

「それはズルイ、です……」（後書き）

セイクリッドヒューリズ、登場です（早っ）。
まだカード足りないんじゃないかなー、とか思いながら書いたら
ました、テヘッ（笑）

この話が出た時はまだロト13が最新でした。

やばい、そろそろストックが切れそうだ……！
ストックが無くなつたら、一気に更新速度が遅くなりそう。
その時は、皆さん、『メンナサイ』（——）を

感想、評価等お待ちしております！

「そいつ等は気付いてねみてえだけだな……」

さて。

俺は意氣揚々、といつよりはノリの乗せられた感じでデュエルを始めてしまった訳だが。

アイツの溢れる鬪気を、どう沈めてやるつか……？

「俺の先攻だぜ、ドローチ！ 俺あ《黒竜の雛》を召喚！ 効果発動！ このカードを墓地に送つて、手札から……来い！ 《真紅眼の黒竜》 ッ……！」

早速お出ましか……！

基のフェイバリットカード、レッドアイズ。LVが7の割には低い攻撃力が目立つ闇属性ドラゴン族モンスター。

遊戯王チームLEGENDsの主力カードで、一番攻撃力が低い。けれど、それをサポートするカードは協力だ。

例えば、

「魔法カード、《黒炎弾》！ 俺の場にレッドアイズが居る時に、その1体を選択して発動出来る！ 相手にレッドアイズの元々の攻撃力分……つまりは2400ダメージを与える！」

「うあああつ……ー！」

燈夜 LP 4 000 1 600 .

そう、例えば《黒炎弾》。このターンレッドアイズは攻撃出来ないけれど、今のように初ターンならそのデメリットは無い。特にこ

の世界だと、ライフは4000だから《黒炎弾》の有用性は高い。

……そもそも、2400のダメージ自体は高い。

「カードを一枚セットして、ターンエンドだぜ、ストーカー」「ストーカージャ……ねえよ！俺のターン、ドロー！」

伏せが気になるな。もしもデッキ構築が地球ん時と同じなら、基本的にアレは蘇生カードだ。

慧や基、幸仁って俺と違つて手札に主力カードを集めinしな。アレがリビデとかだつたら、離が蘇生されてレッドアイズ2体目、となる可能性がある。

「俺はモンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンド！」
「はっ！ いきなり防戦かよ。こつちは攻めて行くぜH……ドロー！」
《真紅眼の飛竜》 召喚！ バトル！

着実にアタッカーを増やしてきたか……。

「レッドアイズで伏せモンスターを攻撃！ 黒炎弾！」

……どつちもレッドアイズだ、と突つ込んだら負けだろ？

「伏せモンスターは《見習い魔術師》！ このカードが戦闘破壊されたら、デッキからLV2以下の魔法使い族モンスターをセットする事が出来る！ 俺は《見習い魔術師》をセット！」

「チツ……たりい。ワイバーンでセットに攻撃！」

「《見習い魔術師》、効果発動！ 《執念深き老魔術師》をセット！」

「…………俺はこのままターンエンドだ」

良し……特に何も無い。やつぱりあの伏せカードは蘇生系統、と考えるか。

「俺のターン、ドロー！ 永続魔法、《魔法族の結界》発動！」

正直言つ。

……《魔法族の結界》は、使い辛い！

魔法使い族が破壊されるたびに魔力カウンターを最大4つまで乗せ、このカードと魔法使い族モンスターを墓地に送る事で乗つていたカウンター分ドロー出来るカード。

上手く出来れば4枚ドローだけど、時間が掛かりすぎるし、その上自分のモンスターを犠牲にしなきゃ行けないんだからな……。

今のところ、好みで入れてるカードだ。大好きなんだよ、このカード。

それはともかく。

「反転召喚、《執念深き老魔術師》！ リバース効果！ 《真紅眼の黒竜》を破壊！」

「チツ……」

老魔術師の執念のような、呪いのような……なんか禍々しい気がレッドアイズに纏わりつき、破壊する。

「このお婆ちゃん……」ええ。

「お、俺は《執念深き老魔術師》をリリースして、《ブリザード・プリンセス》をアドバンス召喚！」

「う……そのカードは……」

「このカードはLV8だけど、魔法使い族モンスター1体をリリースして、表側攻撃表示でアドバンス召喚出来る。そしてこのカード

の召喚に成功したターン、相手は魔法、罠カードを使えない

伏せカードは気にせず攻撃出来る。闇属性だから、《オネスト》の警戒もしなくて良い。

そもそも、元々基のデッキに《オネスト》は入らない！ 光が居ないから！

「バトル！ 《ブリザード・プリンセス》で《真紅眼の飛竜》に攻撃！ フリージング・マジカル！」

命名、俺。ネーミングセンス〇です本当にありがとうございます」と

「くつ……！」

基LP4000 3000 .

「俺はカードを一枚伏せて、ターン終了だぜ」

「……やっぱわかんねエ。なんで慧や咲之宮がお前に惚れんのか……」

「おいおい、慧はともかく結姫は……」

「隠してんじやねエよ。端から見るとバレバレだぞ、お前

……。

「当人……慧とか咲之宮、後は鴻……じやねエ、今は志藤だつたか？ そいつ等は気付いてねエみてえだけどな……俺や幸仁から見りや、一目瞭然つてやつだぜ」

俺ははあ、と溜め息を零す。

「……別に、俺だって好きでやつてる訳じゃねえよ」

「テメエ……いつまでそうしてるつもりだよ？」

「俺はもう、誰も好きにならないし恋人も作ったりしないって決めたんだ」

まあ、それでも慧を振り切れない優柔不断、チキンだけどな。

……慧が笑顔で居てくれないと調子狂うのも事実。そう自分に言い訳しておこう。

「お前こそ、さわさき沢崎…………メグミ慧美はどうすんだ？」

「め、慧美がなんだってんだよ？」

「……良かった。沢崎の事は忘れてねえんだな」

「あ？」

「…………お前が居なくなつて、沢崎、スッゲー怒つてるんじやないかなーつて思つただけだよ！」

沢崎恵美。基の幼馴染で、俺たちが通つていた高校の風紀委員だ。俺から見ても相思相愛だというのに、奥手の基は好きじゃない、とか言つじ。慧美は結構アタックしてるのにな。

「知らねエよ！ 俺は、アイツの事なんか……！ チツ、ドロー！」

途中で言葉を止めたか。アイツも、心の奥底では認めてんだろうな。

沢崎が好きだつて。

「リバースカードオープン！ 『リビングデッジの呼び声』！ 広つて來い、レッドアイズ！」

やつぱり、蘇生^{レッドアイズ}系だつたか！

「行くぜ！ 僕は《真紅眼の黒竜》をリリースして、《真紅眼の闇竜》^{ラゴン}を特殊召喚する！」

「あ……來たか。序盤で出しても攻撃力の上昇幅は低いとは言え、墓のエースカード！」

「このカードは自分の墓地のドラゴン族モンスターの数、攻撃力が×300ポイントずつ上がっていく！ 墓地のドラゴン族モンスターの数は3体！ ょつて900ポイントアップ！」

《真紅眼の闇竜》 ATK2400 3300

《ブリザード・プリンセス》を超えた、か。ヤバイな。

「バトル！ ダークネスドラゴンで《ブリザード・プリンセス》を攻撃！」

「つ……！」

燈夜 LP1600 1100

《魔法族の結界》 魔力カウンター 0 1

そろそろ、ダメージを受けるのは厳しいな。
けれど、手札にこの状況を開拓するカードは無い。これは……やはりたく無いけれど、無理矢理行くか？

「俺はカードを一枚伏せて、エンドフェイズ時、墓地の《真紅眼の

飛竜》の効果発動！ このターン、俺は通常召喚を行つてない。ワ
イバーンを除外して、レッドアイズと名の付いたモンスター……『
真紅眼の黒竜』を攻撃表示で特殊召喚するぜ！

『真紅眼の闇竜』 ATK3300 2700 .

「エンドフェイズ時、リバースカードオープン！ 『リミット・リ
バース』！ 墓地の『見習い魔術師』を蘇生し、効果発動！ この
カードが召喚、特殊召喚、反転召喚した時、魔力カウンターを乗せ
られるカードにカウンターを一つ乗せることが出来る！ 乗せるの
は『魔法族の結界』！」

『魔法族の結界』 魔力カウンター 1 2 .

「さらには『リミット・リバース』！ 2体目の『見習い魔術師』！
効果により、さらに『魔法族の結界』に魔力カウンターを乗せる
！」

『魔法族の結界』 魔力カウンター 2 3 .

基は何かをする様子は無い。俺のターンだ。

「ドロー！ 僕は1体の『見習い魔術師』を守備表示に変更！ この
時、『リミット・リバース』の効果により『見習い魔術師』は破
壊される！ そして勿論、『魔法族の結界』に魔力カウンターが乗
る！」

『魔法族の結界』 魔力カウンター 3 4 .

『『魔法族の結界』の効果発動！ このカードと俺の場の『見習い

魔術師》を墓地に送り、魔力カウンターの数……4枚ドローする。」

「……無茶苦茶だな、お前」

分かつてる。良いじゃないか、別に。
無茶苦茶だつて分かつてるけれど、これで手札は補充出来た。

……そうか。これで“勝て”つて言つんだな?

「行くぜ、墓!」

「来いッ!」

「俺は《熟練の黒魔術師》を召喚! 速攻魔法《ディメンション・マジック》! 俺の場の《熟練の黒魔術師》をリリースして、来い! 《ブラック・マジシャン》!」

『はつ!』

気合いと共に登場するマハード。

行くぜ!

「《ディメンション・マジック》の効果で、《真紅眼の闇竜》を破壊!」

「チツ……!」

「さらに、《千本ナイフ》! 俺の場にブライマジが居る時、相手フィールド上に存在するモンスターを1体破壊する! レッドアイズを破壊だ!」

「く……」

無数のナイフがレッドアイズに突き刺さる。ドラゴンだったから
まだしも、もし人間だったら……グロイな。

「……魔法カード、《死者蘇生》！ 対象は、《真紅眼の黒竜》だ！！」

「なつ……ー？」

「 猛れ！ レッドアイズッ！！」

基の墓地から咆哮を上げながら羽ばたく漆黒の竜。格好良いな！

そんな姿に見惚れていたから。

俺は、基の手が一瞬、リバースカードのオープンボタンに行つたのを見逃したんだ。

「行くぜ？ バトルフェイズ！」

「…………そつか…………やつと、思い出せたぜ…………燈夜！」

「つ…………！」

そりや、良かつたな。やつぱりお前とは話し合ひより、戦りあつた方が合つてるみてえだ！

「行くぜ、基！ 《ブラック・マジシャン》でダイレクトアタック！ 黒・魔・導！」

基 L P 3 0 0 0 5 0 0 .

「トドメだ！ 《真紅眼の黒竜》でダイレクトアタック……！
黒炎弾！！」

基 L P 5 0 0 0 .

「その……悪かつたよ。忘れてて、さ」「別に良いっての。慧もそうだったし、幸仁はまだ忘れてるし。そもそも、そんな事したのは御神だろ?」

「……ああ」

それにしても、良かつた良かつた。このまま思い出をなじままだつたら俺自信、凄い滅入つてただろうな。

記憶を思い出させるにはデュエルが良いのかな。ただ、幸仁に勝つのは……うん、難しそうだ。

「俺、先帰るわ。ちと頭ン中整理しねエと」

「……お前、考えるの苦手なんだから止めとけば? 知恵熱出るや

?」

「ンだと?」

はは、と笑う。それに吊られたかのように基も笑った。

「じゃあな、燈夜

「ああ」

その場から基が離れていく。

清々しい気分。

けれど……それを邪魔する奴が1人。

「お疲れ様、一ノ瀬燈夜君

「……何しに来たんだよ？ つか、フルネームは止めてくれ
すつげえ違和感がある。」

「そうかい。じゃあ、燈夜君で良いかな？」

「……まあ、良いけど」

「そり、じゃあ燈夜君」

俺が海の方に視線を向ける。真っ直ぐに俺を見つめている視線を感じるけれど、俺は無視するように視線を逸らした。

「先日。僕が君に言つた言葉は憶えていいかい？」

「言つた言葉？」

「そつ……『君は、弱いね』……と」

……ああ。俺は同意を込めて首を縦に動かす。

良く憶えてる。だからこそ、俺は強くなりたいって思つたんだ。

「彼の最後の伏せカーデ。なんだつたと思つ？」

「……なんだよ、その質問。まさかまた……」

「《激流葬》、だよ」

「つ……！」

『《激流葬》……？』

「それ……本当、なんだよな？」

「嘘を言つても、僕にメリットが無いね。本当だよ」

「…………！」

握り拳が自然と出来る。

慧だけじやない。

基も、手加減しやがつた、のか……！？

「先日、僕が君を消さなくて良かつた、と本気で思つよ

「波の音が聞こえない。

聞こえるのは御神新の声と、

「君程度のイレギュラーなら、僕が手を下す程の存在じやないから
ね」

煩い程の、俺の鼓動

。

「や二つ等は気付いてねHみてえだけひな……」（後書き）

少しずつ、ゆっくりと、一ノ瀬燈夜は悔しさを溜らでこく。

はい、今日は燈夜と基のデュエルでした。

『魔法族の結界』の辺りは大好きですwww ちょっと無理あるかなー、とは思ったけど……（笑）

ヤバイ、明日の投稿間に合つかな……この辺りから少しずつ更新が遅れていくかもしません、すみません（汗）

感想、評価等お待ちしております！

「殺されるぞ、視線で……」

文化祭の準備を本格的に始めて数日。

第五位の寮は小さく、食堂も残念ながら喫茶店にするには少し小規模過ぎた。

そこで俺が考えたのは至極当然の答え 外に机を並べてよう、というモノ。

そうすればコスプレデュエル中も観戦できるし、悪くない案だと思う。

そして今日。

俺は今、巻き金髪お嬢様のリリア・フォルゼン・レイランドと人きりで街に出向いていた。

「…………どうしてわたくしたちですの？」

「今更何だよ……。仕方ないだろ？」

なんか、喧嘩し始めたんだから……。

俺は肩を竦めながら、昨日の出来事を思い出していった。

「大分、様になってきたな」

並べられた数十個のテーブルと椅子を眺めながら、俺は腕を組みながら頷いた。

アカデミアの講義も終わり、放課後。ソフィアを除いたメンバーが文化祭の準備をしている今。俺が何故か仕切りながら第五位を喫茶店へと染めて行つてゐる。

「そろそろ材料とか買い集めた方が良いんじゃないかな？」
「ん？ あ～、そうか……後2週間だしな」

慧の言葉に、俺は文化祭への短さを感じていた。
ある程度の材料は前日に御神が持つて来てくれるらしいけれど、一部の人は練習も必要かもしれないしな。

「このメンバーで料理が出来る奴つて誰が居る？」

「えっとね……燈夜と僕だけ、かな……」

「…………」

す、少ねえ……。

正直、慧辺りは良い客寄せ虫（言い方悪い）だから厨房よりもホールに行つて貰いたいし……ローテーションするにしても、流石に人数が少なすぎる。

「こりや、明日にでも少し材料を買つてきて、練習して貰つた方が良いか……？」
「買い物つて、どこに行くんですか？」

休憩に入ったのか、結姫や凜那が近付いて来る。
全員集合、つて感じだな。ソフィアや御神は居ないけど。

「ん~、流石に購買じゃ足りないし……島から出て町に行くかな

つ……？

なんだ……今、空気が張り詰めたような……つ！？

「それじゃ、私が一緒に行きますよ」

「そんな……僕が行くよ。結姫さん、疲れちゃうでしょ？」

「…………わたしと、行こ…………？」

あの……俺が行くのは確定なのか？　俺が仕切ってるとは言え、材料書けば俺居なくとも大丈夫だよな？

なんて言つてもその主張は聞き届けられる事は無いだろうから、俺は空笑いしか出来ない。

「やれやれだな。そういうえば燈夜、町を歩いた事は無いんだったか……。私が買い物がてら、案内してやる事も出来るぞ？」

「その必要は御座いません。兄さん、私が全身全靈を持つてこの案内いたしますが」

「皆必死ね～。こには一つ、お姉ちゃんと一緒に逃避行しちゃお～？」

どんな妥協案だつ！？　つか、逃避行つて言い方はそこはかとかく駄目な気がする！

しかし、ここで「俺は行かないぞ？」とか言つたら咄びんな顔をするだろうか。見てみたい気もする。

「なんつーか、必死だな……将来苦労するぜ、燈夜」

「はあ……既に苦労してゐつづーの」

「…………それもそうだな」

基の慰めに、俺は深い溜め息を零す。

「なあ……」
「で俺が、基と行く、とか言つたらひつなると細づへ。」
「殺されるぞ、視線で……俺が」

……そつか。

流石の基も、恋する乙女には勝てないか……。

「わういえば——ノ瀬様」

今までどこに行つてたのか、何も知らないリリアが近付いて来る。

「第壹校の特待生と仲が宜しいから、とう理由で注目を浴びているのですが」

ふむ。

「御神様がそれを利用して、町でエキシビジョンデュエルを行いたいらしいのです。なので明日、わたくしと一緒に町へ向かって頂けませんか?」

『え?』

おお……旨息ピッタシだ。

俺もついえ? と聞き返すといひだつたし。

それより……、

「え? ど、どうしてわたくしは旨様に睨まれてますの?...?」

リリア……不憫な子つ……！

そんで、また色々言い争いがあつた上で、俺はリリアと二人だけで町へ来る事に。

その時、またリリアは皆の反感を買つたといつ。

「なんか……災難ですわ……」

「お疲れ様」

同情しておくよ。

俺が^{ねぎい}言葉を呟くと、本当に……、トリリアは重たい息を吐く。

「ところで、どうして俺が噂になつてるんだ?」

町で“デュエルした事なんて無い”……いや、結婚を襲つた不良たちが居たか。

まあそれも人気の無い場所だったし、そもそも噂の内容は“第壹校の特待生と仲が良い”らしいし、俺はどうやって噂になるのか分からぬ。

「それは簡単ですね。第壹校の特待生は時折、テレビ出演するのはご存知でしょう?」

ああ。俺が第壹校に慧たちが居ることを知つたのもテレビだった

しな。

「その際……好きな人は居るのか、といつ質問に慧様が……」「あ……成る程」

口を滑らした訳ね……。つてことはアレじやね？ 慧ファンの人たちに反感買つてるんじやないか、俺？
くそ……慧め、厄介な事を……！」

「その上昨日の撮影では、基様が貴方の事を語つてしまい……」

基、お前もか。

「……まだありますのよ
「今度はなんだつ！？」

「聞くのが怖い……！ けれど聞かないのも怖い……！」

「結姫様が父親に貴方の事を喋つてしまい、本口は家族全員でエキシビジョンマッチを見に来るらしいですし」

咲之宮家全員参加！？

「凛那様の家は幾人ものプロデュエリストを輩出した教育場なのですが……『両親が貴方を見にいらっしゃるといつお話です』」

……おおつ。

「御神様が様々な業界のお偉い方を連れて来ると仰っていましたか
うう」

御神……やつぱりお前とは、一度拳を交えないと行けないようだ
な……！

つか、プレッシャーヤバつ！？

「俺……今日を乗り切つたら、」

「文化祭を頑張りますのでしじう？ 分かっておりまわ」

死亡フラグを切られたつ！？

空氣読めよ、リリア！ そういうの、“KY”って言つんだぞ！

「はあ～……」

今日一番の溜め息を、俺は零したのだった。

「うわあ……」

と俺が声を上げるのも最もだと思つ。

櫻都町の真ん中に位置する中央公園が、俺のエキシビジョンデュ
エルをする場所だというから来て見れば、そこには人、人、人。

それこそどこのライブのように入人が集まり、フェンスで前へ出
て来られないように遮られている。

そのフェンスの前に居るのは、椅子に座った複数の大人たち。

「前に居る方たちが、咲之富家や御園家……その他、有名な企業や会社の方々ですわ」

「マジか……」

ざつと2・30人は居るんじゃないだろうか。俺の緊張も艦上りである。

「あそこには咲之富家の一家です」

そう言つてリリアが指差したのは、並ぶ椅子の中心辺りに居た家族だ。

なんと言つか、厳格そうな男性とずっと微笑んでいる女性。女性の方は母親だらうか？ 子持ちとは思えないほど若そうだけど、結姫に似てる。

そして並ぶ3人の女性たち。約2名は、俺よりも少し年上か？ という感じだ。一番隅に座っているのは、小学生……くらい？ の女の子。

……なんか、無表情だ。腕を組んで、脚を貧乏揺すりしている。

(あれが……結姫の家族、か)

姉2人は勿論、妹にさえ劣っている、と泣きそうな声で話していくのを思い出す。

私、捨てられたも同然なんですよ。
自殺する理由が出来るなあ、って……。

「…………」

「……？ どうか致しましたの、一ノ瀬様？」
「……いや。なんでもない」

大きく深呼吸する。

……良し。頑張るかね。

そう気合を入れると、俺は両頬を2回ほど叩いた。程好い痛みが氣付けとなつて、身体の強張りを消していく。

『本日は皆さん、良くお集まり頂きました!』

やつと開始か……と、俺が会場に視線を送る。
と、

「……司会はお前かよ」

御神新が、マイクを持つて微笑みを持ちながら喋っていた。

『……と、前口上はこの辺りにしておきましょ。今や世界中でも注目を浴びている第壱デュエルアカデミア 横都校……その特待生筆頭、瀧川幸仁君を呼びましょう!』

はつ……！？ 幸仁、来てるのか！？

俺がキヨロキヨロと視線を泳がせると、リリアの後ろで静かに立つている姿が見えた。

なんつーか……前の世界でもそうだったけど、影薄いな、お前。
無口だからだろ? だけれど、

『瀧川幸仁君、どうぞ…』

無言で会場に顔を出す幸仁。その瞬間、耳を劈くような歓声が沸き起こつた。

主に、女性の甲高い声。

「凄い人気ですね……わたくしには、あの方の良さは分かりかねますわ」

……まあ、顔だろ。好みじゃないんだろうしな。
なんて言つたらおしまいな気がして、俺は黙した。

『続いて、1ヶ月前に第壹校へ編入し、特待生の一ノ瀬若菜、一ノ瀬零と血を通わし、瀬野基と長谷部慧と友人関係を結んでいる注目の人間！ 一ノ瀬燈夜君の登場です、どうぞ！』

う……来たか。

俺はもう一度深呼吸して、会場へと一步踏み出す。
歓声は無かつたけれど、壮大な拍手と共に俺は生睡を呑み込む。

『質問タイム……と言いたいところですが、まずはデュエルから参りましょうか！』

え、いきなり？

「燈夜君、幸仁君。準備は良いかい？」

マイクから口を離し、御神は俺たちに問う。
幸仁は静かに頷き、ディスクを構えただけだった。

「ふう……良し。大丈夫だ」

昨日調整が終わつたばかりの“テッキだ。
いつも思うけれど、事故らないでくれよ……？

「一ノ瀬燈夜」

俺は“テッキに祈りを捧げていると、静かな口調で幸仁が話し掛け
て来る。

「俺にはまだ、お前と過ごした記憶は無い……」

……。

「だが基も慧も、そして俺も……記憶が無かつた数ヶ月間、何かが
“足りない”と感じていた」

俺は、ディスクから“テッキを取り出し、ベルトに取り付けたケースに入っている“テッキと入れ替えた。

「その足りない“何か”がお前なのか……試させて貰う」「
上等だ。お前こそ腕が鈍つてないか、試してやるよ」

「「テュエルツ！！」

「殺されたぞ、視線で……」（後書き）

やつべー、Jの先の展開考えてねー（汗）

（どひこひ……どひこひ……） 本氣で考えてない奴
これは……読者様には少し待つてもうつしか（ry）

感想、評価等お待ちしております。はあ。o-rz

「確かに、じいが懐かしい感じがある」

「俺の先攻、ドローー！」

先攻は俺だ。

幸仁に出し惜しみなんてしていたら、一発でライフは〇だ。ただでさえライフポイントは少ないのに。

「俺はモンスターをセット！ ターンエンド！」

「……ドローだ。俺は手札よりファイールド魔法、《竜の渓谷》を発動する」

辺りが竜の飛び交う渓谷へと早代わりする。

元々はドラグニティで活躍するよう作られたカードだが、実際、《竜の渓谷》はデッキから好きなドラゴン族を落とせる効果を持つ。そこに、 “ ドラグニティ ” の要素は必要無い……！

「《竜の渓谷》の効果を発動する。手札の《青眼の白龍》を捨て、デッキから《伝説の白石》レジェンド・オブ・ホワイトを墓地へ送る。この時、《伝説の白石》の効果によりブルーアイズを手札に持つてくれる」

手札の消費は無いに等しい。

この動きをしたところでは、幸仁の手札にはドロー強化のカードがあるはず。

「《トレード・イン》発動。手札のLV8モンスター……ブルーアイズを捨て、2枚ドローー」

やつぱぱつたか。

「《シャインエンジール》を召喚し、バトル。《シャインエンジール》でセットモンスターを攻撃する」

「つ……モンスターは《水晶の占い師》！ リバース効果により、俺は『デッキの上から2枚めくる！』

めぐられたカードは《魔導戦士ブレイカー》と《魔法族の結界》。

「……」

「俺は《魔法族の結界》を手札に加え、ブレイカーをデッキボトム……デッキの一番下に戻す」

手札にブレイカーはある。後続を加えておくのも良いけれど、これはドロー強化しておこう。

……ま、時間も遅いし成功するかも分からんんだけど。

「俺はこのままターンエンドだ」

「俺のターン、ドローっ！」

さて、どうしようか。

出来れば《シャインエンジール》は戦闘破壊したくない。だからと言つて、《竜の渓谷》も残しておぐと後々厄介そうだ。
……と、すると。

「俺はまず、《魔法族の結界》を発動！ そして相手の場にモンスターが存在し、俺の場にモンスターが居ない場合、このカードは特殊召喚出来る！ 《太陽の神官》！」

サイドラのような—SS（特殊召喚）方法を持つ《太陽の神官》。

別に効果は意味がない。

要は、“魔法使い”族である事が重要なんだ。

「俺はチューナーモンスター、《ナイトエンド・ソーサラー》を通じて召喚！」

チューナーモンスター、ところが俺の言葉に観客席がざわわつく。
それはそうだろう。

チューナーといえば、シンクロ召喚の際に必要なモンスターであり、この世界ではその“シンクロ”は未だに田の畠を浴びていないのだから。

「そして LV5 の《太陽の神官》に、LV2 の《ナイトエンド・ソーサラー》をチューニング！」

「は……叫ぶしかないよなっ！？」

「魔導の道標よ、至高の光よ！ 今此処に、全てを解き明かし式を並べん！ シンクロ召喚！ 《アーカナイト・マジシャン》！」

うは、厨一病くせえ……とは思にながらも、妙にワクワクした気持ちが踊る。

ちなみに今の台詞は既興だ。適当に呟んだけれど、それなりに言葉になつて良かったと思つ。

「シンクロ……って、確か……」

「ああ、第壹校の特待生しか知らなかつた召喚方法……」

「それも、特待生から話には聞いたけど、実際見るのは初めてだよな……」

…… そうなのか？

まあ確かに、幸仁や基、慧は勿論、この前初のテレビ出演を果たした零と姉さんもシンクロはしないしな。

幸仁はシンクロモンスターのカタストルが嫌いで、総じてシンクロはしたくないらしいし、慧はシンクロするとネオスの影が薄くなりそうだから、だと。

んで基は、「レベルの計算が面倒臭エ」らしい。

「《アーカナイト・マジシャン》がシンクロ召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを2つ乗せる！ このカードの攻撃力はこのカードに乗っている魔力カウンター1つに付き1000ポイント上がる！」

《アーカナイト・マジシャン》魔力カウンター 0 2 .

《アーカナイト・マジシャン》ATK400 2400 .

「《アーカナイト・マジシャン》の効果を発動！ フィールド上の魔力カウンターを1つ取り除き、フィールド上のカードを1枚破壊出来る！ 対象は《シャインエンジェル》！」

「く……」

《アーカナイト・マジシャン》魔力カウンター 2 1 .

《アーカナイト・マジシャン》ATK2400 1400 .

「2回目の効果！ 《竜の渓谷》を破壊する！」

《アーカナイト・マジシャン》魔力カウンター 1 0 .

《アーカナイト・マジシャン》ATK1400 400 .

そういうライフは4000だっけ……一度《竜の渓谷》を残して

ダイレクトアタックしても良かつたんじゃないか？

……けどそれだと、攻撃力400のモンスターがそのままになっちゃうか。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

何はともあれ、俺のターンは終了。

怖い、幸仁のターンだ。

「ふつ……成る程。確かに、どこか懐かしい感じがする」

「幸仁……？」

「俺のターン、ドロー」

今、何を呟いたんだ？

「俺は『サファイア・ドラゴン』を召喚する。バトル！　『サファイア・ドラゴン』で『アークナイト・マジシャン』を攻撃！」

アークナイトの守備力は1800。1900の攻撃力を持つサファイアには勝てない。

『魔法族の結界』魔力カウンター 0 1 .

「メインフェイズ2。カードを1枚伏せ、ターン終了」

あの伏せ……1枚は『正当なる血統』の可能性が高いな。墓地にはもうブルーアイズが居る。用心しておかないと。

「ドローっ！……良し、やるか。俺は永続魔法、『魔力僕約術』を発動！　これで、魔法カードを使う際に払うライフコストを払わ

なくても良くなる。そして、《黒魔術のカーテン》……「

奈落とかは、無いでくれよ……そう願いながら、俺は一度大きく息を吸う。

「このカードはライフを半分支払い、デッキから《ブラック・マジシャン》を特殊召喚する!」

《ブラック・マジシャン》、とこうモンスター名を告げたからか。再び周囲のざわめきが強くなる。

これで俺も注目の的なんだろうなあ……御神辺りは、その辺りを分かつている上でこのデュエルを計画したんだろう。なんか、簡単に踊らされてる気がするのは癪だけど……今は良い。

いつか見返そう、と決意しながら俺はデュエルを続ける。

「来い、マハーダッ!」

気合いで入った吐息と共に、マハーダが降誕する。
何かを発動する気配は……無い。

「魔法カード、《黒・魔・導》! 俺の場にブライマジが存在する時、相手の魔法、罠カードを全て破壊する!」

擬似《ハーピィの羽根箋》だ。

幸仁は何を発動するまでも無く、大人しく破壊されていた。

《正当なる血統》。案の定、つて感じだな。

「バトル! 《ブラック・マジシャン》で《サファイア・ドラゴン》を攻撃! この時、伏せから《マジシャンズ・サークル》発動!

お互に攻撃力2000以下の魔法使い族モンスターを攻撃表示で特殊召喚する！ 来い、マナ！』

『いいよー！』

「……俺のデッキに魔法使いは居ない」

良し、押し切れる！

「続行！ マハード、あのドラゴンに攻撃だ！」

『はあっ！』

幸仁 L P 4 0 0 0 0 3 4 0 0 ·

「続いて、《ブラック・マジシャン・ガール》……マナでダイレクトアタック！」

『えいっ！』

幸仁 L P 3 4 0 0 0 1 4 0 0 ·

なんか……マナの気合の入れる声、可愛いです。
和むなあ……なんて、言つてる場合ぢやないつての、俺！

「俺はこのままターンENDだ！」

『ふ……』

俺がエンド宣言をすると、幸仁が静かに笑っていた。

「一つ訊きたい。お前は……舞のことを、知つてゐるのか？」

舞 興野舞。幸仁の恋人で、今は大学2年生だ。
活発な性格で、中学、高校と陸上部で走り回っていた、というのを俺は聞いていた。

「ああ」

「……そうか。やはりな」

物静かに納得する。ふつゝと笑みを浮かべた幸仁は静かな動作でディスクに手を乗せる。

「俺のターンだ。ドロー」

ドローカードを暫く見つめる幸仁。そして成る程、と肩を竦め、違うカードを手札から抜き出す。

「魔法カード、『思い出のブラン』。墓地の存在する『青眼の白龍』を特殊召喚する！」

つ……来たか。

「さりに『古のルール』……手札のブルーアイズを、特殊召喚するツー！」

に、2体目来たあ……！

「LV8の『青眼の白龍』の2体でオーバーレイ・ネットワークを構築する」「え……」

「ランク8……『サンダーホンド・ドラゴン』、エクシーズ召喚……！」

ま、まさかそっち……!? 地球に居た時はそのカード、使って無かつたぞ!?

「1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、このカード以外のモンスターを全て破壊する……!」

『く………』

『きやあつー』

マハード、マナ!

うわあ……まさかの全滅。その上、

『魔法族の結界』 魔力カウンター 1 2 .

同時破壊だから乗るカウンターの数は1つだけ……つ、辛い。

「バトルフェイズ。『サンダーホンド・ドラゴン』でダイレクト」「うああっ!」

燈夜 LP 4 0 0 0 1 0 0 0 .

歓声が湧きあがる。勿論女性の黄色い歓声の方が大きい。

うああ……耳が痛い……つ!

それにして……ヤバイ状況だ。俺の場には伏せカードが1枚と『魔力僕約術』、2つのカウンターが乗っている『魔法族の結界』のみ。

その上……俺の手札は0枚だ。

「俺は……このまま、ターンを終了する。来い、一ノ瀬燈夜」

「つ……」

仕方ない……合計3枚のドローに賭けるか！

「エンドフェイズ時、リバースカードオープン！『リミット・リバース』！墓地の存在する《水晶の占い師》を特殊召喚する！そして俺のターン、ドローツ！！《魔法族の結界》の効果を発動！俺の場に居る《水晶の占い師》とこのカードを墓地に送り、俺は2枚ドローする！」

……。

成る程な。ここで引くのか……。

「幸仁！」

「……？」

「俺は慧とデュエルして、基とデュエルして……次はお前だろうな、つて勝手に思つてたんだ。だから俺は、お前とのデュエルの為に数枚、このデッキに加えられたカードがある」

デュエルをしたら記憶が戻るんじゃないか、と思った。もしかしたら本当にそうなのかもしれない。

けれど……2人とのデュエルでは、共通点があつたんだ。

慧はネオス、基はレッドアイズが俺の場にやつて来た時……2人の記憶は戻つた。

なら。

「まずは、俺もお前と同じカードを使わせて貰うぜ。《思い出のブラン》！ 墓地の《ブラック・マジシャン》を蘇生させる！ そして《千本ナイフ》！ 《サンダーハンド・ドラゴン》を破壊する！」

「つ……」

これで幸仁の場はがら空きだ。

「お前とのデュエルの為に入れたカード……見せてやるよつ！ 俺は装備魔法……《自立行動ユニット》を発動する！」

成る程、と言つた様子で幸仁は息を吐く。

「このカードのライフコストは1500……それは《魔力僕約術》で不要になつてゐる。相手の墓地からモンスターを攻撃表示で特殊召喚して、このカードを装備する。対象は、《青眼の白龍》だ！」

俺の場に降臨する神々しい龍。白銀の身体は太陽の日差しに煌き、つい息を呑んでしまうほどに威圧感に溢れていた。目を見開いて、幸仁の時が止まる。

「バトルフェイズ。《青眼の白龍》で、幸仁にダイレクトアタック！」

幸仁 LP 1400 0 .

“滅びのバーストストリーム”が、幸仁を包み込み。

エキシビジョンデュエルは、俺の勝利に終わった。

「確かに、じいが懐かしい感じがある」（後書き）

私って、『魔法族の結界』……好きだなあ（笑）

そして『魔法族の結界』に助けられる主人公、一ノ瀬燈夜。
せうには何気にこの小説初のシンクロ召喚。

ふう……疲れた（爆）

シンクロ召喚の時の台詞とか、全て血口流なんで……考えるの辛い
ですよ

感想、評価等お待ちしておりますね！

「その時は、お前も守つてやる」

……勝つた…………。

信じられない…………。

けれど、幸仁の場に伏せカーデは無い。慧や幸仁のような“手加減”は無い。

俺は　！

『なんと、勝者は編入生である一ノ瀬燈夜君でした！　しかし驚愕に満ちている方、『安心ください。瀧川幸仁君の持つ、たった一枚の手札…………』

まさか…………？

『《死者蘇生》でした。《サンダーエンブ・ドリゴン》の効果を服用後、《死者蘇生》により墓地の《青眼の白龍》を蘇生させれば幸仁君は勝っていましたので』

心に、影が差す。

まるで太陽がどす黒い暗雲に隠れていくように、俺の目の前も闇が覆づ。

君は、弱いね。

御神の鋭い台詞が、的を射る。

「燈夜……そ、うか、思い出した。何故忘れていたのか……」

幸仁が近付いて来る。

思い出してくれた。それは凄く嬉しい事だ。嬉しい、はずなのに

……！

「 来るなッ！…」

俺は、気付けばそんな言葉を吐いていた。
はつとなつて、俺は辺りを見渡す。

御神は全てお見通し、という様子で俺を見つめている。珍しく目
を見開いて俺を仰視する幸仁。

観客席には、様々な視線が俺を突き刺す。結姫のご家族も、凜那
の両親も。

「 ……ッ」

逃げる。

この視線から、早く……！

「 一ノ瀬様っ！…？」

俺はその場から、背を向けて走った。

どれくらい走つただろうか。

気が付くと、そこは公園だった。中央に噴水があり、その周りにはベンチが4つ。四方向に分かれた道はどこまで続いているのだろう……？

俺は一つのベンチに腰を下ろして、はあ、と息を零した。

「何やつてんだ、俺……？」

そんな自問には、誰も答えてくれたなかつた。

『死者蘇生』、『激流葬』、『聖なるバリア・ミラーフォース』……はは、パワーカードのオンパレードじやんか。
俺、やっぱ弱いんだなあ……。

もしかしたら……いや、もしかしなくても、他の奴より俺は弱いんじやないか？

雪と姉さんには何回も負けてるし、結姫の植物デッキもシンクロが無い分、コントロール色が強いだらうし……そもそもティタに苦戦しそうだ。

凛那のアルカナも、かなり苦労するだらうし……そもそも、展開力が早すぎだろ。

志藤の巨大天使にはパワーで押し切られて、ソフィアの除去能力の高さは折り紙付き。

リリアのデッキも、前デュエルしているのを見た時……俺のデッキには結構刺さつたし……。

「…………」

「…………」

リリアだ。

顔を上げると、そこに額に汗を垂らしたリリアが肩で息をしていた。

「……俺を追いかけて来たのか？」

「ええ。」、座らせて貰いますわ

もう言つてリリアは俺の隣に座つた。少しの間、沈黙が続く。

「…………悪かったな」

「え？」

「…………突然、逃げ出しちゃつてさ」

頬を搔きながら、俺はそう切り出した。

「俺、強くならないとな」

歯を、守れるよつ。

「世界を守るとか、歪みがビツとか……そんなの俺には分からない。非現実的過ぎて、寒感が湧かないんだよ……」

「それは歯さん、そうだと思いますわ……事実、わたくしもそうでしたし」

「…………ナビ」

俺は、強くなる。

「歯を守れるよつ……強くなりたいって思った。御神に弱いって言つてから、ずっと考えていたんだ」

「そうですの……」

俺は小さく頷く。

俺は弱い。

弱いからこそ、強くなりたい、という想いは人一倍強いんだ。

「その時は、お前も守つてやるよ

「え……？」

世界は要らない。

俺が守りたいのは、“世界”じゃない。

「俺は俺の友達……仲間だけ守れれば良いんだ」

仲間、なんて言葉……地球に居た時は臭いなあ、なんて思つてた
けど……。

自然と俺の口から出たのは、仲間、といづ一言だった。

「…………

俺は勢い良く立ち上がり、リリアに手を差し伸べる。

今まだ、俺は弱い。

けど、少しずつで良い。俺は強くなつてこいつ……そう決意して。

「御神や幸仁には悪いけど……買い物、行こうぜっ！」

平々凡々だけど、他の殿方よりは礼儀の為つた男性。

そんな何とも言えない印象だった彼、一ノ瀬燈夜様。

正直、会つて見なければ彼のことは全く分からなかつた、というのが本音でしたわ。

零に彼の事を訊けば、「絶対至高の存在」。

若菜に彼のことを訊けば、「愛すべき愛弟」。

それも、血の繋がつた家族とは思えない惚ノロケ氣を延々と聞かされるのですから、彼女たちに一ノ瀬様の事を訊ぐのは自分の中でタブーとなっていました。

そんな彼が、真摯な瞳でわたくしを見つめながら言つた真つ直ぐな言葉。

その時は、お前も守つてやるよ。

「はふう……」

正直、ドキッとしましたわ。

わたくしが今まで接した事がある殿方と言えば、御神様とレイランド家の財産を狙つて近付いて来た打算的な男性のみ。
けれど……一ノ瀬様の瞳は、濁つていなかつた。

と、言つ事は。

「衣装は慧と基が作つてくれるらしいし……やっぱ問題は料理だよな。当曰は購買にある程度のを予約したけど……練習、必要だよな」

全く。

」の心臓……早く、収まつて下れこまし……。

「その時は、お前もやつてやるよ」（後書き）

今回は短いです。

リリアのフラグを無理矢理立てました。ニヤニヤ（笑）

次は誰とのイベントか、皆さんなりお気付きましたよね？ 私は作者の癖に、思い出すのに数分掛かってしまいました……。

決意を新たにする燈夜。しかし、その胸の奥には、本人も気付いていないどす黒い感情が 。

え、ネタバレ？

違います、未来予告です。きっと。

感想、評価等お待ちしております！

「…………」の前は、燈夜さんを私の部屋に招待したつい

アルバイト。

俺はカードを売つて結構な金銭を得た……つん、それは良かった。要らないなー、というカードも良い金になつてくれた。

けど、それは卒業までの学費や寮費、その他諸々に使う為、俺が自由に使える金は少ない。

イコール、デツキを強化出来ない。その上文化祭に使うお金を富豪の娘達 まあ結姫とかリリアとかに払わせるのは、男として恥ずかしいと思つんだ、俺。

……全部御神が出してくれれば良いのに…………あ、冗談な、冗談。多分。

てなわけで 俺は購買のお姉さんに頼んでアルバイトをさせて貰つている訳だが。

「いやまあ落ち着けよ、餅搗けよ、おこ餅はどうだマシュマロ口でも良いぞ《マシュマロロンのメガネ》まだいいだつー？」

「可愛いわよ、燈夜ちゃん」

「…………」

「ああ～……脚がスースーするう……ハイソックス？ そんなん知るかつて話。

第五回 ハルアカデミア 檜都校。そこは購買の他にも、食堂と呼ばれるレストランのような場所もあるといつ。俺は初めて知ったんだけど。

俺がアルバイトをする、と言つて連れて来られた場所がこの食堂だつたわけだ。

どこのファミレスや喫茶店のようこ、他にもアルバイトしている子たちが制服を身に着けて動き回っている。

そして　俺、一ノ瀬燈夜も同じく。

女性用の制服を着せられ……どどのつまり女装、している訳だ。ゴト寧にウイッグ（カツラ？）を取り付けられて。

「もう……お嫁行け……じゃない、お嫁さん貰えない…………」

「あらあら。それならお姉さんが貰つてあげるから大丈夫よ?」

「全然大丈夫じゃ有りません。眼がギラギラしてるんですけど……」

何ソレ怖い。

はあー、と溜め息を零す。ここまで重い溜め息を零したのはいつ振りだらうか。この世界に来た時もここまでじやなかつたぞ。

「うーん、やつぱりお姉さんの思つたとおり、可愛いー！　女装つてね、瀬野君や瀧川君みたいな“格好良いイケメンタイプ”、よりも一ノ瀬君のような平凡な顔立ちの方が映えるのよ?」

「知りたくなかった新事実、……」

「どうか、平凡な顔立ちつて……。まあ、自覚してるけどさ。俺はこれで接客しろ、という事だらうか。多分そつなんだらうなあ。」

「どうか、化粧つて面倒臭いな。して貰つた俺が言つのもなんだけど、こんなのを毎日している女性方は、最早尊敬に値するね。」

「今日は料理を運ぶのと、注文を聞きに行くをお願い。さつき教

えたとおりだからね

「はあ……」

「あ、後なるだけ声は高くな。今でもやいまで低いわけじゃないけど、とにかく高く、それと女性らしさを意識すれば大体は騙せるか

「ひ

さこですか……。

俺はやる、と決めたからには最後までやつとおもタタイプ。数回咳払いして、軽く息を吐く。

高く……高く……。

「い……いらっしゃいませ」

「お……予想以上！ うん、オッケーだよ。アルバイト中は燈夜、じゃなくて燈歌テウカって名前でね」

なんか……キヤバクラみたいだな。燈歌つて言つのは源氏名？
とやうで。いや、キヤバクラとか行つた事無いんだけど。

「それじゃ、お願いね

「はあい……」

高めの声で、俺は溜め息交じりに返事を返したのだつた。

「新人さん？ 僕、第二位なんだけど……」その後一緒にビビツ？

「おい、抜け駆けは無しだぜ。僕と一緒にさー」

「い、いえー……すみません、まだまだ終わりそういう無いので……

失礼しますね

はあー……ナンパも日常茶飯事、か。

というか、俺が男って気付けよ……骨格とか肩幅とかで気付かな
いか、普通？ いや、慧みたいに華奢だと分からぬだろうケド……
俺は普通だぞ、普通！

一度ホールに戻る。

少しの間静かな空間が支配する。水を貰つて飲み込むと、ちょっ
と落ち着いて来た。

と 。

「つかー！ 腹減つたぜ」

「ふ……思つたよりも長引いたからな」

は、基に幸仁「一つ！？

そ、そんな……く、クソ、バレる訳にはいかねエー！？

「燈歌ちゃん、瀬野君と瀧川様にメニュー訊いて来て

お、俺がつ！？ つか瀧川“様”つて……。ファンクラブの方で
すか、そうですか。

うあー、緊張するー……。

大きく深呼吸して、いざ、出陣！

「いー、ご注文はあります（ ）か？」

…………」、声裏返つた一つ……

顔が赤くなつていくのを感じる。けれど流石幸仁、何の反応もなく日替わり定食を頼んだ。

基は少し怪訝そうに俺を見つめていたが、無視するよつて醤油ラーメンを。

「日替わり定食一つと、醤油ラーメンを一つですね。ありがとうございました」

素早く礼をして、俺は速くその場から離れようとして背を向ける。

「なあ、お前……」

ビクウッ。

「…………いや、何でもね。気のせいだら」

「し、失礼しますー…………」

し、死ぬかと思ったー……ヤベえよコレ、ヤベえよコレ。大事な事だから2回言いました。

これ…………いつバレるか分かんないぞ、本当に。

再び溜め息を零したい気分になるも、どうにか俺は抑えたのだった。

基と幸仁が帰つて、俺も安堵しながら仕事を続けた。

人間、慣れというものは怖いもので、俺は高い声を出し続けるのも女装でさえ楽、と感じるようになつていた。

……なんて思つていてから、神は俺に試練を『えたんだわ。

「燈夜、どこに行つたんだわ?」

「…………行方不明…………」

「アルバイトする、つて言つたのは分かつてゐるんだがな…………購買には居なかつたし」

「教えてくれませんでしたしね…………」

「おかしいです。兄さんレーダーが反応しません」

「うへへへへ 燈夜ちゃん成分が足りないいへへへへ」

「…………雲様と若菜様の発言には、突つ込んで宜しいのでしょうか?」

「…………おい、どんな仕打ちだコレは?」

「あいつ等、いつもは中庭で食べてるじゃないか!? なんで都合良くへいひひひ元氣來るんだよ!-?」

「結構な団体さんだねー。それも、皆君と一緒にいる女の子達だよね?」

「…………ええ、まあ」

「行つてらっしゃい」「

「悪魔つ!-? 僕には行つてらっしゃいの漢字が誤字変換されて、逝つてに聞こえたぞ!-?」

「行かなきゃお給料は無いよ?」

「樂しんでる…………絶対樂しんでる…………！」

ええい、行つてやるわー、行けばいいんだろ、逝けばっ！？

「「「、」」」注文はお決まりですかー？」

ひい……怖い！ 特に霊にバレた時にや、俺の貞操が……危ない！

「あ、私は」

「くんくん……兄さんの匂いがします」

お前は犬かっ！

なんて突っ込みを入れるわけにもいかずに黙つていると、7人の視線が俺に集中する。

これは……絶体絶命のピンチ……！？

えと……えと…？

「お、お兄さんって、一ノ瀬燈夜さんの事ですか？ それなら当た
り前ですよ。私、燈夜さんと仲良いですしー」

……何言つてるんだ、俺？

いやしかし、言つてしまつたからには、これで突破するしかない！

「仲が良いつて……どうこいつですか？」

あれ……視線が怖い。それも皆だ。姉さんでさえ微笑みながら眼
が細まつている……！

「私の名前、燈歌つて言つんですけど……名前が似てるのと、好み
とかが似てるから気が合つちゃつて……この前は、燈夜さんを私の

部屋に「」招待したりー

な、何言つてるんだこの口はつ！

アレだ……俺はモテないからって、見栄を張つているんだ。うん、見栄張りたくなるよな？ 俺、実は結構モテるんだぜ！ みたいな……………零や姉さんの前でこれを言つたのは、間違いだったと思うけど。

死亡「フラグ」です。

「……今日は帰らせて頂きますね
「私もお供しよう」
「僕は一度、第五位の寮行くから……」
「校舎内はお任せくださいまし
「見つけたらDPで連絡ね～？」
「兄さん……ふふふ」

……俺、バイト終わつたら死ぬ？ 死ぬよな、コレ？

ふらふらとしながら食堂を出て行く6人の美少女達。凄くシユールだけど、そんな事を考える暇も無く、俺は命の危険を感じていた。

「…………」

くい、と。

制服の裾を掴んで、志藤が俺を見上げていた。

「……一ノ瀬君……バレてる」

「え……」

「……図星？」

う……。

「……良く分かつたな。需でさえ分からなかつたのに
「……カマ……かけた」

「え？」

つー事は俺、今自分でバラしあつてことかー?
うわあ……何してんだよ、俺。阿呆か。

はあー、ヒ溜め息を零す俺。

「一ノ瀬君……燈歌

「うん? ジゃなくて……はい、なんでしょうか?」

一応、今はアルバイト中。高い声を出しながら、俺は接客を続けた。

「……オムライス」

後日談。

志藤にはバレたけれど、特に問題は無く。

女性6人に問い合わせられたけど、適当に言い逃れて……それも特

に問題は無く。

問題は、1つ。

『わーい、燈歌ちゃん可愛いーー！』

『確かに……慧殿にも負けず劣らずです』

「いつの間に写真撮ったんだお前いつー？..」

マナとマハーナの手元には、3桁にも及ぶ写真の数々。

軽いパンチラまでは、俺の精神を大きく削る、といつか…。

.....。

「あ、燈歌ちゃんってパンツも女性用だったんだね？」

「もう止めてくれーっ！..」

御神にもバレていた俺は、本気で不登校になりかねなかつた、と。

はあ……。

「…………」の前は、燈夜さんを私の部屋に招待したつー（後書き）

「や、やってしまったー……！」

もう一つの遊戯王小説、通称“僕らの”でもやった女装ネタ。まさか燈夜までも犠牲になるとは……！

燈夜には……頑張つてもういたいです。色々な意味で。

感想、評価等お待ちしております！

「俺が、友達になつてやるよ」

講義も終わり、アルバイトも終わり。

とつとつ明口は、待ちに待つたアカデミア行事 文化祭だ。

時刻は夜。

薄暗闇が島を包み込む、睡眠の時間。
彰正先生と御神も眠っているだろう遅い夜中の時間帯……俺は最後の見直しをしていた。

『元気だね、マスターは』

「まあな」

講義中、ずっと寝てたしな……げふん、げふん。

そんな事実は全然全くこれつぴちも無きしにもあらずだから。なんてマナに言つても無駄だらうケド、心中で言い訳をしておく。

幾つも並べられた机と椅子の数を確認……良し。

更衣室の代わりとなつている第五位の寮の食堂奥。衣装の数……良し。

昼間に貰つた食料……良し。どれくらい繁盛するかは分からぬけど、充分足りるだらう。

主に女性陣がやつてくれた飾り付け……うん、良し。結構様になつてる。

「明日は、マナとマハードも手伝ってくれよな

『はーい』

『わ、私も……ですか』

「モチ。期待してるぜ?」

基、幸仁、そしてマハード……御神も顔は滅茶苦茶良いし、人気の高い彰正先生も手伝ってくれるという。女性客は集まるだろう。男性客? 言わずもがなだろう?

唯一浮くのは俺なんだけど……まあ、俺はキッチンで仕切つてりや良いだろ。ナンパしてくる輩が出てきたら仲裁役として俺が出て行く程度で。

『 燈夜殿 』

俺が外に並べてある一つの椅子に腰を下ろすと、どこか真剣な表情でマハードが話し掛けて来る。

ちなみに、マナはいつも通り俺にくつ付いて来ている。マナの顔が俺の真横にあつたり胸が背中に当たつたりとかなりの役得具合だが、正直慣れっこなので無視。

『あの日……御神新殿が全て話した時の事を、憶えてありますか?』

「…………

あの日は、色々あった。

御神との出会い。結姫たち含め、全員(正確には“殆ど”)が元は地球の人間だという事、ソフィアの中から志藤が出てきて、ソフィアとのデュエル。

そして、俺は 弱さを、突き付けられた。

『志藤殿がデュエルに敗北し、倒れた時……燈夜殿から起つた突如の爆発。あれは一体……？』

「俺を、選んでくれた奴だよ」

『ひ……！？』

マナが俺から離れる。

俺から放たれる異質な気配……オーラを感じ取ったのかもしれない。

『燈夜殿を、選んだ……？』

『けど、マスターを選んだのは私たちのはずだよ。』

ああ……そうだ。

「俺を選んだのは、マナとマハードだよ、間違い無く。けどお前らの他にも、俺を選んでくれた奴がいるんだ」

『それは、一体……？』

『…………』

「まだ、その“時”では無い。」

脳裏に、あの時聞こえた女性の声が響いた。

「まだ秘密だな。近い内に、ちゃんと教えてやるよ」

「……誰と話してやがんだ、オメー？」

「つ……なんだ、ソフィアか」

「その名前で呼ぶんじゃねーよ」

気が付くと、ソフィアが怪訝そうに俺を見つめていた。

当たり前だけど、精霊化しているマナやマハーデは他人には見えない。慧や結姫たちも見えないんだから、ソフィアが見えるはずもない、か。

だから、俺が独り言を喋っていたように見えた、と。

「うわー、痛い子だわー、俺。

「で、誰と話してたンだよ？」

「え？ えっと……わざわざまで居たんだけど……どうか行つたかな？」

「…………」

「…………視線が痛い…………」

けれど無理矢理納得してくれたのか、ソフィアは静かに椅子に座り込んだ。

「お前はどうしたんだよ？ 明日文化祭だぜ？」

「別に……オレ、元々夜行性だからよ。いつもこの時間は適当に歩き回つてんだ」

「へー。んじゅ、講義中はどうしてんだ？」

「まあ、サボり?」

「…………」

居眠りしてる俺より悪いな、こいつ。だからって寝起きで寝ちゃう気がするけど。

「……あの、よ」

「ん?」

暗くて、ソフィアの顔は見え辛い。どことなく顔が赤く感じるのは、照れているからだろうか?

「彩伽は……アイツは、元氣かよ?」

彩伽　志藤彩伽。

へえ、と俺は笑みを浮かべる。

「心配してんのか?」

「べつ、別にんなんじゃねーよー。ただ、その……」「、このアカデミアに来てからずっと一緒にいたから……」

それが、心配してることなんだよな。

とは言わぬが、俺はソフィアに感じていた印象が変わるのを感じていた。

「元氣だよ。相変わらず口数は少なかつたりするけど、ちゃんと周り見て行動してるし、何より結姫や凛那みたいな友達と一緒に入って、楽しそうだ」

「……そうか」

笑っていた。

ソフィアは微かに、口元を緩ませていた。陰になつて良くな見えなかつたけれど、それだけは確かだ。

「お前はどうなんだ?」

「……オレ？」

「ああ。お前は友達、つべり」

「イラねー」

俺の言葉を遮るように、ソフィアが拒絶する。

「ダチなんて、裏切るだけじゃねーか。どれだけ一緒に居て、親友だと何かほざいても……結局、最後はオレの傍から居なくなっちゃまつ」

過去……ソフィアの過去に、何があつたかなんて俺なんかには想像出来ない。

それと同時に、ソフィアはその過去を話したくないんだろう。誰にだつて、話したくない過去はあるもんだ。

それが大きいか小さいかの違いはあれど、な。

「 地球に居た時、」

「は？」

俺にだつて話したくない過去の一つや二つ、ある。だから無理に聞くなんて野暮な事はしない。

「慧つて、お化け屋敷が嫌いでさ。基は逆に大好きで、いつもお化け屋敷に連れて行こうとしてた。幸仁はその仲裁に入つて、俺はその後、いつも一手に分かれよう、なんて妥協案を出してた

「な、何言い出しだんだ？」

「……俺が通つてた高校の文化祭に雪が来た時、喫茶店の接客して

きた俺を単独指名、とか言って教師を困らせてた。姉さんさ、なんだかんだ高校のミスコンに出て、優勝しちまって……優勝者の特権で、俺にキスしようとして来てさ。あの時は焦った

「おい、一ノ瀬……？」

「遊戯王の大会に出た時、スゲエ気の合つたプレイヤーが居てさ。俺、一回戦負けで慧たちをずっと待つてたんだけど……その人とずっと話し込んでたんだ。会社に対する不満とかぶつけ合つて、途中、2人で強制退場されるところまで盛り上がったんだぜ?」

「おいッ！」

「つと、話しそぎたか?」

ノリに乗つて零と姉さんの話までしちまつたぜ。やれやれ、自重しないとな。

「友達つてさ、結構大事なんだぜ? そりや、家族だろうが友達だろうが、『他人』に変わりないし……何考てるか分からない」

「当たり前だ。

『二次元の世界とかならともかく、相手の気持ちが全て分かる人間なんて居ない。

「もしかしたら、疎ましく思つているんじやないか? 俺の発言に、怒つてるんじやないか? 嫌われて、しまったんじやないか?……?」

俺も、昔はそんな事ばかり考えて、他人と触れ合つのが怖くて仕方が無かつた。

まあそれは、零や姉さん、慧と触れ合つてゐる内に解けていった

んだけぞ…… 閑話休題。

「けど分からぬか」ソフィア、友達同士は笑い合える。そう思わないか?」「

「……笑い、合える……」

「“ああ、コイツ、俺の此処が嫌いなんだ……”って思つたら、笑い合えないだろ?」

なんか、説教みたいになつちまつたな。

ここいら辺で切り上げるか。

それこそ、こんな説教垂れて嫌われちゃヤだからな。

「俺が、友達になつてやるよ」

「……とも、だち?」

「ああ。俺がお前の友達第1号だ! んでもつて、明日の文化祭にや雲や姉さん達含め、皆お前の友達だ。裏切るとかそんなの考えずには、一緒に過ごす仲間 な?」

最後、ちょっと臭かつたか?

ソフィアは暫く無言だった。俺も夜風を感じながら、沈黙を守る。

「……今日は、帰るな

「……ああ。お休み、ソフィア

「……その名前で、呼ぶなつての」

静かな抗議をして、ソフィアが帰つていぐ。

「……わへー」

明日は、文化祭だ。

「俺が、友達になつてやるよ」（後書き）

きやー、燈夜君格好良いーーー！

てな訳で“今のところは”順調に毎日更新をしている廃棄人形です。
デュエル？無いですねー。『僕らの』でもそうですが、私が書く遊戯王の一次創作はデュエルが少ないみたいです。反省。
しかし、私はストーリー重視！プロットとかそんなの有りません
けどストーリー重視！

ちなみに、この小説のストーリーはカップ麺が出来る程度の時間で確定しました（爆）

感想、評価等お待ちしております！

番外編～誕生秘話（笑）と一ノ瀬燈夜～（前書き）

今回は番外編です。

ですので短いです……すみません（汗）

ゲストは我等が主人公、一ノ瀬燈夜！

番外編～誕生秘話（笑）と一ノ瀬燈夜～

作者「わーい、初めての番外編だー」

燈夜「……なんで棒読みなんだ？」

作者「眠い」

燈夜「一睡もしないで書いてるからだろ！？」

時刻は午前7時前です。

作者「しかも書いた日の前日は友達の家に泊まりに行つててさー。
疲れた、疲れた……」

燈夜「帰つてから早々アニメばっか見てるしな。仮眠取れよ」

作者「だ が 断 る」

作者「はてさて、この番外編では、この小説の誕生秘話（笑）と…
…最後には主人公、一ノ瀬燈夜の紹介をしようかと思つていたりして
てるんだと思われると思つよ？」

燈夜「なんか、凄い曖昧だな」

作者「……眠いからテンションがおかしいんでございます。大事
じゃないから1回程度しか言わなかつたんじゃないかな？ だよね

？」

燈夜「俺に訊くな」

作者「てなわけで！誕生秘話を……ーーー！」

燈夜「（餡^{あん}の入ったドローパンを食べ始める）」

作者「メインの方の『遊戯王 僕らの進んで行く道』で、今とある理由で番外編STORYをやっているんです。遊戯王の一次創作なのに遊戯王が殆ど出てこないから、なんかしつくり来なくて……といつわけで、この小説を書こうと決めました」

燈夜「んぐっ……。けどさ、設定とか殆ど練ってないんだろ？現
在進行形で」

作者「えへ。だつてぶっちゃけると、ソフィアの“友達”に関する
過去……全く考えてませんもん、テヘ」

燈夜「それはぶっちゃけ過ぎてないか！？」

作者「世界の名前も考えてないし……文化祭の内容も全然だし
……その他色々なイベントも考えてない！」

燈夜「威張んな！」

作者「まあある程度考えている事と言えば燈夜の過去や留年の秘密（留年していく、基や幸仁よりも1つ年上、という事を忘れている人は多いはず）」

燈夜「ふむふむ」

作者「基と燈夜の馴れ初め。謎の声の正体。御神の秘密……程度？」

燈夜「少なつ！ 良くそんなんで投稿しようなんて思えたよな」

作者「そういうえば、忘れかけてたけど燈夜も小説書いてるんだよね。
君はどうなの？」

燈夜「俺はちゃんとプロット作ってやつてる。0から全部作って、
話の流れを書いて、後は腕次第って感じだ」

作者「尊敬するよー。流石私の書いた人物！」
キャラクター

燈夜「……」

作者「それはともかく……ヒロイン、多いよねー」

燈夜「お前が言うのが、それをつーーー？」

作者「零と若菜……結姫に凜那、慧、彩伽やソフィア、リリア……
そしてマナたち」

燈夜「待て。零と姉さんは……まあ、まだ良いとして、だ。マナ“
たち”ってなんだ」

作者「え？」

燈夜「“なんでそんな事訊くの？”みたいに首傾げるなよ。」

作者「君は知っている、という設定にしよう。燈夜は僕が書いてるメイン小説、通称“遊僕”は知ってるでしょ？」

燈夜「なんか突然頭に浮かんだ内容だけど、まあ一応」

作者「私の中では、主人公の諏訪^{すわアキラ}晃の精霊は皆ヒロインって感じだよ？」

燈夜「多すぎじゃね！？ “LEGENDS”なんて田舎じゃないよな！？」

作者「……と、“遊僕”も読んで下さっている方でしか分からないお話はここまで。話を戻すと、今の私たちの会話……精霊のヒロインはまだ増えるって言つフлагだよ？」

燈夜「お前つて……」

作者「例えば、『サイレント・マジシャン』LV8辺りは既に喋つたよね」

燈夜「お前つて……お前つて……！」

燈夜「ところで、毎日更新とか凄いらしいな」

作者「そりゃ凄いことだよ！ 私だって驚いてるもん！」

燈夜「して、頑張っている理由は？」

作者「早めに完結させて“遊僕”的ストックを作りまくって、何よりオリジナル小説を書きたい」

燈夜「……そつか」

作者「ただね？　こんな設定をちゃんと練つていない小説なのにメインの“遊僕”を超える人気だつていつ…………」

燈夜「分かる、分かるよお前の気持ち。そういうのつてなんか、すげえやりきれないよな」

作者「やつぱ質、シリアルスバつかの“遊僕”より（超苦手な）コメディ入れてる“LEGENDS”の方が良いんだね」

燈夜「それと、早い更新も関係あるんだろうな」

作者「ですよねー」

作者「眠い……けど後は燈夜の設定を少しだけ書き込むだけだ」

燈夜「ああ、頑張れ」

作者「うあ……適当のモン加えて良いよね？」

燈夜「止めるよ？　雪に殺されるぞ？」

作者「…………あい」

一ノ瀬燈夜。
いちのせとうや

主人公。

年齢：18歳。

性別：男性。

身長：考えていない。平均辺り。

体重：同じく考えていない。平均辺り。

趣味：遊戯王、料理、小説執筆、読書

特技：特に無し。

メインデッキ：《ブラック・マジシャン》軸の魔法使い族デッキ。

本作、『遊戯王 LEGENDS～伝説の名の元に～』主人公。

平均だけどどことなく童顔氣味の顔立ち。しかし、女装が似合つ辺り結構に中世的な顔立ちなのかもしれない。

実はバイ。バイとは、男性でも女性でも恋愛関係、若しくは性行為を行える事である。

食堂でアルバイトしている。その際は常に女装していて、その時のお名前は燈歌。この事を知っているのは数少なく、精霊以外のヒロイック勢だと彩伽のみ。

両親は既に居らず、高校に通いながらもアルバイトをして生計を立

てていた。そのアルバイトも、数件を掛け持ちしていた。そのアルバイトの際、料理に興味を持ち始めた。

幾つかのデッキを持っているが、その殆どが“魔法使い族”モンスターが軸とされたデッキ。

また、ある程度を除いて殆どのカードを売却してしまった為、余りのカードは無いに等しい。

たまに魔法使い以外のデッキも使う。

御神新の「君は、弱いね」という発言から強くなる事を決意する。しかし、慧、基、そして幸仁と手加減……というよりは実質的に負けていた事を知つて、酷くショックを受けてしまう。

作中の“選ばれし存在”で唯一、御神新に選ばれていない存在。マナとマハーダ以外のある存在にも選ばれているが、それが何なのかは不明。

それを知っているのは燈夜のみである。

燈夜「……思ったより長かったな」

作者「うん、私も驚いてる。もつと少ないかと思つた」

燈夜「……まあ、まあお疲れ様。次からは文化祭編だろ?」

作者「そうだよ。結局のところ、どれくらい長くなるかは分からないんだけど……一応、文化祭編として分けておくつもり」

燈夜「頑張れよ。俺たちもそつだばぢ……何より読者様の為こそ」

作者「ありがとう。私、頑張るつ！」と、言つ事で

燈夜「…………？」

作者「お休みなさい（――）三」

燈夜「…………えと、じやあ締めるか

深呼吸。

燈夜「これからも、『遊戯王 LEGENDS～伝説の卡の元～』
』を宜しくお願ひしますッ！」

番外編～誕生秘話（笑）と一ノ瀬燈夜～（後書き）

会話にもあつたとおり、次からは文化祭編です。多分。
ちゃんとトコエルもありますし、遊戯王の一次創作……ですよ？

そういうば、他の作者様の一次創作を読んでいると、人気投票なる
ものがありますね。

私もやりたいなー、なんて……。

誰でも良いので、それに關しての意見を下さい。お願ひします m(

—) m

感想、評価等お待ちしております！！！

「暫、楽しもひやッ……」

朝は清々しいほどに晴れ渡り、暗雲は勿論白い雲さえ見当たらぬ。温かな日差しは第壱校の文化祭を祝福しているかのように俺たちを包んでいる。

文化祭開始まで、残り20分。

今頃女性陣は食堂奥で、用意された衣装に袖を通しているだろう。各言う俺も、基、幸仁、彰正先生と御神の5人と共に寮裏で着替えていた。

「……あの、今更なんだけど……彰正先生、そのモンスターで良いんですか？」

「うん、何か問題あるかな？」

「……いえ……」

いやしかし、『古代の機械騎士』は……目元以外、顔隠れてるし。流石に槍と盾は無いけれど、それでも凄くゴツイ印象だ。

……まあ、多くは突つ込むまい。

「チツ、なんか動きづれエな……」

「当たり前だろ……なんで『アックス・ドライバー』なんだよ

『一寧に翼まで。彰正先生と同じく斧は持っていない。

しかし、本當になんて『アックス・ドライバー』？ 確か基のデッキには入っていなはずだけど……。

「……落ち着かないな」

「……いや、なんかもう予想通りとこりかなんといつか

俺、実は誰が何の衣装を着るかは聞かされていない上に、ちゃんと
とその衣装がなんなのかを見てはいない。

だから男性陣は勿論、女性陣が何を着るかは分からぬ。自由意
志にしたからな。

それはともかく。

幸仁……お前、やつぱり『正義の味方 カイバーマン』か。基や
彰正先生より全然コスプレっぽくない。マスク以外は普段着ていて
も……まあ、ある程度は許容される格好だ。

……だといふのに、なんつー存在感だ。

幸仁の元々のオーラか……それとも、どこかの世界に属ると
いう海馬社長のプレッシャーか。

流石社長……侮れないぜ！

「燈夜君、僕はどうだい？ 似合つていたら嬉しいけれど」

「……いや、そのモンスター分からんんですけど」

「おお、これは失敗。まだカード化されてないじゃないか」

ワザとらしい……けれど、無駄に似合つているから口を挟めない。
服装はなんか、普通だ。それこそモンスターなのか、と疑問に思
つてしまふほどには。

けれど、違うのは背中。

右側に白い翼。左側には黒い翼じくが対になつて生えていた。いや、
生えていたという言葉は語弊ごひがあるけど……生えていたといつよつ、
映えていた、か。

「んで、お前のその格好は……」

「俺か？ 俺は見ての通り、『ブラック・マジシャンズ・ナイト』

だけ?」

「…………それなりにマイナーなモンスターだな」

紫色の甲冑に黒マント。表側は黒いけど、その内側は赤い色をしているこのマントは、凄く格好良いと思つ。

この衣装を作ってくれた手芸部の方々…………本当にお疲れ様です。そしてありがとー。この恩はにつか覚えていたらきっと返すと思うよ?~

ちなみに、ブライダルナイトが持つていてる剣も造ってくれたようだ。腰に下げられてる。本当に良い仕事をしてくれたよ、うん。

「さて、それじゃあ行くかい?」

「そうだね」

彰正先生と御神、キャラ被つてるよ…………。

俺たちが揃つて食堂の方へ向かうと、既に皆、外に出ていた。おお、皆個性的だな。つい頬が緩んでしまつ……自重せねば。

ふんつ。

「燈夜君。何変な顔をしてるのかな?」
「…………変な顔で悪かったな」

力んだけだいっ！^{りき}

それはともかく。

俺たちに気付いた女性陣は、小走りで俺たちに近付いて来る。

「燈夜！　どう、かな？」

真つ先に声を掛けてきたのは、慧だ。

慧が着ているのは、『E・H E R O ブルーメ』。

緑色で、且つ葉っぱのようなドレスを身に纏っていた。胸元はオリジナルなのか、葉で覆われていた。

「ああ、良いんじやないか？」

「そ、そうかな……えへへ」

まあ、知っている人も少ないとthoughtけど。

「兄さん。私、兄さんの為だけに着替えました」

「それは嬉しいけど……この文化祭中は、密の事も考えてな？」

「はい」

雲は『セイクリッド・グレディ』だ。本当なら彰正先生のように顔は見えないはずだけれど、兜をして顔を覗かせている。

……けれど、さ。

「なんつーか……似合っていない事は無いんだけど、違和感の塊だぞ？」

「それは、私も思っています。しかし、セイクリッドシリーズにはグレディくらいしかコスプレ出来そうに無かったので」

「それは……確かに」

その他は男性型だつたり、人間じゃなかつたりするしな。

「燈夜ちや～ん。あたしはビッグかなあ～？」

「ん……ねえさ……え？」

…………。

「姉さん……えと、それ何？」

大きく黒い翼は姉さんの手にくつつけられていて、口には嘴くちばし、だらうつか？

拘束具のようなベルトが身体に取り付けられていて、胸が妙に強調されている。その部分は凄く……なんつーか、エロい。

えと……姉さんのデッキで、且つ翼に嘴、とすれば……まさか。

「勿論、『ヴェルズ・フレイス』よ～？」

「……やつぱりか」

ぱたぱた、と口で喋りながら翼を動かす。
流石姉さん……予想外過ぎる。

「……アレは、手芸部もかなり手を焼いたよつだ
「……だらうね。という凛那は……、」

『コマンド・ナイト』。赤い鎧を着込んだ、場の戦士族モンスターを強化する女性モンスターだ。

腰には剣も掛けられていて、元々の凛那の雰囲気もあつてか、かなり似合っている。

「流石凜那。自分に合ったモンスターを選んでるな」「う……そ、そんな見るな。恥ずかしいだろ？」「

そういうもんか？ 確かに、俺もずっと今の姿を見られると恥ずいな。

「あの……と、燈夜さん。私はどうでしようか？」「お？」

結姫だ。結姫の姿をまじまじと見つめる。

格好は……余り憶えていないけれど、確か《ローズ・ウィッチ》って名前の、モンスターだったはず。

頭には大きな華の帽子を被っていて、赤と緑を混合させた服を着ていた。

赤と緑……マリオヒルイージ……いや、そんな事考えちゃ駄目だ。駄目つたら駄目だ！

「ああ、綺麗だと思うよ」

「そ、そうですか？ ありがとうございます……！」

しかし、似合つてることに間違いはない。俺は邪念を捨て去りながら結姫にそう答えた。

「……お、ソフィアもちゃんと着替えてくれたんだな」「し、仕方ないから着てやつたんだよ。ん、んなに見るなッ！」

ソフィアは……えつと、《墮天使ナース・レフイキュル》か。背中には6枚の翼。体中を包帯で纏わせたソフィアの姿がそこには居た。

「そうか？ 結構似合つてるぜ？」「

「…………あ、ありがと……よ」

あれ、素直だな……前なら睨んできそうな感じなの。」。

昨日、友達になろううといふ会話が実を結んだかな？ だとしたら嬉しい限りだ。

俺がその事に微笑んでいると、リリアが腕を組みながらふふん、と鼻を鳴らしていふ姿が視界に映る。

「さあ、わたくしの姿を見て跪きなさい」、一ノ瀬様
「いや、しないから」

リリアは《ネフティスの導き手》だ。リリアのテッキは《ネフティスの鳳凰神》を軸としたピートダウンだから、予想通りって感じだ。

しかし、低攻撃力の導き手が偉そうに立ちはだかる、というのもなんか……シユールな光景だな。

「跪きはしないけど、似合つてるぜ」

「あ、当たり前ですか」

くい、と。

俺の羽織つているマントを引つ張る感触がした。

俺が振り向くと、志藤が無表情で俺を見上げていた。

「…………一ノ瀬君……格好良い……」

「ありがと。お前もすげえ可愛いぞ」

「…………うん」

顔を赤く染めて俯いてしまつ。照れているのだろうか？ といふ

が、今思つと凄い恥ずかしい台詞言わなかつたか、俺？
志藤に釣られたかのように、俺も赤面してしまつ。

志藤の格好は『勝利の導き手フレイヤ』だ。チアリーディングとかで使う……ボンボン？ みたいなのは背中、といつよりお尻辺りに仕舞われている。

……なんか、尻尾みたいだ、とか思つたら負けなんだろうか？

さて 文化祭が始まるまで残り10分も無いだろう。

今頃樺都町や、もしかすると他の町の人たちも船に乗つてこの島に来て、文化祭開始を今か、今かと待ち侘びている頃だろう。
最終チェックだ。

「皆、集まつてくれ」

俺の一言に合わせて、皆が皆集まつてきてくれる。
合計人数は俺含めて13人。結構な人数だ。

「最終確認だ。交代は3時間毎。最初は御神、幸仁、慧、凜那、リリア、ソフィアだ。次に彰正先生、基、結姫、雫、姉さん、志藤。それを交互に行う」

「あれ……そういえば一ノ瀬君はどうするんだい？」

「俺は仮にもリーダーを任せられてるしな。取り敢えずばぶつ続けだ」

そりや、少しの休憩は取らせて貰いつつもりだけど、と続けた。

「そ、それじゃ不公平ですよ」

「そうだ。燈夜の分も」

「要らないって。俺がしたいんだからな」

それに。

ずっと働いていた方が、余計な事を考えなくて済む。

「…………」

「話を戻すけど、基本的に俺はキッチンに入ってる。料理を出
来るメンバーは限られてるから、多分キッチンとホールの交代は無
いと思う」

俺を筆頭に、御神と彰正先生はずっとキッチンだらう。寄寄せと
して暇な時に行つて貰う事はあるだらうナビ。

「以上！ 時間は無いから、異論とかは無にしてくれ。それじゃ

「

『只今より、第64回第壹テュノールアカデミア 横都校文化祭を、開
始致します』

「皆、楽しもうぜッ！…」

多種多様の返事が、俺たちを包み込んだ。

「皆、楽しもうぜーーー」（後書き）

はい、とこり訳で文化祭編開始です！

今回は皆さんのコスプレ内容の紹介とシフトを。
コスプレに関しては、はい、一言言つますと……。

「うわー、凄いカオスだ」

特に若菜が。次に彰正辺りかな？ 頭隠れてるし。いや、幸仁だろ
うか……海馬、もといカイバーマンですし。

あ、それと。

書きながら思つたんですが、「あ、リリア『テュエルしてない』。
だから『テッキが何なのかも知らされていなかつたオチ……なんとい
う不覚。流石私、馬鹿だ。」

はい、ネフティス『テッキです。もうぶっちゃけますが。

感想、評価等お待ちしております！

「それは違いますっ！」

「燈夜～、オムライス～」「

「燈夜、ヤキソバ～だそ～だ」

「一ノ瀬様、カレーライスがお～つだそ～ですわ」

「なんで俺ばかりに頼むんだよ～！？」

慧、凜那、リリアの順番で俺に言ってくる。

言われた通りにメニューを用意しながら、俺は次々と品をテーブルに並べていく。それを凜那とリリアが持つて行った。

「だつて……料理してるの、燈夜だけだよ？」

「ええい、御神とソフィアはどうしたつ～！？ キッチン担当はアイツラだろ～！？」

「えと、御神さんは食料の調達をしに購買へ……ソフィアさんを連れて」

「早つ～？ まだ文化祭始まつて1時間だぞ～！」

「……思つたよ～、繁盛してるね」

お前らのおかげでな……！

アカデミア屈指の美少女集団、慧、凜那、リリアが揃つてるんだ。結姫たちが居ないだけまだマシだけど、もし集まつたら渋滞が起きるんじゃないだろ～か。いや、起きるな……確実に。

その上、第一位の特待生旦つ、女子が設立したファンクラブの数々……その一角を担つていてる幸「も語るんだ」。

だ、としても。
……疲れる。

「ほい、オムライスとヤキソバ」
「うん」

慧に入れ替わるように、凜那が戻つてくる。

「大変そうだな、燈夜」

「ああ……そうだ、凜那、料理は苦手そうだったけど盛り付けは出来るだろ？ カレーは出来たから、福神漬けとか置いてくれ」

「ああ」

スプーンを添えて、カレーライスの入った皿を渡す。後は凜那に任せて大丈夫だろう。

次は……。

「やあ。頑張ってるね、燈夜君」

「労いは良いから、早く手伝ってくれ」

御神とソフィアが、手に荷物を持ってきながら帰つてきた。見たところ結構な量だけど、確かにこのペースなら、すぐにでも必要だらう。

俺には何も言わずに行つたのは止めて欲しいけれど、結果的にはこれで良い……のか？

「燈夜」

「ん……ソフィア？」

テーブルに食材を置いたソフィアが、外を指差しながら声を掛けってきた。

「3番席に、お前を呼んでる奴が居るぞ?」

「は……俺?」

「一体誰だ……?」

手を洗つて、布巾で拭いてから外に出る。

3番席、3番席……ここか。

「えっと、俺…………私に何か御用でしょうか?」

そこに座っていたのは、1人の男性と3人の女性だった。
男性は厳格そうな雰囲気を醸し出している。筋骨隆々、素手で熊
と戦つていそうな体格だ。

一方で、女性3人は綺麗な人たちだ。基本的には桃色の髪形をし
ていて、薄い桃色だつたり濃い桃色と個性豊かだ。

って……。

「あれ……もしかして、結姫の……!?

「あら、やつぱり貴方が一ノ瀬燈夜さん? お察しの通り、わたくし私は結

姫の母です」

「……ふん」

やつぱり……!

桜都町で見た事はあった。あの時はもう一人、小さな女の子が居
たけれど……。

「貴様が、結姫を誑たぶかせた男というのは」

「たぶつ……? そ、そんなんじゃ有りませんよ! 結姫……さんは、階級の差なんて無いように、仲良くして貰つてはいるだけです」「どうだかな」

「うわあ……なんか、雰囲気通り怖え……。

「まさか、本当に第五位とはね……結姫の趣味って、はつきり言つて悪いわね」

「全くね。顔が良い訳でも無いし、デュエルモンスターZが強い訳でも無い。我が妹ながら、やれやれだわ」

「……スゲエ言い草。流石の俺もイラッと来たぞ。

とは言え、彼女たち（多分結姫のお姉さん方）が言つている事は確かだ。結姫の趣味は知らないけれど、俺は顔も平凡、遊戯王も微妙妙……。

うわ、自分で言つて泣きたくなつてきた。

「それは

「それは違いますっ！」

「ゆ、結姫っ？」

結姫が居た。

珍しく怒った表情で、席に着く家族たちを睨んでいた。もしかすると、結姫の怒った表情を見るのは初めてかも知れない。

「あらあら。結姫ったら……」

「……ふん。第五位なんぞの人間に誑かされおつて」

気付くと、俺たちは注目の的だつた。

食堂から出て来た御神たちも遠目で見ているし、お密さんたちも俺たちに視線を集中させていた。

それはそうだ。

咲之宮家のトップは、たまにテレビ出演もしている。今や経済界

にも顔を出している結姫の姉2人も、かなり有名だ。少なくとも、俺でさえ知っているくらいには。

だからこそ、注目を浴びないはずも無かつた。

「それは、違います。私は燈夜さんが燈夜さんだからこそ、一緒に居るんです」

.....。

「燈夜さんは私が危険に陥つた時、助けてくださいました。私が泣きたい時、隣に居てくださいました。お父様たちはそういう時、傍に居てくれた事など有りませんでしたのに……」

「.....」

「取り消してください」

静かに。

結姫が、視線を鋭くする。

「私は燈夜さんに誑かされてなどおりません。取り消してください！」

結姫はやつぱり、俺の事……好きに、なっちゃったのか？

端から見るとバレバレだぞ、お前。

基に言われた言葉が脳裏に浮かぶ。

そう……俺は、“あの時”からいつも鈍感のフリをしていた。もう誰も好きにならない、恋愛なんてしないって……そう決めたから。

慧に始まり、雲と姉さん……志藤、ソフィア、凜那、リリア……そして結姫。

数人は、ほんの少し前からだ。特にソフィアは、朝……いつもと、様子が違った。それがもしかしたら恋なんぢやないのか、つて思つたんだ。

自惚れか、ただのナルシストか。それだつたら良かつたのに。

俺なんかを、好きになっちゃって……！

「結姫……」

けど。

俺は、逃げてたんだ。

皆の気持ちに気付いていないフリをして、正面からぶつかるのから逃げてた。なのに……。

結姫は、俺の為に、怒ってくれてる。実の親に、反抗してくれてる。

「結姫」

俺は結姫の肩に手を置いて、一步前に出る。

「確かに俺は、顔が良い訳でも、デュエルモンスターZが特別強い、という訳では有りません。特徴といえば、伝説のカードを使つたり、シンク口やエクシーズ召喚を行うところでしょうか」

そんな事を知らない一般のお客さんがざわわつくのを尻目に、俺は

結姫の家族を一人ずつ順番に見つめていく。

その最後。

結姫の父……咲之宮家のトップの眼を、真っ直ぐに見据える。

「けれども俺は、結姫さんの……結姫の大変な友達です。彼女が困つていれば助けるし、笑つていれば一緒に笑います」

「燈夜さん……」

逃げちゃ、駄目なんだ。
どんな事にも、俺は。

「もしも、第五位の俺なんかでは、娘さんを任せるのが不安だとうのなら……」

いつの間に居たんだろう。

御神が隣に居て、俺のデュエルディスクを手に持っていた。
俺はそれを受け取りながら、左腕に装着する。

「コレで、俺の実力を見極めてください」

燈夜さんの言葉が、胸に響く。

初恋 私はやっぱり、燈夜さんが好きです。

優しくて、明るくて、けれどどこか寂しげで……ドローパンが好

きで、甘い物が好きで、鼻にクるような辛い物は嫌い。

私は、やっぱり。

例え燈夜さんが私じゃない誰かを好きになつたとしても、一緒に

居たいです。

「そつ……良いわ。なら、アタシが試してあげる!」

「つ……？」

声が聞こえたのは後ろからだつた。

振り向くと……。

「ゆ、結羅!」ユウラ

咲之宮結羅……私の妹で、最年少のプロデュエリストとして活躍
している子。

「結姫、あの子は……?」

「……私の、妹です

「妹、つて言つと……プロデュエリストの?」

こく、と私は頷く。

燈夜さんが、結羅とデュエル……いへら燈夜さんとは言え、プロ
のデュエリストでは……。

「結姫

「燈夜さん

「……俺を、信じてくれ

「……」

「…………はい」

燈夜さんが信じて、と言つのなら、私は信じる以外の選択肢なんて有りません。

「　　デュエルッ！！！」

お客様の全員が全員、そのデュエルに注目している。有名なプロデュエリスト、咲之宮結羅のデュエルを生で見られるのだから当然と言えば当然なかもしれない。

勿論、慧さんや凜那さん……お父様やお母様も、そのデュエルを静かに見据えていた。

「アタシの先攻よ、ドローッ！　アタシは魔法カード、『E・エマージョンシー・コール』を発動！　デッキから『E・HERO エアーマン』を召喚！」

「HEROデッキ…………！？」

「エアーマンの効果を発動するわ！　サーチ効果により、アタシは『E・HERO オーシャン』を手札に加える。カードを一枚伏せて、ターンtrandよ」

そう、結羅のデッキはE・HERO……何度も融合し、相手を追い詰めるデッキ。

燈夜さんの話では、遊戯王GXという漫画、及びアニメの主人公がE・HEROを使っているらしいです。

「俺のターン、ドローっ！…………あ

今初めて手札を確認した燈夜さんが、呆けた声を上げました。
どうしたんでしょう？

「……で、」

で？

「デッキ間違えたーッ！！」

え、えええつ！？

「ぶ、ドラマジデッキじゃないのか……くう、仕方ない。このままやるしかないか。俺は『テラ・フォーミング』を発動！ デッキからフィールド魔法、『フューチャー・ヴィジョン』を手札に加える！」

『フューチャー・ヴィジョン』……？

効果は知っていますけど、燈夜さんが使うのは初めて見ます。一体どんなデッキなのでしょう？

「『フューチャー・ヴィジョン』発動！ 自分、または相手が通常召喚に成功した時、そのモンスターは次の自分のスタンバイフェイズまでゲームから除外される！」

「つ……厄介ね」

「『フォーチュンレディ・ライティー』を召喚！」

フォーチュンレディ！

しかし、本当に燈夜さんは魔法使いが好きですね。新たな好み、発見です。

「ヴィジョンの効果により、ライティーは除外される。その時、ライティーの効果を発動！ カードの効果により場を離れた時、デッキからフォーチュンレディを特殊召喚する事が出来る！ 来い、『フォーチュンレディ・アーシー』！」

地属性のフォーチュンレディ、ですね。

フォーチュンレディはLVによって攻撃力と守備力が増減するモンスター。アーシーは確か、LV×400ポイントでしたから……。攻撃力は、2400です。

「バトル！ アーシーでエアーマンを攻撃！」

「つ……！」

結羅 LP 4 0 0 0 3 4 0 0 .

「ここの時、リバースカードオープン！ 『ヒーロー・シグナル』！ E・HEROが戦闘によつて破壊され墓地に送られた時、デッキからE・HEROを特殊召喚出来るわ！ 『E・HERO フォレストマン』を守備表示で特殊召喚よ！」
「くう……次のターン、融合されるかもな……俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

結羅の手札にはオーシャンが居るのは分かつています。そしてスタンバイフェイズ、フォレストマンの効果で融合が手札に加わる……。

となると、結羅は少なくとも氷のHEROと大地のHEROは出す事が出来る、という事になります。

「アタシのターン、ドロー！ スタンバイフェイズ、フォレストマンの効果でデッキから『融合』を手札に加えるわ！ ……『融合』

発動！ 場のフォレストマンと、手札の《E・HERO ザ・ヒート》を融合！ 融合召喚、《E・HERO ノヴァマスター》！

「そ、そっちか！」

火炎のHERO、ノヴァマスター。大地でも氷でも無かつたのは予想外だったのか、燈夜さんの顔が驚愕に染まる。

「さらに《E・HERO オーシャン》を召喚！ このカードはヴィジョンによつて除外されるわね。安全だわ、ありがとう」「……どういたしましてっ」

「维い、ヴィジョンを利用されちゃいました……。

オーシャンは自分のスタンバイフェイズ、墓地のHEROを回収出来るモンスター。戦闘破壊される心配は無くなつたので、結羅が笑みを浮かべた。

「バトル！ ノヴァマスターでアーシーにアタック！」
「つ……」

燈夜 L P 4 0 0 0 0 3 8 0 0 .

「ノヴァマスターがモンスターを戦闘破壊したら、一枚ドロー出来るわ。カードを一枚伏せて、ターン終了よ」

「まだだぜ！ エンドフェイズ時、俺はこのカードを発動する……！」

一枚の伏せカードが、オープンする。

「《フォーチュン・インハーリット》ツ……」

デュエルはまだ、始まつたばかりでした。

「それは違いますっー」（後書き）

『デュエルは途中で止めました。残りは次回（笑）

しかし、アレですね。結姫の妹、結羅ちゃん……なんか、大人びてる？

確か設定年齢は12歳程度だつた気がする……あれか、姉（結姫以外）の影響か。そういうことにしておこう。

感想、評価等お待ちしております！

「結羅ちゃんは、お姉ちゃんの事、好き?」

『フォーチュン・インハーリット』。

「フォーチュンレディが破壊されたターンに発動可能の、通常属性カードだ。

効果を知らないのか、結姫の妹……結羅ちゃんは眉を潜めていた。

「このカードはフォーチュンレディと名の付いたモンスターが破壊されたターンに発動出来る。次の俺のスタンバイフェイズ、手札からフォーチュンレディと名の付いたモンスターを2枚まで特殊召喚することが出来る」

「……へえ。良いわ。アタシはこのままエンドよ」

「俺のターン、ドロー！」

手札を確認する。

これは……？

「スタンバイフェイズ、ライティーが帰還！ そしてインハーリットの効果により」

手札のフォーチュンレディは3体。

その中の炎のフォーチュンレディは出して意味は無い……と、すれば、だ。

「俺は手札より、『フォーチュンレディ・ウォーテリー』を2体特殊召喚する！」

「水のフォーチュンレディ……？」

「ああ。このカードは、フォーチュンレディが表側表示で存在する

時に特殊召喚に成功した場合、カードを2枚ドローする！　俺はウ
オーテリー2体の効果により、4枚ドローする！」

「4……つー？」

一気に手札が肥えた。

……ドラマジと違つて、手札が潤沢してくれるのはフォーチュン
レディの良いところであり、悔しいところだな。閑話休題、今はそ
んな事考えている暇は無いな。

「さらにスタンバイフェイズ、場のフォーチュンレディ達はレヴガ
上がる。メインフェイズ、魔法力ード、《ワーム・ホール》！　俺
の場のモンスターを1体、次の俺のスタンバイフェイズまでゲーム
から除外する！　対象はライティー！」

「つ……！？」

「そして、ライティーが“効果”によりフィールドを離れた為、効
果を発動！　来い、《フォーチュンレディ・ファイリー》！」

今度は炎のフォーチュンレディだ。

「コイツは、強力だぜ？」

「ファイリーの効果を発動！　このカードがフォーチュンレディと
名の付いたモンスターによつて、表側攻撃表示で特殊召喚に成功し
た時、相手の表側表示モンスターを1体破壊し、その攻撃力分のダ
メージを相手に与える！」

「なつ……！？　それじゃ、《破壊輪》と同じじゃない！」

「ああ。《破壊輪》と違うのは、俺はダメージを喰らわないところ
だな　俺はファイリーの効果で、《E・HERO　ノヴァマスター》
を破壊する！」

「つ……ちつ！」

結羅 L P 3400 800 .

後ファイリー1体でも倒せるライフポイント。

「バトル！ ウォーテリーで、プレイヤーにダイレクトアタック！」
「通さないわ！ リバース罠、《和睦の使者》！ このターン、アタシが受けるダメージは0だ！」

「くつ……！」

この世界では、《和睦の使者》や《ガード・ブロック》の採用率が比較的高い。

俺の考えだけど、理由としては、やっぱりライフポイントが400と少ないからだろう。

地球なら8000だから、別に入れなくて生き残る確立は高かつた。少なくともこの世界よりは、格段に。

俺ももしかしたら、ライフが4000と考えると採用してしまうかもしれない。

…………… 売つちまつたけど。

「俺はカードを3枚伏せて、ターン終了だ」

「……………アタシのターン……………」

結羅ちゃんの手が、震えていた。それこそ遠目から見ても分かるくちこには。

『成る程、のう……。どうする、新たな主人？ 咲之宮家の娘の為に、このデュエル始めたのは自分でも分かっておらつ？』

脳内に響く、女性の甲高い声。どこか近くに聞こんだりスマーハード

やマナが何も言わないのを見ると、この声には気が付いていないんだ
わ。」

俺は心中だけで返事をする。

(ああ)

『しかし、あの末っ子も子供……フレッシュシャーに押し潰されそうになつて居るわ?』

……。

周囲の視線はまだ、慣れたものだらう。仮にもプロデューリスト、
視線なんていつも浴びっぱなしだらう。

しかし 多分、彼女を縛り付けているのは父親の眼差しだ。

結姫を遠ざけたくらいだ。一番年下とは言え、何をするか分から
ない。

『さて、どうするのかのう……?』

……。

良し。

「結羅けやん!」

「つ……な、何よ?」

「そついえば、まだ血口紹介して無かったよね? 俺は一ノ瀬燈夜。

結姫とは、いつも仲良くして貰つてる

「…………咲之宮、結羅よ!」

しかし、なんか口調が鋭いな。見たところ一、二、三歳くらいなのに……結姫とは、やつぱり環境の違うか。

「結羅ちゃんは、お姉ちゃんの事、好き?」「え……?」

「と、燈夜さん?」

「……櫻都町で俺を見た時、結羅ちゃん、結構俺を敵視してたよね?」

沈黙。

もし……俺の考えが正しければ、だけだ。

「そして今回も。ただ俺とデュエルしたかった、なんて理由じゃないよね……姉、結姫を、取られる気がしたの?」

「……! アタシは……!」

「大丈夫だよ」

大丈夫。

「結姫は、君の傍から居なくならないから

「ツ……!」

結羅ちゃんが、結姫を見つめる。暫し、視線が絡み合つ。

「……そつか……そうだよね……だって、アタシのお姉ちゃんだもんね」

顔に笑みが浮かぶ。

プレッシャーなんて無かつたように、その姿は自然体だった。それこそ、結姫の母親があらまあ、と眼を細め、上の姉2人が驚き、

父親が暫く呆けてしまつてゐるには。

『お前も、罪な男よの』

(……さて、ね)

俺は、負けたかな？

「アタシのター……ドロー！　スタンバイフェイズ、《フューチャー・ヴィジョン》で除外されていたオーシャンが帰還して、効果を発動！　アタシは墓地の《E・HERO エアーマン》を手札に加えるわ！　そして、《大嵐》…」

「げつ……ー？」

まだ《運命湾曲》とか引いてねえよつ！？

「チヨーン！　《強制脱出装置》！　対象はオーシャンで、そりゃチヨーン！　《亜空間物質転送装置》！　ウォーテリーをゲームから除外しておく！」

そこでチヨーンは終了。オーシャンは手札に戻り、《フューチャー・ヴィジョン》と《死靈の巣》を巻き込んで《大嵐》の処理は終了。

「《E・HERO エアーマン》を召喚して、サーチ効果を発動！　デッキから《E・HERO プリズマー》を持つてくる。魔法力ード《融合》！　場のエアーマンと手札の《E・HERO オーシャン》を融合！　来て、《E・HERO アブソルートZero》！」

「来たか……」

氷のHERO……一番厄介で、且つ俺が一番好きなHEROだ。HEROの中でトップを誇っているのは、アブソとネオスが同率だつたりする。

「《融合回収》！」墓地の《融合》と《E・HERO オーシャン》を手札に戻すわ。そして再び《融合》！ 場に居るアブソルートと手札のプリズマーを融合して、再びアブソルートZeroを融合召喚！

「そして、フィールドの離れたアブソルートZeroの効果で俺のモンスターは全破壊、か……」

「そうこうのこと」

やれやれ……デュエルで力を証明するとか言いながら、

「魔法カード……《ミラクル・フェュージョン》！」

負けちまつたら、意味無いじゃんか。

「墓地の《E・HERO ハーマン》と《E・HERO プリズマー》を除外し、融合！ 《E・HERO The シャイニング》《-》」

《E・HERO The シャイニング》ATK2600 32

00 .

「バトルよ！ The シャイニングでダイレクトアタック！」

おっと、シャイニングからアタックしてきたのか。

燈夜 L P 3 8 0 0 6 0 0 .

トアタック！ 瞬間氷結 (Freezing at once)
コト！ 「うわああああつー」

「うわああああつー」
寒ッ……！」

前の通り、絶対零度の攻撃を受けて、俺のライフポイントは0を示した。

負けた、か。

はあ、と俺が肩を落としていると、結羅ちゃんが俺の元へ歩いてきていた。

その顔はとても清々しい。それは多分、“勝利”とこう一文字が全てではないんだろう。

「ありがとつ、燈夜お兄ちゃん
「す……つ？」

お兄ちゃんつ？

萌える、なんて言っている暇も余裕も無い。ただただ驚いて、俺は呆けてしまっていた。

「あたしね……確かに、お姉ちゃんが取られちゃったんじゃないかな、つて不安だったの」

あれ……誰、この子。別人？

「上のお姉ちゃんたちはいつも仕事ばっかりで……あたし、いつも結姫お姉ちゃんの後ろをくつ付いてばかりだった」

親は、仕事で。姉も、仕事で。

結羅ちゃんの傍に居てあげられた家族は、結姫だけだった。

だから、居なくなるのが怖かったんだ。

「けど……違ったんだね。例え結姫お姉ちゃんが別の場所で住むようになっちゃっても、アカデミアに通いだしても……結姫お姉ちゃんは、結姫お姉ちゃんなんだね」

「……そうだよ。君にとって、代わりなんて居ない……たった1人の、“咲之宮結姫”という姉だから。心配しなくて良いんだよ」

そう言って、俺は結羅ちゃんの頭を撫でた。

少し驚いたように眼を見開いた結羅ちゃんだけど、頬を赤く染めて、嬉しそうに顔を緩めた。

「…………そうだろ、結姫？」
「…………燈夜さん」

いつの間にか、俺たちの傍に結姫が……いや、結姫だけじゃない。咲之宮家大集合だ。

「…………俺は、力を証明出来ませんでした。すみません」

「…………ふん。確かに前は結羅に負けた。だが」

「貴方はどうやら、ちゃんと結姫を……会つて間もない結羅の」
も、見てくれていたようですし」

「まあ……良いんじゃない？ テュエルしてゐる時は、ちよつと……
ちよつと、格好良かつたし」

「お姉様、顔が赤いわよ」

「う、うるさい！」

…………どうやら、多少は認めてくれたようだ。結果オーライだな。

後は、家族水入らず……俺は喫茶店のオーナー（役）として、1
つ咳払いをして頭を下げた。

「どうぞ、この喫茶にてお寛ぎを。幸福な時間を、貴方に」

休憩時間。

俺は寮裏に廻つて、壁に寄りかかりながらふう、と息を吐いた。
煙草でも吸つていたら様になつていただろうか、なんて変な事を
考へてしまふ。

『マスター……大丈夫？』

「ああ……うん、大丈夫だよ」

多分。

精霊化しているマナが実体化して、俺の隣に腰掛ける。そして俺の肩に頭を乗せる形で寄りかかってきた。

軽めの重力感が俺に圧し掛かる。

普通の人間と大差ないような暖かい温もり。静かな時間。柔らかな一時。

「俺……また、負けたんだよな」

「……マスター……」

「俺……また、また……ツ！」

負けた。

この世界に来て、俺は負けばかりを味わっている。

アカデミアに来て……慧の『聖なるバリア・ミラー・フォース』

然り、基の『激流葬』然り、幸仁の『死者蘇生』然り……今回然り。

その他、この世界に来て何回もデュエルした。

いつものメンバーの中でも、御神以外とは全員デュエルをした。

けれど。

「俺……弱いなあ」

零の『セイクリッド・ブレアデス』のバウンスに勝てず。

姉さんの『ヴェルズ・バハムート』のコントロール奪取にやられ。

結姫の『椿姫ティタニアル』の制圧力に負けて。

凜那の『アルカナ・ナイトジョーカー』のパワーに押されて。

リリアの『ネフテイスの鳳凰神』で成す術も無く終わり。

ソフィアの『堕天使ゼラート』による効果により、ワンターンキ

ル。

志藤の『ホーリーナイト神聖騎士パーシアス』に圧倒された。

「つ……」

「マスター……！」

涙が、出て來た。

もう、俺は18歳だつて言つのに……何、泣いてンだよ、俺？

膝を置んで、俺はその間に顔を挟んだ。

俺の精靈だとは言え、余り泣き顔は見られたくない。

まだ、俺は子供なんだ。

カードゲームで負けて、泣いてしまう子供。

ガキ

「俺…………つー…………旨を…………ツ」

守れないんだなあ…………！

涙が、折角の衣装を濡らしていく……。

「結羅ちゃんは、お姉ちゃんの事、好き?」（後書き）

いえーい、結羅ちゃんフラグ立てたぜー。
これはヒロイン増加かーつ？

私の馬と鹿。ただでさえやバイ人数のヒロインなのに、そろそろ把握し切れませんで。私と読者様が、いやしかし、元々見切り発車で投稿始めた小説だから別に云々。

てか、この小説……メインの小説のPV超えちゃつたつ！？ 馬鹿な、まだ1ヶ月も過ぎてないのに！

燈夜の涙。悔しが、辛さ。

共感出来る人、出来ない人、それぞれだと思います。
妹を、姉を、友達を守りたい。なのに、自分が弱いせいで守れない。
それどころか、自分は“守られてしまつ”。
それに、燈夜は涙を流しました。

これから彼は、どんな道を歩むのか……自分でも分かりません（笑）

感想、評価等してくださりお願いします（切実）

「成る程。お前が第五位の落ち零れか

「彰正先生、良く仮面外さないで料理出来るよな……」「……ああ」

メンバーが交代して、俺は基とそんな事を話した。

『古代の機械騎士』のコスプレをしている彰正先生だが、流石に料理をする時は仮面を外して視界を広げるんじゃないか、と思つていた俺だが……。

まさか、外さないなんてな。流石、御神の次に完璧超人の彰正先生。

「つと、んな事言つてる場合じゃないな。基、6番席にこれとこれ
を頼んだ」「はいよ」「志藤！ それ以上やると焦げる！」「つ……」

今回のキッチン担当は俺、彰正先生、志藤だ。

雪と姉さん……特に姉さんにキッチンを任せると、それこそ大惨
事。喫茶店を続けられなくなってしまう。

結姫は、流石お嬢様。料理なんてした事がないといつ。

志藤は結構飲み込みが早く、練習したら一部の料理は作れるようになつっていた。だから、その一部の料理は全部任せている。

「……兄さん」

「ん……どうした、雪？」

昼時も過ぎ、何とか一段落付いたところで、外から雪がやつて来

た。

俺は手を洗つて、タオルで汗を拭きながら零の方へ向かい直る。

「大丈夫ですか？」

「……？　ああ、これくらいのスピードなら、まだ食材は

「兄さんが、です」

俺？

「俺はまあ、結構楽しんでるし。そりや疲れるけど……その分、遣

り甲斐あるよな」

「眼、赤いです」

「ツ……！」

大丈夫か、って“その事”だったのか。

少し前、俺が休憩中……マナの前でだらしなく泣いてしまった。涙の痕とかは顔を洗つて取つたけれど、眼の充血は無くなつていなかつたのだろうか？

「……大丈夫だ。俺はそんな、柔じやないぞ」「……………そうですか」

そう言って、外へ戻つて行く。

……まさか、気付かれてたなんてな。俺ももうちょっと氣をつけないと。

なんて決意をしていたら、今度は姉さんがこっちに来た。

「燈夜ちゃん、疲れた！」

「ええい、我わがまま伝言がないつ！　そして引っ付かない！」

ペいつ、と姉さんを引っ張がしながら俺は溜め息を吐いた。

姉さんの台詞も、本気じゃないという事は分かつてゐる。いや、疲れたのは本当だらうケド、だからと言つてサボりに食堂へ来たわけじゃない。

多分……気分転換に俺に会いに来ただけだろ。

「燈夜ちゃん……キスしよ～？」

「しません」

「え～、どうして～？」

「どうしても何も有りません。俺たちは弟姉でしょ～が」

「…………？」

……本氣で分からな～って顔された。解せぬ。

「常識的に考えてみなよ。弟姉って事はつまり血の繋がりがあるつて事だぞ？」

「常識的～？　じゃあ、キスしても大丈夫だね～？」

「どういつも常識を浮かべたんだつ～！」

「…………恋する乙女の常識…………」

「志藤が答えるのか！？　そして姉さんは頷かないー！」

全く……。

それに俺が言つと随分と酷い奴に聞こえるけど、まだ随分思いなんだから。恋人同士といつ前提があるならまだしも……。

その後、結姫が貰ってきた注文の料理を俺は作りにキッチンへ戻つていった。

「…………ふはっ！」

水うめー。

コップ一杯分を一気に飲み干した俺は、疲労で身体が凝り固まつてきた身体をほぐす為、大きく伸びをした。

うは、気持ち良ーー…………まだ5時間しか経っていないとい、俺の身体も弱くなつたものだな、うん。

「…………ないつーー！」

「…………ん？」

叫び声？ とこりうよつは怒鳴り声だろつか？
外がなにやらざわついてこる。揉め事だろつか？ だとしたら、俺の出番つてことになるけど……。

「燈夜ーー！」

「基？」

外で密寄せ、もといホールをしていた基が妙に慌てた様子でやつてきた。

「うん？」

「どうしたんだ……うおっ！？」
「まひ、お前の出番だぜ……！」
「ちよ、押すなって……ーーうわっ！？」

地面とのキス。あれ、キスってこんな味したっけか……あはは、不味いぜ。

つか、それより鼻が痛い……鼻血出たんじゃね？…………良かつた、出てない。

「私がまだ第三位なのは、ただ単に私の力不足……！ それは疑いようの無い事実！ だが、友は関係ない！」

「そうか？ 聞いたところによると、今お前の傍に居る中に、第五位の存在が居るというが？」

「それは……！」

……？

起き上がりつて、土埃を払つ。

さつきの怒鳴り声……凛那だったのか。12番席に座る男性に大声を張り上げながら、凛那は怒りに肩を震わせていた。

後ろを振り向くと、基がぐつ！ とサムズアップ。なんで俺やねん。

ん。

なんて聞こうとして、結姫が俺の傍に来た。

「私が頼んだんです」

「うん……？」

「仲裁役は、燈夜さんに任せましょつて」

……Why?

「私は……いいえ、私と結羅は燈夜さんに助けられたんです。いつもあくしゃくした空間が、今日は和やかなのも、燈夜さんのおかげですし」

面白い事に、咲之宮家家族は、未だに3番席で楽しんでる。勿論結羅ちゃんも一緒にだ。

理由としては、結姫を含めた家族全員で文化祭を廻りたいからだとこゝ。今は結姫のシフトだから、それが終わるまでずっと居るらしい。

……20分、「俺が呼ばれるのだけは、」勘弁願いたかったんだけどな。

閑話休題。

「だから今回も、俺に行けど?」

未だに言い争いしている御園親子を指差す。なんか、周りのお客様も引いてるつてば……。出来れば俺もお近付きになりたくない雰囲気……。

「はい」

「…………良い笑顔だね。逝つて来ます」

結羅ちゃん、頑張つてとか言いながら手振らないで。結姫のお父様、威圧感込めて俺を睨まないで下さい。

……やれやれ、だ。

……。

「どうか為さりましたか、お客様方?」

今は凛那も客だからな。

「つ……燈夜」

「……誰だ？」

「わたくし 私めはこの喫茶店のオーナーをさせて頂いている、一ノ瀬燈夜と申します。何か揉め事のようですが、何か 成る程。お前が第五位の落ち零れか」

言葉を遮らないで欲しかった。渾身の演技げふんげふん。渾身の格好良い姿と台詞だったのに。

「やはり、落ち零れの傍に居るという話は本当のようだつたな……」

凛那

「つ……！ 燈夜は落ち零れなどでは

「凛那」

今度は逆に俺が、凛那の台詞を止める。

そして凛那の前に出て、俺は椅子に座っている男性と対峙した。結姫の父親とは別の威圧感。

そういえばこの人も、エキシビジョンデュエルの時に居たつけな。確か……道場？ だか教育場とかいう場所をやっているらしい。かなり有名らしいから、余程名を知られているんだろう。

だからこそ、多分。

俺のような、第五位という底辺に居るという人間が嫌いで、そして一向に上の階級へ上がれない凛那へも怒りを持つてているのだろう、と俺は推測した。

「貴方は、このアカデミアのレベルの高さを」存知でしょうか？」

「ああ。俺もかつてはこの学園の第一位へとのし上がった男。このアカデミアのレベルの高さを買って、凛那を通わせているのだからな」

「そうですか　しかしそれは、数十年前のお話では？」「……何が言いたい？」

「ふう、良かつた。ビルやセントラル星のようだ。

「あの時よりも、さらにレベルが高くなっているとしたら……
凛那を怒る資格、御座いませんよね？」

「…………」

「誰か一人、この場に連れてきてください。別に貴方でも宜しいですよ。そして俺とデュエルしましょう！」

「何？」

「燈夜つ？」

これは、俺が俺に与える試練である。

俺は、負けてばかりで……このままじや守りたい存在も守れない。

そんなのは……“嫌だ”。
だから。

「もし俺が勝ったのなら、凛那はレベルの高いアカデミアの中で頑張つているのだと、認めてあげてください」

「……もし、お前が負けたらどうする？」

「だから……！」

「俺が負けた時は、このアカデミアを出て行きますよ
「なつ……！？」

だから俺は、敗北した時、自分に罰を与える。

ざわめきが起る。それは凛那や凛那の父親だけでは無く、遠目に見ていたお寄、咲之宮家家族……そして、俺の学友たちにも及んでいた。

「な、何を言つてゐる！？ これは御園家、私たちの問題だ！ 何故お前が退学する必要があるんだつ！？」

「どうしますか？」

「燈夜ッ！－！」

凛那の事は無視して、父親の瞳を真っ直ぐに見据える。

これは、決意だ。

生半可な罰じや、彼は動いてくれないだろつ。仮にも教育場とやらを経営している敏腕。様々な人間の瞳を見てきただろつ。

「こゝで、自分に甘くじちや駄目なんだ。

「…………良いだろつ。しかし、手加減はしない…………俺のところに居る、一番強い者を連れてくるが、良いか？」

「父様つ！？」

「望むところですね」

「燈夜……！ 何故……ッ」

悪いな、凛那。

俺は、お前を利用してるんだ。

「これで勝てなきや、俺は世界はおろか、お前らを守る事をえ出来ない……それなら、俺は居ない方がマシだ。」

その場合、皆の気持ちを裏切る形になるけれど そもそも、凛那や他の皆みた的な綺麗な子達は、もつと相応しい人が居るはずだ。この覚悟に押し負けるくらいじや、俺は駄目なんだ。絶対に。

「一刻ほど待て。今から呼ぶ」

（音）

喫茶店は、一時休業になっていた。

それでも、何故か客は増えていく一方。その1人1人には一応、料理は出せないけれど水は差し出している。

その中、私、御園凜那を含めた喫茶店運営をしている全員が集合していた。

「燈夜……どうしてそんな事言つたの？」

「そんな事つて……なんだ？」

「惚けんじやねエよ！ アカデミアを出て行くがどうとかだッ！」

「ああ、それね。大丈夫だつて、俺が負けなきや良いんだろ？」

そう言つて、飄々としている当事者。
その姿は、まるでいつものと変わらない。

「…………一ノ瀬君…………」

「んな心配そうにするなつて、な？」

「兄さん……兄さんが出て行く時は、私も一緒ですか？」

「あたしもよ～」

「……俺が負けること前提になつてないか？」

それはそれで悲しい、と燈夜は溜め息を零した。

「燈夜お兄ちゃん！」

「ん……結羅ちゃん？」

「結羅？」

結姫の妹だという女の子が近付いて来る。この子、確かプロデュエリストじゃなかつたか……？ いやしかし、雰囲気が違います。同姓同名、だろうか？

「お父さんから伝言だよ。『そつなつたら咲之宮グループで雇つてやる』だって」

「なんで皆負ける」と前提なんスか！？

「……しかし、御園ヴェーベルと言えば、有名だぜ？」

「ヴェーベ……？ 教育場だかつて、そんな名前なんだ」

御園ヴェーベル……父が設立し、早12年。プロデュエリストを輩出した人数は既に3桁を超え、今や世界的にも有名な教育場だ。そんな教育場で、父様は一番強い人間を連れてくると言つ。

「正直、勝てる見込みが見当たりませんわ」

「はつきり言われて傷付きました……」

「……燈夜は強い。俺は心配などしては居ないがな」

「俺の味方は幸仁だけだよ！」

「僕も信じてるよ、燈夜君」

「あ、御神は良いです」

私の、所為か……。

もしも……もしも負けたら、私の所為で燈夜が……ツ！

「安心じりよ、凜那

どくん、と。

真つ直ぐに私を見つめる燈夜に、鼓動が高鳴る。

「お前を縛る糸は、解いてやるからよ」

もうすぐ、一刻が過ぎる。。

「成る程。お前が第五位の落ち零れか」（後書き）

自己犠牲精神が激しい主人公、一ノ瀬燈夜でした（笑）！
この辺は晃と同じですねー。

しかし自分の小説を読み返したら、私は思った。

「燈夜……実際、負けてばかりじゃね WWW？」

まともに勝つたのが結姫を襲った暴漢という……………これはヤガマ
イ、うん。

とは言え、この凛那の為のデュエルで勝つか負けるかは、未来の私
に寄ります（爆）

感想、評価等お待ちしておりますね～！

『甘えるのかの?』

船に乗つて来てくれたのは、男性だった。
どこか高圧的な視線を持つ、第一印象はそれ程良くない男。しかし、態々連れてきたんだし実力は確かなんだろう。
俺はふう、と息を吐く。

「先程の言葉、忘れないな？」

「貴方こそや」

位置について、デイスクを開ける。
デッキを装着して、数秒眼を閉じた。

『さて……どうなるかの、一ノ瀬燈夜?』

俺にしか聞こえない、女性の声が俺に問い合わせる。
俺はそれに答えず、ゆっくりと瞼を上げた。

「態々僕が呼ばれるとはね。先生の気紛れにも困つたものだ」「それは悪かつたな」

「本當だよ。第五位という底辺に位置する人間とデュエルしなければならないなんて……しかし、やるからには勝たせて貰おうか」「そう簡単に行くと思うなよ?」

周囲には、それこそかなりの人だかりがある。下手をすると結羅ちゃんなどデュエルした時よりも多い。

俺は腰に取り付けてあつた剣を取り出して、地面に突き刺す。

「僕の名前は風科雄斗! 未来のデュエルキングだ、覚えて置くが

かざしなコウト

良い！」

「上等だ！俺は一ノ瀬燈夜だぜ！」

「「デュエルッ！！」」

「先攻は俺、ドロー！俺はフィールド魔法、《魔法都市エンディミオン》を発動！」

俺と風科……観客全員を巻き込んで、魔法都市が建つ。

「《テラ・フォーミング》！ デッキから2枚目 The エンディミオンを持つてくる！」この時、魔法を使つた為、エンディミオンに魔力カウンターが1つ乗る！

《魔法都市エンディミオン》魔力カウンター 0 1 .

「《魔力掌握》！ 対象はエンディミオン！ 効果により、魔力カウンターが1つ乗るぜ！ さらにデッキから同名カードを手札に加える事が出来る！ 効果適用後、エンディミオンにカウンターが乗る！」

《魔法都市エンティミオン》魔力カウンター 1 2 3 .

「《おろかな埋葬》！ テックから《神聖魔導王エンティミオン》を墓地へ送る！」

《魔法都市エンティミオン》魔力カウンター 3 4 .

「そして、《黒魔力の精製者》を召喚！ 効果を発動！ このカードを守備表示に変更し、エンティミオンに魔力カウンターを1つ乗

せるー！」

『魔法都市エンディミオン』 魔力カウンター 4 5 .

「へえ。このターンで一気に5つまで乗せたか。第五位にしては、良くやる方ってところか」

「お褒めに預かり光榮だ。俺はカードを一枚伏せて、ターンエンド「僕のターン、ドロー」

さて……風呂はどうなデッキを使う？

俺は緊張で息が詰まるのを感じる。このデュエルに負けたら退学、とか宣言したんだ、仕方が無い。

「僕は『ジェネクス・ウンディーネ』を召喚。このカードが召喚に成功した時、デッキから水属性モンスターを墓地へ送り、『ジェネクス・コントローラー』を手札に加える……僕が墓地に落とすのは、『黄泉ガエル』だ」

「……ジェネクス、か？…………いや…………」

地球の話だが、一時期、ジェネクス帝というデッキが流行った。と、すれば。

純ジエネクスと考えるのは尚早だ。もしもジェネクス帝だとしたら、帝モンスターの効果によってエンディミオンは除去される可能性が高い。破壊耐性はあっても、除外、バウンス耐性は無いからな

……。

……相性が悪いか？

「僕はカードを一枚伏せて、ターンを終了するよ」

「俺のターン、ドローッ！」

……何にせよ、早めに決着を付けたほうが良さそうだ。

「俺はまず、《マジカル・コンダクター》を召喚！ もうだ《魔力掌握》を発動する！ そして魔法を使った事により、エンティミオンに一つ、《マジカル・コンダクター》には2つ魔力カウンターが乗る！」

《マジカル・コンダクター》 魔力カウンター 0 2 .

《魔法都市エンティミオン》 魔力カウンター 5 6 7 .

「《魔力の精製者》を攻撃表示に変更し、効果を発動！ 守備表示にして、魔力カウンターを乗せる！」

《魔法都市エンティミオン》 魔力カウンター 7 8 .

ライトロードのライラと同じで、《魔力の精製者》は効果で守備表示にする為、表示形式を変更しても効果を発動出来る。
これで8個……！

「魔法都市に乗っている魔力カウンターを6個取り除いて、墓地に存在する《神聖魔導王エンティミオン》を特殊召喚する！」

《魔法都市エンティミオン》 魔力カウンター 8 2 .

魔法都市の王、エンティミオン。このデッキのキーカード！

「エンティミオンがこの方法で特殊召喚に成功した時、墓地の魔法カード……《おろかな埋葬》を手札に戻す！ そして発動！ デッキから《氷結界の風水師》を墓地へ！」

『マジカル・コンダクター』 魔力カウンター 2 4 .

『魔法都市エンティミオン』 魔力カウンター 2 3 .

「『マジカル・コンダクター』の効果を発動！ 1ターンに1度、魔力カウンターを取り除き、その取り除了いた数と同じレベルのモンスターを手札か墓地から特殊召喚することが出来る！ 僕は3つ取り除き、墓地に存在する『氷結界の風水師』を特殊召喚！」

『マジカル・コンダクター』 魔力カウンター 4 1 .

「LV4の『マジカル・コンダクター』にLV3の『氷結界の風水師』をチュー二ング！」

「なっ……それは、まさか……！」

「 魔導の道標よ、至高の光よ！ 今此処に、全てを解き明かし式を並べん！ シンクロ召喚！ 『アーカナイト・マジシャン』ッ！」

攻撃表示！

シンクロ召喚した事により、ざわめきが起こる。アカデミア生徒はもう周知の事実だから良いけれどな。

「このカードのシンクロ召喚に成功した時、魔力カウンターが2つ乗る！ 1つにつき、このカードの攻撃力は1000ポイント上がる！」

『アーカナイト・マジシャン』 魔力カウンター 0 2 · ATK 4

00 2400 .

「リバース罠、《漆黒のパワーストーン》発動！ このカードに魔力カウンターを3つ乗せて、1ターンに一度、魔力カウンターを乗せられるカードに1つ、移し替える事が出来る！」

《漆黒のパワーストーン》 魔力カウンター 0 3 ·

「《漆黒のパワーストーン》のカウンターを1つ、《アーカナイト・マジシャン》へ！」

《漆黒のパワーストーン》 魔力カウンター 3 2 ·

《アーカナイト・マジシャン》 魔力カウンター 2 3 · ATK 2
400 3400 ·

ハア……魔力カウンターの増減が激しくて、頭が痛い。

「《アーカナイト・マジシャン》の効果を発動！ 《漆黒のパワーストーン》に乗っている魔力カウンターを1つ取り除いて、相手のセットカードを破壊する！」

《漆黒のパワーストーン》 魔力カウンター 2 1 ·

「つ……速攻魔法、《エネミー・コントローラー》！ 僕は《ジェネクス・ウンディーネ》をリリースして、《アーカナイト・マジシャン》のコントロールをエンドフェイズまで得る！」

「う……」

アーカナイトの攻撃力は3400 ·

残念ながら、エンディミオンでは倒せない……！ その上、相手の墓地には《黄泉ガエル》が居るのに伏せカードが無くなり、尚且つダメージも与えられない。

…………最悪だ……！

「……俺は、ターン終了する」

『アーカナイト・マジシャン』がこっちのフィールドに帰つくる。

「僕のターン、ドロー……！……ハハ、まだ4ターン目だけど、そろそろ終わりにしようか。折角来たんだし、僕も文化祭、見て廻りたいからね」

そんな…………終わる…………？

「スタンバイフェイズ、『黄泉ガエル』が帰還する。手札から再び、『エネミー・コントローラー』！『黄泉ガエル』をリリースして、またこっちに来て貰おうか、『アーカナイト・マジシャン』？」
「ツ…………！」

「まだスタンバイフェイズだ、『黄泉ガエル』が帰還する。メインフェイズ！」

俺は…………。

「僕は、『黄泉ガエル』をリリースして『風帝ライザー』をアドバанс召喚。効果により、モンスターのエンディミオンにはデッキの一番上へ戻つて貰う」

やつぱつ…………。

「『アーカナイト・マジシャン』の効果を発動。魔力カウンターを1つ取り除き、」

『アーカナイト・マジシャン』魔力カウンター 3 2 · ATK 3
400 2400 ·

「『魔力の精製者』を破壊する」

弱かつたんだ。

「バトルフェイズ 『風帝ライザー』で、ダイレクトアタック」

燈夜 L P 40000 1600 ·

燈夜、と声を上げてくれる皆が居る。

兄さん、とか。

燈夜ちゃん、とか。

一ノ瀬君、とか……。

凛那の声も、涙が混じつて聞こえた。

「『アーカナイト・マジシャン』で……直接攻撃だ」

燈夜 L P 16000 0 ·

幾つかの結果を述べるなり。

まず、凛那は認められた。俺が第五位にしては良い動きをしたから、だという。ライフを1.ポイントも削る事が出来なかつたのにな……親はやはり子供に甘い、ということだらうか。

そして……。

「お前はこのアカデミアを去る、と言つたな」

「……………はー」

「父様！ 別にそこまでしなくても……！」

「俺は別に、お前の退学を強制する気は無い」

「……………え？」

退学しなくても良いって、事か？

「父様……………！」

希望の光が見えて、凛那が笑みを浮かべる。

「……………」

退学は、しなくて良い。

歯の傍に、居て良い……………！」

『甘えるのかの？』

「……………と。」

脳裏に響いた声が、俺の心臓を躍動させた。

『自分が決めた事じゅうつ？ 良いのか、それで。誰かの言葉に、

好意に甘えて……お主は、それで良いのか?』

…………。

良くない。

良い訳が無い。

「…………いいえ」

俺は小さな声で、呟いた。

「俺は、自分で言つたんです。このアカデミアを去る、ヒョウ約束は
破りたく有りません」

「燈夜ツ！？」

「俺は、このアカデミアを、退学します」

そうか、と……凛那の父は、眼を閉じた。

「何を言つているんだ！ 父様は強制しないと言つたんだ！ そん
な簡単に決めていいのかつ！？ お前は……」
「ただ……」

凛那の言葉を遮つて、俺はどうか、力無い笑みを浮かべる。

「明後日の文化祭が終わるまで……で、良いでしょつか？」

「…………ああ」

「…………燈夜ツ！？」

ああ、この後。

皆に、色々言われるんだらうなあ……。

そんな事に内心げんなりしながら、俺は地面に突き立てた剣を取りに行つたのだった。

『甘いのかの?』（後書き）

また……また負けた……ツ！

Q：こんな主人公で大丈夫か？

A：大丈夫じゃない、問題ある。

はい、燈夜の退学決定～！ どんどんぱふぱふ～。祝い事じゃない
？ ですよね。

しかし、実質負けてばかりだなあ……なんでこんな主人公なんだ。
面白（ry

さて、と。

この後の展開、どうしようかなつ（爆）

感想、評価等お待ちしています！

「女性って、怖いな……」

その後、特に何事も無く文化祭の一田田は終了した。

まあ、強いて言えば……俺以外のメンバーが何度もデュエルを挑まれた事くらいだろうか。俺だけ蚊帳の外。解せぬ。俺はそのコスプレデュエルの司会をしたり、観戦者に水を運んだり……そんな事ばかりしていた。

……完全に脇役だな。いや、脇役で良いんだけれど。

てな訳で。

「皆さん、お疲れ様ー！」

しーん……。

あの、えと……皆、元気ないね？ 疲れた？

既に俺たちは衣装を着替え、制服に直っている。

御神と彰正先生はその衣装を洗いに行ってくれていた。明日、明後日と着るんだしな……まあ、あの完璧超人２人ならそこいら辺、問題は無いだろう。

「あのー……どうしたんだ？」

「どうしたも何もねエだろ！」

ひつ！？

なんか久し振りに基が怖いつー！

「退学……ってなンだよ

「まあ、そういう約束しちまつたしなあ……」「なンでそんな約束したのか、オレは訊いてんだッ！」

そ、ソフィアも怖いッス……。
俺は所在無さげに頭を搔いた。

「ん~、勢い？」

「ふざけないで下さい一つ！」

ふざけてないのに……。

「燈夜は、それで良いの？」

「良いも何もなあ……俺が決めた事だし。それに

「それに……なんですか？」

それに、俺が居ても居なくとも、世界は変わらない。

「……なんでも無い。とにかく！ 俺はこのアカデミアを出る。
学費とかはもう全部自分で出したから問題は無いしな」

まあ、本当は卒業までの学費、寮費を一気に払ったからかなり勿体無いんだけど……しかし、約束は約束。破りたくは無い。

俺は目の前にあるお茶を一口飲んで、喉を潤した。

「兄さん、私

「駄目だ。零と姉さんはこのアカデミアに残ってくれ

零の言葉を遮つて、俺はそう伝えた。

これには、俺なりの理由がある。

元々、零と姉さんは俺ばかりに構つてしまつからか、友達が少な

かつた。そんな2人にも、結姫や凜那、リリア、ソフィア……志藤。勿論基や幸仁、慧もそうだ。

沢山の友達が出来た……といつのこと、俺の自分勝手な行動の所為で離れるのは罪悪感が……。

と、俺なりの考えがあつての事だぞ？ うん。
恥ずかしいから口には出さないが。

「燈夜ちゃんはあ……その後、どうするの～？」

「その後？」

……いや、ぶつけやけ考えてないけど。

「取り敢えずは適当に旅するかな。元々結姫に会わなきゃいけないつもりだったし」

「そう、ですの……しかし、それでは……」

「金なら心配ないぞ？ 結構貯金も溜まってるし、旅の途中も多少は働くつもりだからな」

彰正先生、若しくは御神辺りに頼んで、雲と姉さんの口座を作つて貰つつもりだ。ズズメの涙程度になるかもしけないけれど、仕送りもするつもりだし。

俺、なんて家族想いなんだ……！ くう、泣ける。

なんて内心、自画自賛をしながら欠伸を零した。今日は一日中働いたから、疲れたな……。

「……一ノ瀬君……」

「ん？ なんだ、志藤？」

「……また……会える？」

.....。

「ああ、会えるわ。時間が空いたら会いに来るしな」

「……そつ

……きっと、な。

俺はそう内心で呟いて、淡く微笑む。

「…………」これでこの話は終わりな。明日の話をしようぜ」

明日は文化祭2日目。今日よりも多い人数が来るはずだ。

「シフトは、一箇所だけ変更。最初に彰正先生たちのグループで、その後に御神たちだ。今日と同じで3時間毎。それで大丈夫か？」

「ああ、問題は無い」

幸仁の言葉に、皆各自に頷いてくれる。

良し、スマーズだ。俺も早く寝たい……げふんっ。

「じゃあ

「」

「一つ、良いか？」

凛那だ。

「どうした？」

「…………皆に、提案があるんだ」

“あの時”から、凛那は元気が無かつた。だから接客の時もなるべくキッチチンの方で動いてもらつた。

俺の所為……なんだろうな。間違いなく。

「明日は……燈夜を、休ませてやらないか？」

「は……っ？」

何言つてゐんだ、コイツ？

「今日、燈夜はずつと働いていただろつ。キッチンで料理を作り、購買や食堂まで食料を取りに向かい、マナーの悪い客を止めに入り……と」

「そつだね。僕は賛成だよ」

真つ先に賛成したのは、慧だった。

「べ、別にいらねえつて。3田田は喫茶店出来ないんだぞ？　その時に休むから」

「それなら尚更、明日は休んでください、燈夜さん」

3田田は、このアカデミア文化祭最大のイベント、ミスコンがある。

生徒会に頼まれて、第壹校舎一と言つて良い人気を持つこの女性陣がミスコンに参加するらしい。

……今更だけど、美少女ばかり集まつたものだ。類は友を呼ぶ、とはこの事だろうか。

幸仁と基も、美少女じゃ無いけど顔立ちは整つてゐイケメンだし。

……え、俺？　類じや有りませんけど、何か？

「明日一日ぐらいなら、オレたちだけで大丈夫だからよ」

「そうです。兄さんは、残り少ないアカデミア生活を楽しんでください」

「……まあ、退学するという事自体納得している訳では御座こませ

んが……わたくしも、その方が宜しいと思いますわ」

「燈夜ちゃんは～、自分の事を蔑ろにしそうみ～？」

「皆…………」

「ああ、もう……ホント、敵わない。

「……分かったよ。明田は、皆に任せる。それで良いかな?」

「つたりめエだろ！ 僕たちに任せとけっての！」

「いつ言つ時の基は、頼りになるしな。幸仁も口数は少ないけど、リーダーシップあるし。

何より、御神や彰正先生が居るから大丈夫だよな。

なんて考えていると、志藤が俺の顔を真っ直ぐ見つめながら口を開いた。

「……じゃあ……明日……私が働いていない時、『デートしよ……』？」

「ああっ！ ズルイですよ、彩伽さん！」

ズルイ、て。一応、俺はまだ結姫の気持ちは知らない設定なんだけど……。というか、慧以外はそのはず。零と姉さんは例外として……だから、ね？

「……早い者勝ち」

「私も立候補します！」

「わ、私も……つ、罪滅ぼしを、だな」

「やれやれ、ですね。わたくしを差し置いては困ります」

「オ、オレは……（「によ」「によ」）」

「燈夜、僕と一緒に廻らない？ 色々興味があるんだよね
「兄さんは私と行く事が決まっていました。前世から」
「あらあら～。燈夜ちゃん、モテモテね～？ あたしも良いかしら
～？」

「皆落ち着けつてつー！？」

もう何がなんだかっ！？

基と幸仁も、静かにお茶を飲んでるだけじゃなくて止めるよ。
このままじゃ食堂がカオスになるぞ！

それから、少しして。

結論。

「女性って、怖いな…………」

俺は悟りを開いたのだった。

「女性ついで、怖いな…………」（後書き）

はい、今回は短めでした。

燈夜が悟りを開いてしまった……大丈夫か、この主人公。

てなわけで、文化祭第一日目が終了！ 思つたより短くなってしまつたけど、本当に重要なのは2日目と3日目です。いやまあ、退学するといふイベントもこれ以上ないほどに重要なんですけどね。

プロットは作つていなくとも、小説を書いている内に、「あ、次はこうしようかな」という案は脳内で浮かべるもの。
一応、2日目と3日目の大まかな流れは出来上がりました。ふむ、
カオス（笑）

感想、評価等お待ちしております！

「確信犯かよチクショウツー!?」（前書き）

何気に投稿初めて一ヶ月……。
一日更新、まだ続いてます（驚愕ーー）。

「確信犯かよチクショウウツーーー?」

空は、晴天。
心は、曇天。

未来は……雷雨。

「はい、どうぞ」

「……もう一度初めから細かくしつかりとじご説明お願ひしても宜しいでしようか」

「だからあ。明日のミスコン、燈歌ちゃんも登録したから参加してねって事だよ?」

「……じゃあ、それは?」

「明日のミスコンの時の衣装」

訂正します。

未来は……暴風雨だ……ツ!!

「ミスコン、ミスコン、?」

はあ~……齧だ。

文化祭2日目　俺はまず、退屈する暇とアラルバイトを辞める事を伝えように向かった。

間違いない。なのに、俺と顔を合わせてすぐ口を開いたのは、スコンに出場して、とこうお願い。

俺が着替えている姿とかを盗撮して、ひらひらと写真を揺らしながら頼むのはお願ひじゃなくて、脅迫だと思つるのは俺だけじゃないはず。

ちなみに、今の俺の服装は制服だ。ブライダルナイトの衣装は寮に置いて来た。

「あれ……そりゃ、結局一緒に廻るとかってどうなったんだ？」

昨日、いつまでも話しあう（？）が終わらなかつたから、既は帰らせたんだけど。

まあ、良いか。静かで。

なんて考えていると、突然背中から強烈な衝撃が……ツ！

「燈夜お兄ちゃん！」

「あたた……あ、結羅ちゃん」

咲之富結羅ちゃんだ。

結羅ちゃんに向かい合つて、やーっと抱き付いてくる結羅ちゃんの頭を撫でる。

気が付くと、咲之富家の家族が大集合していた。結姫以外。結姫は今頃喫茶店だらつ。

「どうしたの？」

「燈夜お兄ちゃんと一緒に廻りたかったから、探しちゃつた」

えへ、と恥ずかしげに笑う結羅ひやん。可愛い事言つてくれるよ、
結羅ひやんは。

「そつか。どこ行きたい?」

「燈夜お兄ちゃんと一緒に、どこへでも!」

「あはは……」

随分と懐いてくれてる。それは嬉しいんだけど…………。

「…………」

咲之富家トップの殺氣が、凄く肌に刺さるんですね…………それこそ、痛みが具現化されそうなくらいだ。

俺はそれから逃げるように、結羅ひやんの手を引いて歩き始めた。

アカデミアの構造は、日本の学校とは造りが違う。例えば、一つの巨大な教室に全階級の人間が集まるとこか、とか。

だから、このアカデミアで“教室”と呼べる部屋は5部屋のみだ。4年で卒業できるこのアカデミアだからな。一つは予備らしい。

つまり 実質、校舎内には殆ど出し物は無いに等しい。それこそ小さなものがしか無いんだ。

「外行こうか

「うんっ」

確か……第五位は喫茶店で、第四位の寮では演劇。第三位がコスプレ場。そこではお客様を貸して、コスプレをさせる場所らしい。

第一位がお化け屋敷。第一位は皆第五位の手伝いに来てくれてい

るから、何も無しだ。

途中、俺と咲之富家の皆さんはたこ焼きを買って食べながら、個人の出し物が立ち並ぶ道を進んでいた。

「結構美味しいね、このたこ焼き」

「うん。熱くない、結羅ちゃん？」

「少し熱いけど……大丈夫！」

元気だな、結羅ちゃん。第一印象とは大違った。
はふはふ、と熱を冷ましながらたこ焼きを食べる姿に、俺は微笑
めしく見つめる。やういえば零も小さい頃……。

「燈夜お兄ちゃん？」

「え？」

「どうしたの？」

……なんか、変な顔してたかな？

「何でも無いよ……。あ、そろそろ結姫が休憩に入る頃だよ。行つてあげな」

「本当っ！？ 燈夜お兄ちゃんはどうするの？」

「俺は……ちょっと、1人で行きたいところがあるからさ。結羅ちゃんが、結姫を元氣付けてあげて？」

「…………うんっ、分かった！」

元気良く返事をした結羅ちゃんは、手を振りながら俺に背を向ける。それを追いかけるように、咲之富ファミリーも歩き出した。

その時、だった。

結姫や結羅ちゃんの父と母……咲之富グループの社長と社長補佐

をしている2人が、小声で俺に言った。

「……余り、無理はするな」

「つ……！」

「突き詰めすぎると……倒れてしまいますよ」

……あの2人には、お見通しか。敵わないな。

俺は咲之宮ファミリーを見送りながら、残ったたこ焼きを口に含む。

普通に美味しいな、コレ。

それから、少しだけ時間が経った。とは言つても、20分くらいだろうか？

既に第五位の喫茶店は次のシフトに廻っているだろう。結姫は結羅ちゃんと共に楽しく廻っているに違いない。

そんな俺は、第四位の寮の近くまで来ていた。

さつき貰つたパンフによると、後數十分で演劇が始まららしい。最近はともかく、仮にも小説を書いていた身。こういったのは結構興味がある。

安い入場料を払い、チケットを貰つて中に入る。第五位よりは良いけれど、それでも流石第四位。まだまだ廢れていると言えど。俺は幾つか用意されていた席で、一番後ろに腰を掛ける。

……と。

「居た……つ！」

「ん？」

1人の男性が、俺の田の前まで走ってきた。
なんだ？

「お前……ツ、第五位の一ノ瀬燈夜だよなつー。」

「あ……ああ」

「ちょっと来てくれツ！」

「は……ちょ、ちょっとつ！？」

無理矢理連行される俺。 一体なんなんだ。
舞台裏まで拉致され……俺が見たものは。

「し、志藤……？」

「……ん」

志藤彩伽だった。

それだけじゃない。元々フレイヤのコスプレをしていたはずなのに、今は純白のドレスを着ている。それこそ、もうちょっとドレスを変えればウエディングドレスだ。

「え、と……「コレは？」

「……演劇する……私と一ノ瀬君で」

「はあ！？」

演劇？ 僕が！？

「ちよ、ちよっと待てって……説明してくれよ」

「実は…………」

俺を拉致してきた男性の説明によると。

主役である男性は体調を崩してしまった。もう一人の主役である女性は、昨日失恋してしまつたらしく、自室に閉じこもつてしまつたらしい。

その代役が、ミスコンにも出るアカデミア屈指の美少女、志藤彩伽。一度今の時間は空いているから、志藤も条件付きでOKを出したと言つ。

その条件が、

「……俺とやる事?」

「…………」

「……俺と頷かれる。

まさか、俺が巻き込まれるとは……。

「大丈夫……衣装はある」

「そういう問題じゃないよなつー?」

「……台本もある…………」

「憶えられないから!」

「……台詞、出してくれる」

「そんなに俺とやりたいか、お前はつー?」

俺がそう大声を出すと、志藤はあらうことか顔を赤くして俯いてしまう。

「…………あ、はい。」

時間も無いし、拒否権は無いんですね、良く分かります。

「……ストーリーは？」

「ツ……！　一ノ瀬……君？」

「一回だけな。コイツラも困つてゐみたいだし、助けてやるよ

第四位の人たちを指差しながら、俺は溜め息交じりに答える。志藤も、恐らく第四位の人たちが困つていたから演劇をやる決心をしたんだろう。俺が断つても、志藤は諦めないはずだ。感情を表には出さないくせに、内心は凄く熱いんだからな……」イツ。

「これ、台本です」

ある豊かな国の姫君、ミリエル（志藤）。彼女は生まれた時から何不自由無く暮らしてきた、生粋の箱入り娘でした。ある日、ミリエルは外の世界が見たい、と城を抜け出してしまったのです。

そこで出会つたのは、貧困街に住まう1人の少年、コリスト。惹かれ合つ2人。けれども、2人は決して結ばれる事が有りません。

ミリエルとコリストは、一体どんな恋物語を紡ぐのでしょうか。

「成る程ね。つまりはあれが、コリストは俺が演じるって事か？」

「……そう」

やれやれだ。

少しボロい布……もとい、服に着替えた俺は台本を流し読みする。

……その台本の途中、だつた。

「……なあ、志藤」

「…………？」

「……キスシーン、つて書いてる氣がするんだけど……氣のせいだよな？」

「…………ぽつ」

「確信犯かよチクシヨウツー！？」

いや、いや落ち着け一ノ瀬燈夜……これは演劇。フリだ、フリ。数回深呼吸して、再び台本を読みふける。開演まで後少しきないんだ……。

やるからには、本氣を出してやるわ。

『一ノ瀬燈夜ア……？』

『そうだ……。異端者、一ノ瀬燈夜を殺せ。勿論、デュエルモンスターズを用いてだ』

暗闇 あんたん 暗澹あんたん とする空氣まんえん が蔓延まんえん する空間で、低い声が響き渡る。

肌寒さが身体を刺激し、思考能力を低下させる。

舌打ちを零しながら、命令をされた方はわアツたよ、と面倒そうに呴いた。

『命令じや、仕方ねエよなア……ま、久し振りに人間を殺せんなら異端者だろ？がなんだろ？が関係ねエなア……クハツ』

笑いが起ころ。

気持ちが悪いくらいの重厚な晒わらいが、静かな空間を支配した。

『待つてやがれよオ……「ノ瀬燈夜さんよオ……！」』

「確信犯かよチクショウツー！？」（後書き）

……凄い展開だ。無理矢理繋ぐ為にまさか演劇をすることは、私も予想外（笑）

ちなみに、演劇のストーリーは昔、私が書こうとしていた小説のネタです。没ネタですが……（汗）

さて、次の話は遊戯王の一次創作、といつ事実なんて忘れて自由に書こう！（爆）

感想、評価等宜しくお願ひ致します！

「ずっと、一緒に……」

「ああ……貴方は、一体誰なのですか……？」

「僕は、『リストです。君は、もしかして……』」

演劇が始まつて、まだそれほど時間は経っていない。

それと同時に俺の緊張は最高潮だ。幸い、棒読みにはなつていなければ……それでも、いつボロを出すかは分からぬ。

台詞を見る為、何度も舞台裏を見なければならぬ俺……いつかバレるんぢやないか？

「時間です……私は一度、城へ帰らなくてはなりません」

「……また、会えるかな？」

「ええ、勿論です　また」

「うん。じゃあね、ミリール」

一度、ミリール役の志藤は身を引く。
後は、少しの間……俺の独壇場だ。

台詞は確か……。

「君は一国の姫……僕はただの貧民……好きになる事なんて、許されない」

時折横目で舞台裏に出されている台詞を確認しながら、言葉を紡ぐ。

「けれど、楽しかった……凄く、楽しかった。君との短く儂い時間は……」

「こんな台詞、言わせるなよ……ッ！」

逢莉^{アイリ}……………！

自然と、涙が溢れていた。それこそ本当に、観客が「涙……？」と、小さく呟かなければ自分でも気付けないほど、自然に。

「もし……もしも、君が僕の前から居なくなつても、楽しかつた時聞を憶えてくれるのなら、」

憶えていて、くれるのなら。

「俺も……絶対に忘れないから」

「つひさん、と志藤は首を横に振る。

「良かった…………ドキドキした」

「そ、そうか……」

「それはまあ、良かった……のか?

真正面からドキドキした、とか言わると俺もむず痒い感覚に襲われる。

「それにしても、志藤って台詞、全部憶えてるのか?」

「……勿論

「……」
すげえな……志藤も、演劇をやるついでさっさと決めたばかりのはずだ。台本を見たのもその時が初めてだって言つてたのに……。

「次、志藤さんです!」

「……行つて来る」

「ああ」

ドレスの裾を掴まないよう気を付けながら、志藤は舞台へ向かつていった。

俺は台本を見ながら、次のシーンの台詞を流し読みする。流石主役の一人、出番が多い。

とは言え、今は城の舞踏会のシーン。コリストの出番はない。

「つまらない……」

そう言つたのは、舞台上にある豪華そうな（本当に豪華っぽい）のが

凄い）椅子に腰を下ろした志藤だった。

台本によると、これは心の声らしい。その証拠に、舞踏会自体は滞り無く進んでいた。

「私は、何故ここに居るのでしょ?」何も、楽しくない……コリス様は今頃、何をしているのでしょうか?」

普段の志藤とは雰囲気が全く違う。

志藤の表情は、本当に憂いを帯びているように見えた。正直などこか、演技には全く見えない……。

志藤の演技がそれ程上手いのか、それとも?

「コリス様に、会いたい……王族として、想つてはいけないことがのでしようか」

志藤……もとい、ミリエルが何度も求婚される。それをやんわりと断りながら、ミリエルは時折憂いを帯びた溜め息を零す。

その憂いの帶びた表情と吐息に、再び心打たれる男性が多数……といつ、悪循環。

……いやまあ、なんつーか……変にリアルだな、コレ。

志藤の演技が上手いから、特にそう感じてしまう。

それから、特に失敗も無く演劇は進んでいった。

中盤と後半の間くらいの中途半端な場面。俺と、志藤……最大の見せ場がやってきた。

設定場所はコリスが住む貧困街から少し離れた場所にある大きな公園だ。

「コリス、俺は相変わらずのボロい布を着ていて、志藤は真紅のドレスを身に纏っていた。

「コリス様……コリス様は、私のこと、どうお思いですか？」

「僕は、誰よりも、君を想つているよ」

「私もです、コリス様」

用意されていたベンチに腰掛け、静かな空間が場を支配する。

「けれど、それは駄目なんだ。身分が違うから」

「私は、コリス様を愛しておりますよ」

「僕も愛してる。だけれど、僕たちは……住む世界が、違うから」

身分の違い、なんて俺には分からない。そりや、生まれも育ちも日本だつたし、実感なんて沸くはずも無い。

「気持ちだけでは、駄目なのですか？」

「気持ちだけじゃ、どうにもならないんだよ、ミコヒル姫」

「つ……」

次の瞬間、志藤は俺に抱き付いて来た。志藤の華奢な身体が密着する。

あれ、えと、え!?

こんな場面、聞いて無いぞ!? 確か次は志藤が、「そうですか……」と呟き、「ですが」、と繋げるはずだったのに!

舞台裏のカンペを見ると、アドリブで続けて! と書かれていた。んな馬鹿な。

「み、ミコヒル姫……?」

「姫、など……要りません。他人行儀のようではないですか」

やつべ、本当に志藤のアドリブが始まった。こんな台詞知りません。

「私は、コリス様を愛しています……コリス様の為ならば、父も、母も……國も命さえも、投げ捨てる事が出来ます」

「……みつ、える……」

「貴方と一緒にならば、どこへでも行きましょう。友を捨て、居場所を捨て……地の果て、地獄の底へでも行きましょう。貴方の事を……愛していますから」

志藤……お前、まさか、“俺”的ことを？

「ずっと、一緒にです……」

そう言つて、志藤彩伽は、俺に口付けを交わした。

そのストーリーの結末を告げるなら、最後、ミリエルとコリスは駆け落ちをした。

これから先、2人の道程は困難の連續だらう。しかし、2人は手を取り合つて、生きて行く　という結末だった。

「志藤……」

「…………？」

どうしてキスしたんだ……なんて、野暮な質問はしない。まだ心の整理が出来ていない俺がそんな事を訊いたら、オーバーヒートしてしまう。

…………うん、落ち着くまで心の奥底にしまっておこう。

「さつとき語った言葉、もしかして……」

演劇が終わり、俺と志藤はチョコバナナを手に近くのベンチで休んでいた。

しつかし、チョコバナナの他にもリング飴やカキ氷まるで夏祭りだな。

「…………一ノ瀬君に…………言つた」

「…………そつか」

チョコバナナを食べながら、俺は沈黙した。

「…………私を…………」

「え？」

「…………連れて行つて欲しい」

…………。

「さつとき語った言葉…………私の、気持ち…………嘘偽りは無い」

「…………」

「私は…………一ノ瀬君が好き。大好き。愛してる…………一ノ瀬君の為なら…………友達も、要らない…………」

「……その考え方、雪や姉さんに似てるよ。

けどな、志藤。

それじゃ、駄目なんだ。

「志藤」

「……？」

「お前は、このアカデミアに残つて欲しい」

パリツ、と……志藤が食べていたチョコバナナのチョコが割れた。

「ほら、世界の歪みとか、なんか色々起こつてんだろ？ 僕はともかく、志藤は御神に選ばれた“救世主”なんだからな」

「…………救世、主」

「ああ。一方で俺は、御神には選ばれてない。とすれば、他の奴等とは違う俺が情報収集した方が良いだろ？」

正直……世界なんて、どうでも良い。

皆さえ守れれば、俺は世界がどうなつても良い。けれど、世界が壊れるイコール、皆も危険、若しくは死んでしまうって事だ。

誓を守る過程として、世界の歪みとやらも正す。それだけだ。

「ちやんと帰つてくる。会いに来るからや」

「…………約束」

「…………ああ」

志藤が出してきた小指に、俺の小指を重ねる。

「…………嘘吐いたら…………私と結婚……」

「…………しないからなつ……？」

「……チツ

舌打ちされた……。

「……絶対……帰つてくる……」「ア」

志藤がチョコバナナを口に含んで。

パリッ、ヒ……また、割れる音がした。

「ずっと、一緒に……」（後書き）

わーい、志藤彩伽のキスだー。

ふう、落ち着いた。

はい、文化祭編の志藤彩伽でした。

良くもまあ、あそこまで都合よくアドリブが出来たものですね。書いた自分でも驚きます。

さて、珍しくこの小説で考へてある主人公の過去……逢莉といつ名前。

燈夜が“守る”という事に執着しているのは、逢莉の事が強く関係してあります。

読者様が、予想立て下さるのも面白いですねっ！

……過去が出てくるのはまだ結構先の予定ですが。

感想、評価等お待ちしております！

「……一気に食べすぎだよ」

もう毎時だ。

太陽の日差しが暑い！ こりゃ力キ氷も食べようかなあ、なんて
考え始めている俺。

「うん、力キ氷食おう」

「あ、僕も食べる。燈夜はいつもと同じメロン？」

「勿論だ。というか俺、メロンとカルピス味しか食べた事がな

」

……後ろかつ！？

「……？ どうしたの、燈夜？」

……横でした。

俺はメロン、いつの間にか俺の隣に居た慧はイチゴ味の力キ氷を
食べながら、文化祭を見て廻る。

いやー、力キ氷って美味しいねえ。力キ氷に使って良い言葉が分
からないけど、こう、食が進むって言つかさ……！

「つう……

「……一気に食べすぎだよ

あ、頭いてえ……けど、これが嵌るんだよな！

頭を押さえながら一人恍惚にしていると（別にMつて訳じやない
ぞ？）、慧が何かに気付いた。

「あ、あそこでデュエルしてるみたいだよ？ 行って見よー！」

「お、おい、ちょっと待つて……。」

慧が走ったからいけなかつたんだろうか。真正面には男性が立つていることに、慧は気付けなかつた。

「け、慧！」

「え……？ わわっ！」

「つあつ！ 冷てえ！」

そりゃ力キ氷ですから。なんて真面目に言つてゐる場合じゃないな。

俺は自分の力キ氷を落とさないよつてしながら、小走りで慧の元へ向かつた。

「大丈夫か、慧？」

「う、うん……。」

じうやう、慧に怪我は無せねつだな。

「おい、何ぶつかつちやつてくれてんだよ、あア？」

うわ……柄の悪い奴でしたか。

その男性を改めてみると、結構な強面さんでした。身体もでかいし、腕も太いし……俺、殴られたら数メートル吹っ飛ばされるんじやないか？

「うわあ、兄貴、服にシロップ掛けちまつてるぜ～。」

その後ろからひょっこり現れたのは、強面さんとは真逆にもやしみたいに細い男だった。

妙に背が高く、眼が異様に細い。狐眼、と言つのだらうか？

「どう落とし前付けてくれんだア？」

「べ、弁償します……その、」

「お、兄貴、アイツ結構マブイでっせ」

「マブイって……古ッ！ もう意味が分からない奴も居るんじゃないか？」

「マブイって言つのは、（多分）可憐いって意味だ。」

「ひひ……弁償なんて酷い事は言わねえよ。身体で払つてもいいはず？」

「……こんなタイプだったのか、コイツ。俺がこの世界に来て初めてデュエルした、あの男二人……訂正、3人組と同じ類の輩だ。けど、不思議だ。」

あの時みたいな、恐怖は無い。あの時もそうだったけど、こう真正面から対峙していると、全然恐怖心が刺激されない。

……正直、基の方が怖い。下手すると、俺のアルバイト初日、燈歌関連で俺を探していた女性陣の方が数倍怖いと思う。

「待てよ」

だから、俺も強気に言葉を発する事が出来た。

「あん？ なんだあテメホ？」

「そりや、ぶつかつちまつた慧が悪いと思つ。けど、だからって女子を連れて行くのは良くねえんじやねーの？」

「お、女の子……」

慧、そこは照れるとこがじゃないから。

「あア？ ジヤあビリ落とし前付けてくれるってんだよ？」

……弁償する、って慧、言わなかつたか？

しかし、また弁償とか言つてもコイツラは納得しないだろ？ な、経験上。

と、すれば。

「デコエルしろよ」

やべ、「おい」を付け忘れた！ 僕の……馬鹿あ……！

「兄貴、なんか凄く悔しそうでつせ」

「……頭イカしてんだろ」

酷い言われ様だ。しかし、すぐには否定出来ない俺つて……一体
……？

「デコエルで決着付けようぜ？ そうだな……タッグデコエル、つ
てのはどうだ？」

「タッグだア？」

「ああ。それとも何か、負けんのが怖いのか？ そりやそつだよな
。俺たち子供に負けたらすっげえ恥だもんな」

「なつ！？ やりましょうよ、兄貴っ！ ここまで言われて、黙つ
てるなんて男じゃねえつス！」

「ああ、良いぜ……俺たちが勝つたら、その女を渡してもうつか

ふう、単純で良かつた……。

「俺たちが負けるかよ。な、慧？」

「へつ！？ あ、えと、うん……」

俺は既に溶けてしまつたカキ氷を一気に飲み干し、男達から距離を取つてディスクを展開した。

「行くぜ、慧！」

「う、うん！」

「　　「　　「　　「デュエルツ（ス）！」　　」

ライフポイントは合計で8000。味方の場にあるカードを自由に使う事は出来ず、使用権は基本的にカードの持ち主しか与えられない。

フィールドや墓地も別々で、片方の場にモンスターが居た場合、例えもう1人の場にモンスターが居なくとも直接攻撃は行えないルールだ。

先攻は……俺！

「俺のターン、ドロー！ 俺は《サイレント・マジシャン》LV4を通常召喚！ カードを2枚伏せて、ターン終了！」

また、初ターンで攻撃が出来るのは最後のプレイヤーのみである。

「俺様のターンだ、ドローッ！」

「お前がドローした時、サイレント・マジシャンに魔力カウンターが1つ乗る！」

『サイレント・マジシャン LV4』魔力カウンター0 1 · A

TK1000 1500 ·

「チツ……俺ア『ゴブリン突撃部隊』四喰！ 3枚セット、ターンエンドだ！」

『ゴブリン突撃部隊』……なんか、久し振りに見たな。

2300という高い攻撃力を持つデメリットアッカー。攻撃するごとに次の自分のエンドフェイズまで守備表示になってしまつ。しかしそれって、タッグデュエルだと凄く長い時間じゃないか？

……ま、まあ良いか。

それはともかく、伏せは3枚。可能性としてはゴブ突を守るカウンター系列、攻撃反応型、後は『スキルドレイン』みたいなカードだな。

そういうこの世界つて、あんまり召喚反応型入ってるの見た事無いな……閑話休題。

「ほ、僕のターン……ドロー！ 僕は『E·HERO ハーマン』を手札に加え、召喚！ デッキから『E·HERO ハーマン』を持つてくる！」

持つてくるモンスターこそ違えど、結羅ちゃん似た動きをする

「カードを2枚伏せて、ターン終」…

「オイラのターンっスね、ドロー！」

《サイレント・マジシャン LV4》魔力カウンター 1 2 · A
TK1500 2000 ·

「オイラは《ブラッド・ウォルス》を通常召喚するっス！」

《ブラッド・ウォルス》……1900アタッカーの元祖か。

「《ブラッド・ウォルス》に《突進》発動！ 攻撃力が700ポイント上がるっス！」

《ブラッド・ウォルス》 ATK1900 2600 ·

ダメージステップに発動しなかつた？

……なんで？

「バトル！ 《ブラッド・ウォルス》でサイレント・マジシャンを攻撃するっス！」

「そう簡単にやらせるかよ！ 騰発動、《奇跡の軌跡》！ 僕はサイレンント・マジシャンを選択！ 相手……この場合ターンプレイヤーのお前が1枚ドローして、サイレント・マジシャンの攻撃力を1000ポイント上げる…」

「なつ……！？」

まあ、ダメージは『えられないんだけど。

『サイレント・マジシャン LV4』 ATK2000 3000 ·

「またこの時、相手がドローしたからサイレント・マジシャンに魔力カウンターが一つ乗る!」

『サイレント・マジシャン LV4』 魔力カウンター2 3 · A
TK3000 3500 ·

「向かい打で、サイレント・マジシャン!」

奇跡の光を帯びたサイレント・マジシャンは、《ブラッド・ウォルス》なんて目じゃない。

ダメージは入らないにしても、《ブラッド・ウォルス》は戦闘破壊された。

「う……」めんよ、兄貴……オイラは一枚伏せて、ターン
「Hンドフライズ時、速攻魔法《手札断殺》! 僕とターンプレイ
ヤーのお前はカードを2枚墓地に送り、2枚ドローする!」

『サイレント・マジシャン LV4』 魔力カウンター3 4 · A
TK2500 3000 ·

後一つ……無理だつたか。

「俺のターン、ドロー……良し。俺は2枚目の《サイレント・
マジシャン LV4》を通常召喚! そして《レベルアップ!》を
発動! 『サイレント・マジシャン LV4』を墓地に送り、デッ
キから来い! 『サイレント・マジシャン LV8』! !

まさか、ここで《レベルアップ!》を引くとは思わなかつたけど、

結果オーライ。ちなみに、《手札断殺》で引いたのはサイマジ「↙↙4が2枚である。馬鹿な。

それはともかく、無事に↙↙8は出てくれた。

「頼むぜ」

『ええ。私も、女性を傷付ける輩は嫌いですもの。ふふふ……』

……とても、怖いです……。

……続けよう。

「バトルフェイズ！　《サイレンント・マジシャン》「↙↙4」で……」「おっと、罠発動！　《スキルドレイン》！　俺は1000ライフ

「コストを支払い」

「させない！　速攻魔法《サイクロン》！」

「チイツ……」

男2人組↙P8000　7000・

スキドレの効果は適用されなかつた。そのままバトルが続行される！

「つあつ……！」

男2人組↙P7000　6300・

「続いて、《サイレント・マジシャン》「↙↙8」でダイレクトアタック！」

「うあああああつ……！」

男2人組 LP 6300 2800 .

「俺は、ターンエンドだぜ」

これで俺の手札は2枚……《召喚僧サモンプリースト》と《サイレント・マジシャン LV4》だ。これで押し戻されたら、後はもう慧に任せることはない。

「俺様の、ターン……ドロー！」

《サイレント・マジシャン LV4》魔力カウンター4 5 · A
TK3000 3500 ·

さて、どう来る？

「くく……良いカード引いたぜえ……《神獣王バルバロス》！」

ば、バルバロスっ！？

「手札から速攻魔法、《禁じられた聖杯》！ バルバロスの効果を無効化して、攻撃力を400ポイントアップさせるぜ！ その上、バルバロスは妥協召喚したつ一つ事が無かつた事になるから、攻撃力が1900から元々の3000へと元通りだ！」

《神獣王バルバロス》 ATK1900 3000 3400 ·

チッ……聖杯は手札だつたか。若しくは引いたのか……いや、引いたのはバルバロスだつて言つてたな。

前のターン、聖杯は伏せなかつた……となると、《スキルドレイン》が成功すると信じていたのか。

「さうに、伏せから《幻獣の角》発動！ バルバロスの攻撃力を800上げる！」

《神獣王バルバロス》 ATK 3400 4200 ·

「……LV8を超えたか。その上、《幻獣の角》にはドロー効果も持つている。

「バトルだ！ バルバロスでその女を攻撃イ！」

「つ……悪い……！」

『はあ……仕方ないわ。まあ、ここは主役の長谷部さんに任せましょうかしらね』

何かを呟きながら、LV8が破壊される。

燈夜&慧 LP 8000 7300 ·

それと同時に、男がカードをドローする。サイレント・マジシャンに乗っている魔力カウンターは既に5つ……これ以上乗ることは無い。

「くく……メイン2だ。《ライトニング・ボルテックス》！」

「えつ……！」

「てめえらのモンスターは全部破壊させてもうひづエー！」

『幻獣の角』で引いたのか……！ 魔力カウンターが5つ乗ったサイレント・マジシャンが破壊されたのは結構辛い……！

「俺はターン終了だ。さて、どうするよ？」

「…………僕のターン……ドローー！」

引いたカードを見て、慧は口元に笑みを浮かべた。
手加減は……無し、だな。

終わったか…………？

「僕は……『E・HERO プリズマー』を召喚！ 効果により、
『E・HERO ネオス・ナイト』を見せて、デッキから『E・H
ERO ネオス』を墓地に送る！」

「ネオスだと……!? それは伝説の……お前、まさか…………！」

忘れがちだけど、慧はこのアカデミアの特待生なんだ。
こんな奴等には、負けない。

「このターン、プリズマーの名称はネオスになる！ 魔法カード、
『ラス・オブ・ネオス』！ フィールドに居るネオスをデッキに戻
し！」

ネオスと改名されているプリズマーが、慧のデッキの中へ戻つて
いく。

「フィールド上のカードを、全て破壊する…」
「な、何イ！？」

俺の場には何も無く、慧の場に伏せられていた『ヒーロー・ブラ
スト』、相手の場の幾枚もあるカードが破壊されていく。

「そして、『O・オーバーソウル』！ 墓地に存在する『E・H E

RO ネオス》を特殊召喚する！

出た……完全蘇生カード。

過労死で有名なネオスが勢い良く顔を出す。流石ネオスさん、今日も輝いています。

「装備魔法、《アサルト・アーマー》をネオスに装備！」

あ、終わった。

「僕の場に戦士族モンスターが1体のみの場合、装備可能！ 攻撃力が300ポイント上がる！ けれど僕は、《アサルト・アーマー》のもう1つの効果を発動するよ！ このカードを墓地へ送り、このターン、ネオスは2回攻撃をする事が出来る！」

まあ、使わなくとも決着は付いてたんだけど。

「バトル！ ネオスでダイレクトアタック！」

「うわ、オイラのところに……うわああああつ！」

男2人組 LP2800 300 ·

「ラスト！ ラス・オブ・ネオス！！」

「次は俺様か……！ ああああああああああああああつ……！」

男2人組 LP300 0 ·

「……一気に食べすぎだよ」（後書き）

久し振りに、燈夜が普通に勝ったぞー！
え、慧一人でも勝てたんじゃないって？ 何言つてゐのさ。

当たり前でしょ？

てな訳で、志藤彩伽 が終わり、続いて長谷部慧 です、ハイ。
まだ慧 は終わつてませんよ、モチのロン。いやまあ、次で多分終
わるんでしょうけど。

しかし、《幻獣の角》つてバルバロスとかの獣戦士にも装備出来た
んですねー。Wikιで見るまで忘れてましたww
それにしても……アレです。

燈夜のデッキ、一々魔力カウンターとか書くのが面倒です。面倒で
す。面倒過ぎます。大事な事だから(ry

感想、評価等々首をぐるぐるさせながらお待ちしておりますm(—

—) m

「悪くないな」

「その、ありがと。……燈夜」

すたじゅうせつと逃げていった男たちを尻目に、慧は俺に小さく咳く。

その顔は、なんと言つてか“申し訳無さ”で一杯だ。
昔から何度も見てているその表情……前は男として見ていたけれど、今は女性として見たその表情は、じつ……なんか、グッとする。

俺、実はひだつたのか！？

……本当にらむつと苛めたくなる衝動に駆られるけれど、うん、じゅは自重しよう。今はシリアルスシーンだ。

「じゅ致しまして、だな」

俺はそう言つて、慧の頭を撫でる。身体は男だとしても、背の低い慧の身長は結構頭が撫でやすい位置にある。

身長だけなら、凛那の方が高いしな。零と同じくらいだらうか？
俺たちは近くのベンチに腰を下ろした。

「まつ、なんだかんだで慧との付き合には長いからな。これくらいの荒事は慣れてるよ」

「あはは……」

「それに、基と一緒に居た時の厄介事の方が俺には辛いつづーの。
何度も不良軍団に襲われたか」

俺がそう憤慨していると、慧が静かに俯いた。

陰になつてゐるからか、慧の表情が見れない。

「その時も……燈夜、僕を守つてくれたよね」

基とつむんでいるから、といつ理由で俺、慧、幸仁の3人は何度も不良軍団に襲われた。

慧は元々喧嘩が強くないから俺の背中に屈させて、基本的に拳を振るうのは俺と幸仁だった。

…………まあ、幸仁もそこまで強い訳じゃなかつたけど。

「そりや、慧は俺の」

「どうして……僕は、男なんだろう」

…………。

「女の子に生まれてくれば……僕は、何の気兼ねも無く燈夜を好きになる事が出来たのに」

慧の悩みが、小さな空気の振動となつて俺の耳に届く。外に吐き出したといつのに、慧の悩みは飛散する事が無かつた。

一生、苦しみにきたんだろう。

俺と出合つて、尙更。俺を好きになつてしまつて、もうこ…………。

「男に生まれてくるのなら、せめて強くしてくれれば良かったのにね。そうすれば、僕は燈夜と肩を合わせる事が出来るのに」

「う…………」

慧は、俺の後ろで守られていただけだ。俺にとつて当然だと思つしてきた事は、慧にとつて足枷になつっていたのか？

静かな沈黙が場を支配する。

……はあ。俺は何、後ろ向きてなつてるんだ？ 馬鹿だろ、俺。

「俺は、お前が男に生まれて来てくれて良かつたと思つてる
「え……？」

「お前が男で、可愛くて、華奢な身体付きだったからいや、小学生の時にからかわれてたんだろう？」

「いつだつたつけ……低学年の時だつたつけ？ いや、もひひひひひひ
と上かな？」

「それがあつたからいや、俺はお前と出会えたんだ。お前が女の子だつたら凄い人気者で、俺にとつては高値の花！ 話すことなんて無かつたんだ」

「燈夜……」

正直、女性用制服（今はコスプレ）を着ている慧は本当に可愛いと思う。俺や基たちとは違う女性っぽい骨格や肩幅。そりそりと流れれるショートカットの髪。

そして、時折覗く綺麗な脚。脚フェチの俺にはたまらない……げふん。

「それに、もうお前は守られるだけの存在じゃないだろ？」
「え……？」

「さつあ 慧。お前、俺と肩を並べて戦つたじゃないか

「…………あ

勿論、喧嘩つて訳じゃないけど。遊戯王デュエルモンスターZつ

ていうカードゲームだけど。

それでも、慧は俺より強い。逆に俺が守つて貰わなければならな
いぐりいには、だ。

「自信持て、慧。お前は男だらうが女だらうが、魅力的なことは
変わり無いからさ」

「うわ、恥ずかしつ！」

慧がきょとんとした表情で俺を見てくる。俺は尚の事恥ずかしく
なつて、赤くなつた顔を見られない為に視線を逸らした。

出会つた時期は少し遅いかもだけど、流石幼馴染。そんな俺の行
動なんてお見通しみたいで、くすつ、と笑みを浮かべた。

「うん……ありがとう、燈夜。そつだよね……僕、前に言ったもん
ね」

俺の前に立ち上がつて、慧はにっこりと笑顔を浮かべる。
その笑顔は凄く眩しくて、俺はまた、顔を赤くしてしまつ
。

「絶対、好きになつてもうから…………つてねー！」

そんな嬉し恥ずかしのイベントが終わり、俺は慧と別れて適当に
ぶらついていた。

そこまでお腹も空いていないし、特別やりたい事も無い。1人で居るのって暇なんだなあ、なんてしみじみ思つていた。

……いやまあ、俺の隣ではマナがふわふわと浮いてるけどさ。こんな人が多いところでマナ（外面向には何も無い空間）に話すなんて、痛い奴の何者でもない。

テレパシーなんて使えませんっ！

「……燈夜」

「ん……凜那？」

こんな所で何してるんだ？

辺りには凜那以外、見知った顔は居ない。待ち合わせとかしないとすれば、凜那は1人つて事だらうか。

「どうした？」

「……話があつてな」

「話？ 僕の退学の事か？」

「つ……どうして、そんなに軽いんだ、お前は」

いや、軽いって言われてもなあ……正直なところ、この世界だとアカデミアの卒業資格なんて無くても良さそうだし。

周り……というか世界の救世主？ が強いだけで、他の人たちのレベルはうーんって感じだ。とすれば、最悪、こんな俺でもプロデュエリストになれるかもしない。

食つていけなくなつたらプロ試験を受けてみようかな、とは思つているけれど……退学に関しては特に反論は無い。

……いやまあ、皆と離れるのは寂しいけど。

「私の所為で、お前は……」

「……？ なんでお前の所為なんだ？」

「……私が、父と喧嘩をしてしまい、お前を巻き込んでしまった。

私が意地を張らなければ……」

「お前……結構馬鹿なのか？」

「なつ……！」

正直、俺には凛那がどうしてここまで自分を追い詰めているのか分からぬ。それこそ、これっぽっちもだ。

「お前は友達の事を言われて怒ったんだろ？ 俺にはそう見えたぜ？」

「……それは、そうだが……」

「俺も似たようなものだよ。凛那には笑っていて欲しいから、俺が手を出したんだ」

「つ……！」

……なんか、この世界に来てから俺、恥ずかしい台詞ばかり言つてる気がする。気のせいかな？

「このアカデミアを出て行く、とか言い出したのは俺からだし？ そんな重い条件を出して負けたのも俺。ほら、お前の悪いところなんて無いだろ？」

「いや……そもそも、その原因を作ったのは私なんだぞ？」

「……それ言わされたら反論出来ないけど」

なんか、納得行かないなあ。

俺は凛那に笑つて欲しいから口を出したのに、今の凛那は今にも泣きそうだ。これじゃ、俺の努力と退学が報われないじゃないか。

.....。

良し。

「凛那、ちょっと付き合つてくれね？」

「と、燈夜……あ」

俺は凛那の手を取つて、近くにあつた第一位の寮……お化け屋敷に入った。

暗い、ざわざわした空気が辺りを漂つてゐる。作り物にしては凄く本格的だ。それこそ、遊園地のお化け屋敷に匹敵するへうこに。

「と、燈夜……ど、ビリしてこんな所に？」

あれ……凛那、声が震えてる？

そう思つたのも束の間、突然ミイラの格好をした男が墓石の後ろから顔を出した。勿論、妙に低くした作り声を出しながら。

「キヤアアツ……」

う……。

ガシ、と俺の腕を掴む凛那。それこそ抱き込む感じで……つまりは、その。

……腕が胸に、挟まれてます。

「り、凛那！ その、ち、ちか……！」
「い、いひこののは苦手なんだ……その、離れないでくれ……よっ！」

すれすれーん！

「うわっ、なんつー破壊力！　いつもは妙に男勝りな感じなのに、今はこの汐らしさである！」

これが……ギャップ萌えか……………ツ――

「モモタニ」

「ふーんやつ！」

「おみやげーっ！？」

なんか段々、悲鳴がおかしくなつてきてないか？

そしてとても右腕が痛い。胸の感触なんて堪能出来ないくらいには、俺の右腕が痛い……凛那と負けず劣らずに悲鳴を上げている。

「あの、凛那…………その、腕
「ぐすん…………ふえ？」

「俺が居るから大丈夫だよ」

キリッ！

あ、数多くの「ウモリさんたち。

「やああああああああああああ」――。「

「痛ええええええええええつー!?

教訓

勢いで突っ走ってはイケマセン。

そんなこんなでお化け屋敷を出た俺たち。色々な意味で疲労困憊である。

しかし、俺なんて良い方だ。凛那の方は……えと……。

「だ、大丈夫か？」

「燈夜の……馬鹿あ……」

「ぶはつ！？」

馬鹿な……俺のアトラクションはまだ終わってないだとつ！？
鼻血……鼻血が垂れる……ツ！

「わ、悪い、凛那……」

「……どうして、お化け屋敷に入つたんだ……？」

なんとか調子を戻してきた凛那が、リンクゴジユースをちびちび飲みながら問い合わせてくる。

……その姿も妙に幼稚っぽく見えて、俺的にはグッド！

「えと……楽しいか、凛那？」

「怖かった」

「…………めん」

当たり前の回答だった。

「けど……悪くないな」

ふふ、と凛那はリングゴジュースを見つめながら笑う。
そりゃ良かった。怖がらせただけなら、俺の行動はただのドSである。

……もう一度お化け屋敷に入らせたいと思う俺はもしかしたら本当にドSなのかもしれないが。

「笑ったな、凛那」

「……え？」

「俺はお前の、笑った顔が見たかつたんだよ」

凛那の隣に座りながら、俺はそう言った。

女の子ってのは、笑っていなきやならないと思う。人間……特に女の子は、生まれただけで幸せになる権利を持っている……俺はそう信じてる。

だから、燈夜は私を幸せにすること！

私は燈夜と一緒にいると、幸せになれないんだからね！

逢莉の言葉が脳裏を過ぎる。

「俺は退学しても、ちゃんと会いに来るよ。別に今生の別れじゃないんだし、そう気負う事も無いさ」

「…………」

「とか逆に、俺が会いに来た時、凛那や他の皆が笑えていない

とか……絶対に嫌だからな

俺の言葉に、凛那がふつ、と喉を鳴らす。

「絶対に嫌……か。我が仮だな」

「ああ、我が仮だ。悪いか?」

いや、と凛那は首を横に振る。

「悪くないな

静かな空間が俺たちを包む。

凛那は手に持ったリンゴジュースを、一気に飲み干したのだった。

「悪くないな」（後書き）

結構な早足で書き上げた割には、まあまあ良い出来だと自負しています……自惚れですかね？

廃棄人形です。

全然ストーリーが思い浮かばなくて、仕方無いからと慧のイベントの後、そのまま凛那のイベントへ。

凛那 のイベントはデュエル無しでした。

……凛那可愛い。暴走した感が否めないけれど、後悔はしていない。
凛那が可愛い！

大事な事だから緩急つけて2回言いました。

宜しければ感想、評価等下されば歓喜して、毎日更新が長続きしそうですよ！

「……俺、居なくても大丈夫だな」（前書き）

今日は短めです。

「……俺、居なくても大丈夫だな

凛那と別れてから1時間が経つた。
俺はまた一人で適当にぶらぶらとしていた。その間、俺は知り合
いに誰も会っていない。

本日の文化祭は後1時間も無い。
楽しい時間は瞬く間に去っていくというが、今回もそうだったら
しい。1人の時はともかく、誰かと居る時は楽しかったしなあ……。
そんな事を思いながら、俺は良し、と人込みから離れた。

「」の辺りなら、誰も居ないな

『うん、そうみたいだね、マスター』

マナが、俺の隣でふわふわと浮いている。
マハーダとマナは、誰にも気付かれぬよう喫茶店の手伝いを
してくれていた。プラマジやプラマジガールが誰かに見られたら大
変だしな。

今はマハーダの番。今頃、失敗しそうな女性陣の料理をどうにか
してるんじゃないかな。

「っくしゅん！」

「……………？」

「い、いえ……風邪でしょうか？」

マナと一緒に人気の無い場所を歩きながら、俺は第五位の寮へと向かった。

会話も無い、静かな空間　だけど、別に重苦しい感じはしない。

そして、第五位の寮が見えてきた。

「……あれ？」

俺は近くの木陰に隠れて、様子を見る。

「リリア、2番テーブルを頼むよ」

「分かりましたわ」

「玲さん、12番テーブルのオーダーを取りに行って欲しいんだけど」

「はい。その前に、玲昌先生、ヤキソバれんじょうお願いします」

リリアと玲……？ 確かあの2人は、シフトが違った気がするんだけど……？

「玲昌先生！ オーダー貰つてきました！」

「うん、ありがとう」

「御神さん、1番テーブルと8番テーブルの片付け、終わつたよ

「」苦労様、長谷部さん

姉さんと慧……この2人も、シフトが違うはずだ。

まさか……？

『うん。 そのまさかだよ、マスター』

「マナ……」

『結構始めから、皆で動いてたんだよ。休憩は一人ずつ、少しの時間でね』

そつか……。

覗き見していると、彰正先生と御神が仕切りながら喫茶店は回つていいく。

そこに滯りは見られない。それどころか、昨日よりもスムーズに見えた。

「……やつぱり

『マスター……？』

「……俺、居なくとも大丈夫だな」

どうやら、俺の心配は杞憂だったみたいだ。
俺はその場から離れる。夕日が落ちていく。流石にこんな時間帯になると、少し肌寒い。

両手を青い制服のポケットにしまいながら、俺が向かつた先は何度か訪れた、島外れの灯台。

潮風が俺の髪を撫でる。

心地良い時間だ。時折聞こえる文化祭の喧騒は、まだ祭りは終わっていないと告げているようで、俺は好きだ。

いつまでも、この空間が終わらないか

なんて淡い希望は、

一瞬の内に打ち砕かれる。

「ククク……まさか、1人で居てくれるなんてよオ……危機感が足りねエんじやねえの？」「つ……！」

その声は低く、俺の脳にじびり付いて聞こえた。

男だ。

左腕にはデュエルディスク、服装は全体的に黒い。髪の色や瞳の色も、俺と同じで真っ黒だ。

「まずは自己紹介と行こうぜエ？ 俺アギゼルってんだ」

「……一ノ瀬燈夜だ」

「クク、やっぱ間違いじゃ無かつたみてエだな……！ 一ノ瀬燈夜

……俺は、テメエを殺しに来たぜ？」

「はっ……？」

殺しに……！？

余りに物騒な言葉。俺の驚愕にて、男 ギゼルはにい、と口元を歪めた。

「俺の主からの命令なんだよなア……テメエはいつか、主の邪魔になるからつてよ。だから、ブチ殺す。跡形も無く、骨も灰も残らねエゼ」

本気だ……ツ！

どうする……ディスクがあるってことは、多分デュエルなんだろ

うけど……したところで、俺に勝てる可能性はない。命令される
くらいなんだから、コイツはかなり強いんだろう。
逃げるか？ いや、簡単に逃がしてはくれないだろう。

今現在、まだ文化祭は続いているんだ。

第五位の寮では、皆が頑張ってくれている。疲れても疲れても、
それでも文化祭を楽しんでいる事に変わりは無いんだ。

今、俺が逃げたら……皆の頑張りが無駄になる。

「一つ訊かせる。お前の主つてのは

「テメエの敵。それだけで充分だろ？」

「チツ」

時間稼ぎは勿論、情報も得られなかつた。
死。

いや……俺は、死ぬ訳には行かないんだ……ッ！

「さあ、構える……テメエが負けたら、死んでもらひさせ?
「……仕方、無いか……」

ディスクにデッキをセットして、展開させる。

「コイツがもし、幸仁たちよりも強かつた場合、俺に勝ち目は無い。
それこそ一瞬で“殺される”。

けど、弱かつたなら……俺にも、付け入る隙はある……！

「力を貸してくれ……マハード、マナ」

『勿論です、燈夜殿』

『お師匠様、いつの間に……マスター。私は、どこまでも一緒に

だよ?』

ありがとう。

『「デュエルッ!!」

潮風が吹き荒ぶ……。

「……俺、居なくても大丈夫だな」（後書き）

次回は、自分の命を賭けたデュエルですね。

廃棄人形です。

いつの間にかこの小説も、PV10万を超えていました。皆様、本当にありがとうございます！

きっと更新速度が遅かつたら、ここまでならなかつたでしょうね

……読者様万歳！

番外編をやろうかと迷ったんですが、ネタが無く断念。元々コメティイは向いていない私に、それは致命的ですようよつ……（エコー）。

感想、評価、その他意見などを毎日毎日、お待ちしております！

「 さあ、残り時間までもつ少しだぜ？」

命を賭けた決闘^{デュエル}。

動悸が増すのを感じる。俺の事を睨むように観察しているギゼルの視線が、とても恐い。

命運を分けるターンランプは

「俺の先攻だなア。ドローッ！」

……光らなかつた。

「クク……行くぜエ？ 俺は『封印の黄金櫃』を発動！ デッキからカードを除外して、2ターン後のスタンバイフェイズに手札に加える！ 俺が除外するのは 『ネクロフェイス』！」

「なつ…………！？」

『ネクロフェイス』…………！？

氣味の悪い顔の形をしたモンスターが、異次元へと消えていく。そのモンスターの効果は、敵と味方のカードを道連れにする事。

「『ネクロフェイス』が除外された時、お互いのデッキの上から5枚除外する……ッ！ さあ、始めようぜ、一ノ瀬燈夜さんよオ！」

「く…………」

俺とギゼルは、デッキの上から5枚をゲームから除外する。残念ながら、ギゼルが除外したカード群は見えない。

俺は『見習い魔術師』、『千本ナイフ』、『ディメンション・マ

ジック》、《熟練の黒魔術師》……そして、

「マナ……！」

《ブラック・マジシャン・ガール》。

これで、デッキの中に眠るブラマジガールは一枚。しかし相手のデッキを考えると、すぐにでもデッキ破壊をしてくるだろう。その際、3枚あるマハードや残り1枚のマナを除外されるのはどうしても避けたい。

……しかし、無理に《黒魔術のカーテン》を使っても、ライフが危険になる。相手のデッキに、ダ・イー・ザとかその辺りが出てくるとも限らないんだから……。

チツ……厄介なデッキを使いやがる。

デッキ枚数：30枚。

「俺はモンスターをセット。カードを2枚伏せて、ターンエンドだぜ」

「つ……俺のターン、ドローッ！」

デッキ枚数：29枚。

「《魔導戦士ブレイカー》を召喚！ 召喚に成功した時、ブレイカーに魔力カウンターを乗せる！ 俺はブレイカーの効果を発動し、魔力カウンターを外して右側のセットカードを破壊する！ マナ・ブレイク！！」

「甘いぜエ……リバースカードオープン、《和睦の使者》！ このターン、俺が受けるダメージは0だ！」

「くそ……」

やつぱり、守るカードが入ってたか……。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！　スタンバイフェイズ、1ターン目が経過する……『サイバー・ヴァリー』を召喚。ターンエンドだ」「俺のターン、ドロー！」

『サイバー・ヴァリー』……面倒なカードを使ってくれる。

デッキ枚数：28枚。

「『熟練の黒魔術師』を召喚し、バトル！　『魔導戦士ブレイカー』で、セットモンスターを攻撃する！」

「大外れだ　『一二ドル・ワーム』！」

つ……！

リバースモンスター……その効果は、相手のデッキの上から5枚墓地へ送るカード。

デッキ枚数：23枚。

「くそ……伏せから速攻魔法、『ディメンション・マジック』発動！　攻撃済みの『魔導戦士ブレイカー』をリリースして、来い！　マハードッ！！」

気合いで吐息と共に、マハードが舞い降りる。

「その後、俺は『サイバー・ヴァリー』を破壊する！」

「チツ……しゃあねえか」

良し、これでドローはさせないで済む。

その上、マハードと熟練のダイレクトが通ればデュエルは終わりだ！

「バトル続行！ 熟練の」

「そう上手く行くと思ってんのかア？ 僕ア速攻魔法《スケープ・ゴート》発動。俺の場にトークンを4体生み出すぜ」

「くつ……《熟練の黒魔術師》と《ブラック・マジシャン》で2体のトークンに攻撃！」

出てきた羊のトークンを破壊する2人の魔術師。

……俺に出来る事はもつ、無い。

「俺はターンを終了する……」

「ははは……！ 本当にテメエが異端者かよつ！？ 弱エ、思つた以上に弱いぜ……！ 俺のターン！ ドロー！」

ギゼルの言葉が、俺の胸に突き刺さる。弱い、と自覚し、悩み続けている……誰かに言われるのは、思つた以上に……辛い。

「スタンバイ、黄金櫃に封印されていた《ネクロフェイス》が手札に加わるぜ！ そして、《闇の誘惑》！ カードを2枚ドローして、手札の闇属性……《ネクロフェイス》を除外する！」

「つ……！」

「デッキ枚数：18枚。

『魔法族の結界』、『カオス・ソーサラー』、『マジシャンズ・

サークル》、《死者蘇生》、《召喚僧サモンプリースト》。幸い、マナの姿は無かつた。

「俺は《異次元からの埋葬》を発動！ 俺の除外ゾーンに居る《ネクロフェイス》、《ダーク・アームド・ドラゴン》、《終末の騎士》を墓地に戻すぜ」

墓地に……？ ってことは、墓地から除外する気なのだろうか。

「クク……《闇王プロメテイズ》を召喚！」

「な……っ！」

「このカードの召喚成功時、墓地の闇属性モンスターを好きな数除外できる。このカードの攻撃力はエンドフェイズまでその数×400ポイント上昇する。俺は《ネクロフェイス》を含め3体を除外するぜ」

《闇王プロメテイズ》 ATK1200 2400 ·

「そして、勿論《ネクロフェイス》の効果が発動だア！」

デッキ枚数：13枚。

もうかなり少なくなつてきてい……。

この残りのデッキ枚数が、俺の残りの命……デッキと一緒に、俺の命も削られていると思うと、ゾッとする。

生睡を呑み込む。その喉で息を吸うと、痙攣したかのように震えた。

恐い。

恐怖心が俺を支配しつづけ。

「バトル！ 《闇王プロメテイズ》で《熟練の黒魔術師》に攻撃イ
！」
「ひつ……と、罠カード発動！ 《聖なるバリア・ミリーフォース
》……ツ！」
「チツ……」

獣鍊の前に表れた盾が、熟練オレを守ってくれた。

「俺は残りの手札全て……3枚を伏せて、ターンエンドだ。来いよ
「あ、ああ……ど、ドロー……」

デッキ枚数：12枚。

身体が縮こまる。

恐い、恐い、怖い。

死ぬのは……ツ！！

「《黒・魔・導》…………！」

「おお、良い引きしてんじゃねエの。けどよ……失敗じゃねーか？
チエーン発動、《威嚇する咆哮》。さらにチエーン　《闇次元
の解放》」

「…………あ」

動悸が、早くなる。

「逆順処理だ。《闇次元の解放》により、《ネクロフェイス》を除
外ゾーンから蘇生させる。んでもって、《威嚇する咆哮》によつて

お前はこのターン、攻撃宣言を行えない。そして、《黒・魔・導》
俺の罠カードは全て破壊、だよなあ？

俺の罠カードは全て破壊、だよなあ？」

残りの一枚も『闇次元の解放』だつたらしい。破壊されていく。

そして

「『闇次元の解放』が破壊された事により、『ネクロフェイス』は
破壊され、除外される さあ、残り時間までもう少しだぜ？」

デツキ枚数：7枚。

〔 〕

「何してんだよ？ 早く外へ」

本居宣長著　大日本史

逃げろ、逃げろ……遠くに……ツ——

少しだも、ハヤく……ハヤく！――

「え……？」

残り数分で本日の文化祭は終わりを告げる。もう辺りも薄暗く、第五位の喫茶店には御神や彰正など従業員以外の人影は居ない。

そんな中、誰かの叫び声が聞こえて、結姫は動きを止めた。

結姫だけではない。慧、凜那、彩伽、零に若菜……ソフィアとリリア……基、幸仁。

全員だ。

その場に居る全員が、灯台がある方向に視線を向けた。

「今、誰かの声がしなかつたか……？」

「ああ……灯台の方だな」

基と幸仁が、怪訝そうにしながら確認し合つ。

心中に広がる不安な色。言いようの無いソレは、喫茶店の片付けを続ける事が出来なくなつていた。

そんな中……御神だけは、ふう、と肩を竦めた。

「 やつぱり、君は弱いね」

小さな咳きは、誰の耳朶にも届かない。ただただ、虚空に消える。

「良いよ、追わなくて。もう彼は、戦つ事など出来ないだろうからね

お疲れ様、ギゼル。

最後にセウサウと、御神新は片付けを再開したのだった。

「 まあ、残り時間までもつ少しだぜ? 」(後書き)

と訳すと、重要なデュエルはちゃんとした決着も付かず、幕を閉じました。

廃棄人形です。

今回はライフ変動は有りませんでした。デッキだけがどんどん減っていたわけです、ハイ。
デッキ破壊を書いたのは初めてでしたので、間違つていたらすみません。

ちなみに、ギゼルの次のドローカードは《異次元からの帰還》。それで《ネクロフェイス》が出てきて、エンドフェイズに除外されたりして効果発動。

その後、ギゼルの次のドローカードは《ジ・エンド・スピリッツ終焉の精霊》でした。

除外されている闇属性モンスターの数は燈夜とギゼルを合わせて28体。攻撃力は8400……半端無いですねww

ご感想、ご評価、その他諸々いつでもお待ちしておりますねっ

『好きなの』

「……朝、か……」

寄り掛かっていた樹から離れ、俺は昇り始めている太陽を見つめた。見つめたとは言つより、実際には眼を細め、手で影を作りながらなのだけど。

朝 　というよりは、早朝だろうか？

まだ4時とかその辺りだとと思つ。制服のポケットにしまってあるDPには書いてるだらうけど、身体がダルくて見る気になれない……。

（あの後……俺が逃げ出した後、灯台と第五位の寮の間にある小さな森の中で眠つちまつたんだな……）

思い出しながら、俺は再び樹に凭れ掛かる。

少し……寒い。

早く寮に戻つて、顔を洗わないと……いや、シャワーだろうか。

汗と涙の塗れたこの姿……すぐに、洗い流したい。

「マナ……マハーダ？」

立ち上がり、俺は精霊2人に呼びかける。

……返事が無い。

もう一度呼びかけてみるけれど、俺の前に現れてはくれなかつた。俺の声に呼応したのは、体温を奪いに来た小さな風のみ……。

「………… 猶豫つかれた…… かな？」

はは、と自嘲する。

……虚しい、な。

そうだ、今日は購買のお姉さんの陰謀で、//スコンに赴むんだつた……。

あの人、面白い事好きだよなあ。短い期間だけ、それが凄く分かる。思い付きでイベントをやつたり、俺や他の従業員も巻き込んで、何らかの事件を起こしたり……。

そして今回は、//スコン、かあ……。

朝6時くらいには迎えに来て、寮室で化粧と着替えを済ますんだったよな……早く帰らないと。部屋、片付いてないし。

「………… 行ひ

「うーん、やっぱり才能あるよ、燈歌ちゃんはい」「………… 何の才能ですか、何の」「ソレは勿論、」

……勿論？

「女装？」

「そんな才能は要りませんでした」

誰か破棄してくれ。いや、若しくは譲渡しよう、うん。
思ったよりも早く来てくれた購買のお姉さん 深美さんは俺に
化粧を施しながら、頬を赤く染めながらそう褒めてくれた。
……俺的には褒めてるのか微妙なんだけど。

既に服装は女性用だ。

深美さんの趣味なのか、その服は俗に言うメイド服だ。白と黒を
基調としたその服は深美さんの手作りだそう。手の凝ったことだ。
腰の辺りには大きなリボンのようなものが結んであつたり、フリ
フリのスカートがかなり短かつたり……エナメル製？とか言う靴
も新調してあつたり。

正直に言ひつと。

「勘弁してください……」

「だが断る」

「断られたつ……？」

そんな……馬鹿な……ッ！

と言うかそのネタ、この世界にもあつたんだね。ちょっと驚き。

化粧が始まつて結構な時間が経つた。それこそ、俺がうとうとし
ちゃいそうな程にだ。

ウイッグを頭に。さらに仕上げ、とカチューシャを取り付けた。

「わあ……」

顔の前に鏡を出されて、俺は自分の姿を確認した。

「いやもう、なんていうか……美少女、としか言ひようが無い。睫毛はある程度長い方だつたけれど、さらに強調され、眼が大きく見える。元々艶げだつた一重瞼も、今はくつきりだ。グリス？ だか口紅だかで俺の唇はてかてか光つていて、肌が白くなつていた。勿論、その白さの中に紅潮を入れるのも忘れていい。

ウエーブを掛けた茶色のウィッグも、正直……かなり似合つている。

「……誰？」

「はあ……はあ……」

「…………深美さん？」

え、あの、なんつーか。

貞操の危機？

「襲つて良い？」

「駄目で わわつ、こつち来ないで、ちょ、服脱がしちゃ……だ、」

誰か助けて————ツ————！

「ゴメンね、燈歌ちゃん。つい

「ついじゃ有りませんっ！」

間一髪。俺は何とか貞操を守りきつて、小さく溜め息を零した。
深美さん、以外と力強いんだもんなあ……もう少し深美さんが正
気を取り戻すのが遅かつたら、文字通りアツー！ な展開だつたに
違ひない。若しくはお持ち帰り～、とか。

「じゃあ、私は後で会場に向かうから、燈歌ちゃんは自分で会場まで行つてね」

「……………はい」

…………本当に出るんだ……はあ、齧だ。

実は一昨日の内に、深美さんは“燈歌”のミスコン出場を決めて
いたらしく、登録済みだと言つ。
水着審査とかが無くて良かつた。そんなのに出たら俺…………冗談抜
きで倒れる。

「じゃあね～」

「……………はああ～」

…………どうするかなあ…………。

一度自分の部屋に戻つて、荷物を片付ける。今の時間は……8時、
か。何気に深美さん、2時間近くも部屋に居たんだ。

俺が持つてゐる幾つかの“テッキ”を並べていく。今日持つて行くテッ
キを決める為、毎朝やつてゐる事だ。

「……………あれ？」

「 プラマジックが、無い？」

さつきまで着ていた制服や部屋の至るところを見てみると、
「 プラマジックの姿が無い。」

「 落としたか？ それとも……マハーデーヴマナが愛想を失かし
たから、それと同時に姿を消した？」

「まあ、良いや。あんただらしなく逃げちゃつたんだから、幻
滅するに決まつて。」

世界を救うとかは、俺じゃなくて幸「や基たちがやつてくれる。
俺みたいな“凡人”が何かする必要も無いよな。」

「……今日はコレだけで良いや

一番左端にあるデッキ。面倒だからデッキケースに入れず、その
ままティスクに差し込んでしまつ。

さて。

「まだ時間はあるし……片付かるか」

明日、遅くても翌後日には俺、このアカデミアには居ないんだし
な。

布団を畳み、小さな（それこそみかん箱程の大きさしかない）机
の上を渴いた布で拭いていく。

それが終わると、俺は元々部屋に置いてあつたはたきを取り出し
た。
と。

「ンンン、と扉がノックされる。

「燈夜さん……居ますか？」

「ん……結姫？」

来てくれたのか。

俺は結姫を出迎えよひと立ち上がり。

スカートがひらりと揺れた。

「…………」

……俺、今女装してんじやん。
え……どつする？ どつするー？ エ、エツー？

パニック状態の俺。落ち着けば良かったのに、と思つのは後日談
だ。

完全に慌てた俺、一ノ瀬燈夜……もとい、一ノ瀬燈歌。俺の脚は
足元にある机に激突し。

どんづ、と音がした。

「あ、居るんですね。開けますよ？」

わー……、と血の気が引いた。

この時、なんですぐにでも制止しなかったのか……俺がそう後悔
したのは、後日談（2回目）。

扉が開く。

今の俺の姿……メイド服。完全女装。それこそ下着までだ。右手

「」ははたきがある。

わへ……どうも、

「え……貴方は、確か……」

「とつ……燈歌、です」

声を高くして、俺はさきいちなしに笑みを浮かべる。

内心ばつばつ。いつだかの食堂の時なんてメジやない緊張感だ。

「…………」「…………」

結姫さん、とても怖いです。

「…………」

え、え、と。

「わ、私……その、燈夜さんの…………せ、専属メイドなんですか？」

「…………え？」

「…………」

お。

俺の馬鹿——ツ——！

なんで突然そんな設定が思い浮かぶんだつー？今までそんな様子なんて無かつたのに、突然そんなの言われても信じる訳無いだろつ！

「メイドさん……だつたんですね」

信じひめつたつー？

「ですが、その燈歌さんがどうして燈夜さんの部屋に居るんですか？」

「それは……えへへ」

「……は苦笑いで凌ぐしかない！」

しかし、俺の苦笑を見て、尚更結姫の殺気が強まつた気がするのは……氣のせい、だと良いなあ。

……何故に？

「…………燈夜さんの居場所を知っていますか、燈歌様」

な、なんか口調がいつもと違つて……！？

「あ、ああ……？ わざわざ出掛けてしまつたけど……」

「そうですか……ふふふ、そりなんですか…………燈歌様？」

「ひ、ひやいつ？」

結姫が……結姫が怖いよーーー！

「夜道にま、お氣を付け下そーね…………」

そう言い残して、結姫が去つていく。

結姫が…………「んなに怖いとは…………」。

余り怒らせなつよつじよつ。俺は静かにそつ決意した。

『黒・魔・導・爆・裂・破…』
ブラック バーニング

『マナ。少し落ち着きなさい』

『はあ……はあ……』

マナとマハードが居る場所は、個室の中だった。

真っ白い個室。床、壁、天井の全てが純白に染められた四角い部屋の中で、マナは静かに膝を付いた。

かれこれ数時間、2人は幽閉されている。

最後に憶えているのは、主である一ノ瀬燈夜がギゼルと名乗った男から逃げ出した時。

気が付いたらこの個室に閉じ込められていたのだ。

『マスターのところへ行かないといつも！』
『それでも、お前は力を使い過ぎた。少し休みなさい』
『傷付いてたんだよ』
『マナ……？』

無音に等しい部屋の中で、2人の声が木霊するように反響する。

『マスターつて、1人で抱え込んだりタイプでしょ……？ 今まで見てきた私やお師匠様なら分かるよね？』
『……ご両親の時や、逢莉殿の時の事、か』
『うん』

ゆっくりとした動作で立ち上がりながら、マナは静かに頷く。
昔から……見てきた。

それこそ、燈夜が生まれた時から一 ずっと。

『今回もそつ……。勝ちたいのに、勝てない悔しさ。守りたいのに、守れない辛さ。これから先、どんな敵が襲ってくるか分からぬのに、マスターは自分の力不足に嘆いて……泣いてた』

世界を救う。

そんな大それた事を頼んでしまったのは、自分たちだ。結果的に、

それが原因で自分の主は苦しんでる。

マナは、それがとてつもなく辛かつた。

『その上、あのギゼルって人……本気でマスターを殺そうとしてた。なのに……ッ、私は、何も出来なくて……ッ！』

『マナ……だが、』

『好きなの』

マナは自身の杖を、壁に向けて構える。

『マスターの為なら、私』

『私も同じだ、マナ』

マハードも、壁を睨み付けながら杖を向けた。
魔力が膨大していく。

『私も、燈夜殿の力になりたい。燈夜殿だからこそ、この力を使いたい。そう思えたのだ』

『お師匠様……』

『行くぞ、マナ。我らが主の元へ』

『つ……はい！』

トウヤ
主への想いを込めて。

魔力が、爆発する。

黒^{ブラック}・爆^{バーン}・裂^{ブレイク}・破^{ブレイク}・魔^{マジック}・導^{ドゥイ}！――『

『好きなな』（後書き）

もしかしたら、もしかすると。
“燈歌”、メインキャラ決定……つ！？
んなアホな。

廃棄人形です。

マナが想いをぶっちゃけました。可愛いです。可愛いです。言いたりないのでもつとつわ何する止め（ry

感想、評価等お待ちしておりますう～。

「……秘密、ですか」（前書き）

今回、いつもよりは少しだけ短いです。

「……秘密、ですか？」

『それでは！ 第64回第五回ミス・コエルアカデミア桜都校、ミス・コンテストを開催致します！』

無駄にノリノリな生徒会副会長の言葉が終わるや否や、アカデミア……いや、恐らくは島全体に音楽が流れ始める。

ミスコンのテーマソングだらうか？

音楽好きな自分としては、ミスコンなんて参加せずにこの曲を聞いて居たいんだけど…………。

『それでは早速参りましょうかね！ ハントリー番号1番… 第一位の特待生、長谷部慧さん！』

「は、はい」

一番田は慧らしい。生徒会に推薦されて参加する事になったから、慧たち女性陣は皆番号が早いみたいだ。

このミスコンでは、第一審査に皿山紹介、第一審査に料理、第三審査がデコフルだ。そこで観客達の投票をして貰い、最終審査という流れになる。

はあ……何度も考へても鬱だ。マジでやりたくない…………けど、まあ。

「…………」

最後の思い出作りには、良いかな。

第一審査は滞り無く進んできた。強いて言えば、皆の質問の中に、好きな人は居ますかという質問が来た事だらうか。

居る、といふ言葉で観客が思い浮かぶのは俺である。幸には基なり「仕方ない」とでも考へてゐるのか分からぬけど、殺氣は俺に向けてだけだつた。解せぬ。

『それでは最後ですね。エントリーナンバー17番、市ノ瀬燈歌ちやん、どうぞ！』

……苗字は漢字を変えただけじゃないか。流石にバレるんじゃないかな？

横目で結姫たちを見てみるも、どうやら気付いた様子は無い。ライバル心剥き出しで見られているだけだ。

……ば、バれてないだけマシ、だろうか？ なんか複雑。

『おお、これは美しい……！ 鮮やかで明るい茶髪に映えたカチューシャ、すらりとした肢体に羽織られた麗しいメイド服。スカートから伸びるハイソックスは、もつなんと形容したら良いか……じゅるり』

キモつ！？

う、うわあ……男に見られる女性たちって、こんな気持ちだったんだ……学園。

……男性恐怖症になりそうだぜ。

『「つと、失礼。しかし、こんな美少女が居るんですね。アカデミアでは見たことが無いので、一般からの参加でしょつか?』

『いいえ、アカデミアからです。

なんて言える筈も無いので、俺は苦笑しておく。

『ではつ、一つ田の質問に参りましょつ! 燈歌ちゃんの年齢や趣味、その他諸々を教えてください』

『その他諸々って、何言えば良いんだよ……?』

『え、えと……』

声を高く、声を高く……マイクを手に、俺は小さく深呼吸した。

『年齢は18歳、です。趣味はテュエルモンスターズと料理……後読書とか、です』

『流石に小説を書くこと、とは言えない。そんな事言つたら今度こそバレる。』

『それで……その、食堂でアルバイトしています。何度か会つた事がある人も多いんでは無いでしょうか……』

『お、と黙つ事はこのアカデミアの人間なんですね』

『し、しまつたーッ!』

『いやいや、どうせこいつかはバレるんだ。……ん、俺、明

田（または明後日）からこのアカデミアに居ないよな？

まあ俺が燈夜だつて事は気付かれてないしな、うん。

『使用テッキはなんですか？』

「え、えと……」

何を言えば良いんだろう？

ドラマジ……は駄目だな。その他“燈夜”が使ったテッキも無し。

つかそもそも、後で“ユエル”するんだよな？ じゃあ今持ってるテッキを言わないと……。

「ひ……」

そこで俺は止まる。

……なんで気付かなかつた。俺は今、一ノ瀬燈夜じゃなくて市ノ瀬燈歌だぞ？

俺が今持つてるテッキ……シンクロ使つじやん。

俺の馬鹿あ……。

「……秘密、ですっ

どうせ後でバレるだろうけど、ついそんな事を言つてしまつた。

残念そうに溜め息を零す観客さん。良く見たら、その観客の中には咲之宮家や御園家の方々も居る。

……暇人だねえ、やれやれ。

『そりですか。なら、第三審査を楽しみにしておきましょー！
続いて』

それから、何個も質問をされた。

例えば、好きなカード。

例えば、得意な料理。

例えば、スリーサイズ（勿論、秘密で通した）。

『ラスト2つになりました。続いて、好きなタイプつー。』

どじん、と背後に文字が出てきそうなほど勢いをつけて、生徒会副会長は叫ぶ。

す、好きなタイプ……？

俺自身、そこまで好きなタイプつてのが明確になってる訳じゃないしなあ……無難に行くか？

「えつとー……私の事をちゃんと見てくれる人でしょうか」

『燈歌ちゃんのことを？ それって具体的には、どうこう？』

ええい、突っ込むな馬鹿者おー！

「上辺……外見に捉われないで、いつも隣で支えてくれる人です。それと、一途に想ってくれると私も心が動いちゃうかなー、と」

しまつた……つい饒舌に喋つちやつた……。

やつちやつたなー、と俺は片手を頭の後ろを搔いた。しかし観客には俺が照れているように見えたのか、歓声が湧き上がった。

『成る程、成る程。今すぐにでもナンパしたいのですが、それは後にしておいて……最後の質問です！』

後でもナンパしないでください。

『今現在、好きな人……及び付き合っている人は居ますかっ！？』

……來たか。皆の質問にも来ていた奴。ある意味、今回的一番の難所だろう。

さて、なんと答えたものか……。

居ない、と言いたいところだけど……深美さんの“設定”だと、俺は燈夜と良い感じになつてているといつ。

その上、なんか妙に女性陣……特に結姫からライバル視されてるし。結姫の場合、朝の事があつたから尚更なんだろう。

……まあどうせ、これが最後の女装なんだし、別に良いか。皆と会ひの後少しなんだしな。

「は、はい……好きな人は、居ます。けれど片思いなんですよ……」「なんとつ？ それはこの俺ですかっ！」

「違いますよ？」

『笑顔で言わると流石の俺もショックだつたり……』

いやなんか、顔が勝手に笑い始めて……。

『ちなみにその好きな人に告白はしましたか？』

あの、質問はアレだけじゃなかつたのか……？
まあ、その派生なんだろうけど。

お、良い事思いついた。

「はい、しましたよー。友達からつて言われちゃいましたけど
『う、羨ま……もとい、憎いっ！ ソイツが憎い……！ 是非、そ
の人の名前をうー』

「私と似てる名前を持つてゐ、一ノ瀬燈夜君です」

瞬間、世界が止まつた……気がした。
燃え上る殺氣。その殺氣は熱気となつて俺……もとい、燈夜に
向けられている。
……うん、アカデミアを出るまで、余り人と会わなによつてしょ
うひとつ。

「皆さん、私の話を聞いてくださいーー」

ビシッ！

俺の言葉に、観客達（男子9割）は直立した。何この子達、可愛
い。

「実はこのバチキも、燈夜君から貰つたんですよー。だから秘密な
んですー！」

……ところが設定にしておけば、燈歌がシンクロ使つても大丈夫に

なる。

後で大騒ぎする事になるよりは良いだらう、といつ判断だ。

……おかげで、男子達だけじゃなく結姫含めた女性陣も怖いんだけど。後でどう弁解しよう。早まつたかな。

けじじづせ、後でいついつ事になつていただろひし、別に良いか。遅いが早いかの問題だし。

『それでは……第一審査に参りましようか～』

……なんか、凄いやる氣が無くなつてゐる。

ミスコン、大丈夫なんだらうか……？

「……秘密、ですか」（後書き）

「うひょひ……なにか、燈夜……もとい、燈歌が可愛く思える。

廃棄人形です。

取り敢えず私が思った事は一つです。

「燈歌が出た時って、同時に燈夜の死亡フラグが立つよなあ

強ち間違つていないでしょ? うね。流石だ。

ちなみに少しネタバレ。

燈歌はこれから先、かなり活躍しちゃいますよー。ええ、大活躍しちゃいます、ハイ。

こんな展開有りつ! ? え、燈歌、まさか……………? という感じな展開を考えてしまつたのでwww

「ご感想、ご評価、その他お気に入り登録など宜しくお願ひします
!」

「……冗談の回し味がします。」

『続いて、料理審査です！』

いつの間にか気を取り戻した生徒会副会長が、声高らかに告げる。
料理、か……これなら心配は無もそつだな。
ほつと胸を撫で下ろす。それと同時に、慧たち皆は大丈夫だろう
か、と不安な色が広がる。

「……ん」

「え……あ、志藤……さん」

志藤が、俺の服（メイド服）の裾を引っ張つてきた。一応周りの
目を気にして、さとを付ける。

「……優勝候補……頑張つて」

「そんな、おれ……じゃない、私が優勝なんて出来ませんよー」

つか、出来てしまつたらこの世界つて頭おかしいんじやないか。
眼が節穴なのか、それが深美さんの化粧技術やセンスが神がかっ
ているに違いない。

「そちうひん、嘘をん頑張つてくださいね。その……料理審査」

「無理」

「早ツー!? つとむ」

ついにいつもの感じで喋るとこがだつた。才でのどいりで直したけ
ど。

しかし、こつもより早い返答だったな……志藤にしては脅威のス

ピードじゅなかつたか？

『課題料理が決まりました！ それは～…………』

溜めるなあ。

『 肉じゃが！』

おおおおー！ と大きな声が会場に響き渡る。
肉じゃがか。ミスコンだし、それなりに家庭的な料理、ってこと
なんだろうな。

『 食材はこちらで用意致しました。それではエントリーナンバー1
番、2番……どうぞ前へ！』

『 のミスコンでは、会場にキッチンは2つだけしか備わっていな
い。
だから、ナンバー順に2人ずつ作っていくことになる。イコール、
俺は最後つて事だ。』

まつ、取り敢えずはみんなの様子を見守るとしますかね。

まず、1番の慧。

少し煮る時間がちょっと短かつたりしていただけだ。まあ、上手

く出来た方だわ！」

次、2番の零。

まず食材を切ることから失敗。手を洗つていただけ、俺からすれば合格点だ。キッチンを壊さなくて良かったと思つ。

3番の姉さん。

言つ事無し！ 悪い意味で！

順番が違つた零とリリアが止めなければ、今頃キッチンの1つは使用不能になつていただろう。ついでに姉さんが作った料理を食べた人は病院行きだ。ギリギリセーフだぜ！

4番目、結姫。

基本は出来てた。けれど、切つた食材のサイズが大きかつたり、アク取りに悪戦苦闘してたりと……まあ、隣でやつていた姉さんに比べれば可愛らしい失敗だ。

……姉さんのところ、ほんっ！ とか小さな爆発も起つっていたし。

5番、リリア。

なんつーか、初つ端から頭を抱えていた。用意されていた作り方のレシピ眺めても、クシ切り？ 半月切りってなんですか？ と全然進まなかつた。

……確かに、その辺りは教えてないけどな。少しは動こうよ、リリア。

6番目は凜那。

今までの人に比べると、慧並にスムーズだつた。滞つたところと言えば、皮剥きだらうか。ちょっと苦手そうだつたけれど、それはご愛嬌だらう。

正直言つと、皮剥きに苦戦していた凛那……少し可愛かつたし。

7番田には志藤だ。

……コレに関しては、流石志藤、と言つしかない。普通の肉じゃがの食材の中に、様々な食材を混ぜ込んだんだ。それを味見しないのも志藤らしいと言えば……失礼か？

作り終えた後食べた生徒会副会長は、すぐさま2・3リットルほどの水をがぶ飲み。お疲れ様だな。

8番田……ソフィア。

俺と一緒に居てくれる女性陣の最後であるソフィアは、今まで一番良かつたと思う。

手を洗い、皮を剥き丁度良い大きさに切つていぐ。煮込み時間、アク抜き……テンプレだけど、だからこそ美味しく出来ただろうと思う。

……志藤の肉じゃがの次に食べたから、尚更美味しく感じただろう。俺も少し食べてみたい。

そんなこんなで、第一審査が進んで行く。

『それではラスト　エントリー番号17番、市ノ瀬燈歌さん！』

小さく手を振りながら会場へ。

前の番で15番、16番が終わつたから、俺が最後。17番という番号だから予想はしていたけれど、俺だけ1人らしい。

俺がキッチンに立つと、食材が残り少ないのが見えた。作るのは1人分らしく、ギリギリ足りるんだろうけど……。

(うん……)

個人的に、何か物足りない。

食事は大人數で食べるから美味しいんだ。独りで寂しく食べてもなあ、と思う。

そんな事を考えていると、視界の端に他のミスコン参加者が作った肉じゃがが写る。

16人分もの肉じゃがが入った鍋。そして、俺が作る分だった1人分の食材。

良し。

「すみません、ちょっと良いですかー？」

『あ、はい、なんでしょうか？』

「えっとですね

」

ミスコン参加者は、偉大だと思う。俺は無理矢理参加させられたから例外。つか、男だから例外って事で。

当たり前だけど、皆が皆美少女だ。妙に色っぽかったり、妙に幼げだったり。色んな人が居るけれど、皆美少女、及び美女に分類される。アイドル並、人によつてはそれ以上だ。

だからこそ、俺はその人たちに褒美をあげたいと思つ。

俺は16人分の肉じゃがを使い、少しずつ味を調節していった。

幸い、調味料は結構残っていた。一応途中までは作つた姉さんの肉じゃがも、美味しく出来上がつたと思つ。

俺の含め、17人分の肉じゃがが並ぶ姿は、壯觀だ。まだ温かい内に、ミスコン参加者や生徒会、教師の方々に食べて貰う。

……その他、抽選で決めた数人の観客にも食べて貰う。

多くの人に食べて貰いたかつたから、俺の分は無し。ぐすん。

「美味しい……」

そう呟いたのは、咲之富家で唯一抽選に選ばれた結羅ちゃん。それを口火に、どんどん贊美が広がっていく。正直に言つと酷い出来だった肉じゃがも美味しくなつていたのか、ミスコン参加者も驚いている様子だ。

「……兄さんのと同じ味がします……」

ギクうつ！

「そ、それはほらー……私、燈夜君に料理、教えてもらつたからー
……え、えへへ」

く、苦しいか……？

しかし、追求はしてこなかつた。取り敢えず一安心、かな？

なんて思つてゐると、志藤が近くに寄つてくる。
そして自分の分の肉じゃがを俺に差し出してくれた。

「志藤さん……？」

「……食べて良い…………貴方の分」

「…………ありがとう」

志藤…………お前、良い子だね…………ツ！

一口食べる。うん、ちゃんと味も付いてるし、肉やジャガイモも一度良いくらいに柔らかい。

「もう良いよ。私は皆に食べて貰いたいから作つたんだから。ね？」

「…………ん」

「うへ、と頷く志藤。小さな口でジャガイモを口にして、美味しい、
と小さく呟いた。

もつタ方だ。

流石に17人が肉じゃがを作つていたら、こんな時間にもなつてしまつ。

文化祭は今日で最後。第三審査を明日に伸ばす事なんて出来ない
から、ここからは早足になるだろう。

『それでは時間も無いので早速第三審査…………テュエルに参りましょ
うー組み合わせは機械のランダムですー　まずは　この2人つ

!』

突如上から舞い降りた液晶スクリーン。かなり金が掛かってるな

ー、とは常々思う。第二審査の食材の量も多かつたし。

第一回戦……慧VS名の知らぬ女子生徒。

いきなり慧か……しかも対戦相手、確か第四位だぞ。
しかしあ、油断大敵だな、慧。

会場に立ち、ディスクを構える2人。

「「デュエルっ！」」

「あたいの先攻だね、ドロー！ あたいは永続魔法、《凡骨の意地》を発動！ そして《デーモン・ソルジャー》を召喚！ カードを1枚伏せて、ターンエンドだよ！」

《凡骨の意地》……凡骨ビートか？ なんか、この世界つて通常モンスターのアタッカーが多いなあ。特に第四位、第三位の一部の人たちは、通常モンスター使用率が高い。

別に入れなくても良いと思うデッキにも入っているんだよなあ。凜那のアルカナや慧、基、幸仁辺りは仕方ないとしても。

「僕のターン、ドロー！ 僕はまず、《大嵐》を発動するよ！」
「つ……！ チェーン、《強欲な瓶》！ カードを1枚ドロー！」
「なら、《E・HERO プリズマー》を召喚して、効果発動！
《E・HERO ネオス・ナイト》を見せて、デッキから《E・HERO ネオス》を墓地へ送る！ そして《O・オーバーソウル》
！ ネオスを蘇生！」

お、得意の蘇生コンボか。ネオスの強みは、やっぱりHEROとこう名前を冠していることと、《O・オーバーソウル》の存在だ

るつ。

墓地に送つて蘇生、なんてドラマジには出来ない。それこそ《思い出のブランコ》でそのターン限りか、《死者蘇生》の制限カードなどじやないと無理だ。

完全蘇生なんてずるいや。

「バトルフェイズ！ ネオスと名前の変わつているプリズマーで、《デーモン・ソルジャー》を攻撃！」

「な……プリズマーの攻撃力は1700、1900の《デーモン・ソルジャー》には勝てないよ……」

「分かつてゐるよ。けれど、僕は手札からモンスター効果を発動！ 『オネスト』！！」

……え、まさか。

女子生徒 LP 4000 2300 .

「そんな……は、早すぎ……」

「続いて、ネオスでダイレクトアタック！」

「きやああああああつ……！」

女子生徒 LP 2300 0 .

決着早つ！？

後攻1ターンキルでした、本当にありがとうございます。

流石慧……ライフ4000という事に慣れてるな。俺はまだ慣れてないつてのに。

『勝者はエントリー番号1番、長谷部慧さん！ お疲れ様でした！

早速、次に行きましょう』

『

次は、どっちも俺の知らない子達だった。

……俺はそのデュエルを観戦しながら、早く自分の番来ないかな、なんて考えていた……。

「……冗談との同じ味がします。」（後書き）

……なんか、デュエルが呆氣なさすぎます。

廃棄人形です。

なんか、着々と燈夜の中で彩伽への好感度が上がっている気がして仕方が有りません。

その分、今までイベントが起きていない雲や若菜は不利かな？
まあこれは計算してやつてることなのですよ、ハイ。雲と若菜の事を忘れた訳では決して……有りません。（なんだこの間は）

それにもしても、燈夜もとい燈歌ちゃんお疲れ様です。肉じゃが作り。
こんな子を嫁に貰えたら良いのに、とか考えちゃう私はもう乙って
ますね、分かりたくなかつたです。

感想、評価、お気に入り登録……ビシビシ、お待ちしております
『じれむ！』

「あ、あっがと!……お姉さん」

『それでは、続いて御園凜那たいVS、リリア＝フォルゼン・レイラン
ドさん!』

それまでの戦いは、志藤対零、ソフィア対姉さんだつた。
勝者は零とソフィア。志藤も姉さんも、後少しつてところで逆転
されていた。ちなみに、ソフィアは相変わらずワントーンキル。や
れやれだ。

会場に並ぶ凜那とリリア。
ディスクを展開させ、副会長から始まりの合図が下る。

「『デュエル!』」

「わたくしの先攻ですわ、ドロー。わたくしはモンスターをセット、
カードを2枚伏せてターン終了します」

「私のターン、ドロー!……私は《切り込み隊長》を召喚し、効
果を発動! 手札より《クイーンズ・ナイト》を特殊召喚する!
そして、《連合軍》を発動する!」

《クイーンズ・ナイト》ATK1500 1900 ·
《切り込み隊長》ATK1200 1600 ·

「バトル! 《クイーンズ・ナイト》で裏守備モンスターを攻撃!」
「モンスターは《ドラゴンフライ》ですわ。リクルート効果により、
わたくしは2枚目の《ドラゴンフライ》を特殊召喚
「……ならば、《切り込み隊長》で《ドラゴンフライ》を攻撃する
!」

「通りますわ。効果により、わたくしは　　《ネフティスの導き手》を特殊召喚！」

リリア L P 4000 3800 ·

《ドラゴンフライ》の効果でリクルートされたのは、鳥の仮面を被った女性だ。昨日までリリアがコスプレしていたモンスターでもある。

「メインフェイズ2。私はカードを伏せ、ターン終了」

「なら、行きますわね、ドロー！　わたくしはモンスターをセットし、導き手の効果を発動！　導き手とセットモンスターをリリースして、デッキより現れなさい……《ネフティスの鳳凰神》……」

導き手によつて召喚された鳳凰。それは金色に輝く鳥だ。

……しかし、鳳凰は中国に伝わる伝説の鳥だけど、不死鳥フェニックスや朱雀とは別物の存在のはず。その上、フェニックスなどは炎を纏う鳥、鳳凰はどちらかと言えば風だ。

けれどネフティスは炎属性で、且つ不死鳥を彷彿させる自己再生能力を持っている。その上、英語名は確かフェニックスになっちゃつてたはずだ。

…………まあ、良いか。

「バトル！　確かに、《切り込み隊長》のせいで他の戦士族には攻撃出来ないのでしたわね……ならば、《切り込み隊長》に攻撃致しますわ！」

「つ……く！」

『クイーンズ・ナイト』 ATK1900 1700 ·

「わたくしはこのまま、ターンエンド

今は、どちらの流れに乗つているかは分からぬ。リリアの場にある2枚の伏せカードが胆きもか。

「私のターン、ドロー！ 私は『増援』を発動！ デッキより『キングス・ナイト』を手札に加え、召喚！ 『クイーンズ・ナイト』が場に居る時に『キングス・ナイト』が召喚に成功した時、デッキより『ジャックス・ナイト』を特殊召喚する！」

『クイーンズ・ナイト』 ATK1700 2100 ·

『キングス・ナイト』 ATK1600 2200 ·

『ジャックス・ナイト』 ATK1900 2500 ·

「バトル！ 『ジャックス・ナイト』で『ネフティスの鳳凰神』に攻撃！」

「つ……仕方有りませんわね。罠カード、『鎖付き爆弾』！ このカードは発動後、装備カードとなるのですわ。『ネフティスの鳳凰神』に装備し、攻撃力を500ポイントアップ！」

『ネフティスの鳳凰神』 ATK2400 2900 ·

「迎え撃ちなさい、ネフティス！」

翼をはためかせる。ジャックスの剣はその黄金の翼に弾かれ、返り討ちを喰らつた。

凛那 L P 3200 2800 .

『クイーンズ・ナイト』 2100 1900 .

『キングス・ナイト』 2200 2000 .

「く……私はターンを終了する」

「貴方のエンドフェイズ時、私は罠カードを発動！『デストラクト・ポーション』！ネフティスを破壊し、その時の攻撃力分……2900ポイント、わたくしはライフポイントを回復致しますわ」

リリア L P 3800 6700 .

モンスターが居なくなる事によつて、『鎖付き爆弾』が破壊された。これはルール破壊だから、『鎖付き爆弾』の破壊効果は発動されない。

「わたくしのターン、ドロー一致します。スタンバイフェイズ、墓地に存在する『ネフティスの鳳凰神』は破壊された為、自己蘇生！この効果により特殊召喚に成功した時、フィールド上の魔法、罠カードを全て破壊します！」

「く……『正当なる血統』が……！」

これは、凛那が不利……か。

『連合軍』も破壊された為、三銃士たちの攻撃力も下がる。

『クイーンズ・ナイト』 ATK1900 1500 .
『キングス・ナイト』 ATK2000 1600 .

「…………ふう、余り良いドローは出来ませんでしたわね。仕方有りませんわ……バトルフェイズ！ネフティスで『キングス・ナイ

ト》を攻撃！」

「つ……！」

凜那 L P 2800 2000 .

「カードを一枚伏せて、ターンエンドですわ
「私のターン……ドローッ！」

凜那は勢い良くカードをドローする。そのドローカードを見た凜那は、小さく深呼吸した。

「魔法カード、《戦士の生還》！ 墓地の存在する《キングス・ナイト》を手札に戻し、召喚！ デッキに眠る2体目の《ジャックス・ナイト》を特殊召喚！ 《融合賢者》！ デッキの《融合》を手札に加え、発動！ フィールドに存在する三銃士を融合し 来い、《アルカナ・ナイトジョーカー》！！！」

絵札の三銃士が交わる……天位の騎士。

「《一族の結束》を発動！ 墓地には戦士族しか居ない！ その為、私の場に居る戦士族モンスターの攻撃力は800ポイントアップする！」

「な……！？」

《アルカナ・ナイトジョーカー》 A T K 3800 4600 .

「行くぞ、リリア＝フォルゼン・レイランド！ バトルフェイズ！
アルカナで、《ネフティスの鳳凰神》に攻撃！」

（伏せカードは《王宮の鉄壁》……く、こうこう時に《サイクロン

『が欲しいですわ）

リリア L P 6700 4500 ·

「まだですわ。まだライフポイントは4500も」

「いや……終わらせる！速攻魔法《融合解除》！《アルカナ・ナイトジョーカー》をエクストラデッキに戻し、集え！絵札の三銃士！」

《クイーンズ・ナイト》、《キングス・ナイト》、《ジャックス・ナイト》の三銃士が再び揃う。

その騎士は結束し、攻撃力を飛躍的に上昇させた。

《クイーンズ・ナイト》ATK1500 2300 ·

《キングス・ナイト》ATK1600 2400 ·

《ジャックス・ナイト》ATK1900 2700 ·

「……わたくしの負け、ですわね」

「バトル続行！ 絵札の三銃士でダイレクトアタック！」

リリア L P 4500 0 ·

勝者は凜那となつた。リリアも良く頑張つたと思う。けれど、あそこで《融合解除》とはなあ……。

内心、俺は結構驚いている。なんにしろ、アルカナ格好良いー！

とか思つていた俺だし、まさか6700? 辺りのライフが一瞬で消し飛ぶとは思わなかつたからだ。

次の対戦は、結姫対見知らぬ女生徒だ。今回も俺じやなかつたらしい。

結姫には悪いけど、ちょっとトイレ……俺は静かにその場を後にして、トイレへ向かつた。

のは、良いんだけど…………。

「…………

田の前には、男子トイレと女子トイレ。

俺の今の格好 メイド服で女装中。

「…………どうに入れば良いんだよ?」

女子トイレ……は、犯罪だうつし、男子トイレで良いんだよ……な?

ちょっと自信ない。

念の為、周りに人が居ないのを確認した俺は、そそくかと男子トイレの中に。

「や、止めてよおー

「ひ……ー?」

男子トイレの中から声が聞こえた。

俺は死角になる場所に隠れて、そつと様子を窺う。

そこに居たのは男3人組と、眼鏡を掛けたどこか気弱そうな子だつた。

3人組の真ん中に居る男が持っているのは、一枚のカードだ。それを取り返そうと眼鏡の子が奮闘しているも、他の2人に遮られている。

「まさか、ここでもまた会うなんてなあ……何年振りだア？」

「返して……返してよ、僕のカード！」

「デュエルモンスターズ、止めたんじや無かったのか？　またこんなカード、大事に持つてやがって……」

ちらりと、そのカードが見える。

『冥王竜ヴァンダルギオン』 。

「こんなモノ、また前みたいに流しちまうか？　くひひ」

前……？

「へえ……前みたいに、ねえ」

「つ……誰だ！？」

俺は、久し振りにキレていた。

大事に思っているカードを……大切なモノを、壊そうとしやがつて。何がくひひだ、気持ち悪い笑い方しやがつてよ……。

「な、なんだこの女？^{アマ}驚かしやがつて……」

「なア、結構可愛くね？」

「へ、へへ……なんだよ、なら　え？」

俺は男の手からカードを取り返し、静かに通り過ぎる。
その間……数秒としなかつただろう。

泣き崩れている10・11歳くらいの男の子にカードを渡す。男の子はそれを大事そうに胸元へ持つていった。

「な、なんだテメエ……ッ！？」

「失せな。じゃねえと…………消すぞ」

「ツ……！――コイツ……眼の色が変わりやがった！？　化け物かよ！？」

そう言い残して、男たちは背を向けて逃げていく。クズの上に腰_チ
抜けかよ、情けねえ。

ふう、と俺は一息吐いて、男の子に向き直る。

「大丈夫だった？」

「あ、ありがと……お姉さん」

「おね……」

あ、そうだった。今は女装中だった。

話しながら、少しづつ声の高さを上げていこう、うん。

……しかし、今の声で良くお姉ちゃんって呼ばれたな、俺。元々、そこまで低くなかったからか？

「……このカード……お姉ちゃんから貰った大切なカードなんだ。
良かつた……」

今言ったお姉ちゃんって言つのは、多分彼の実の姉なんだろう。

「良かつたね。これからも大事にしてあげると良いよ」

俺はそう言いながら、男の子の頭を撫でた。

まあ何にしても無事で良かつたと思つ。カードは勿論、この子も。もう少し俺の来る時間が遅かつたらと思つと……俺は考えたくない。

「じゃあね」

「あ……な、名前はっ!? 僕は柏木康太かじわきコウタです!」

「俺……じゃない。私は市ノ瀬燈歌。じゃあね、康太君」

「は、はい!」

最初から名前で呼んじゃつたけど……別に良いか。

妙な充実感を得ながら、俺は会場へ戻る。

トイレに行つた本当の目的を忘れていた事に気付いた時……既に結姫のデュエルは終盤に差し掛かっていた。

「……わざわざと行こう」

「あ、あっがんへ……お姉さん」（後書き）

柏木康太を出したのは何故なのか……自分で全てを把握し切れていません。

廃棄人形です。

この話を書いて、私は確信しました。

私はデュエルを書くのが苦手だ！！

……他の作者様マジ尊敬。

そしてひとつコリアの「テック解禁。負けちゃいましたけど。ライフポイントが4000だと、伏せカードが増えてしまうことが多いです。その為、ネフティスは強いですねー。

『魔法族の結界』が破壊されちゃうなんて…………ッ！！

はい、そういう訳で（どういう訳で？）『』感想、ご評価、お気に入り登録、その他諸々いつでもどこでも云々お待ちしておりますよ！

『そんな奴に、燈夜を任せた事など出来ぬ』（前書き）

短いっスー（汗）

すみません……><

『そんな奴に、燈夜を任せた事など出来ぬ』

まるでガラスが割れるよつた、小気味良い音が轟いた。

白い壁が割れ、新たな空間へと直結する。その世界は今まで居た場所とは正反対で、暗闇が支配していた。

新しい玩具を見つけたかのように表情が輝き、特に何も確認せずに暗闇へと奔る。

右、左、前……上に下。ビームでも黒一色の世界を眺め、彼らは困惑した。

ここはどこだ、と。

我が主の場所では無い事に、微かな絶望を胸に秘めて。

『マスター……マスターっ！』
『ここは……一体』

マハーダとマナは、再び確認するように辺りを見渡した。
背後の真っ白い部屋はそのまま……しかし、それ以外は黒一色。

精霊である筈なのに、生きている心地がしない……とは、どう事だらう。

『マスターが……居ない……ッ！』

悔しくて、悲しくて、マナは歯を食いしばる。涙は流さない。流れそうになつても、すぐに押し止めた。

涙を流すのは、^{マスター}彼に会つてからで良い。

落ち着け、と軽く深呼吸をする。まだ手はある筈……その希望を信じて。

そんな時だつた。

『ほつ……良くもまあ、あの壁を壊したものじや』

『つ……誰だ!』

マハードが杖を構えながら、声を荒げる。しかし、傍に居るのはマナ一人のみだった。

『尤も……妾も1人では、壊す事など叶わぬ。弟子と一緒にだからこそかのづ』

声はこの暗闇全体から聞こえるようだつた。前後上下左右、全ての方向から聞こえてくる低めだが女性の声。

まるで脳内に響くような錯覚を覚えて、マハードは生睡を呑み込んだ。

『なあに、警戒するではないわ。妾は汝等の敵ではない 同時に、味方とも言えぬがな』

『貴方は、何者なのです……?』

『クク……何者、か。《ブラック・マジシャン・ガール》……汝と同じ、デュエルモンスターズの精霊じやよ。ただの……な』

そう答えると同時に、背後の白い部屋は姿を消した。

辺りは完全な闇に覆われる そう思つた矢先、マハードとマナの目の前に映つた人影……それは、どこか懐かしい感じがした。

高校の学生服を着崩し、左腕には見た事も無いデュエルディスク

を装着している。

首には鎖で繋がれたピラミッドのようなパズルが掛けられていた。

『こ奴が誰か、分かるかの?』

『…………』

『誰ですか?』

マハーダは眼を細め、マナはどうしても分からず口を開いた。
くく、と“声”は喉を鳴らす。

『どうやら、《ブラック・マジシャン》の方は知っているようじゅうの』

『え……!?』

マナがマハーダに視線を向ける。その表情はどうか辛そうに見えて、マナは言及する事が出来なかつた。

『流石、高位の魔術師…………と言つたところか。マハーダ、だつたのう。汝の本音を話すが良い。今の主、一ノ瀬燈夜と共にあるかそれとも、この者の元へ行くか』

『な……』

静かな沈黙が場を襲う。暗闇の中、マナは隣に居るマハーダを見つめていた。

訳が分からない、というのが本音だった。

田の前に現れた男性。不思議な力を感じる大きな金色のペンダン
ト。そして、マハーダと“声”的会話。

『…………答えられぬか。そうじやろうて。妾も、もし汝の立場じやつたら歎こんでおつたわ
しかし、』

そこで一度言葉を区切る。すると、その男性の隣に新たな人影が生まれた。

黒い髪、黒い瞳……周りの影が強い為注目されないが、実際にはそれなりに顔立ちは整っている。

一ノ瀬燈夜が、静かに瞳を閉じていた。

『マスターっ！』
『幻じやよ。妾が作り出した幻想……話す事も、触れる事も叶わぬ。
偽者なのじやからな』
『く……マスターをビビこなやつたのっ…?』
『びこもせつておひる。今頃、アカデミアの文化祭を楽しんでお
りう 表面的には、じやがな』

最後の言葉は小さすぎて、マナの耳には届かなかった。

しかし、楽しんでいる、といつ言葉にマナは安堵感を感じていた。例え得体の知れぬ声だとしても、だ。

『……まだ迷つてあるか、マハーダ。どうやら、一ノ瀬燈夜を中心として認めきれないないと見れる』
『え……お師匠様、そんな筈無いですよね？　お師匠様は
『分からぬ……もしかすると私は、まだ……』

まだ……その後の言葉を、マナは想像する事が出来ない。

まだ、認めていない？
まだ、分からぬ？

まだ

。

『そんな奴に、燈夜を任せせる事など出来ぬ』

“ 声 ” は、力強い意思を込めてマハーディマナに告げる。

『 燈夜 …… そして自分の弟子に、眞実を告げよ。その後、どうするか決めるんじやな。出なければ、主等に燈夜を任せ事など適わぬ上 』

“ 声 ” がそう断言すると、燈夜と男性の幻が消えていく。幻想と告げられた姿なのに、消えていくのを見ると胸が張り裂けそうに辛い。

『 安心せい …… それまでは、妾が燈夜を守つてやる。後は、汝等次第じゃ 』

その言葉を最後に、 “ 声 ” が聞こえなくなる。

耳鳴りがしてしまつ程の静寂。重苦しい沈黙。全方向から覆う闇は、自分の姿 …… そして、尊敬する師匠マハーディの姿も消してしまった。

まるで。

独りになつたよつた 錯覚、だった。

『そんな奴に、燈夜を任せた事など出来ぬ』（後書き）

はい、今回は少しだけ、核心に迫ってみました！

廃棄人形です。

原作、及びアニメキャラは出さないぞー、とか活き込んでたら……

…（汗）

一応髪型とかは描写していませんが、ペンダントって時点で気が付いている方も大勢でしょう……。

マハーダとマナの秘密……真実。それはもうちょっと後になります。“声”の正体も、もう少し先になると思います。

次回は、燈歌ちゃん大活躍っ！？ シンクロ使って大暴れ！ そして再び燈夜の死亡フラグが乱立する……………（嘘です。未定）

感想、評価、お気に入り登録、感想欄にて展開予想みたいなのも立てて見ても面白いと思います！

勿論、全てお待ちしておりますよーーー！！

「新たな旅立ち……なんてな」

ミスコンも終盤に差し掛かっていた。

……いや、第三次審査の“デュエル”に入った時点で終盤なんだ
うけど、そこは突つ込まないで欲しい。
だつて、だ。

『それではとうとう最終戦！ 最後の最後まで残った謎の美少女、
市ノ瀬燈歌！ 対するは、自ら立候補した“アカデミアのお姉さん
”こと、条藤深美さん！』

……なんで俺が最後なのさ。しかも相手、俺に女装させた張
本人である深美さんだし。

つか、アカデミアのお姉さんって……異名か、それ？

まあそんな事は置いといて、俺は会場へ入場する。既にそこには
深美さんの姿もあって、妙にニヤニヤした表情で俺を見つめていた。

「相変わらず可愛いねー、燈歌ちゃん」

く……絶対に楽しんでやがる……！

「そ、それはありがとござりますー」

無難な答えを言いながら、俺はディスクを構える。
デッキがオートシャッフルされているのを眺めながら、俺は小さ
く深呼吸し。

弱エ、思つた以上に弱いぜ……！
タイコニシト

さあ、残り時間までもう少ししだぜ？

まるで針が刺さったかのよつて、心臓が暴れだす。その動悸は痛みを増し、喉を震わす。

オートシャツフル機能が終わりを告げる。

息苦しい……まるで、脳が呼吸する事を拒絶しているかのよつだ。

『少し休むが良い、我が主よ。どうぞせよ、このままでは過呼吸で失神じやぞ？』

そんな、彼女の声に従つよつて……俺の身体は、地面へと吸い寄せられるように墜ちて行つた。

「…………」

小鳥の轟り……それは俺の眠りを穏やかに覚ます氣付けとなつてくれた。

上半身を起こして、辺りを見渡す。

鼻腔をくすぐる薬品の匂い、白い幕に覆われた場所……俺が眠つていたのは、真っ白のベッドだった。

右側に置かれている机の上には、俺のデュエルディスクとテックキが置かれていた。

「……」

「保健室を」

「ひ……」

幕が開かれ現れたのは、御神新だつた。
中に入ってきた御神は、再び幕を閉じて近くにあつた丸椅子に腰を下ろした。

「おはよつ、燈夜君……こや、今は燈歌ぢやん、と呼んだ方が良いのかな?」

「へ……、げつ! ?」

ふ、服……俺、メイド服着てるつ! ?

流石に力チユーシャとかは外してあるけれど、それこそ文化祭の時と同じ衣装だ。

文化祭 そうだ、俺、ミスコンの途中で……。

「困惑してゐみたいだね。まず言つておきたい。今日は文化祭が終わつて1週間が経つた日だよ」

「は……1週間! ?」

俺、1週間も寝てたのか……あれ、てことは1週間も同じ服着てたのか?

「あ、安心して良いよ。服は毎日取り替えてるから。条藤さん……だつたつけ? 彼女が拘つてメイド服をね」

「あの人は……」

溜め息を零す。

「あの後、アカデミアは大騒ぎだつたよ。ミスコンは中止したし、彩伽ちゃんや条藤さん、それと君を診てくれた保険医が証言した言葉でさ」

「言葉……？」

「君が男……それも今話題の第五位、一ノ瀬燈夜だってこと」

「…………バレたのか。まあ、緊急事態だつたし仕方ないだろ？…………くそっ。

再度溜め息を零して、がっくりと肩を落とす。変な目で見られるのだけは嫌だな。

「…………皆は？」

「元気だよ。君が倒れたことによつて、精神的に参つてている節はあるけれど……取り敢えずは普通にアカデミア生活をしている」

「…………そつ、か」

なら、何よりだ。

俺はベッドから出て、ティスクにデッキを差し込む。そして一応、左腕に装着した。

「ど」「行くんかい？」

「…………どうせアンタなら、俺の行動なんてお見通しなんだろ？」

「ふつ…………わて、ね…………さよなら、と告げた方が良いのかな」

「…………いらねえよ」

じうせお前とは、いつか絶対、会つ事になるんだから。

俺はまず、着替る為にと第五位の寮へ向かった。

アカデミアの制服……ではなく、唯一持つて来ていた（といづより、この世界に来た時に着ていた服）私服に着替えた。

即効で俺が着ていたメイド服を洗い、乾かし、綺麗に置む。そのメイド服は紙袋に仕舞い込んだ。

数少ない余りのカードと数個のデッキを黒い箱型のボックスに仕舞つて、それをリュックの奥へ入れる。

ある程度の金が入った財布は尻ポケットへ。圈外で使えない携帯電話や最近使っていない音楽プレイヤーをポケットに入れ、DPは部屋の机の上に置いた。

「うし……荷物が少なくて楽だな

リュックを背負い、メイド服の入った紙袋を持つ。靴を履き、部屋を出る。

その直前、俺は部屋に振り返った。

「短い間だったけど、結構感慨深くなるな……」

一度礼をして、俺は部屋を後にした……。

まずは購買に、だな。

そう思い立つて、俺は校舎へ向かった。

さつき時計を確認したら、既に講義が始まっている時間だった。
今頃でも、俺が起きた事を知らずに講義を受けているんだろう。
……好都合だ。俺はそう、淡く微笑んだ。

『これで良いんじゃな、燈夜よ』

「ん……ああ、お前か。良いんだよ」

別れなんて、唐突だ。挨拶なんてしない方が、別れは辛くない
。

購買に着いた俺は、カウンターに居た深美さんに手を上げた。

「と、燈夜君！ 眼が覚めたんだね！」

「お陰様で」

「そつかー。あれ、けどなんでここにいるの？ というか、なんで
私服……？」

「それは……まあ、訳が有りまして。これ、お返ししますか」

そう言いながら、俺は紙袋を手渡す。

中身を確認した深美さんは……あらう」とか、その紙袋を付き返
してきた。

「あげるよ」

「……はー？」

「練習する為の服、必要でしょ？」

「何の練習ですか？ 女装なんてしませんよっ！」

「え……？」

「そんな不思議そうに見んで下さー……」

まるで俺に女装趣味があるみたいじゃないか……。

「……まあ、それでもあげるよ。なんならいつとあげようか？」

「要りませんっ！」

「まあ、まあ。貰える物は貰つておきなさいって。『//』とかじゃない限りは、何でも得なんだから」

「…………はあ、分かりましたよ」

……今度、リサイクルショップとかに売ろう。

内心でそんな事を思いながら、俺はその紙袋を折つてリュックの中に入りこまつ。カードしか入つていなかつたリュックの中は、紙袋を入れてもまだ余裕がありそつた。

「あの……深美さん」

「ん、どうしたの？」

「……ちょっと訳あって、アルバイト、辞めたいんですけど……」

「…………」

……沈黙が、凄く怖い。

まるで俺を見定めているかのような深美さんの視線に、俺は冷や汗を搔いた。

「……その訳つて、君にとつて大事な事？」

「はい。大事です」

約束だからな……凜那の父親と。

約束は守らなきや……完全な自己満足。その自己満足の為に深美さんたちに迷惑を掛けてしまつなんて……俺、なんて最低な奴なんだろ。

やつぱり俺は、自分が嫌いだな、うん。

「……そつか。うん、分かった。けど、いつでも待ってるからね！私も、他の従業員さんも……勿論、お姉さんも。燈歌ちゃんの帰りをねつ」

「あはは……ええ。また機会があれば……」

多分、無いんだろうけど。

俺は最後、深美さんに頭を下げてその場を後にした。

……そして、今度は最上階。プレートには、校長室、と書かれていた。

2度、軽くノックをする。入室許可を告げる声が聞こえて、俺は中に入った。

……久し振りに会つた、虎島校長には。

「おや、君は……」

「ノ瀬燈夜です」

「眼が覚めたのだね。何か用かね？」

そこで俺が話したのは、退学する。文化祭2回目の時点で一応は云えてあつたけれど、ちゃんと挨拶はした方が良いと思った。

「そうか……しかし、君はまだ病み上がりだ。もう少し
「いいえ……もう決めた事ですから。それに、体調は大丈夫ですよ
「……………」

では、と告げて俺は虎島校長に背を向ける。

そして、ドアを開ける……直前に、虎島校長は俺を呼んだ。

「一ノ瀬君。君は既に、卒業までの学費や寮費を払っている。籍は
置いておくから、こいつでも戻つてくると良い」

「……………失礼します」

深美さんと良い、虎島校長と良い……優しいね、本当。涙が出そ
うになるよ。

校舎を出る途中、講義中の教室を影から見てみた。案の定、零や
姉さんたちが真剣に講義へ取り組んでいる最中だった。
俺は静かに、その場を後にした訳だけだ。

そして、船乗り場。時間通りに船が来るなら、後数10分つ
てところだらう。

もうすぐお別れだ。

財布の中身を確認……つん、ある程度は残つてゐる。数日なら大丈
夫だらう。

その間にアルバイトして、こざとなつたらカードを売つて……ど
うにか、生計を立てるしかないよな。

そう考へながら、俺はアカデミアへと振り返った。

短い期間だつた、と思つ。

けれど……長かつた、と思つ。

時が経つのは早いもので、このアカデミアに来て既に2ヶ月ちょっとが経つていた。

アカデミアに来て、慧、基、幸仁と再会して。その3人は記憶を失つていて。

まずは、慧とのデュエル……そして、予想外の告白。次に彰正先生とのデュエル。その後に凜那と出会い、友達となつた。

そういうや、マナが結姫と慧にライバル宣言した事もあつたつけ。その時は気付かないフリをした俺だけ……全く、精靈が人間に恋なんてするなよな。

幸仁とソフィアのデュエル。初ターンからブルーアイズを3体並べる幸仁は流石、とか思った。まあ次のソフィアのターンでワンキルされた訳だけど。

そして、雫と若菜姉さんと再会。まさか2人までこいつの世界に来るのは……。

初めて出会う御神新。ソフィアから現れるかつての級友、志藤彩伽。語られる真実……。

基から受け取つた果たし状。幸仁とは櫻都町でデュエルして、記憶を取り戻してくれたんだつたつけ。

そして 文化祭。

「色んなことがあった気がする……」

俺が「ひつみれば、2ヶ用ひよつとなんて考えられないくらいの密度だ。

それも…………もうすぐ、終わるんだ。

遠くに、船が見える。二つの間にか、結構な時間が経つていたらしい。

「新たな旅立ち…………なんてな」

口ひせ、したくなない言葉だナビ…………。

心の中では、既に出ておいで。

「新たな旅立ち……なんてな」（後書き）

最後は少し早足になつてしまひました……すみません^ ^

廃棄人形です。

文化祭編、終了了！ 思つたより長くなつた……おかしいな、当初では「3・4話で終わるんぢやね？」とか考えてたのに（苦笑）

そして、前回の次回予告は全くの外れ！ まさかの退学！ 燈歌……燈夜は倒れてしまい、デュエルは出来ませんでしたッ！！

それはともかく、新たな物語の始まりです。ある意味、この小説の核となるでしょう、ハイ。

……あれ、私の頭の中では、燈夜とヒロイン達の絡みが無い。

馬鹿なつ！？

ところで、そろそろ人気投票みたいなことをしたいなあ、と。
え、まだ人気低いのに良くやるなあ？ あはは、ですよね~。

その辺り、意見くださいなつ！ ぐださこつたらぐだせこつよ
しくしく。

てな訳で、その辺りを踏まえた感想、評価などをお待ちしております！

番外編～瀬野基と瀧川幸仁～（前書き）

文化祭編終了記念の番外編！

ゲストは基と幸仁です！！

番外編～瀬野基と瀧川幸仁～

作者「ふ〜、見直すと結構進んだね〜」

基「ホントにな。未だに考えてない事が大半の癖によ

幸仁「いつも行き当たりばつたりか……いつまで続くか

作者「て、手厳しい…………と、ところであつー 燐夜の男友達つて
言う設定だけど、2人はその事、思つてる?」

基「燐夜の? そりや、光栄だとは思つてるけどよ…………なあ?」

幸仁「……出番が少ないのだが」

作者「…………すみません。何せヒロインの影を濃くしたいと思つてた
ら、出番が、ね……(汗)」

幸仁「その割には、御神は出番が多いな

作者「そりや、燐夜を抜かせば男性群の中で最重要人物ですから!」

基「俺たちも重要じやね?」のかよ

作者「そ、そろは言つてませんよ? ええ、ちゃんと2人のイベントも有りますし……えと、2人は恋人が居るんでしたつけ?」

基「テメエが聞くのかよつ!?」

幸仁「居るが。俺も基もな

基「べつ、別に恵美はそんなんじゃねエよッ！」

幸仁「……誰も恵美、とは言ひてないが？」

基「つ……チツ…」

作者「…………えと、まあ関わり深い女性は居る、という事で。じやあ女性関連のイベントは無い方が良いかもなあ…………その上燈夜を絡ませるとすれば…………」

基「……今考えてやがんのかよ」

作者「うん、分からんつー…」

基「諦めんの早Hー？」

作者「私は元々、後々のイベントを考えるのは苦手なのつー。基本的にパソコンの前で曲を聞きながら、その場で考えて執筆するんだから！」

幸仁「……良くもそれで、昔は小説家を志していたものだな」

作者「うん、まあね……今はもつ、私の執筆能力じゃ駄目だ、と諦めちゃいましたけど」

基「……燈夜と同じ事言つてやがる」

作者「それはそうだよ。一部を除いて、燈夜の設定はリアルの私と

同じなんだから。趣味とか。魔法使い族が好きっていの、も、私が
ら引き継がれてるし

基「はあん。つか話変わんだけよ、俺と鴻……ソフィアだったか?
アイツと俺、口調似てね?」

作者「うん……私もたまに混乱する」

幸仁「…………はあ

作者「溜め息吐かれたっ! ? ち、ちひさんと区別は付くようじ
るよ! ? 」

基「例えば?」

作者「えっと、ね……同じ台詞を例こすると、」

燈夜『知らねえよ』

基『知らねエよ』

ソフィア『知らねーよ』

作者「ごめんなさい(――)」

基「…………たりイ」

作者「ごめんなさい(――)」

幸仁「ふ……まあ、何もしていなによつてマシだろう

作者「ありがとうございます……その優しさが凄く心に刺さりますけど。さて、それではこの2人の紹介をしちゃつたりしましょう！」

基「変な事書くなよ」

作者「…………善処します」

瀬野基
せのハジメ

主人公の親友。

年齢：17歳。

性別：男。

身長：燈夜より少し高い程度。幸仁よりは低い。

体重：考えてません！

使用デッキ：『真紅眼の黒竜』デッキ。
レッドアイズ・ブラックドラゴン

主人公・一ノ瀬燈夜の親友であり、チームLEGENDsのメンバー。

耳にはピアスを付け、ドクロのシルバーネックレス。指には数個の指輪をしている、元不良。

中学と、高校の途中までは喧嘩ばかりしていた。が、学校に多額の寄付をしていた両親が原因で退学にはならなかつた。

幼馴染の沢崎恵美が好きだが、本人は恥ずかしくて言い出すことが出来ない。

しかし、朝、基を迎えて行つたり一緒に帰宅する事もあれば、お弁当を作つてくれた事もあった為、実質付き合っているようなものだつた。基自身は否定しているが。

両親とは疎遠になつており、余り顔を合わせていない。

4つ年下の弟が居る。

それなりに料理は出来るが、地球に居た頃は殆どがインスタントだつた。その為、燈夜と知り合つた後は作つて貰う事もしばしば。

燈夜に関しての記憶を失つていたが、燈夜とのデュエルの際、レッドアイズが燈夜の場に出た時に記憶を取り戻した。

使つたカードは『死者蘇生』。

御神新に選ばれた救世主の1人。

たきがわユキヒト
瀧川幸仁

主人公の親友。

年齢：17歳。

性別：男。

身長：高い。

体重：平均。

使用デッキ：『ブルーアイズ・ホワイトドラゴン』^{ブルーアイズ・ホワイトドラゴン}『青眼の白龍』^{ブルーアイズ・ホワイトドラゴン} デッキ。

主人公・一ノ瀬燈夜の親友であり、チームLEGENDsのメンバー。

いつも冷静沈着で、熱くなる事は少ない。それこそ、過去を振り返つても数回しか無い。

周りを良く見ており、女性陣が燈夜に向かっている感情も逸早く察知している。

……しかし、影が薄い。

燈夜と出会ったのは中学時代で、基とは高校に入つてからだった。中学時代は生徒会長を経験している。

興野舞という大学生の恋人が居る。中学、高校と陸上部であり、元気で活発な少女だといふ。尤も、幸仁曰く大学生になつてからはある程度、大人しくなつたらしいが。

余談だが、幸仁が興野舞と出会つた時、燈夜も一緒に居た。

料理は得意な方だが、燈夜ほどではない。

燈夜に関しての記憶を無くしていたが、ブルーアイズが燈夜の場に現れることで記憶を取り戻す。

使つたカードは『自立行動ユニット』。

御神新に選ばれた救世主の1人。

基「おい、二郎」

作者「へ？」

基「俺ア別に恵美の事、す、好きじゃねエよー。」

作者「基……男のツンデレは、萌えなぐぼあつ……！」

基「殴るぞ、テメエ」

幸仁「既に殴り飛ばしているが……」

作者「いっつー……私のライフはもうつだ

幸仁「それは作者のライフが少ないのか、それとも基の攻撃力が高かつたのか」

作者「私のライフは2400だったよ？」

基「俺の一撃はレッドアイズ並かよつー？」

作者「さて、漫才はここまでにしておこで」

幸仁「頬を擦りながら言われても、な……」

作者「痛いんだもん。それはともかく」といつう、新たな物語の開幕だあー！」

基「だな。流れは決めてあんのか？」

作者「あつはつは、何のことだい？」

基「フリイ、お前に聞いた俺が馬鹿だつた

作者「まあ、読者様には焦らしがプレイつて事で、次とその次の投稿はヒロイン紹介になると思つからねつー」

幸仁「本音は？」

作者「その間に少しばえておかないと…………はつー？」

基「本当に本音、ぶちまけやがつた…………」

作者「といひで、ひうせつて燈夜は復活するの？　後、柏木康太つて誰？」

基「知らぬよつー！」

幸仁「自分で考えるんだな……」

作者「はあ……我が仮だな、つたぐ」

基&幸仁「お前に言われたくない

作者「さて……最後に一言聞こえますか」

基「だな」

幸仁「ああ」

作者「カルピスは至高。異論はふべつー?」

基「殴るわ」

幸仁「蹴りはしたな、今……」

作者「あつあつあー…………仕方ない、真面目でやるか

基「最初からじゅう

作者「これからも、【遊戯王 LEGENDS～伝説の呪文～】
を、「

基「宜しくな

幸仁「宜しく」

作者「宜しくお願ひしますつー！」

番外編～瀬野基と瀧川幸仁～（後書き）

少し影の薄い親友ポジション、基と幸仁でした（苦笑）

廃棄人形です。

話中でも書かせていただきましたが、少し……ほんの少しども考え
る為に、次とその次はヒロイン紹介にさせて貰います。

こちらの都合で申し訳ございません^ ^

また、ヒロイン紹介とは言つてもマナなどの精霊はまだ謎が多いと
思つので、紹介は致しません。
……精霊のヒロインは増えますし(〃)

感想、評価等、お待ちしております！

番外編～ヒロイン紹介（1）～（前書き）

今回紹介するのは、慧、雲、若菜、彩伽です。

地球上に居た時から、燈夜の事を知っていたメンバーですね！

ネタバレはしないようにしています。

ただ、興味が無いなあ……とか、見なくて良いや、って人は飛ばして頂いて構いませんよ？

番外編～ヒロイン紹介（1）～

長谷部 慧
はせべケイ

ヒロインの一人であり、チームLEGENDsのメンバー。

年齢：17歳。

性別：体は男、心は女。

髪の色：明るい茶。

瞳の色：焦げ茶。

趣味：遊戯王、ハーメンタル・ヒーロー雑誌を読む事

使用デッキ：『E・HERO ネオス』デッキ

第1部、「別れの言葉は、要らないよな……」で登場した。

燈夜が小学3年、慧が小学2年の時に出会った、少し遅めの幼馴染。昔からその容姿は可愛らしく、女性よりも男性に告白される事の方が多いかった。

地球に居た頃は、基本的にレディースの服を着ていた。

性同一性障害という病気で、小さな頃から身体と心の性別が違う事に悩んでいた。その上、苛められていたところを助けられた上に友達を作るキッカケをくれた燈夜に惹かれるが、性別の問題で一步引いていた。

しかし異世界に来て、流れであれ告白し、その後「お前はお前のまま、と諭され引く事を止めた。

……最近の悩みは、告白したのに今までと殆ど変わらない燈夜の対応だつたりする。

遊戯王を始めたキッカケは燈夜。燈夜がやっているのを隣で見て、自分もやりたい、と志願した為。その際、燈夜に貰ったネオスを軸としてデッキを構築した。

後述の雲や若菜とは違つた感じで燈夜に依存している節がある。

異世界に来た時には燈夜に関しての記憶は無かつたが、燈夜とのデュエルの際、ネオスが燈夜の場に行つた為、記憶を取り戻した。

使つたカードは『N.O.・11 ビッグ・アイ』。

御神新に選ばれた救世主の1人。

いちのせシズク
一ノ瀬雲

ヒロインの1人であり、燈夜の妹。

年齢：17歳。

性別：女。

髪の色：黒。

瞳の色：黒。

趣味：遊戯王以外は今のところ特に無し（理由有り）

特技：燈夜の居場所を特定する事

使用デッキ：セイクリッド

第12部、「こ、コレは……ッ！」で登場した燈夜の妹。

いつも無機質な表情をした美少女。雰囲気はかなり大人っぽく、姉の若菜とはほぼ正反対な性格。

しかし、自分が貧乳であることにコンプレックスを抱いており、それに対しても拗ねる事もある。その辺りも若菜とは正反対である。

遊戯王を始めたきっかけは、燈夜がカードを漁っている際、自分も同じ時間を共有したいと思った為。
その時、ほぼ同時期で登場したDTのデッキを構築し、以来使用し続けている。

頭は良く、遊戯王のルールを大学生の若菜よりも先に憶えてしまつた程。

実はまだ、燈夜の記憶は戻っていない。しかし、自分の本能と欲望のままに燈夜を意識している。
記憶が無いことに内心、かなり悔やんでいるが、一人で背負つている。

御神新に選ばれた救世主の一人。

いちのせつかな
一ノ瀬若菜

ヒロインの一人で、燈夜の姉。

年齢：19歳。

性別：女。

髪の色：茶。

瞳の色：ブラウン。

趣味：遊戯王、燈夜の観察、日記

特技：特に無し。

使用デッキ：ヴェルズ。

第12部、「こ、コレは……ッ！」で登場した燈夜の姉。

間延びした喋り方が特徴的な美女。妹の雫と違い、豊満な身体を持つている。地球に居た時はその身体を使って、燈夜を誘惑していた（半分ほどは天然だが）。

目立ちはしないが、雫と同じくらいには燈夜至上主義。他の人がどうなるううと、燈夜さえ無事ならば良いと思っている。

遊戯王を始めたきっかけは、燈夜に誘われたから。雫が遊戯王を始め、姉の若菜だけが仲間外れなのは嫌だから、という理由で誘われた。

雫に対抗してか否か、セイクリッドと同じDTで登場したヴェルズを使用。

小さな子供に良く好かれる体质。それは若菜が醸し出す柔らかな雫困気が原因だろう。

雫と同じく、燈夜の記憶は戻っていない。しかしそれを悔やむ事は無く、また多くの想い出を作れば良いと考えている。

御神新に選ばれた救世主の一人。

志藤彩伽
しじゅうアヤカ

ヒロインの一人で、燈夜とは中学の時の同級生。

年齢：18歳。

性別：女。

髪の色：水色。

瞳の色：深い青。

趣味：遊戯王、読書

特技：暗算

使用デッキ：天使

第9部、「絶対、好きになつてもらうから」で“鴻ルナ”として登場。

本当の名前が出たのは第14部、「わたしが一ノ瀬君を……護る」。

いつも無表情で、言葉数も少なめ。しかし、その発言が的を射ていることが多々。

ただ感情が出すのを苦手としているだけで、心中は他の人と同じく豊か。特に燈夜の事となると、自分の感情を暴走させてしまう事も。

甘い物と動物が好き。特に苺のショートケーキが大好物で、地球上に居た時は犬を2匹飼っていた。

俗に言う天才で、彩伽自身に自覚は無いが全国レベルの頭脳を持つ。天才的な頭脳を持っている事、寡黙で無表情な事、そして美少女だ

から、という理由で友達が出来る事は無かつた。

そこに燈夜が話しかけ、以後、暫く行動を共にしていた。

自分でも自覚するほどに燈夜至上主義。この辺りは前述のヒロインと似ている為、意気投合している。

遊戯王を始めたのも、燈夜がやつてるのを見ていた為。

また、唯一地球から異世界に来た人間の中で燈夜に関しての記憶を有したままだつた。

…………何気に、燈夜の中で一番好感度が上がつるのは彼女なのがもしそれない。

御神新に選ばれた救世主の一人。だが、その後異世界に居た“鴻ソル（＝ソフィア）”と魂が完全にリンクしてしまい、融合へと至つた。

番外編～ヒロイン紹介（1）～（後書き）

書く事が有りませんね。rz

感想、評価等お待ちしております！

番外編～ヒロイン紹介（2）～（前書き）

今回は結姫、凛那、リリア、ソフィアです。

番外編～ヒロイン紹介（2）～

咲之宮結姫
さきのみや「カウヒ

ヒロインの一人で、咲之宮グループの三女。

年齢：16歳。

性別：女。

髪の色：ピンク。

瞳の色：蒼。

趣味：遊戯王、テレビを見る事（特にプロリーグでの結羅の活躍）

使用デッキ：植物

第2部、「……現実逃避して良い？」で登場。しかし、第2部時点では名前の登場は無い。

暴漢に襲われていたところを燈夜に助けて貰った少女。燈夜が異世界に来て始めて出会つた人もある。

世界的にも有名な企業、咲之宮グループの三女。だが、デュエルモンスターZなどに関して他の姉妹よりも才能が無く、今現在は家族と暮らしてはいない。

また、それが原因で家族との合流は疎遠となつっていたが、文化祭1回目の事件で良好になつてているという。

助けて貰つたとは言え、初対面だつた燈夜を家に泊めたり抱き付いたりするなど、意外に大胆。また、燈夜が初恋らしい。

基本的には温和で、怒ることは少ない。が、燈夜を侮辱された際に

は実の親や姉相手に啖呵を切つた。

敬語なのは昔からの癖で、家族以外には基本的にさん付けである。

御神新に選ばれた救世主の1人。

御園みその凜那

ヒロインの1人で、決闘者道場の1人娘。

年齢：19歳。

性別：女。

髪の色：黒。

瞳の色：灰色。

趣味：強い決闘者の研究。

使用デッキ：絵札の三銃士。

第11部、「ソイツが俺の敵か」にて登場。

教育場である“御園ヴェーベル”1人娘で、修行の為にアカデミアに通っている。

常に父親や将来継ぐことになる“御園ヴェーベル”的プレッシャーを背負つていて、デュエルを楽しむ事が出来なくなっている。

燈夜の事が気になつて入るようだが、本人はまだそれが何なのか気付いていない。

今までがずっとユエルばかりの人生だった為である。19歳という、ヒロイン勢（精霊など例外を除く）の中では一番の年上だが、同時に一番の乙女。

また、結姫と同じく燈夜が初恋。

最近では、燈夜たちが居た世界に興味を持つている模様。だが、それを他人には言っていない。

御神新に選ばれた救世主の一人。

リリア＝フォルゼン・レイランド
ヒロインの一人。お嬢様。

年齢：17歳。

性別：女。

髪の色：金。

瞳の色：蒼。

趣味：朝の占いを見る事

使用デッキ：『ネフティスの鳳凰神』 軸。

第12部、「」「レは……ッ！」で零、若菜と共に登場。

レイランドカンパーー、通称「Cの娘」。しかし末娘なので、それなりに放任主義で育てられてきた。

とは言え、教育係によつて常識、知識、デュエルモンスターZなど基本的な事は教わってきた為、ヒロイン勢の中でも一、二を争う常識人。

しかしそれ上に、ぞんざいな扱いを受ける事も。

作中、少し可哀相な人の一人である。

御神とは合流があつたようで、異世界に来て勝手が分からなかつた零と若菜と旅をしていた。

とは言つても、まだ日には自体は浅い。

朝の占いが好きで、その結果により気分が変わってしまうほど。特に「外に出ない方が良い」などと告げられた日には、アカデミアを休んでしまつた。

『平々凡々だけど、他の殿方よりは礼儀の為つた男性』というのが、最初の燈夜の印象だつた。

が、今まで接してきた男性……御神新との関係を持とうとしている者や、しごの財産を狙つてくる人間とは違い、真っ直ぐ真摯な視線を向けた燈夜に心打たれる。

御神新に選ばれた救世主の一人。

おおとじ
鴻ソファ

ヒロインの一人であり、志藤彩伽と魂がリンクした人間。今は特に

関係は無い。

年齢：18歳。

性別：女。

髪の色：銀色。

瞳の色：翠。

使用デッキ：墮天使。

第9部、「絶対、好きになつてもらうから」で声だけ登場。ちゃんと出てきたのは第11部、「ソイツが俺の敵か」である。

元々は普通の女子（少し不良気味）だったが、地球で過ごしていた志藤彩伽が救世主になつた事で酷似していた魂が繋がつた。

燈夜と“友達”になるまでは、一匹狼だった。なるべく誰とも接しないで過ごそうとしていた。

過去を抜きにすれば、燈夜が友達第1号。今は他のヒロイン勢とそれなりに仲良く過ごしている。

また、御神をざことなく危険視している数少ない人物。

本名はソフィアだが、特定の人物以外にソフィアと呼ばれるのを嫌う。その為、一部の人には鴻ソルと名乗っている。

後天的にだが、御神新に救世主として選ばれた1人。

番外編～ヒロイン紹介（2）～（後書き）

と言ひ訳で、“人間”的、ヒロインたちでした～！　ぱちぱち。

廃棄人形と申しますです。

勿論、これが全てではないかもしません。この小説自身、メインの『遊僕』の息抜きみたいに書き始めましたから、私の気分で展開が変わっていきますし。

え、息抜きなのになんで毎日更新なのか？　私も知りませんwww

後、息抜き作品なのに何で『遊僕』なんて目じやないくらいの人気なのかも突っ込まないで下さいね　潰しますよ

さて、次回からは新たな章へ！

皆さん、燈夜の活躍……その他諸々を、（プレッシャーにならない程度に）お楽しみください～！

感想、評価etc・etc……いつもいつもでもいつまでも、お待ちしております！

「いつでも待ちますー。」（前書き）

新章開幕ですー。（キービジュアル）

「いつでも待ちますー。」

信じ難い事に、だ。

まるで「実は貴方、天才なのよ」見たいな事を言われたみたいな
非現実的な事なんだ。

俺だつてアレだ、もう一八歳とは言え男の子だ。船から降りて、
“これから俺の新しい人生が始まるんだ”みたいな馬鹿な事も考
えて居たさ。

現実だと、まずホテルと働き先を探さないと、と足を進めた訳だ
けど。それでも、真新しい事に目をキラキラさせる少年だったんだ、
俺は。そこ、鼻で笑うな。

なのに……本当、信じ難い展開である。

「お茶で良いですか？」

「あ、はい」

……俺は今、女の子の家に居ます、ハイ。

俺がアカデミアから出て早くも一週間。今頃雲たちも心の整理が

出来たかな？ まだ短いと思えなくも無い。

それはともかく、その辺りは御神や彰正先生、後は基や幸仁辺り
がどうにかしてくれるだろう。恋する乙女たちよ、頑張れ……

俺って最低だな。

そんな自分がさらに嫌になりながら、俺はファンシーな外見をしたカードショップの店員をやっていた。というより、“売り子”だらうつか。

……ファンシーな外見の。

(……なんで俺、ちゃんと調べなかつたんだらう……?)

いやまあ、1週間も働き口が見付からなかつたら焦るだらうケド。馬鹿だろ、俺。ああ、馬鹿か。馬鹿だもんな、俺。

「いやー、君がそんな衣装を持つてるとほんと良くて似合つてるし……元々そんな趣味だつたのかねえ?」

「断じて違います。やらされてはいましたけどね……」

「そりゃかい、そりゃかい。まつ、似合つて、さらにならんと働いてくれてるから」(ちとしては万々歳さ)。あ、その格好だと名前は燈歌ちゃんで良いかね?」

「名前まで一緒つ!?」

……うん、つまり、アレだ。

俺の新たな人生の始まりは、女装で始まつた訳だ。しかも深美さんから貰つたメイド服で。

俺はウイッグのツインテールと共に溜め息を一つ。一々揺れるこの髪が凄く鬱陶しい。

まあ、生活の為だ。これくじりどうに事は無これ……あつと。

「あの～、『レトロセイ

「はい。えつとー…… 2300円ですね」

「はい」

「ありがとうございます。お釣りは200円になります」

流石ファンシーな店だ。店名も『カードショップ・百合の花』だからか、客は女の子ばかりだ。

だからか、自称シャイボーキな俺はちょっと辛い。おしゃべり、自称（笑）とか言つなんよ！？

……まあ、ナンパみたいのは無いだろうから安心、安心。

……とか、思つていた俺も居た。数秒前の俺は甘かったね、うん。

「あの……新しい店員さんですか？」

「あ、はい。今日からなんですー！」

「そりなんですかっ！ その……背が高くて、スタイル良いですね

！」

「ありがとうござります。貴方も可愛らしいですよー！」

「そ、そりですか……？ な、ない……えと、仕事終わったら、一緒にお食事、行きませんか……？」

「え？」

……いや、落ち着け、餅搗け俺。普通にアレだろ、「友達になりましょウ」って奴だろ？ 大丈夫、今は一応女同士だ。他意はないさー 多分！

「えつと……」

「氣をつけな、燈歌。」ついに輩は、お食事=ホテルだからね

「「」みんなさーい、今日は用事があるので「」遠慮をさせて貰いますね

店長である美弥子ミヤコさんの耳打ちが無ければ、俺は喰われるところだった。危ない危ない。

残念そうに肩を落とす女の子。ちょっと可愛いし可哀相だけど……男つてバレたら大変だからね。

……俺の社会的な存在とか、百合の花の信頼とか……いきなり俺の働き口が無くなるのも困る。

「じゃあ、また今度お願ひしますねっ？」

「え……あの、ちょっととつー?」

……俺の返事なんて待たずに行ってしまった……次の言い訳を考えておかないと。

そう、この店の名前は百合の花。百合である。百合。大事な事だから何回も言つナビ。“百合”なんだ。

百合とは、花以外にも意味がある。女性同士の恋愛とか……詳しい事は知らないけど、そんな感じだ。

元々は先代の店長……美弥子さんの母が花の百合が好きで名付けただけなのだけど、同性愛者の女性がこの店に来るようになってしまつたらしい。

……なんか、店内が凄く盛り上がりってる。勿論女性同士で、だ。何故だらう、ピンク色が見えるよ……。

「ここは出会い喫茶かつ！」

「はあ……」

「頑張りな。あたしゃもう結婚してるし、年齢も年齢。殆ど誘われはしないけどねえ」

確かに、美弥子さんの左手の薬指には指輪が嵌められている。
というか、年齢つて……まだ二十代、悪くても三十前半でしょう
が。まさか、外見だけとか…………いやいや、この外見で40、5
0とか……現実だと犯罪だらう……ははは（苦笑）。

「けど、アンタは違う。綺麗であり、且つ可愛らしい容姿にハスキ
ーボイス、身長も高いのは一部を除いて、女性には憧れなのさ。1
8歳だから犯罪でもないしね」

……多分、俺の服装がメイド服だからというのもあるんだろう。
男の俺を採用した美弥子さんも美弥子さんだが、当たり前のように
俺に合うサイズは無い。そもそも店員少ないし。今は美弥子さん
と俺だけだし。

……だから、届くまではこのメイド服が俺の制服である。それも
相まってかなあ……くう、ここでも深美さんの魔の手がつー?

なんて、脳内で馬鹿な事を繰り広げていると、店の扉が開いた。

その方向に視線が向けられる。なんか、そういうので注目される
のって嫌だよね。殆どの人は経験があると思う。

その子は当たり前のように、女の子だった。

セミロングの真っ白い髪だった。年齢を重ねて生えて来る白髪とは違うのか、根元から毛先まで真っ白。遠目では分かりにくいけれど、眉毛も白いから地毛だろうか。

瞳の色は……紅い。あかそれこそ、凄く鮮やかだ。昔テレビで見たルビーみたいだ、と俺は一瞬見惚れる。

白い肌に血色の良い唇。短パンから出たすらつとした脚は、目の保養というよりも目に毒だ。

綺麗な子だな……というのが、俺の感想。

比べるのは失礼だけど……正直、俺の会つて来た中で一、二を争う少女だった。ちなみに、争っているのは逢莉である。

……
閑話休題。

「あれ……？」

その子が店に入つてから、なんか物静かだ。何かと喋っていた女性たちは、その談話をピタリと止め、その女の子を見つめていた。

……不穏な空気。

それを破つたのは、美弥子さんだった。

「お、莉愛リアかい。久し振りだねえ」

「はいっ！ お久し振りです、美弥子さん」

どうやら2人は知り合いらしい。挨拶を終えた美弥子さんは、視線を下に向ける。

「康太君も、元気そうだ」

「はい。僕はいつでも元気だよ？」

「ははは、そうかい。そつだ、紹介しておくよ。今日からこの店で

働く

「あ、市ノ瀬燈歌です。えと、」

そう、俺が挨拶しようとした時だった。

「あつー！」

康太って子が、俺を指差しながら大声を上げた。

……あれ、康太？　この子…………確か、

「あれ……柏木康太君？」

「は、はいっ！　文化祭ぶりですっ！」

「おや、知り合いかい？」

「はい。少し前に、ちょっと」

しかし、凄い偶然だなあ。何が凄いって、康太君がこの店に来たことじゃなくて、会った時に俺が丁度“燈歌”的姿だったことがだ。

「第壱校の文化祭の時に、危なかつたところを助けてもらつたんです！」

「え、そんなんですかっ？　ありがとうございます！　私は康太の姉で、柏木莉愛かしわぎりあと申します！」

……まあ、俺からすれば助けたつもりは無いんだけど。

「そんな、当然のことをしただけですし」

それでも美少女の前だと良い格好してしまつ俺、一ノ瀬燈夜18

歳。今は燈歌だつて書つた……俺の馬鹿。

「あの……お礼がしたいんで、家に来てくれませんか？」

「へっ？ いやいや、そんな、お礼なんて」

「行きましょうよー。僕も招待したいんだ！」

「え……えと、うん……」

どうしよう。断る理由も無いんだろ？ お礼して貰つよう
な事をした自覚も無いのに、なんかなあ……。
なんて迷つていろと、美弥子さんが俺の肩を叩いた。

「良いんじゃないの。お礼云々はともかく、ね？」

そう言つた後、美弥子さんは柏木さんと柏木君（紛らわしいな）
に聞こえないほどの声で、俺に囁く。

「友達になつてやつておくれ」、と。

「分かりました。少しだけなら……それと、仕事が終わつてからで
良いかな？」

「本當ですか？ はい、いつでも待ちますー。良い、康太？」

「うんつー！」

「元気だなあ……とか思つてしまつ俺は、少し爺臭いのだろうか。

店の中の不穏な空気は氣になつたけれど、それでも楽しそうな柏
木弟姉を見ると、心が和んでいくのを感じた俺だった。

それが、俺……一ノ瀬燈夜と、彼女……柏木莉愛の出会い。

運命、とか……そんな言葉は嫌いだ。けれど、もしそんな象徴的な言葉を使うなら。

この出会いが、運命の歯車を動かすスイッチとなったのだろう。

「いつでも待ちますー」（後書き）

はい、これが運命の歯車が動き出した瞬間でしたー。

廃棄人形です。

まさか、核となる登場人物、莉愛の弟が康太だつたとは……いや本当、書きながら「あ、莉愛の弟にしよう！」とか考え付いたんですね、ハイ。

しかし、ここでも燈歌ちゃん大活躍っ！　私の趣味丸出しだすね、分かります。

感想、評価など……「いつでも待ちますー」

「えりあ、お姫様」

そこは、一見すれば物置小屋を少し大きくした程度の建物だった。人が2人過ごすにはまだ大丈夫なんだろうけど、それでも不自由なのは間違いない。かなりボロかった第五位の寮の方が幾分マシに見えるんだから不思議だ。

周りの家は充分に豪華な家が建ち並んでいる。物置小屋みたいな“家”を見た後だからか、尚更豪邸に見える。

「その……汚いんですけど、どうぞ」

アルバイト終わり。

俺を待つてくれた柏木弟姉と共に、俺はこの場所に案内された。

……これが家、ですか……。

内心、半信半疑である。いやまあ、俺に嘘を吐くメリットが2人にあるとは思えないんだけどさ。

実は中には雰たちが居て、「よくも黙つて行つたなーー」的に突進されるんじゃないだろうか。

なんて警戒しながら横開きの扉を開く。

……当たり前だけど、そんな事実はある訳も無かつた。

「…………」

俺は未だにメイド服姿のまま、その小屋……もとい、家の中を眺める。

幸い、水道やガス、電気はあるらしい。入ってすぐ隣にキッチンがあつた。

部屋の中は思ったよりも広い。横幅はともかく、奥が広かつたという事だらけ。とは言え、3人分の布団を並べただけで一杯一杯になる程度。

小屋の隅に2つの布団が重ねられ、枕が2つ上に置かれている。

……なんというか、質素な部屋だ。

テレビやパソコンといった娯楽用品は無く、真ん中にある古いやぶ台の上には何も置かれていなし。

後、あるとすれば……1つのタンスのみ。両開きの扉が付いているタイプだ。その両開きの扉の下には2つ、引くタイプの収納場所がある。

「適当に座つていてください。お茶で良いですか？」
「あ、はい」

そう言われて、俺は曖昧に頷いた。

康太君が先に座り込んで、俺も遠慮がちに腰を下ろした。元々胡あぐら座くづが好きじゃない俺は、静かに正座をした。

3人分のお茶を持ってきた柏木さん……ええい、心の中では莉愛さんと呼ばせてもらおう。

莉愛さんは1つ、1つ丁寧にお茶を前に置いてくれる。そして莉愛さんもその場に座り込んだ。

「すみません、お茶菓子切らして……
「い、いえ、そんな……お構いなく」

そう言って、俺はお茶を一口。少し猫舌な俺。うん、飲めない。今すぐ飲むのは諦めよつ、と口ップをテーブルの上に戻す。

「あの……燈歌、さん？」

「え？」

「その……着替えなくて良いんですか？」

……メイド服しか、着替え、持つていりません……！

「あ、あはは……いえ、えつと……大丈夫ですよ？」

「そ、そなんですか？ ジヤあやつぱり……その、女装趣味が……？」

「無いですか～ッ！？ ていうか、なんで知つて……！？」

はつ、まさか志藤みたいなカマ掛けてやつたぜキリッつて奴！？
なんて思つていると、康太君が服の裾を掴んで存在を主張してきました。

「えつと……わつき、美弥子さんが教えてくれましたけど
「……あ、さいですか」

つい素の声で反応してしまった俺を、誰が責めよつか。普通の答
えだつたという事だ。

「じゃあ、俺が男だつて事は既に知つてるって事……

「はい」

「…………着替えてきまーす」

くそう、くそう……っ！ 教えてくれても良かつたじゃないか、
あの馬鹿店長！ ただでさえメイド服で外歩くのは恥ずかしかった
のこ……ツ！

「ここ」、脱衣所無いので……着替え終わるまで私と康太は外に居ますね

「えー。僕は男だし、良いじゃんかー」

「駄目。他の子ならともかく……康太は絶対駄目だよ

「ちえー」

……えと、何なんだろう？ 僕にはさっぱり理解出来ない。いや、ガチで。

けれどまあ、気を利かして外に出てくれたんだし、俺も早く着替えちゃおう。

俺はそつ思つて、まずはカチューシャを取つた。

着替えながら、俺は違和感の正体を突き止める為、俺は思考を開始した。

違和感。そう、それこそ俺の心に突き刺さるような、小さくも重大な違和感だった。

ウイッグを取り、深美さんから（無理矢理）受け取つていたメイク落としを使つた後、洗面台を借りて顔を洗つた。少しボロくなっているタオルに顔を埋め、手に付いた水分も取り払つた。

違和感は……そう、多分莉愛さんと出会つてからだ。綺麗だ、可

愛い……などと心中褒め称えていたんだけど、同時に頭の片隅で思つたことがある。

“似てる”、と。

それは違和感と呼ぶには少し程遠い感覺かもしれないけれど。もしかしたら、違和感と言つよりは既視感に近いかもしない。
どちらにせよ、

「な~んか……気になるんだよなあ」

俺は呟いて、これまた深美さんに（無理矢理！）貰つていた化粧セットの中の手鏡を覗き込み、化粧が落ちた事を確認する。うん、良し。

ボタンを外し、メイド服を俺の身体から離していく。下着まで女性物なんだから、深美さんも面白がって着せた美弥子さんも人が悪い。

それから下着、スカート、ハイソックス？ などどんどん脱いでいく。やれやれ、たまに思うんだけど着替えって面倒だよな。こう、一瞬で着替えられる機械が無いだろうか、なんて未来に淡い希望を持つてみる。まあ、未来が良くて現在がコレじゃ意味無いな。

「良し、後は私服を着るだけだな」

ど、パンツ一丁で言う俺、18歳。

しかも人の家（家と呼んで良いのかちと微妙だけど）でパンツ一丁つて言つのも、余り想像したくない状況である。それこそ男友達の家だと、恋人の家だと……どちらも俺と莉愛さんの関係性とは程遠い。前者なんて不可能だ。

……いやまあ、恋人つて言つのも平々凡々な俺が美少女である莉愛さんと付き合つて可能性は皆無なんだろうけど。

……別に拘ねてないぞ？ へんう。

「……ふう、着替え終わった」

……最近独り言が多くなつたな、なんて思いながらもそつ口走ってしまう。俺も年だらうか。ショッピング……じゃない、ショッキングだ。

下着（妙に抵抗が無い）にメイド服を綺麗に畳んで、紙袋の中にしまつ。ウイッグは……しまつといひも無いし、ところひとつで同じく紙袋の中ぐ。

さうしてその紙袋をリコックの中に入れて、その口を開じた。

……まあ、違和感なんて気にしなくて良いか。どうせ俺の気のせいだ。

「あの、着替え終わりまし 」

「なつ、何言つてるの康太つ！？ 私は別に燈夜さんの事、好きつて訳じやない ！」

扉を開け放ちながら報告した俺。言葉をほほ最後まで言い切ったところで俺に気付いた超絶美少女、莉愛さん。子供の癖に妙にニヤニヤしてる康太君。

暫し見詰め合つ俺と莉愛さん。

「…………」

「…………」

「あ、もうすぐ習い事の時間だー。僕、帰るねー。お姉さん……お兄さんへ また会おうねー」

そう言つてそそくわと帰宅してしまつ、恐らくほほの状況を作り

出した張本人。

「…………」

「…………」

見詰め合ひの俺。顔を真っ赤にしていく莉愛さん。

「……俺、帰りましょうか？」

「いえ、そんな別につ！？ わたし、わつきの事は別に本音じゃないって言うか、えとその、好きって言ひ訳じゃないんですよ！？ ああ、だからって嫌いって訳でも……！ そのその、貴方の事は好きですし嫌いじゃないんですけど好きって訳じゃないんです！ あれ？」

「…………」

527

「あはははははっ！ も、もつ何を言ひてるのか分かんないって
……へへ、はははっ！」
「…………えへへ。私も何言つてるんだろ？ なあ、もう……」
「はは……ふう。取り敢えずいつまでも外に居てもなんだし、中に
戻つてきなよ

…………って、ここは俺の家じゃないのに何言つてるんだろう。
けれどそんな事は気にしないで、莉愛さんは頷いて中に入った。
元々座っていた場所に腰を下ろすと、もう完全に冷めているお茶
を飲む。ちょっと温いけど……俺としては熱いよりもマシだ。何気
に喉渴いてたし。

「改めて……俺は一ノ瀬燈夜。名前で呼んでくれて良いし、口調も
崩してもらつて構わないよ。というか、その方が俺も接しやすいし

そう言いながら、いつのまにか俺も口調を崩している事に気付く。

「……うん、分かった。私の事も莉愛で良いよ、燈夜」「りょーかい」

再びお茶を飲む。今度は一気に全部だ。

ふう、と飲み干してコップをテーブルの上に戻す。したら、いつの間に用意してたのか（多分最初からだろうけど）急須に入ったお茶をコップに入れなおしてくれた。熱そうな湯気がゆらゆらと立ち上がっている。

「その……本当、ありがと」

「……何が？」

「康太を助けてくれたんでしょ？」

「ああ……」

アレか。

アレは本当に、俺がむしゃくしゃしただけだしな。最近の若者宜しく、イラッと来たから首突っ込んだだけだ。

……まあ、カードを大切にしない奴は嫌いだからな。それが原因であるといえば、原因か？

「……あれ？」

「……？ どうしたの、燈夜？」

「いや、今更なんだけどさ……康太君ってどこ行ったの？ 習い事とか行つてたけど」

やつぱり、デュエルモンスターZなのだろうか。それともまた別のか？

「えと……確かに今日は、ピアノと書道だつたかな？ 明日は茶道と経済についての勉強……あ、政界についてもかな？」

「…………一体彼は何者なのさ」

「柏木コンツェルンの後継者だよ」

「かしわぎ……コン、コンツェルン……」

どつかで聞いたな、その名前…………。

アレは……そり、リリアがこの世界について話してくれていた時の事だ。

『この世界では、幾つかの企業がとても力を持っています。それに御神様が関わっているんですけども』

『へ～。例えばどんな企業があるんだ？』

『そうですね。わたくしの家であるじょうがわなけや咲之富グループ、他にも柏木コンツェルンや城ヶ崎社でしうか』

力を持つている企業、か。その後継者……つてことは、康太君は未来の社長様！？

俺、そんな人と関わりを持つ事が多いなあ…………。

「…………あれ、そうだとすると、莉愛は…………？」

「あ、私はほぼ無関係だよ？ 私は捨てられた身だから

「…………は？」

…………捨て、られた？

「この髪の毛とかがイケなかつたのかな？ 若しくは女性が後継者、ていうのが許されなかつたのかもね。結構前の事だよ」

「…………」

「まつ！ 捨てられたって言つても、こいつやつて生活出来るようにはしてくれてるし、ある程度仕送りも送つてくれるから結構充実してゐるよ？」

……重い事情を、随分と軽々しく言つてくれるな……。

一言で言えれば、捨て子つて事だら……？ そりゃ、仕送りとか貢つてるなら捨て子とは違つかもしれないけど……。

「……寂しくないの？」

「ん~、そんなにかなあ。たまにだけど、康太も遊びに来てくれるし。まあこんな髪とかしてると、友達も出来ないんだけどね？」「

自分の白い髪を弄くりながら、やれやれ、と言つた様子で答える。話し相手は 1人、か。

俺は分からぬ。白い髪の毛とか、紅い眼とかは一次元くらいしか殆ど聞いたこと無いけども……それでも、同じ人間じゃないか。なんで差別とかがあるんだろう？

本気で分からないな。分かりたくも無い。

「まつ、これからは俺が友達だしな」

「え？」

「……何呆けてるんだよ。俺が友達じゃ嫌か？」

「え……えと、うつん。なんでだろう、なんか…………あれ？」

ポロリと、小さな零が一粒、莉愛の瞳から零れた。
内心、寂しかったんじゃないだろうか。

1人で居る事は、凄く辛いことだ。それこそ、状況によつては本当に“壊れてしまう”程に。

泣き崩れた莉愛の姿に、俺はやつと違和感の正体が分かった。

やつぱりやつだ。“似てる”んだ。俺のかつての恋人……逢莉に。

髪の色とか瞳の色は似てないけど、顔立ちもそれとなく……何より、雰囲気が。まるで田の前に居るのが逢莉のような錯覚も覚えてしまつ。

だから、だらうか。それとも純粋に俺がそうしたかったのかもしれない。

俺は、莉愛を優しく抱き締めた。

「え……と、や？」

「寂しかったんだろう？ 辛かったんだろう？」口で吐き出しきまえよ。ここなら、誰も見てねえよ」

「……燈夜が……見てる、よお」

「あはは……そうだな」

「全く、わづ…………胸、借りるね？」

最後の言葉は、一れ以上に無い程に涙声だった。

俺はその問いに、小さく答えた。

「じつも、お姫様」

「アーヴィング、お姫様」（後書き）

最後の燈夜の台詞……すついぐく臭いッス。

廃棄人形です。

最後の台詞、実は題名にする為に無理矢理作ったという。なんと言うプレイボーイ。死ねば良いのに。

なんて半分冗談な事は置いといて。私から一言。

「おー、トコモルしろよ」

ついでこもづ一言。

「おー、マナたちほどいんだ」

最後にもう一つ…

「おー、ヒロインビード」

そして私は、その言葉にこの言葉を捧げてしんせよ。

「フヒヒ、カーセン~~~~」

……………頑張るわ、色々と。

どんな感想、評価、その他諸々でもお待ちしておりますよ、皆様。

「 恋人だし、ね？」

莉愛が泣き出してから、数分が経つた。

最早俺の服はびしょ濡れだが、そんなの気にする俺じゃない。ち
ょっと肌寒くなってしまったけれど、ここで「あの、服濡れるから
泣くの止めて貰つて良い?」とか言うのはただの外道だ。神や莉愛
が許しても俺が許さん。この拳が真っ赤に燃えるうー!

……なんて頭の中で外道な俺を「成敗」していると、ゆっくり
と莉愛が俺から離れていった。

……もうちょっととくつ付いて良かつたのに、とか思う俺は
ただのエロ小僧だ。胸当たつてたしだけふん、だけふんつ。

「…………ありがとう、燈夜」

「いえ、じゅりじゅり…………」

「え?」

「ナンデモナイヨ?」

何口滑らしてるんだこの馬鹿ーッ!

幸い気付いていないよう、首を傾げる莉愛。その仕草、鼻血が
出ちゃう程かわゆいんですけど、どうしたら良いですか?

選択肢1、抱き締める。

選択肢2、イロイロ我慢。

選択肢3、押し倒す。

選択肢4、もっと泣いて良いんだよ、と諭す。

……うわあ、選択の余地ねえ……。3は犯罪だろ。4も意味
分かんないし。いや、1も犯罪の匂いがするぞ。

……「こは我慢だな。据え膳喰わぬは男の恥、などとこつ言葉が脳裏に浮かんだけど無視！ 無視つたら無視つ！

「 つと、もういんな時間か」

壁に取り付けられた古いタイプの時計を見た俺は、もう夜の8時になりそうな事を確認した。

合計1時間くらいはここに居たんだな、俺。
俺は温くなつていたお茶を一気飲みすると、リュックを持つて立ち上がる。

「 んじや、そろそろ帰るわ」

「 あ……そ、そっか……ど、ビルに住んでるの？」

……？ どうしてそんな事訊くんだろう。余おひと想えば百合の花で会えるだらう。……その時は俺、燈夜じやなくて燈歌だけどさ。

『『M y s t e r i o u s』』についてちょっと不気味なホテルだよ

「 ホテル……？」

「 ああ。訳あつて、そこが今の俺の拠点かな」

金がある分、結姫と出合つた時よりもマシな状況だ。

「 えと……家族、とか」

「 居ないよ。あ～、第壹校に姉と妹が1人ずつ居るけど、基本的に俺1人」

「 じゃ、じゃあつー

……？

なんか、結姫の時デジャヴと既視感。

「と、泊まつて行かない、かな……？」

本当に結姫と同じ事言つてるーつ！？
何なの、この世界の女性つて危機感つてのがないの？ 僕、これ
でも列記とした男だよ？

「な、なんなら、暫く一緒に暮らしても良いし……」

……結姫を超えたか、お主。

なんて馬鹿な事言つてる場合じやねーつ！ なんで顔を赤く染め
てるのか知りたくないけど、この暴走娘を止めなければ……ッ！

「えと、でもほら、それじゃ迷惑だし……」

「私は一緒の方が嬉しいよ？」

「…………」

えと、えと。

生活費……は、突っ込んでも無駄だろう。といふか、ホテル代を
そつちに回せるし。バイトも始めたから、余裕はあるだろう。

……あれ、断る理由が見当たらない。

「……あ～、ほら、莉愛つて女の子だし。男と同じ屋根の下つて言
うのは、少し不健全じゃないかな～」

「大丈夫っ！」

「何がっ！？」

全然大丈夫じゃなくねっ！？

「そういう時は、私が燈夜を襲つてゐるだらうし！」

「全然大丈夫じゃないつ！ つか、お前は痴女か！」

「だつて……」

「だつて？」

「 恋人だし、ね？」

「……………はい？」

「恋人……………つて、何言つてゐるの？」

「え……………あ、そか。そなんだ………ゴメンね、今の無しつ！」

……………何だつたんだろう。個人的には凄く氣になる。
けれど、手でバッテンを作りながら言わると、俺も突つ込み難
い。「こは諦めよう。

「うう……………なんで泊まつてくれないの？ 私の事、嫌い？」

「いや、そ、そういう問題ぢゃなくて……………」

こう、なんと書つか……………君みたいな（超）美少女と一緒に暮らし
ていると、（自称）鉄の理性を持つ俺もヤバイつていうか。
この小屋で過ごすつて事は、隣で……………それも結構近い距離で眠る
つて事だろ？

僕、そんなの耐えられませんっ！

「じゃ、じゃあこいつしないか？ デュエルして、勝つた方の言ひ事
を聽くつていうの」

「……………私は良いけど、ディスク、持つてないんだよね……………」

「ディスクなくてもテューハル出来るじゃん」

「え？」

「え？」

……俺、なんか変な事言つた?

「……どうやつて?」

「いや、どうやつてって……例えばこのテーブルの上にカード並べて、ライフ計算は電卓とか使つてね」

「…………ああ、そういうへば! うん、思い出したよ」

思い出した……? 前はそんな風にテューハルしたつことだらうか。

うん、うん、と何度も頷いている姿がちょっと可愛らしく映つたりしたけど、今は閑話休題。俺はリュックから殆どシンクロもエクシーズも使わないデッキを選ぶと、テーブルの上に乗せた。

「じゃあ、やるつか

お茶や急須を退けて、俺はデッキをシャッフル。いつの間に取り出したのか、莉愛もデッキをシャッフルしていた。

逸早くシャッフルを終えた俺は、ポケットから携帯を取り出す。圈外だけど、電卓機能は使えるだろ。

「それ……」

「ああ、コレ? 携帯電話。まあ、余り気にしないで」

「…………うん」

妙に感慨深そうに携帯を見つめる莉愛。なんか、さつきから様子が変だな……まあ良いか。

「じゃ、始めるか」

「うん」

「『テュエル』」

同時に告げて、俺はアカテニアを出てから始めてのテュエルを始めた。

懐かしさと、嬉しさと、やるせなさと……何より、田の前に居る彼への愛しさが今にも爆発しそうだった。

今すぐでも、抱き付きたくて。
今すぐでも、彼に触れたくて。
今すぐでも キスしたい。

そんな欲望が私の中で暴れ回る。狂おしい程な感情が廻り巡つて、少し苦しい。

私は、彼の胸の中で泣いている時に、全てが解つた。なんで、どうして……そんな疑問が胸中を支配するけど、それ以上に湧き上がるのは、嬉しかった。

……本当に。
本当に。

「んなに私を喜ばして

神様は、私を庇うしたいのだわ」

……つ！

「先攻は莉愛で良いよ」

「うそ。じゃあドローするね」

「ういえ私は、燈夜とデュエルするのは始めてだつたつけ。
そんな事にも心が躍るのを感じながら、それを悟られなによつて
手札を眺めた。

「モンスターをセット。カードを一枚伏せて終了するね」

「んじゃ、俺のターン。ドローつと」

「燈夜は、どんなデッキを使つただれ？……？」

「……良し。じゃあまずは《トレード・イン》発動。手札の《サイ
レント・マジシャン》LV8》を捨てて2枚ドロー」

「《サイレント・マジシャン》つ？」

「え……どうかした？」

「う、ううう、何でも……」

私の反応に、燈夜が首を傾げる。

そ、そつかー……燈夜のデッキは沈黙の魔術師なんだ。えへへ……

……。

「お、引いた。《サイレント・マジシャン》LV4》を召喚。バト
ルフィーズ……セットモンスターに攻撃」

「モンスターは《シャインエンジェル》だよ。効果で、私はデッキ
から《サイレント・ソードマン》LV3》を特殊召喚するよ
「へ……成る程ね。莉愛が驚くのも分かるな、コレ」

凄いよね。こんなに酷似した『デッキ』を使うなんて。

燈夜は沈黙の魔術師。私は沈黙の剣士。

些細な事かもしれないけど……今の私にとって、これ程嬉しい事も少ない。

「それじゃ、カードを2枚伏せてターンಹンド」

「うん。私のターン、ドロー。スタンバイフュイズに、《サイレント・ソードマン LV3》の効果。このカードを墓地に送つて、デッキから《サイレント・ソードマン LV5》を特殊召喚するよ」

「あ、その前に莉愛がドローしたから、サイレント・マジシャンにカウンターが乗る」

《サイレント・マジシャン LV4》魔力カウンター0 1 · A

TK1000 1500 ·

燈夜は別のデッキを持つてるんだ……。

別のデッキのカードをカウンター代わりとして、サイレント・マジシャンの下に重ねる。

「うーん……バトル。LV5でサイレント・マジシャンに攻撃」「攻撃宣言時、《ガガガシールド》発動。このカードは発動後装備カードとなつて、自分の場の魔法使いに装備する。すると、那个モンスターは1ターンに2回まで戦闘、効果破壊を免れる事が出来るんだよ」

「じゃあ、それにチョーンして《王宮のお触れ》発動したいな」

「う……《魔宮の賄賂》。一枚ドローして良いけど、お触れは無効だな」

「う……防がれちゃったか。

「じゃあドローするよ」

「その時、サイレント・マジシャンに魔力カウンターが乗る」

『サイレント・マジシャン LV4』魔力カウンター 1 2 · A

TK1500 2000 ·

「攻撃続行。ダメージは通るんだよね?」

「ああ。えっと……300か」

燈夜が、携帯の電卓を操作する。

燈夜 LP4000 3700 ·

「メイン2、カードを2枚伏せて」

私がHOND福岡の宣言をしようとしたら、正にその瞬間だった。

『おやおや……楽しそうですねえ、お二人サン』

気持ち悪いくらいに間延びした口調をした男性が、宙を浮いて、

私たちの前に現れた。

「 恋人だし、ね？」（後書き）

変な奴登場、 の巻。

廃棄人形です。

なんか、莉愛がとてもなく重要な事を心中で喋っちゃっている気がする。勘の良い人なら、莉愛の正体……もう気付いているんじゃないだろうか。いや、いる。反語。

……しかし、私はなにをしてるんだろう？

本當なら「LEGENDS」のプロットを作るべきなんだろうけど、只今私は、「LEGENDS」を書き終えた後に執筆するオリジナル小説のプロットを作っているという。

……私つて馬鹿ですね、とても良く分かっています。

感想が少ないよーう！

誰か……誰かーつ！（笑）

待っていますよ―――！！

「燈夜と私は、運命共同体だからねー。」

不気味な男だった。

身体は半透明という訳ではないのに、その薄い存在感から今にも男が見えなくなりそうだ。

薄い布のような服を身体全体を覆うように羽織つて、その布がマントのようにひらひらと存在を主張していた。

男の顔はいつでも笑顔 それも、胡散臭を満載の作り笑顔だらう。

「……誰だ？」

まず声を上げたのは俺。少し前に出て、右手を莉愛の前に出して守るように立ち塞がる。

莉愛はその腕に縋るよつに掴んできた。

『おつと、これは失礼を……。私はミリオル……一ノ瀬燈夜様と、柏木莉愛様ですよねえ？』

「……なんで俺たちの名前を知ってるんだ？」

『当たり前な事を……しかし、理由を話す必要も無いんですよね。私の目的はたつた一つ 柏木莉愛様。貴方を我が主の元へ連れて行くことなのでねえ……』

「えつ……ー？」

俺の腕を掴む力が強くなる。俺は更に莉愛の前に出て、唾を呞ん

だ。

男……ミコオルの目的は、莉愛。俺じゃない。その事に少しほつとしている自分が大嫌いだ。

『一ノ瀬燈夜様……クク、君が御神新に選ばれなかつた出来損ないの救世主ですか』

「つ……！」

「イツ……御神や救世主とやらの事も知つてゐる……！？

『我が主は、君の事を高く買つていましてねえ。どひでしょ、我々と共に行くといつのは……？』

「な……」
「と、燈夜……」

「何言つてんだ、『イツ……！

訳わからねえ。分からぬことだらけだ。

「……断る、と言つたら？」

『言つたでしょ。我が主は、君の事を高く買つている、と。つまり……我々と来ないという事は、同時に、敵になるという事。敵は殲滅あるのみ……貴方を殺して、目的を果たす事になるでしょうねえ』

「チツ……！」

『安心なさい。殺すといつても、力尽くじやしない。ええ……ゴン、

ですよ』

そう言つてミリオルが取り出したのは、デュエルディスク。ミリオルと同じく存在感が薄いソレは、静かにミリオルの左腕に取り付けられた。

俺は一度右腕を掴んでいる莉愛の手を左手で握る。安心しそうな意味を込めてだ。

右腕からゆっくりと離れる莉愛を確認すると、俺は自分のデュエルディスクを取り出して、小さく深呼吸。そして左腕に……。

怖い。
恐い。

負けたら……死。

震える。歯がガチガチと音を立て、冷や汗が俺の体温を奪っていく。頬を垂れた汗は音も無く落ちて、デュエルディスクがそれを弾く。

まるで何もかも知っているかのようだ、ミリエルが薄気味悪い笑みを浮かべている。大きく深呼吸する。肺が凍ったかのような錯覚が俺を襲う。

落ち着け……落ち着け、落ち着け。

『なんじゃ、情けないのう……』

そんな時、だった。

「……」

『妾を扱うには、まだ力不足じゃが……』この程度なら、貸してやろうかのう』

淡い光……それは、カードの束となつてディスクに装着された。その束は凄まじいスピードでオートシャツフルされる。何のデッキか確認はさせてくれないのか……はは、なんて奴だよ……ッ。

「燈夜……」

後ろで、莉愛が囁き呟く。

宙に浮いた右手を、莉愛の温かい両手が包み込んだ。

「その……何を言えば分からぬいけど……」

俺が莉愛に視線を向けると、莉愛は真摯に俺を見つめていた。とても真剣で、とても真っ直ぐで。不安とか恐怖とか、俺が駆り立てられているモノなんて、微塵も感じられない。
強い、と……俺は純粹に、それだけを思った。

「私、燈夜に言いたいことがあるから……“後で”、話があるの」

だから、勝つて、と。
だから、負けないで、と。

言外に、莉愛はそう告げた。

「大丈夫！ 燈夜と私は、運命共同体だからね！」

死ぬ時は、一緒と……そう言いたいのだろうか。
そうだな。ギゼルと戦った時とは違うんだ。

俺は今……独りじゃない。マハードやマナは居なわけです……

「 一人じゃ、無い。」

「 場所を変えようぜ、ミリール」

『 クク……私を、甘く見ない方が良いですよお』

「 るせえよ。お前のその甘ったるい口調……すぐにでも崩してやるから、覚悟しとけ！」

時は少し遡り、燈夜が燈歌となつて、百合の花にて働いている時

間帯 昼。

太陽が少し東に降り掛けていた。熱気が体温を上昇させ、思考する力を奪っていく……。

そんな中、“世界の救世主”に選ばれた10人が御神に呼ばれ、燈夜がアルバイトしていた食堂に集められていた。

何の挨拶も無しに燈夜が居なくなつたと聞いて早くも1週間。最初は後ろ向きだった心も、少しずつだが前へと向き始めた頃だ。

「 やあ。皆に来て貰つたのは他でもない、世界の歪みの事だよ、
「 歪み……ですの？」

そう、と御神新は首肯した。

「 今、僕らが居るこの第壹校が、世界の中心である事はもう知つて

いふと思つ

数人がこく、と頷ぐ。

今、この場に居る世界 それはあくまで世界であり、惑星ではない。丸くもなれば、回つてもいいのだ。

言わば、地図のように広がつた地平線の世界……その最奥になにがあるかは未だに解明されていない。

「だから、だらうね……“何者か”がこの世界を蹂躪しそうとしている中で、最初の標的なのはこのアカデミアらしいんだ」

「……どうとう、襲つてきたと言つ事ですか？」

「そういう事だね。そして、その歪みを閑ざす方法はただ一つ……

……

近くの椅子を引いて、そこに腰を掛け。両手を組み、身体をテーブルに乗せ、身を乗り出した。

「神に選ばれた救世主である君たちが、歪みのある場所へ向かい、その場に居る“影”とデュエルをし、勝利する事。力をなくした“影”は、歪みと共に勝手に消滅するだらうね」

「“影”……とは？」

「世界を狙う存在の分身、と言つたところかな？ 勿論、力は全然無い小物だよ」

凜那の質問に、御神は即答する。

「……いつまで続ければ良いんだよ、ソレ?」

ソフィアが片足を椅子に乗せたまま訊く。その質問には即答せず、御神は大袈裟に肩を竦めた。

「さあ、ね。世界を諦めてくれるか、その存在が力を失くす……つまり、本体を倒すか。少なくとも、この一択になるだろ？……それ以外は正直、考えられない」

世界を狙う、と言うのだからその存在の力は相当なものだろ？。それと同時に、世界を諦める事など……可能性は限りなく低い。どれ程強い力を持つてしようと、やるべきなのは後者だ。しかし……と、御神は内心で思考する。

御神新が根本の原因となつて、地球の人間たちを呼び出した。それ程の力は持つていて、使役する事が出来る。

が、同時に、そんな御神新でも世界を狙う存在の事は殆ど知らないのだ。場所はおろか、その存在が何者なのか、という事さえ。

どう情報を集めて良いのかも皆田見当も付かない。長い闘いになりそうだ、と内心溜め息を零した。

「ともかくつ 最初の歪みが、数時間前に現れた。それは僕が対処しておいたけれど、元々僕は救世主じゃないからね。皆よりも苦労するんだ。だからこれから皆には、それなりに注意を払って欲しいんだ」

「……話はそれだけかよ？」

基は眼を細めながら、睨むように御神を見やる。

「うん、そうだよ」

「……じゃあ、俺は行くぜ」

「基……」

「……」

慧の呟きに、基は無言で反応し食堂を出て行く。

燈夜が居なくなつてから、基が機嫌が悪い。それは最早周知の事実である。

次いで、幸仁が静かな音と動作で立ち上がる。

「……燈夜ならば今頃、それなりに元氣でやつているだろ？」

「…………」

「…………世界を救う、などと大それた事を考えるな。俺たちは俺たちはただ、燈夜が帰ってきた時に迎える場所を守つていれば良い」

幸仁がそう言ひや否や、食堂を後にする。

しいん、と静寂が衝動を覆い包みこむ。

御神も、微かな笑みを浮かべながらその場から場所を移したのだった。

「燈夜と私は、運命共同体だからねー」（後書き）

ね、眠い……。

廃棄人形です。

前半はともかく、御神たちを登場させた時には半分睡眠の世界で書いてました。ガチで。

そんな状態でデュエルは書けないな、と思つた私は急遽アカデミアへ視点を移しました。

まあ、別段不自然は無いかな、という自画自賛。

しかし、本当、感想が来たらやる気が止まらない。しますねー。
感想を書いた事がある人も無い人も、気兼ねなくドシドシ送つてください！

感想、評価等、いつでもお待ちしておりますっ！

「私に、チャンスをくれませんか？」

眼を閉じる。
眼を開ける。

数度の瞬き^{まばた}が、私の視界を光と闇に分ける。

「さあ……始めようかねえ」

少し離れた場所に、さつきよりも存在が明確となつたミリエルが居る。その視線の先……燈夜は、その問い合わせに答えないで、ディスクを展開させた。

場所は町外れにある大きな広場だった。もつ夜遅くという時間帯だからか、人通りは皆無。

噴水を背景に、^{デュエル}決闘^{デュエル}が始まる。

「「デュエルッ！」「

「先攻は俺だ、ドロー！」

勢い良く燈夜がカードを引く。

あのデッキは、燈夜のディスクに突然現れたデッキ……燈夜と私の沈黙の魔術師と剣士は、未だに机の上に並べられているはずだ。

「……デッキって、コレかよ……つたく、ゲームでしか回した事無いっての！ 僕はモンスターをセット一 カードを一枚伏せてターンエンド！」

「堅実だねえ……私のターン、ドロー……。私は、『波動キャノン

『を発動するよお』

「チツ……バーンかよ」

『波動キヤノン』……1Jのカードを墓地へ送る事で、通過した自分のスタンバイの数×1000ポイントのダメージを『える』……だつたかな?

これは……早く決着が付きそつだよ。

燈夜。

「カードを3枚伏せて、私はターンを終了するよ」

「……俺のターン、ドローッ！」

「これで、終わりかなあ……罠発動、『ギフトカード』。相手は3000ポイントのライフを回復する」

……?

なんでわざわざ、そんなカードを……?

「……チョーンは無いね? ならばそれにチョーン、『ギフトカード』。そして『シモツチの服作用』! 相手のライフが回復される効果は、ダメージへと変換される!」

えつ……!

それじゃあ、逆順処理でシモツチから適用されて、合計6000ダメージ……! -!

「させねえよ! シモツチにチョーン、『トラップ・スタン』! このターン、罠カードは無効化される! -」

「な……!」

良かつた……シモツチ、2枚の《ギフトカード》が無効になつた……！

「初手にあつて良かつたぜ……けど、バーンか。仕方ない……やるか」

狙うは、ワントーンキルだ。

そう呟いて、燈夜は眼を細めた。

……格好良いって思うのは、やっぱり場違いかな……？

「反転召喚……………モンスターは、」

出てきたのは、少し可愛らしい馬のようなモンスター……！

「《魔轟神獣ペガラサス》ツ！－！」

魔轟神。若しくは、魔轟神獣。

光属性悪魔族で統一された、大量展開のシンクロデッキ……。

「ペガラサスの効果を発動！　このカードがリバースした時、手札の魔轟神を1枚相手に見せる事で、デッキから魔轟神を墓地へ送る！　俺は《魔轟神グリムロ》を見せて、デッキから《魔轟神クシャノ》を墓地へ！」

私は、魔轟神の動き方は良く知らない。というよりも、元々シンクロ自体のシステムが良く分からんのだよね……。
確か町にある巨大なスクリーンに写っていた男性が話していた内容によると、シンクロとはレベルの合計で何らかのモンスターが出

せるひしいけど。

「そして、手札のグリムロの効果を発動！ 自分フィールド上に魔轟神と名の付いたモンスターが存在する時、このカードを捨てて『テツキから魔轟神モンスターをサーチする！ 僕は《魔轟神クルス》を手札に！ そして 《魔轟神レイヴン》を召喚！』

ドキドキする。

燈夜がプレイする姿と、これから起ころる出来事に……！

「レイヴンの効果！ 手札を任意の枚数捨てて、その枚数分レベルを1つ、攻撃力を400ポイント上げる！ 僕は手札を3枚捨てて、レベルを3つ、攻撃力を1200ポイント上げる！」

《魔轟神レイヴン》 LV2 5 · ATK1300 2500 ·

「こ」の時捨てたクルスとガナシアの効果を発動！ クルスの効果でグリムロを蘇生、ガナシアは自身の効果で場に特殊召喚される！さらに、レイヴンのレベルを1つ下げて《レベル・ステイラー》

「！」

一気に場が5体で埋まる。

凄い……。

「カードを1枚伏せて、LV1の《レベル・ステイラー》にLV4《魔轟神レイヴン》をチューニング！ シンクロ召喚……《魔轟神レイジオン》！」

……？

どうして一度カードを伏せたんだろう？

「レイジオンの効果は、シンクロ召喚に成功した時、手札が1枚以下だった場合2枚までドローする」

「つ……今、君の手札は0枚……」

「そういうことだ。2枚ドローするー。」

ドローしたカードを見て、燈夜は成る程、と呟く。

「LV3『魔轟神獣ガナシア』に、LV1『魔轟神獣ペガラサス』をチューニング！ LVは4……来い、『魔轟神獣ゴニホール』！」

ゴニホールを基とした獣 ゴニホールが、燈夜の場に召喚される。

悪魔族だと言うのに、妙に神々しさが伝わるその獣は、睨むようにミリエルへと視線を向けた。

「ゴニホールは、俺と相手の手札が同じ場合、魔法、罠、モンスター効果を無効にする……」

「つ……まさか……！」

「……終わりだな。レイジオン、ゴニホール……ダイレクトアタック

けたたましい悲鳴が沸き上がり。

ミリエル LP 4000 1700 0 .

まるで、最初からその場には居なかつたかのようだ……ミリエルは、消えていた。

流石魔轟神……ライフが8000でもワンキル出来るんだから、4000だと楽だな。

ちなみに伏せは『貪欲な壺』、手札は『オネスト』と『魔轟神クルス』だ。墓地にはクシャノが居たから、もつと展開出来ただろう。

何はともあれ……俺は、勝ったんだ。

気が抜けたのか、へによりと尻餅を搗く。

……シモツチバーンとか、手札にトラスターがあつたし、こっちが先攻だつたから良かつたものの、しかもミリエルの手札、自重しろよ。

こっちは命が懸かっているのに、なんだアレ。

「だ、大丈夫、燈夜？」

「ん……ああ、なんとかな」

近付いて来て俺を心配してくれる莉愛に、俺は一息吐きながら答えた。

「……戻るか」

荷物、あそこに置いて来ちまつたし。

「うん、そうだね」

なんとか立ち上がると、大きく伸びをす。少し寒いくらいの夜風だけど、今の俺には丁度良い。

気が付くと、ディスクにはカードが無くなっている。アイツが回収したんだろ？

莉愛と並んで公園内を歩く。街灯と月明かりだけが、俺たちを照らしていた。

「その……燈夜」

「うん？」

声を掛けてきた莉愛に、俺は首を傾げる。

「せつを言つた、私からの“話”なんだけど……」

ああ、その事か。

「…………えと、あのね…………？」

莉愛の顔が赤い。なんか妙に甘酸っぱい雰囲気が俺たちを包んでいる。

……え、何この展開。何言われるの、俺？

「わ、私…………その、燈夜の事…………っ！」

「あ、アレか？ ほら、一緒に暮らすとかなんとか」

「え…………あ、うん、そ、そいつ！ その事だよ！…………」

「…………はあ」

……はい、逃げました。なんか嫌な予感が脳裏を走ったので。チキンと言つな、ヘタレと言つな…

「テュエルも、途中で終わっちゃったしな……戻つたら、続きをやるか？」

「…………」

「莉愛？」

隣を見てみると、そこに莉愛の姿は無い。

それに気付いた俺が後ろに振り向くと、莉愛は顔を俯かせて立ち止まっていた。

「どうした、莉？」

「やつぱり駄目、かな？」

「え？」

小ちな咳きが、俺の耳朶を叩く。

「男女の違いとか、そんなの私は全然気にしないし……別に燈夜が私をどうしたいって言うなら、別に良いよ？」

「……いや、それは問題でしょ」

つい言つてしまつたけど、莉愛の声色は真剣そのものだ。

「それとも……燈夜も、私みたいな子とは関わりたくないなかつたかな

…………

「それは違うー！」

「つ…………」

「…………つい叫んじました。

けども、言つてしまつたものは仕方ない。俺は一歩ずつ莉愛に近付きながら、口を開いた。

「他の人は知らないけど……俺は今日莉愛と出会つたばかりだけど、莉愛の良いところを幾つも見付けた。優しいし、良く気が利くし、家族思いだし……」

「じゃあ……？」

「でもだからこそ、俺が場違いに感じられるといつか……仮が引ける、といつか」

尤もそれは、基や辯の隣に居た時も感じていたことだけじ。劣等感、といったらどうつか。

「……なんだ、そんな事気にしたんだ」

「……莉愛？」

「私も、何でも知ってるよ。燈夜の良いところ」

そう言つて、莉愛は笑つ。

「だから……だからね、私は燈夜が好きになつたんだよー。」

「…………え？」

ひゅ~ひ、ヒ。

風が吹く。

「付き合つて欲しい、とか……そういうのは言わない。ただ、私の気持ちを知つて欲しかったの……」

「…………」

「私に、チャンスをくれませんか？」

チャンス？

「燈夜が、私を好きになってくれるよつに努力するかい。そのチャ
ンス。勿論、一緒に暮らしてだよー。」

「は……いや、でも、」

「それとも私じゃ、燈夜とは釣り合わないかな…………？」

「それはアリマセン」

あ、つい反射的に即答してしまった。いや、事実だけど。

俺の言葉を聞いた莉愛は、とびっきりの笑顔を俺に向けてきた。
そんな笑顔にかなりドキッとしたのは……うん、秘密にしておこう。

「良かったー！ ジャあ、一緒に暮らしても良いよね？」

「ああ、うん……うん？」

「やつた！ これから宜しくね、燈夜！」

あれ……釣り合つ釣り合わないといつ話題と、一緒に暮らす暮ら
さないの話題にどう繋がったんだね？…………？

そして、なんで俺は頷いた……これが流れつて奴か。

「あの、莉愛」

「行こう、燈夜！ “私たち” の家に！」

…………まあ、良いか。

なんなら、頃合こを見て出て行けば良いし……俺が何もしなけれ
ば良いんだしな。

……理性、壊れなきや良いけど。

……色々心配事はあるけれど、取り敢えずはコレで良いか、と思
つてしまつ。それも、多分俺が疲れているからだらうな。

やつと見付かったバイト（しかも燈歌で）をやって、莉愛の家に招待されて、ミリエルと命を賭けたデュエルをして。すぐにもぶつ倒れそうだ。

……まあ、どちらにせよ。

「……そうだな」

俺の腕に抱き付いた莉愛に苦笑しながら、俺はそう答えたのだった。

「私に、チャンスをくれませんか？」（後書き）

リアルで充実している……もとい、莉愛で充実している燈夜、爆発しちゃ！

廃棄人形です。

おかしいな……Jの話ではまだ告白せらるつもつは無かつたんだけど、もっと後の筈だつたのに……！

……脳内で組み始めていた展開表が崩れ去つた瞬間だつた……。

しかし、魔轟神酷いつ！しかし、魔轟神以上にシモツチバーン酷いッ！ どっちもライフ4000だとオワタフラグですねww
……なんという戦いだ。書いてて溜め息を零しました、ハイ。

それはともかく、感想が増えてきて嬉しい限りです！
もひとつドンドンお願いしますね！

感想が来なくなる 溜め息 やる気が無くなつてくる はあーー
E G E N D s 終了のお知らせ。
といつ流れも十一分に有り得ますので、皆様、宜しくお願ひいたし
ますねっ

いつもお待ちしております！

「……裏づちやねば？」

莉愛と2人で暮らし始めて、早数日 僕は、苦労の連続だった。

例を挙げるとするならば、まず……夜。

康太君が泊まりに来た時の為にあつたといつづつの布団を広げ、さあ寝よう、と潜り込んだ時だ。

布団と布団をくつ付けて、枕を俺の方へ寄せて来て……あひつゝとか、莉愛はぴつたりと俺にくつ付いてきたのだ。

近くの銭湯に行つたばかりだから、熱を持った身体がおれに伝わつてくるわ、意外と大きな胸が俺の背中に押されて形を変えたりするわ、艶っぽい寝息が首元に掛かるわ……。

間違ひを起こさない、と決めた俺の悶々とした気持ち。男性諸君なら分かってくれるよな？ 分からない？ 分かってくれ。

……ただでさえ滅茶苦茶可愛らしい美少女なんだから、性質たちが悪い。

アルバイト中……俺は燈歌の姿で、はあー、と溜め息を零した。ちなみに、既に俺は百合の花の制服を身に纏つている。メイド服よりもマシとは言え、やつぱリスカートはすーすーする。

「大変そだねえ、燈歌ちゃん」
「…………真貴さん」

カードをレア度分けしていると、百合の花の店員である真貴さんがニヤニヤと笑みを浮かべながら近付いて来た。

「あれっしょ、莉愛ちゃんと一緒に暮らして理性崩壊寸前つて奴つ

しゃへ」

「……仕事してやる」

俺が男だと叫ぶ時は、店員全員に告げられてくる。また、莉愛と共に暮らすことになると叫ぶ事も（莉愛が口を滑らせて）知っている。

「莉愛ちゃんは、確かに格好を見るとかって厭味悪いかなー、とは思つたやうな感じね。話せば凄く良いやうだし、優しいし、何より胸が大きくて可愛いからね～」

少し前に分かったのは、本当に白髪とこのつのは恐怖の対象になるらしい、と言つた事。なんで白だけ、とは思つけど……仕方ない。けれど莉愛と接した事が多々ある白髪の花の店員は、莉愛が悪い奴ではないと言う事を知つてくる。逆に、莉愛の為なんやうじつ中を走り回る事も厭わないだろ？

ちやんと話せば、莉愛がどれだけ魅力的か分かる 莉愛が柏木コンチカルンの社長？ になれば良いと懸つたのに……世の中つて辛いな、全く。

「莉愛ちゃん、『燈夜』君の事が好きみたいだしねー」

燈夜、といひ単語を強調しないで欲しい。

「……襲つちやんばへ」

「つー、わ、わわつー？」

ぱーぱーぱーぱー……。

真貴さんの唐突な言葉に、俺は手に持つていたカードを落としてしまった。

な……なんつー事を言つんだ、この人はつー？

「な、何言つてるんですか？……！」

大声を上げると店に迷惑だし、男とバレてしまつ可憲性がある為
小声で抗議する。

「んふふー。その反応……満更でもないな、お主？」「
だ、誰だつてこいつなりますよ……っ！」

急いでカードを拾う。

次の瞬間には、お客様に呼ばれて真貴さんはその場から離れて
しまつた。

……爆弾だけ残して行つたな、あの。やれやれだ。

カードを拾い終えた俺は、さあ続きを、と意気込む。
と、そんな時だつた。

「あの……と、燈歌さんつ！」
「あ、はい、なんでしょう？」

今や俺は、百合の花でも有名な店員だ。人気も高いつて教えてく
れたのは店長である美弥子さん。
……嬉しいんだか嬉しいないんだから……微妙なところだな。
……嬉しくないつて事にしておこう。嬉しいなんて言つたら、
莉愛の機嫌を損ねそうだ。

「あの……コレ、一緒に出てくれませんか！？」

「へ……」

勇気を振り絞った感じで差し出してきたのは、どうやら一枚のポスターのようだった。

それを手に取つて、文字を読んでみる。

「か……カップルデュエルトーナメント?」

……何、コレ。

「は、はいっ。2週間後に、カップルのみが参加出来るデュエルトーナメントが始まるんですつ！ それに一緒に、参加してもらえないかなー、つて」

「……女の子同士だよ?」

少なくとも今は、だけど。

「せ、性別とかは余り気にしないらしいんで……」

「……」

カップルとか判別できるのか、それ。

「そ、それに私たち、カップルって訳じゃ有りませんし……すみません」

「そうですか……」

幾つか、店内で溜め息が聞こえる。

まさかとは思うけど、皆俺を誘おうとしてた? [冗談きつ

ー] ……。流石に燈歌の時に、デュエルはしたくないよ?

いやまあ、やううとした事はあつたけどさ。

肩をがっくり落として去っていく女性を、俺は内心謝りながら見送った。

バイトが終わり、迎えに来てくれた莉愛と共に帰路を歩く。最近は店の奥で着替えて、裏口から出せてくれるから楽だ。

「」のまま銭湯行く？」

「ん……けど、荷物は？」

「持つて來たよ」

莉愛が肩に掛けてあるバッグを軽く叩きながら笑みを浮かべる。用意周到な事だな。

じゃあ行くか、と返事をして行き先を変更。田舎すは銭湯なり。

「そついえば……結構誘われてたよね、カップルデュエルトーナメントに」

「う……見てたんだ」

別に悪い事してた訳じゃないとこのに、少し身体が縮こまってしまうのはどうしてだろ？

ちょっと氣に入らない、と言った様子で莉愛が頬を膨らませる。

……そんな事しても可愛らしく思つてしまつのは、同居人（同棲ではない、決して）故の巣廻目だけじゃないだろ？

「べ、別に了承した訳じゃないからな？ 全部断つたよ」

「……なら良いけど」

というかそもそも、女同士で“カップル”“デュアルトーナメント”に出るほうがおかしいと思うんだけど、そこんところどうだひつ。なんて聞けるはずも無いので、俺は苦笑する。

「な、なんなら一緒に出でみるか？ なんて」

「良じのつ？」

「へつ？」

……いや、今の冗談だよ？

「いや、その」

「ちょっと憧れだつたんだ。多人数1組の大会に出るの。友達も居なかつたし、康太も忙しいから」

「……」

……無意識、というか無自覚なんだろうけど。

なんでこう、『冗談でしたあはは、と笑い飛ばせ辛くする事を平然と言つてしまふのだらう。

……けどまあ、莉愛なら別に良じかな？

百合の花に来ててくれた、正直言つて“それ程親しくない”人と出るのは多少憚られるけど、莉愛なら一緒に暮らしてゐるくらいだし、それなりに良く過ごしていると思つ。

……それに、何より燈歌じゃなくて、燈夜で出られるのが大きい。

「じゃあ、一緒に出ようぜ」

「うんっ。じゃあその時は、カツプルのフリをしないとなっ…」

「え…あ、ああ、そうだな」

フリだというのに、なんでそんなに嬉しそうなんだ、莉愛は。
………… そういうモンなんだろうか。俺には良く分からぬけど。

なんて、莉愛と談笑しながら銭湯に向かっている途中。

「………… 燐夜か？」

「つ………… ！？」

声がした。後ろからだ。

莉愛と共に振り返ると、そこに居たのは珍しく驚いた表情をした幸仁だった。相変わらず青い制服を身に纏い、左腕には『ユエルティスク』が。

「久し振りだな、燐夜。その娘は？」

「久し振りつつても、1・2週間くらいだけどな。こいつは莉愛

つて言つて

「初めまして、瀧川幸仁さん」

妙に初めまして、という言葉を強調した莉愛。

幸仁の事を知っているのは別段不思議じゃない。何度かテレビ出演をしてるしな。今じゃ公式にもファンクラブが実在するくらいだし。

「今は訳あって、燐夜と一緒に暮らしてます」

「………… ！………… そつか」

一瞬驚いたように眼を見開いた幸仁だが、すぐに眼を細めて納得

したように頷いた。

「……慧たちにこの事を言うんだらうか。口止めする気は無いけど、もし今回のように再会した場合、物凄く怒られるんだろうな……。僕たちの前から居なくなつたのに、女人の人と一緒に居るなんて！みたいな。」

「……皆、どうしてる？」

「……最近は元気になつてきたな。元通り、とは行かないが……『表面上は』、皆変わらずだ。基以外は、な」

「……？ 基以外？」

「ああ、と頷く。

「基は未だにお前の事に腹を立てている。何故挨拶も無しに……相談も無しに、と」

「相談？」

「一応、退学とかの件は話してあつたし、その場に基も居た筈だ。相談らしい相談はしなかつたと思うけど……。」

「アカデミアの事じゃない。お前を襲つてきた者の事だ」

「つ……！」

「……ギゼルの事か。

「お前とソイツの戦いを見ていた者が居た。それを聞いたのだがな逃げたのだらう、燈夜？」

「ツ……！」

「何故、相談してくれなかつたのか。何故、1人で抱え込んだのか。何故、頼つてくれなかつたのか。正直それに関しては、基だけで

はなく俺……いや、他の者達も問い合わせたい事柄だ

正直、それに関しては余り話したくない。

だつて 恐かっただけだから。俺が無様に逃げたつて聞いて、皆が離れていくんじゃないかつて……！

「だが……」こで俺だけが聴くのも、不公平だ。今度、皆の前で正直に話してもらつつもりだ

皆の前で か。

偶然にならともかく、元々俺は誰とも会つつもりは無い。
充分過ぎるほどに金を手に入れたら、俺はこの樺都町を出て行くつもりだ。この事は莉愛にも話していない……俺が個人で決めた事。どこか遠い場所に行つて、静かに暮らす。最早何の目標も無い俺の、唯一の生きる道だ。

「……そつか

それを、まだ言つつもりは無い。

幸仁の言葉に俺は小さく咳き返す。

「……俺がこの辺りに居た事、取り敢えずは内緒な？」

「……ああ、分かった。ではな」

本当、冷静というかなんといつか。

驚くと同時に感心してしまう。幸仁の背中を見送りながら、俺はついそんな事を思つてしまつ。

「燈夜……」

「 や、行いりや、莉愛。早くしないと銭湯が終わっちゃう」
「あ、うん」

再び莉愛と共に歩き出す。

「 い、俺が樺都町を出て行くかは未定だけど……。

それまでは、莉愛と共に居よう……とか思つてしまつて居る分、俺は少しうつ莉愛に惹かれてしまつて居のかも知れない。

勿論……それを表に出す事はしないけどな。

「………… 燈夜は、私とずっと一緒にだよ」

「うん？ なんか言つたか、莉愛？」

「うん、別に？ 気のせいじゃない？」

「………… あつと、あうと……ね」

「……襲つちやべば?」（後書き）

莉愛の最後の眩きにて、ちょっと鳥肌が立つた私は末期かもしない。

廃棄人形です。

莉愛ヤンデレ疑惑！ ヤンデレ好きな私歡喜！ 書いたの私だけどもつ！

いやまあ、莉愛が純粹な気持ちでそう言つただけかもしませんが。その辺りはこの私にも分かりません（ヲイ）。

まあ、実際この後の展開は未来の私が勝手に考えるので、現^イ在の私は別段これで良いかな、と（笑）

てな訳で、いつもの口上を！

感想、評価等、いつでもどーでも待ち続けております故、どんどんお願ひしますねつー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1158y/>

遊戯王 LEGENDs～伝説の名の元に～

2011年12月21日14時54分発行